

上ノ村遺跡 I

波介川河口導流事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

2010.3

高 知 県 教 育 委 員 会
財高知県文化財団埋蔵文化財センター

上ノ村遺跡 I

波介川河口導流事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 II

2010.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

上ノ村遺跡は、高知平野の西部を潤す仁淀川下流にある縄文時代から近代にいたる遺跡です。これまで、仁淀川下流域では戦国期の山城が幾つか知られていただけで、平地部での遺跡の分布はほとんど認められていませんでした。平成16年度、国土交通省高知河川国道事務所による波介川河口導流事業に伴う試掘調査によって新居城周辺から2つの遺跡が新たに確認され、新居城西方の遺跡を北ノ丸遺跡、南に展開する遺跡を上ノ村遺跡と命名しました。

埋蔵文化財センターでは、平成16年の秋から北ノ丸遺跡、17年度には上ノ村遺跡の発掘調査に着手し平成21年度まで6カ年にわたる調査を実施してまいりました。この度刊行になった『上ノ村遺跡Ⅰ』は、17年度調査と19年度調査の一部の成果をまとめたものです。古代の建物跡と中世前期を中心とする集落の遺構・遺物が検出され、平安京やその周辺で焼かれた綠釉陶器や黒色土器、中国からの貿易陶磁器、東海や紀伊、和泉、播磨などで生産された土器類が大量に出土しています。これはこの地が、古代から仁淀川の河川交通の要衝として重要な役割を果たしていたことを示しているものと思います。

仁淀川右岸の高岡地区では、1990年代以降発掘調査が繰り返し行われる中で、当地が高知平野西部の中心舞台であったことが明らかになってまいりましたが、下流域においても注目すべき遺跡の存在することが判明いたしました。長い歴史の営みの中で、仁淀川流域が重要な役割を果してきたことを示しています。地域のより良い発展のために何よりもその歴史を正しく認識することが不可欠であろうと思われます。埋蔵文化財は、記録の残っていない地域の歴史を語ってくれる掛け替えのない歴史資料です。本書が地域理解のための一助となり、地域発展に資することができれば幸いです。今後とも埋蔵文化財の保護、調査に対しましてご理解とご協力を下さいますようお願い申し上げます。

最後に、調査に対して全面的な協力を下さった地元新居地区のみなさま、国土交通省高知河川国道事務所、発掘作業に携わって下さった現場作業員や整理作業員のみなさまに厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 小笠原孝夫

例 言

1.本書は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター（以下高知県埋蔵文化財センターという）が平成17年度と19年度に実施した波介川河口導流事業に伴う上ノ村遺跡の発掘調査報告書である。

2.調査は、国土交通省四国地方整備局から委託を高知県教育委員会が受けて、高知県埋蔵文化財センターが県教育委員会からの再委託を受けて埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

3.上ノ村遺跡は、土佐市新居上ノ村字土居敷5100-1他に所在する。

4.調査面積

試掘調査 1,632 m² (対象面積約200,000 m²)

本調査 3,440 m² (延べ6,880 m²)

平成17年度 2,490 m² (延べ4,980 m²)

南区(S区) 830 m² (延べ1,660 m²)

北の西区(NW区) : 910 m² (延べ1,820 m²) 北の東区(NE区) : 750 m² (1,500 m²)

平成19年度 1-4区(S1区・S2区) : 950 m² (延べ1,900 m²)

調査期間

試掘調査 平成17年5月18日～6月24日

本調査

平成17年度 17年8月1日～12月16日 平成19年度 19年4月2日～6月21日

5.調査体制

平成17年度

総括 高知県埋蔵文化財センター所長 川村寿雄 同調査課長 森田尚宏

総務担当 同次長兼総務課長 湯浅文彦 主幹 長谷川明生

調査担当 調査課第三班長 出原恵三 専門調査員 堅田 至

平成19年度

総括 高知県埋蔵文化財センター所長 渋田幸一 同調査課長 廣田佳久

総務担当 同次長 森田尚宏 総務課長 戸梶友昭

調査担当 調査課第三班長 出原恵三 専門調査員 坂本憲昭・柴岡理恵・野田秀夫・山田耕三

6.本書の編集執筆は出原恵三が行った。

7.平成19年度現場作業における調査補助員は次の通りである。

高知県埋蔵文化財センター技術補助員 片岡和美 同測量補助員 囲林真史・谷川斉

8.報告書作成においては、出土遺物の時期比定、産地同定等について下記の方々からご指導を得た。

記して謝意を表したい。

平尾政幸(京都市埋蔵文化財研究所) 浜田恵子(高知市教育委員会)

池澤俊幸・筒井三葉・徳平涼子・矢野雅子・吉成承三(高知県埋蔵文化財センター)

9.遺物実測、トレースなどの整理作業は下記の方々が従事して下さった。

松木富子 浜田雅代 吉本由佳 東村知子 高橋由香 竹村延子 山中美代子

10.遺構については、SB(掘立柱建物跡)、SK(土坑)、SD(溝跡)、P(ピット)、SE(井戸)、SX(性格不明遺構)

等の略号を使用した。掲載している Fig の縮尺はそれぞれに記載しており、方位 N は世界測地系による方眼北である。

11.出土遺物は、17 年度調査分が「05-8TK」、19 年度調査分が「07-8TK」と注記して埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	I
第Ⅱ章 周辺の地理・歴史的環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第Ⅲ章 試掘調査	
1. 第1地点	9
2. 第2地点	9
3. 第3地点	10
4. 第4地点	10
第Ⅳ章 本調査S区	
1. S区1上層の遺構と遺物	21
2. S区1中層の遺構と遺物	61
3. S区1下層の遺構と遺物	61
4. S区1の包含層出土遺物	68
5. S区2の遺構と遺物	73
第Ⅴ章 本調査NW区	
1. 基本層準	77
2. 下層(古代)の遺構と遺物	77
3. 上層(中世)の遺構と遺物	88
第Ⅵ章 本調査NE区	
1. 基本層準	107
2. 下層(古代)の遺構と遺物	107
3. 上層(中世)の遺構と遺物	125
第Ⅶ章 考察	
1. 古代・中世の土器様相	131
2. 上ノ村遺跡の変遷	141
3. まとめ	144

挿図目次

Fig.1 上ノ村遺跡位置図	1
Fig.2 周辺の遺跡分布図	4
Fig.3 上ノ村遺跡・北ノ丸遺跡試掘調査及び本調査位置図	11～12
Fig.4 試掘調査地層柱状図①	13
Fig.5 試掘調査地層柱状図②	14
Fig.6 試掘調査地層柱状図③	15
Fig.7 試掘調査地層柱状図④	16
Fig.8 試掘調査地層柱状図⑤	17
Fig.9 試掘調査遺物実測図①	18
Fig.10 試掘調査遺物実測図②	19
Fig.11 試掘調査遺物実測図③	20
Fig.12 上ノ村遺跡(北ノ丸遺跡)年次別調査区位置図	22
Fig.13 上ノ村遺跡2005年度・2007年度調査区位置図	23
Fig.14 S区1基本層準	24
Fig.15 上ノ村遺跡S区遺構全体図	25～26
Fig.16 SB1・2遺構及び遺物実測図	28
Fig.17 SB3・4遺構及び遺物実測図	29
Fig.18 SK1・2, SK5～7遺構及び遺物実測図	31
Fig.19 SK9～14遺構及び遺物実測図	32
Fig.20 SK15・16・18・19・20・22・23・26遺構及び遺物実測図	34
Fig.21 SK80遺構及び遺物実測図①	35
Fig.22 SK80遺物実測図②	36
Fig.23 SK80遺物実測図③	37
Fig.24 SK80遺物実測図④	38
Fig.25 SK81～84・86遺構及び遺物実測図	40
Fig.26 SD1セクション及び遺物実測図	41
Fig.27 SD3エレベーション及びSD2～4遺物実測図	42
Fig.28 SD6セクション及び遺物実測図	44
Fig.29 SD7セクション及びSD7・8遺物実測図	45
Fig.30 SD30・33セクション及びSD30遺物実測図①	46
Fig.31 SD30集石出土状況実測図	47
Fig.32 SD30遺物実測図②	48
Fig.33 SD30遺物実測図③	49
Fig.34 SD31セクション及び遺物実測図	50
Fig.35 SD32セクション及び遺物実測図	51

Fig.36 ピット遺物実測図①	52
Fig.37 ピット遺物実測図②	53
Fig.38 ピット遺物実測図③	54
Fig.39 ピット遺物実測図④	55
Fig.40 SX1・土器集中1・2・6遺物実測図	56
Fig.41 SK32～34遺構及び遺物実測図	58
Fig.42 S区中層遺構平面図、SK30・31・SD10遺構及び遺物実測図	59
Fig.43 S区下層遺構平面図及びSD11遺物実測図	60
Fig.44 S区1包含層遺物実測図①	62
Fig.45 S区1包含層遺物実測図②	63
Fig.46 S区1包含層遺物実測図③	64
Fig.47 S区1包含層遺物実測図④	65
Fig.48 S区1包含層遺物実測図⑤	66
Fig.49 S区1包含層遺物実測図⑥	67
Fig.50 S区1包含層遺物実測図⑦	70
Fig.51 S区1包含層遺物実測図⑧及び搅乱層遺物実測図	71
Fig.52 石製品・鉄製品・石鍋・古銭実測図	72
Fig.53 SK90・SD34～36遺構及び遺物実測図	74
Fig.54 S区1トレンチ・S区2包含層及びP489の遺物実測図	76
Fig.55 NW区基本層準	77
Fig.56 NW区下層(古代)遺構全体図	78
Fig.57 SB5・6遺構及びSB5遺物実測図	79
Fig.58 SB7・8遺構及びSB6遺物実測図	80
Fig.59 SK49・50遺構及び遺物実測図	82
Fig.60 SK50、SD15・16・22、ピット遺物実測図	83
Fig.61 III層・IV層遺物実測図	84
Fig.62 III層遺物実測図①	85
Fig.63 III層遺物実測図②	86
Fig.64 III層遺物実測図③	87
Fig.65 NW区上層(中世)遺構全体図	89
Fig.66 SB9・10遺構及びSB9遺物実測図	90
Fig.67 SB11・12遺構及びSB12遺物実測図	91
Fig.68 SB13・SK40～44遺構及びSK44遺物実測図	92
Fig.69 SK45遺構及びSK45・SE1遺物実測図	94
Fig.70 SE1平面及び側面図	95
Fig.71 SE1柱材実測図	96
Fig.72 SE1側板実測図①	97
Fig.73 SE1側板実測図②	98

Fig.74 SE1側板実測図③	99
Fig.75 SD13・14遺物実測図	101
Fig.76 SD14・17遺物実測図	102
Fig.77 SD14・17セクション実測図	103
Fig.78 ピット・包含層(Ⅲ層)遺物実測図	104
Fig.79 中世包含層遺物実測図	105
Fig.80 NE区下層(古代)遺構全体図	108
Fig.81 NE区基本層準	109
Fig.82 SK76～79・81遺構及びSK76・78・79遺物実測図	110
Fig.83 SK80～83遺構及び遺物実測図	112
Fig.84 SK84～89遺構及び遺物実測図	113
Fig.85 SD26・27エレベーション及びSK84～98、SD26・27遺物実測図	114
Fig.86 土器集中7遺物実測図	116
Fig.87 遺物包含層(Ⅳ層)遺物実測図①	117
Fig.88 遺物包含層(Ⅳ層)遺物実測図②	118
Fig.89 遺物包含層(Ⅴ層)遺物実測図③	119
Fig.90 NE区上層(中世)遺構全体図	120
Fig.91 SB14・15、SK74遺構及び遺物実測図	121
Fig.92 SB16、SK60～62遺構及び遺物実測図	122
Fig.93 SK63・65・66・68・69・71・75、SD21・25遺構及びSD20遺物実測図	123
Fig.94 集石1・2平面・エレベーション及びSD20・24、ピット遺物実測図	124
Fig.95 遺物包含層(Ⅵ層)遺物実測図①	127
Fig.96 遺物包含層(Ⅵ層)遺物実測図②	128
Fig.97 遺物包含層(Ⅵ層)遺物実測図③	129

表目次

Tab.1 調査区一覧表	2
Tab.2 周辺の遺跡名一覧表	5
Tab.3 中世掘立柱建物一覧表	141
Tab.4 遺物観察表	150～192

写真図版目次

- PL1 仁淀川河口上空より上ノ村遺跡を望む 調査前の遺跡全景(南から)
PL2 調査前の遺跡全景(南から) 同上(南西から)
PL3 調査前の遺跡全景(東から遠景) 同上(東から近景)
PL4 調査前の遺跡全景(西南から) 同上(北から)
PL5 試掘調査①
PL6 試掘調査②
PL7 試掘調査③
PL8 試掘調査④
PL9 S区(2005年度)上層完堀状況(西から) 同上(南から)
PL10 S区南壁基本層準 同上西壁基本層準
PL11 SK14(南から) SK18
PL12 SK14(東から) SK14セクション
PL13 SK22礫出土状況 SD16完堀状況(北から)
PL14 SD1完堀状況(西から) 同上(東から)
PL15 SD1セクション 同上
PL16 SD6セクション SD7セクション
PL17 P123遺物出土状況 P106遺物出土状況
PL18 SD7遺物出土状況
PL19 ピット内遺物出土状況
PL20 S区1東部(2007年度)石列検出状況(北から) 同上完堀状況
PL21 SD30(南から) SD6(東から)
PL22 SD31セクション SD32セクション
PL23 P465遺物出土状況 同上完堀状況
PL24 SK82遺物出土状況 SK82セクション
PL25 SD30, P403・449・471遺物出土状況
PL26 SK90焼土検出状況 同上完堀状況
PL27 SD34(南から) S区2完堀状況
PL28 SD34床面出土東播系鉢 同上東播系羽釜
PL29 NW区上層完堀状況(南から) NW区東壁セクション
PL30 SD14セクション SD15セクション
PL31 SD17セクション SD15遺物出土状況
PL32 SE1検出状況(南から) 同上(東から)
PL33 SE1中層(南から) 同上(東から)
PL34 SE1完堀状況(東から) 同上(西から)
PL35 SB5-P4断面 P202断面
PL36 NW区遺物出土状況

- PL.37 SK50遺物出土状況(北から) 同上(南から)
- PL.38 NE区上層完堀状況(北から) 同上(南から)
- PL.39 NW・NE区下層完堀状況
- PL.40 NE区西壁セクション 同上東壁セクション
- PL.41 NE区下層北部の土坑群(北東から) SK69セクション
- PL.42 SK69完堀状況 SK71完堀状況
- PL.43 SD20セクション 同上
- PL.44 SD21セクション SD27セクション
- PL.45 集石1 集石2
- PL.46 土器集中7(南から) 同上(東から)
- PL.47 黒色土器B類椀(1421)出土状況 土師器椀(1372)出土状況
- PL.48 試掘調査出土の縄文土器
- PL.49 土師器甕
- PL.50 土師器羽釜
- PL.51 瓦器羽釜①
- PL.52 瓦器羽釜②
- PL.53 東播系捏鉢
- PL.54 瓦器椀・小皿
- PL.55 紀伊型甕 同上内面
- PL.56 備前擂鉢 同上内面
- PL.57 東播系羽釜 常滑窯胴部
- PL.58 青磁碗① 同上内面
- PL.59 青磁碗② 同上内面
- PL.60 青磁・白磁 同上内面
- PL.61 青磁碗底部 同上内面
- PL.62 緑釉椀・皿 同上内面
- PL.63 黒色土器A・B類椀 同上内面
- PL.64 製塙土器 同上内面
- PL.65 瓦質甕 土鍤
- PL.66 東播系捏鉢・土師器羽釜・東播系羽釜・石鍋
- PL.67 東播系羽釜・土師器甕・綠釉椀・青磁碗・陶器甕
- PL.68 黒色土器A類椀・瓦器椀
- PL.69 須恵器杯
- PL.70 土師器椀・杯
- PL.71 SE1柱
- PL.72 SE1横木と柱
- PL.73 SE1側板① 同上②
- PL.74 SE1側板③ 同上④

第Ⅰ章 調査に至る経過

高知平野西部に位置する土佐市高岡は、大雨、洪水に際して浸水被害の常襲地帯として知られている。これは平野部の大半が仁淀川の後背低地に立地することと南部を流れる仁淀川支流の波介の本流からの逆流、帶水によるものである。特に1975年8月の台風5号による波介川流域での被害は、浸水面積1,590ha、浸水家屋3,354戸という甚大な被害をもたらしたことはまだ人々の記憶に新しい。波介川河口導流事業は、現在の波介川合流地点を仁淀川河口にまで下げ、逆流の影響を除き洪水を安全に流下させる目的で1985年に計画され、2004年度から工事に着手することとなった。工事区間は土佐市用石の現合流地点付近から下流にかけて延長2,500m、面積約400,000m²に及ぶ大規模なものである。

2004年現在、工事区域内で確認されている遺跡は、戦国時代の山城新居城のみであったが、同年7月～8月に実施した県道新居-中島線西側の北ノ丸地区で試掘調査を行ったところ古墳時代後期の木製品が出土した。これを受け、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター（以下高知県埋蔵文化財センター）では同年10月～12月に北ノ丸地区内の1,500m²について本発掘調査を実施した。その結果、中世の杭列、古墳時代後期溝、同時期の木製品が大量に出土した。高床式建物の建築部材や田下駄などとともに琴板や衣笠の鏡板といったこれまで高知平野では出土例のない木製品が出土し、調査地点は古墳時代後期の祭祀空間である可能性ができた。そしてその範囲は調査地点よりも広がっていること、さらに県道東側についても、土居屋敷、中津、鍛冶屋敷などの小字名があり、新居城に関連した中世集落遺跡の存在が想定された。

高知県教育委員会は、工事区域内の広範囲にわたって試掘調査を実施する必要があるとの判断か



Fig.1 上ノ村遺跡位置図

ら、2005年4月に国土交通省と協議を行った。そして、高知県埋蔵文化財センターでは同年5月～6月に200,000 m²を対象に試掘調査を実施することになった。その結果、5つの地点から新たな遺跡の存在が確認されたのである。縄文時代晚期から弥生時代・古代・中世・近世、さらに新居城山腹からは第二次世界大戦末期の本土決戦陣地も確認され、県道以東の遺跡の広がりについては字名から上ノ村遺跡と命名した。中世戦国期集落址を想定していた当初の予想は大きく変更を迫られ、当遺跡は仁淀川下流域における中心的大複合遺跡であり、この地域の歴史と文化の形成を知る上で極めて重要な存在として位置付けられることになった。

高知県教育委員会では、国土交通省と協議を重ね2005年8月から2009年度にかけての5カ年にわたる本調査を行う運びとなり、高知県埋蔵文化財センターが実施することとなった。

表1 調査区一覧(北ノ丸遺跡も含む)

調査区名	調査平面積	調査面数	調査延べ面積	調査期間
上ノ村遺跡1地点(S区西側・NW・NE区)	2,490 m ²	2面	4,980 m ²	2005年8月～2005年12月
同1地点1区	850 m ²	一部2面	1,150 m ²	2006年4月～2006年8月
同1地点2区	1,005 m ²	2面	2,010 m ²	2006年9月～2006年10月
同1地点3A区	540 m ²	3面	1,620 m ²	2006年11月～2007年3月
同1地点3B区	300 m ²	2面	600 m ²	2006年12月～2007年3月
同1地点3区拡張区	500 m ²	2面	1,000 m ²	2007年4月～2007年7月
同1地点4区(S区東側)	950 m ²	2面	1,900 m ²	2007年4月～2007年6月
同1地点5区	1,150 m ²	1面	1,150 m ²	2007年11月～2008年3月
同 “	1,270 m ²	3面	3,800 m ²	2008年4月～2008年7月
同1地点6区	1,400 m ²	4面	5,600 m ²	2008年7月～2009年3月
同1地点7区	1,530 m ²	3面	4,600 m ²	2008年9月～2009年3月
同2地点	5,900 m ²	1面	5,900 m ²	2006年10月～2007年3月
同 “	7,100 m ²	2面	13,100 m ²	2008年6月～2009年9月
同3地点(1～5区、拡張区)	5,280 m ²	1～3面	11,730 m ²	2007年6月～2008年2月
同6地点	400 m ²	1面	400 m ²	2007年8月～2007年11月
北ノ丸遺跡	1,500 m ²	2面	3,000 m ²	2004年10月～2004年12月
北ノ丸遺跡(地点4)	400 m ²	1面	400 m ²	2007年9月～2007年11月
同(5地点)	3,500 m ²	1面	3,500 m ²	2009年4月～2009年9月
旧堤試掘	150 m ²	1面	150 m ²	2007年10月
計	36,215 m ²		66,590 m ²	

第Ⅱ章 周辺の地理・歴史的環境

1 地理的環境

上ノ村遺跡は、高知県のはば中央部に位置する土佐市新居に所在する。高知平野の西部を潤す一級河川仁淀川の下流域の右岸に立地し、標高3m前後、河口からの距離は2km程を測る。仁淀川は西日本の最高峰石鎧山に水源を発し急峻な四国山地を貫流蛇行して土佐湾に注ぐ。県下では四万十川に次ぎ、四国でも第3位の大河川である。幹線流路延長124km、流域面積1,560km²を有するが、そのうち96%、1,508km²は山地である。¹⁾

中流域の越知町付近までは山脚が河岸まで迫り、平均河床勾配1/100～1/150と急勾配である。越知町下流で1/1000となり大きく蛇行を繰り返しながら伊野町に至り、ここで流路を南東方向に大きく変えほぼ直進するように河口にいたるが、この流路転換点の付近から河口にかけて両岸に沖積平野が形成される。ここに広がる平野は高知平野の西部を形成するものであるが、左岸に展開する平野を吾南平野、右岸のそれを高東平野と呼称している。この仁淀川下流に広がる平野は、本川に対して直角方向に東西に長く伸びて、いわば奥深い入り江に本川の流送物が沖積し、奥に向かうほど低い地形が形成され、内水処理に困難を伴うという特殊地形をなしている。すなわち本川付近に形成された自然堤防に妨げられて背後には低湿地が広がる不安定な地質構造を有している。このような地形環境がこの地域の風土、歴史や文化の形成に大きな影響を与えて考えられる。

高知平野東部(香長平野)を流れる物部川が下流域に安定した扇状地を形成しているのとは対照的な構造を呈している。後述するように両地域は、先史時代からそれぞれ特徴を異にする地域文化の形成のあったことが明らかになりつつあるが、人間活動の土台である大地の生い立ちから異なった歩みを辿っていたのである。平野の形成のみならず、流域の岩石相や植生、生息する動物、魚種、鳥類においても微妙な違いが見られる。岩石では物部川は堆積岩が中心であるが、仁淀川ではそれに加えて流紋岩、安山岩、玄武岩などの火山岩が見られる。魚類は物部川の21種に対して仁淀川は52種、植物相は物部川85科444種に対して103科530種と仁淀川流域のほうが豊富である。²⁾

2 歴史的環境

(1) 繩文時代

仁淀川流域の遺跡で学史上最も著名な遺跡は、上流域の愛媛県上浮穴郡に所在する上黒岩岩陰遺跡である。縄文時代草創期の細巻起線文土器や線刻岩偶が出土し、早期の埋葬人骨やイヌ埋葬などが確認されている。中流域でも草創期や早期の不動ガ岩屋洞穴遺跡や城ノ台洞穴遺跡が所在している。仁淀川中・上流域は南四国の黎明期を告げる地域として位置付けることができる。

下流域の高東平野は、沖積低地が広がっていることもあって生活痕跡が確認されるのは縄文後期まで下る。後期前葉の松ノ木式土器が出土している林口遺跡や野田遺跡、後期中葉の遺物が出土している居德遺跡を挙げることができる。林口遺跡からは土坑も確認されており、縄文時代後期頃から自然堤防や残丘などを利用した生活空間が設定されたものと考えられる。³⁾このような動向は高知平野全体に認められる現象である。

晩期になると遺跡数が増加する。主な遺跡としては居德遺跡、北高田遺跡、倉岡遺跡を挙げること

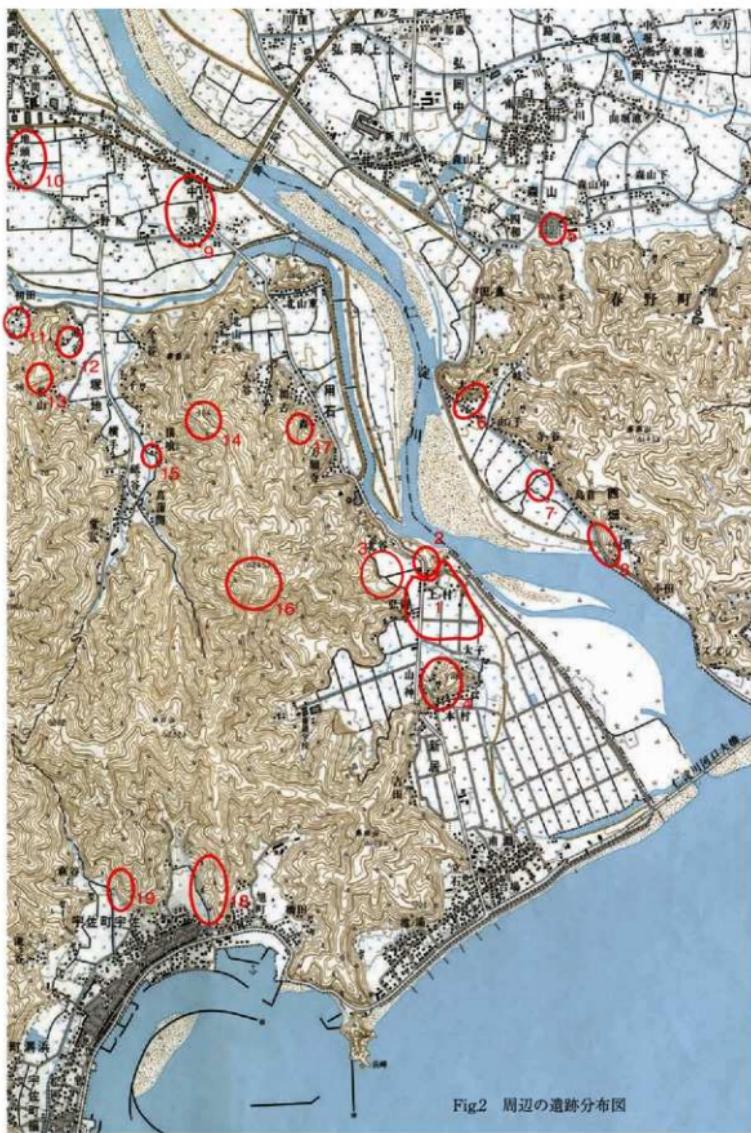


Fig.2 周辺の遺跡分布図

表2 周辺の遺跡名

NO.	遺跡名	NO.	遺跡名	NO.	遺跡名
1	上ノ村遺跡(縄文～近世)	8	西畠城跡(中世～戦国)	15	大サルバミ古墳
2	新居城跡(中世～戦国)	9	中島遺跡(近世)	16	三森城跡(中世～戦国)
3	北ノ丸遺跡(古墳・中世)	10	地頭名遺跡(古代)	17	甫木山遺跡(弥生)
4	新居本村城跡(中世)	11	初田遺跡(古代・中世)	18	新在家遺跡(中世)
5	二塚遺跡(弥生～中世)	12	池ノ谷遺跡(中世)	19	西中郷遺跡(弥生)
6	フケ遺跡(弥生)	13	西土居遺跡(弥生)		
7	西畠遺跡(弥生・中世)	14	天神之森遺跡(中世～戦国)		

ができる。居德遺跡は、現在の土佐市高岡市街地の北方の埋没丘や低湿地に位置する。1996年から98年に実施された調査によって縄文時代後期から古墳時代にかけて営まれた遺跡であることが明らかとなった。中心は縄文晚期から弥生前期にあり、殺傷痕を持つと考えられている多量の人骨や本胎漆器、鍬、土偶などの出土で一躍有名になった。④～⑥)土器は晚期中葉の篠原式段階から晩期末の刻目突帯文土器が大量に出土しているが、在地土器と共に大洞式土器など東日本系土器や北陸、山陰地域の土器も数多く出土している。当時の地域間交流の盛況振りを伺わせるとともに、南四国の縄文晚期時代像を一新させた遺跡として捉えることができよう。③)この他、北高田遺跡からも晩期中葉の遺物がまとまって出土し、倉岡遺跡からも中葉から刻目突帯文土器前半の遺物が出土している。これらの遺跡は、残丘斜面や低地部に堆積した遺物包含層であり明確な構造を作るものではないが、晩期遺跡がほとんど確認されていない物部川流域とは対照的な地域文化の形成を知ることができる。

(2) 弥生時代

弥生時代前期は、初頭(田村前期 I a期)を欠くが、前半・中葉(田村前期 I b・Ic期)のまとまった資料は居德遺跡から出土している。これらの遺物は刻目突帯文土器と共伴する二重構造を示していることに大きな特徴がある。また大陸系磨製石器をほとんど伴っていない。東部の田村遺跡では、前期初頭(I a期)から開始され、しかも晩期土器を伴わず最初から遠賀川式土器が展開し、ほとんど全ての大島系磨製石器が揃っている。このことは、同じ高知平野において異なる経過を経て弥生文化が形成されていることを如実に示している。田村遺跡は弥生文化の生成過程を居德遺跡は伝播によって成立したことを知ることができる。⑦)

前期後半以降、中期前半については、該当遺跡が未確認であるためにその様相は不明と言わざるを得ない。中期後半に至り凹線文が見られる頃になると僅少ながら集落遺跡が散見されるようになる。北隣の用石にある甫木山遺跡からは竪穴住居が発見されており石庖丁や石斧等が出土している。⑧)さらに上流側左岸のいの町バーガ森北斜面遺跡も該当させることができる。⑨・⑩)この時期の遺跡は、平地部には見られず山地中腹の斜面部に立地するという特徴が見られる。土器の特徴としては、凹線文や内面ヘラ削りも見られるが、繁縝なまでに加飾した南四国独特のタイプが多く見られる。凹線文が盛行する東部とは土器様相がかなり異なっている。

後期になると平野部に立地するようになるが前半の遺跡数は少ない。代表的な遺跡として高岡の北高田遺跡を挙げることができる。⑪)後期末から古墳時代前期になると遺跡数は増加する傾向にある。天神遺跡⑫)からは竪穴住居が2棟検出されているが、東部に比べると遺跡数は著しく少ない。

青銅器について少し触れておくと、対岸のいの町八田遺跡からは細形銅劍1口、上流の天崎遺跡か

らは中広銅矛4口、波介万法寺から銅矛2口(中広形1口、広形1口)、対岸の高知市春野町西畠フケからも銅矛2口(中広形1口、型式不明1口)などが出土しており、中期末後期は銅矛形祭器の分布圏を形成している¹³⁾。

(3) 古墳時代

前・中期古墳は皆無、後期になると高岡に宮ノ谷古墳、大サルバミ古墳などこれまで5基が確認されているに過ぎない。高知県は古墳の少ない地域として知られているが、その中でも高東平野は著しく少ない。しかしながら居德遺跡からは中期を中心とした「水辺の祭祀」が確認されており、大量の土師器を中心に須恵器や陶質土器、子持ち勾玉などの祭祀遺物が出土している。¹⁴⁾子持ち勾玉は、高岡の明官寺からも出土している。この種の祭祀遺跡は、甲原船戸遺跡や天神遺跡、光永・岡ノ下遺跡などにも見られる。

集落遺跡は前期初めを除くと中後期を通して不明である。祭祀を営んだ集落がどのように営まれていたのか不明と言わざるを得ない。後期になると東部では小規模ながら集落遺跡も散見され始めるが西部ではまだ把握することができない。

この地域の後期で注目されるものとして、木製品を挙げることが出来る。これは東部では見られない。上ノ村遺跡の西隣の北ノ丸遺跡からは後期の木製品がまとまって出土している。高床式建物の建築部材や大量の田下駄、曲げ物底板などとともに琴板や衣笠の鏡板などが出土している。槽作りの本格的な琴としては四国で初めての出土である。田下駄は居德遺跡でも大量に出土している。低湿地水田耕作用の履物であれば、当該期から本格的な低湿地の水田化が始まった可能性がある。東部との水田立地の違いを投影した遺物の可能性もあり興味深い現象である。¹⁵⁾

(4) 古代

高東平野の古代史は、高岡を中心とするバイパス関連調査によって飛躍的に明らかになりつつある。まず自然堤防上に立地する野田遺跡を挙げなければならない。ここからは律令期以前の遺構も確認されているが、8世紀後半～9世紀前半にピークのある遺跡と考えられる。掘立柱建物や礎石建物が検出され、遺物は大量の灯明皿や二彩、磚仏、軒丸瓦などが出土している。¹⁶⁾軒丸瓦は素弁八葉蓮花文で春野町大寺廐寺出土例と同版である。8世紀後半～9世紀前半に古代寺院が建立されていたものと考えられる。

また、西方250mにある光永・岡ノ下遺跡からも綠釉陶器20点、暗文入りの土師器皿をはじめ古代の遺物が大量に出土しており、中心時期は8世紀後半～10世紀、10世紀後半～11世紀にいるとされている。¹⁷⁾この他、林口遺跡からも11世紀代に比定されている黒色土器がまとまって出土している。このように8世紀後半以降、当地は古代寺院の建立など仁淀川右岸地域における古代史の中心舞台となっていたことが判る。「続日本後紀」によれば承和八年(841年)に「土佐国吾川郡八郷を各四郷に分け二郡を建て、新郡を高岡と号す」とある。この四郷とは『和名類聚抄』による高岡郷、海部郷、吾川郷、三井郷が比定されており、三井を上ノ村遺跡が所在する新居に求める説もある。⁸⁾何れにしても高岡郷が誕生する以前に基盤が形成されつつあったことが近年の発掘調査によって明らかにすることができた。なお宇佐の正念寺には平安前期の銅鐘があり、同じく清龍寺には11世紀の作と考えられている薬師如来立像(檜の一木造り)がある。ともに重要文化財に指定されている。⁸⁾

(5) 中世

古代の諸遺跡が引き続き発展し、更に仁淀川寄りの京間遺跡などが新たに出現する。全体的に集

落が次第に東に拡張している。これは仁淀川の安定化による居住空間の拡大という自然環境の変化も大きく関わっているものと考えられる。

野田遺跡では溝によって区画された屋敷跡が3ブロック確認されており、合計54棟の掘立柱建物をはじめ柵列や溝、土坑、屋敷墓などが確認されている。18)光永・岡ノ下遺跡は、17棟の掘立柱建物や土坑、溝、屋敷墓が検出されており、屋敷墓からは湖州鏡が刀子や宋銭などとともに出土している。12世紀前半に比定されている。17)林口遺跡や京間遺跡からも屋敷を構成すると考えられる掘立柱建物や土坑などが多く確認されている。中世の造構や包含層からは大量の瓦器椀や青磁、白磁などの貿易陶磁器、東播磨系須恵器の捏ね鉢や椀類、常滑、瀬戸など国・内外の陶磁器類が見られる。林口遺跡では12世紀後半の溝から蝙蝠扇が出土している。¹⁹⁻²⁰⁾

これらの遺物から見る限りでは、各遺跡とともに盛行期を12世紀後半～13世紀前半に求められているが、当該期、仁淀川流域を束ねる政治的、文化的に成長した在庁官人層などの台頭を彷彿とせるものがある。高岡を中心に勢力を持っていた平家方の家臣蓮池権守家綱は、以仁王の令旨(1180年)を奉じた頼朝に呼応して挙兵した源希義(頼朝の同母弟)を討伐したことが吾妻鏡に見られる。家綱のような存在を一連の検出遺構・遺物に投影させることができよう。家綱は2年後、頼朝によって打ちたれ、平家地盤であった中・四国にあって土佐が遅早く鎌倉幕府の権力が浸透した地域となったのであるが、「源平合戦」の前哨戦とも言うべき戦闘が高知平野を舞台に行われた背景には、在庁官人層など在地勢力の成長とその確執のあったことが考えられるが、当地域はその中心的な位置を占めていたと理解することができよう。

中世後期に入ると仁淀川流域は有力国人大平氏の傘下に入る。東部では管領細川氏が物部川右岸に築いた田村城館を拠点に土佐守護として支配権を確立して行く。田村遺跡で明らかになったように城館の周辺には家臣団の屋敷が配され、長宗我部氏など国人層を支配機構の中に編成して行ったのである。県西部の幡多地域では一条氏の莊園支配が浸透していた。中間に位置する仁淀川流域は、国人領主層の割拠状態にあったと言われているが、その中で高岡の蓮池城を拠点とする大平氏は、細川氏から「客分の待遇で組織され、その領国支配を支える立場に立っていた」とされている。²¹⁾大平氏は京都の歌人、書家などの文化人と交流を持ち在来国人の中では、特別な位置を獲得していた。応仁二年(1468年)、先の閑白一条教房の幡多下向に際しても、堺から大平氏の大船に乗っていることからも窺うことができよう。その際立ち寄った井ノ尻は、上ノ村遺跡の西方にある新居坂を越えた内海の対岸にあり、大平氏の外港として重要な役割をはたしていた。15世紀後半以降存在感を増してくる南海路の要港としても位置付けることができよう。

しかし大平氏の支配は長く続かず、16世紀半ばには高岡をはじめ仁淀川流域一帯は、一条氏が支配するところとなり、次いで弘治三年(1557年)には本山氏が蓮池城を占領し一帯に支配権を及ぼす。この後再び一条氏が蓮池城を奪回するが、永祿十二年(1569年)に長宗我部氏に滅ぼされて以後、戦国大名長宗我部の支配が確立する。当地は、中世・戦国期を通して支配権の争奪戦がことのほか激しく戦われたところであり、土佐統一を果たす上で極めて重要な関頭的位置にあったのである。

天正十七年(1589年)に実施された「土州高岡郡新居庄地検査」によれば、新居城の南には「土いヤシキ」「カチャヤヤシキ」などが並び、東側の川沿いには「古津」が見られ、現在の小字としても踏襲されている。この「古津」の近くには、「十文字渡し」があり、宇佐から新居坂を越え～十文字渡し～西畠～荒倉峠を越えて高知城下に出る交通路として利用されていた。十文字渡しは現在も名残を留めてい

るが、近世初頭までは遡り得る。8)

上ノ村遺跡のある仁淀川下流域の高東平野は、物部川流域の香長平野とともに土佐の要衝にあり、絶えず歴史の中心舞台となってきたところである。そして各時代を通して、香長平野とは異なった地域文化を形成していたことがこれまでの調査によって明らかとなっている。高知平野の歴史は、両者の織りなす絶妙のバランスの上にダイナミックな展開を見せるのである。

参考文献

- 1) 社団法人建設弘済会『高知工事事務書四十年史』1987年
- 2) 西日本科学技術研究所『平成19年度仁淀川・物部川河川植物相調査業務委託報告書』2008年
- 3) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター・高知県教育委員会『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ』2001年
- 4) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『居徳遺跡群Ⅰ』2001年
- 5) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『居徳遺跡Ⅳ』2003年
- 6) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『居徳遺跡群Ⅵ』2004年
- 7) 出原恵三「弥生文化の成立と高知平野」『高知市史研究3』2005年
- 8) 土佐市『土佐市史』1978年
- 9) 高知県伊野町教育委員会『バーガ森北斜面遺跡』1999年
- 10) 高知県伊野町教育委員会『バーガ森北斜面遺跡Ⅱ』2001年
- 11) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『北高田遺跡』2000年
- 12) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター・高知県教育委員会『天神遺跡Ⅱ』2001年
- 13) 出原恵三「南四国[の]青銅祭器」『考古学と地域文化』一山典還暦記念論集2009年
- 14) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『居徳遺跡群Ⅴ』2003年
- 15) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『北ノ丸遺跡』2008年
- 16) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『野田遺跡Ⅱ・野田庵寺』2005年
- 17) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『光永・岡ノ下遺跡』2000年
- 18) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『野田遺跡Ⅰ』2002年
- 19) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『京間遺跡』2004年
- 20) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『林口遺跡Ⅱ・蓮池城北面遺跡』2001年
- 21) 市村高男「武家政権の盛衰と土佐国」『高知県の歴史』山川出版2001年

第Ⅲ章 試掘調査

平成17年6月から8月にかけて、図示したように新居城南に広がる平野部および旧堤防外の河川敷を中心に102箇所の試掘グリッドを設けて試掘調査を行った。その結果、第1～第4地点の4箇所において遺物包含層や遺構の存在が確認された。ここでは、主な地層柱状図を示し堆積状況や遺物などについて報告する。各グリッド名は、数字の前にGを冠して呼称する。遺物は代表的なものを図示した。

1 第1地点

新居城の南裾部に位置し、水田や宅地跡である。G2-3-10-16を図示した。各グリッドとも客土が数10cmから1mの厚さで見られる。戦後の圃場整備や宅地造成で置かれた盛土である。客土を除くと旧耕作土や底土が残存しているところもあるが、その下層は中世の遺物包含層となっている。G2-16ではIV層上面、G3ではVI層上面で中世遺構が確認された。G10のV層からは古代の土師器、須恵器が炭化物と共に多量出土している。G2のVI層も古代の遺物包含層となっている。

この地点は、総じてシルト層が厚く堆積しており、仁淀川氾濫原の後背地を形成しているものと考えられる。G16あたりから北は、黄茶色シルト層が古代の遺構検出面となり、それ以前は安定した生活面の形成が見られない。黄茶色シルト層の下層は濃茶色～黒褐色粘土の厚い堆積があり古墳時代後期の須恵器や土師器が散発的に出土した。しかし、北ノ丸遺跡や県道西のように植物遺体を含む泥炭状の地層形成は見られない。G16あたりから南については古代の生活面の安定した広がりはないものと考えられる。

遺物は各グリッドから中世土器が中心に出土しているが、細片が多く図示できるものは古代の土器が多い。G2 III層から古代の須恵器(46)やVI層下層から同じく土師器などだが、G3 V層から青磁碗(73)が出土している。G10 VI層からは古代の土師器杯(39)、同じく須恵器杯(44-50-51)、同壺(53-54)などが、G17からも古代土師器杯(36-37)、同壺(55)、同須恵器皿(45)、同蓋(47)、土鍤(82)が出土している。新居城斜面直下は宅地跡で搅乱が激しかったが、G27からは古代須恵器壺(52)と地山直上から縄文晚期の磨製石斧2点(31-32)と晚期土器細片が数点出土している。しかし晚期の遺物包含層は確認できなかった。第1地点は全面に中世の遺構が見られ、部分的に古代の遺物包含層や遺構の存在が予測され、斜面直下には縄文晚期の遺構の存在する可能性がある。

2 第2地点

第1地点の東250mの地点に位置し水田跡である。G48-51-52の地層柱状図を示した。ともに30cm前後の現地表土を除去すると20～60cmほどのシルト層が堆積しており、中世後期戦国期の遺物包含層と同時期のピットが確認された。シルト層の下層は砂礫が厚く堆積しており氾濫原となっている。東方向すなわち仁淀川に近づくほどシルト層の堆積は浅くなりG57地点付近では表土直下がそのまま礫層となっている。礫層の広がる地点から西を本調査範囲とした。第2地点と第1地点の間に十数個の試掘グリッドG11-37を設けたが、何れもシルト、砂、礫の互層の堆積が見られ遺物包含層や生活面の形成は認められなかった。第2地点は中世後期に至って集落が形成されたものと考えら

れる。出土遺物は少なくG52の瓦質鉢口縁部細片(80)が図示できたのみである。他に瓦器・土師器・青磁などの細片が確認された。

3 第3地点

城山東裾部で仁淀川に最も近いところに位置する。山際は宅地があり東側は水田となっていた。中央部南寄りのG60は、現地表下1mほどのところで旧床土が確認されその下層のV層は氾濫性のシルト層の堆積が認められる。VI層の黄茶色砂層からは中世の土師器杯(61)や白磁碗(72)などが出土しVI層中からピットや土坑が検出された。VII層以下は河川堆積物である。中央部北寄りのG61は、地表下1m近くが現代搅乱を受けており、その下にII層の旧耕作土層が形成されている。III・IV層は河川堆積物で遺物は殆ど認められない。V層は茶色粘性土で中世遺物が多量包含されており、ピットの掘り込みも確認された。VI・VII層は河川物であるが、黄色の風化礫を含んでいることから山側からの崩落土も含まれているものと考えられる。VIII層は茶黄色シルトの河川堆積で厚さ1m以上を測る。VII層上面には中世と考えられるピットを検出した。図示し得た遺物はV層出土の青磁碗(74)のみである。G63は山際に近いグリッドである。表土から1m余の深さで現代搅乱を受けておりコンクリートブロックなどが出土した。II層は厚さ30cmを測り中世の包含層で瓦器や土師器、古銭などが出土している。その下のIII層は黒褐色シルト・砂礫層で上面から初期須恵器が出土したが、それ以外は縄文晩期の遺物が大量に確認された。これらの遺物は山腹から流れ込んだものと考えられる。G63の図示遺物はII層が瓦器碗(70-71)、瓦器小皿(64)、寛永通宝(85)、V層上面は須恵器杯(40)、V層中からは、縄文晩期深鉢(1～17・21～30)、同浅鉢(18～20)、石斧(33)である。

縄文土器は粗製深鉢が圧倒的に多いが、半精製品の無刻突縁土器(15)が出土している。浅鉢は僅少であるが、全面丁寧なヘラ磨きを施し口縁部内面を玉縁状に肥厚させるものが目立つ。全体的に晩期前葉の土器を中心である。

第3地点の山際には縄文晩期遺物の堆積層が形成されていることが予想される。第1地点山際の晩期遺物と相俟って、山腹・裾部には晩期の遺跡が立地している可能性もある。平地部は河川堆積物が厚く堆積しているが、中世前期からの遺物が見られ遺構面は二面形成されていることが判明した。古墳時代、古代の遺物も散見されるが、安定した生活面が形成されるのは中世前期で、それ以前は氾濫原が広がっていたものと考えられる。

4 第4地点

県道西側の谷開口部である。平成16年に本調査を実施した北ノ丸遺跡の周辺部に12個の試掘グリッドG20-21-23-95-99-100などを設定した。G20は、15mの客土が置かれその下に旧耕作土が確認された。III層は遺物を含まない粘性土、IV層の粘性土からは古代の遺物が少量出土した。この層準はG10のVI層、G16のIV層に対応するものと考えられるが、かなり低くなってしまいその下層は青灰色粘性土が厚く堆積し県道東のような生活面を確認することはできない。G23は厚さ1.7mの客土が置かれその下は粘性土が堆積している。V層から古代の土器や炭化物が出土しておりG20のIV層やG16のIV層に対応する層準であるが、G20同様にVI層以下は灰色粘土が堆積し生活面の形成は認められない。谷の中央部の地点である。表土下2m余の厚い客土が置かれ、その下層は粘性土が互層に堆積しVII層は洪水性の砂礫層が堆積し、IX層は植物遺体が見られる腐植土層である。G10は北ノ丸

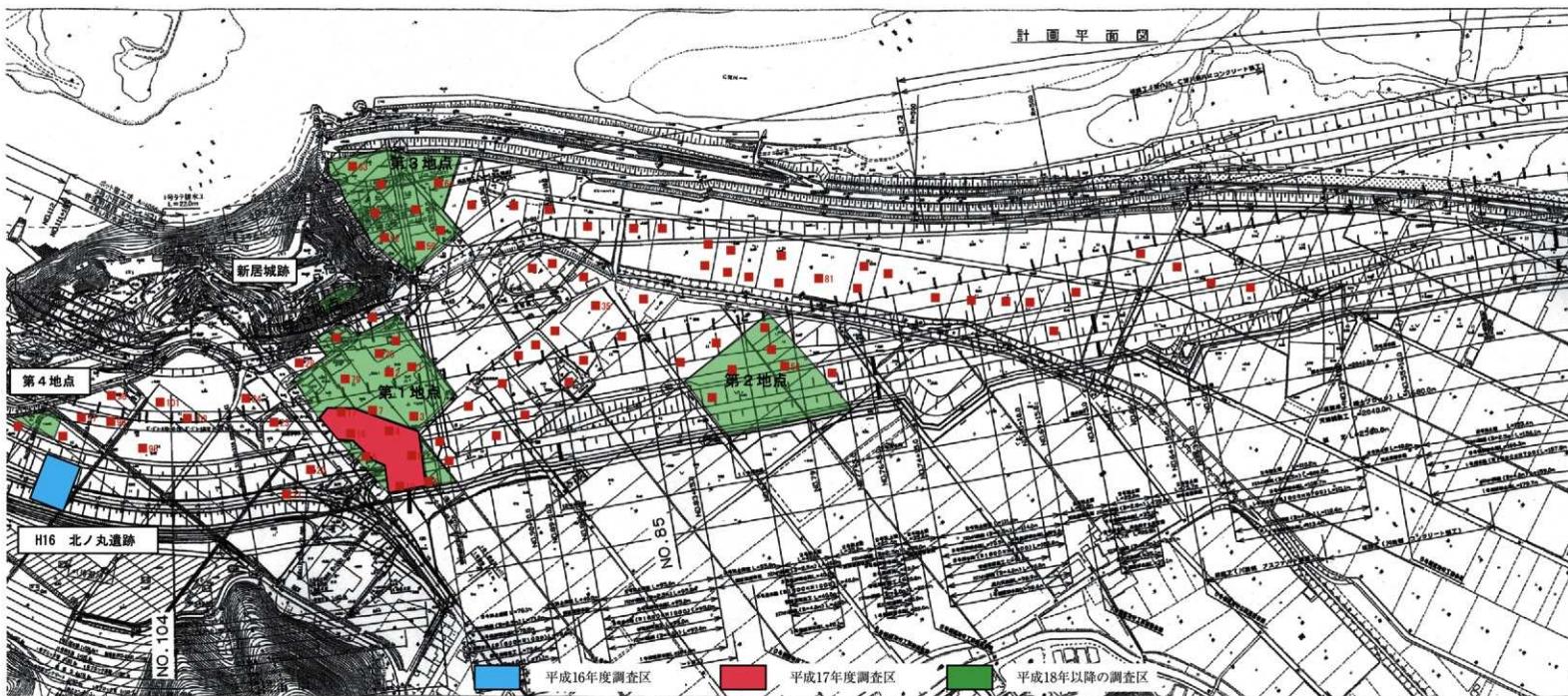


Fig.3 上ノ村遺跡・北ノ丸遺跡試掘調査及び本調査位置図

0
100m
(S=1/3000)



Fig.4 試掘調査地層柱状図①

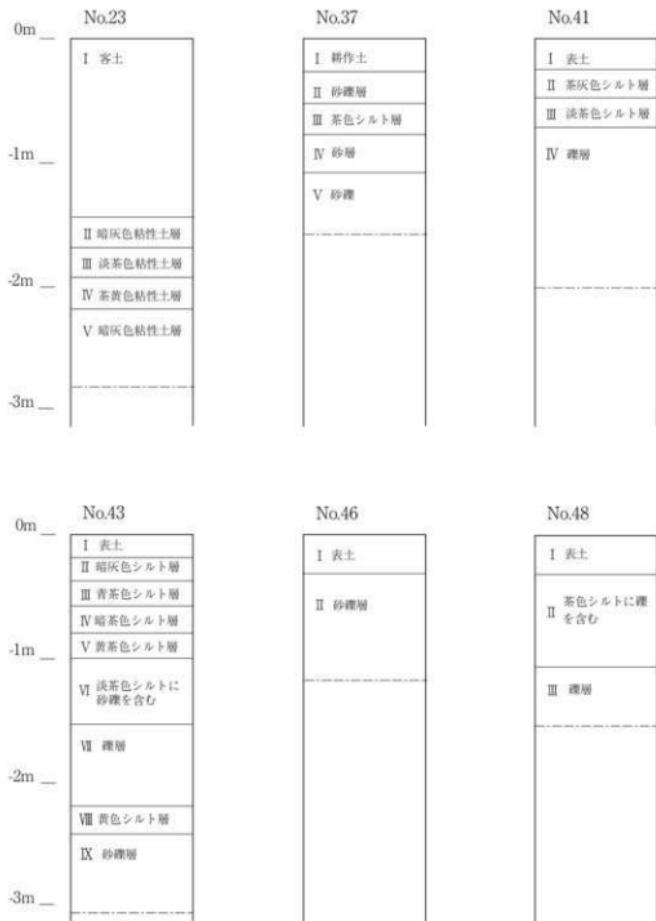


Fig.5 試掘調査地層柱状図②

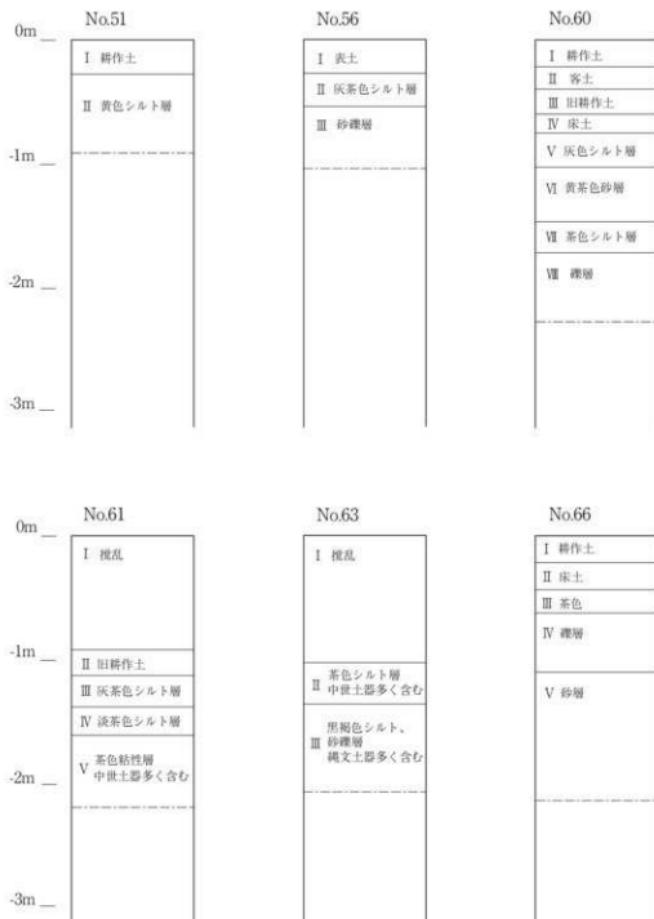


Fig. 6 試掘調査地層柱状図③



Fig. 7 試掘調査地層柱状図④



Fig.8 試掘調査地層柱状図⑤

遺跡の平成16年度調査区に近接する位置にある。地表下1m近くまで客土が置かれている。Ⅲ・Ⅳ層は無遺物層でV層は土壤化しており水田の可能性がある。VII層からは加工痕のある木片が数点出土した。北ノ丸遺跡で古墳時代後期の木製品を多量に含んだ層準(X層)に対応する。

県道から西側は東側に比べて現在でもかなり低くなっている。すでに見たように西側が戦後1～1.5mの客土が置かれているにもかかわらず2m程度低くなっていることは、旧地形ではかなりの高低差をもった谷部であったことが考えられる。北ノ丸遺跡報告書でも触れたように城山の南に広がる自然堤防の後背湿地を形成している。従って県道西側については水田址などが存在することは考えられるが生活址など集落の中心的な空間はないものと考えられる。県道西側については400mを本調査の対象とした。

G101-102 北側の半月状の部分については、未買収地であることから試掘調査を行うことができず、次年度以降に実施することとなった。

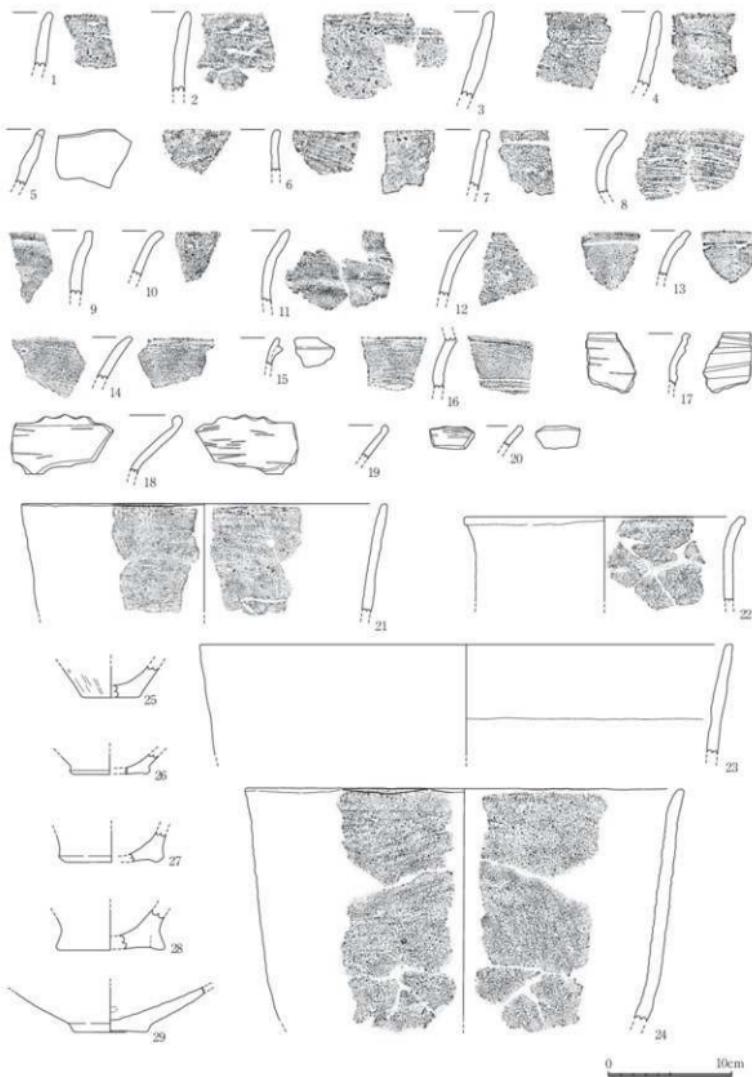


Fig.9 試掘調査遺物実測図① (すべてG 63)

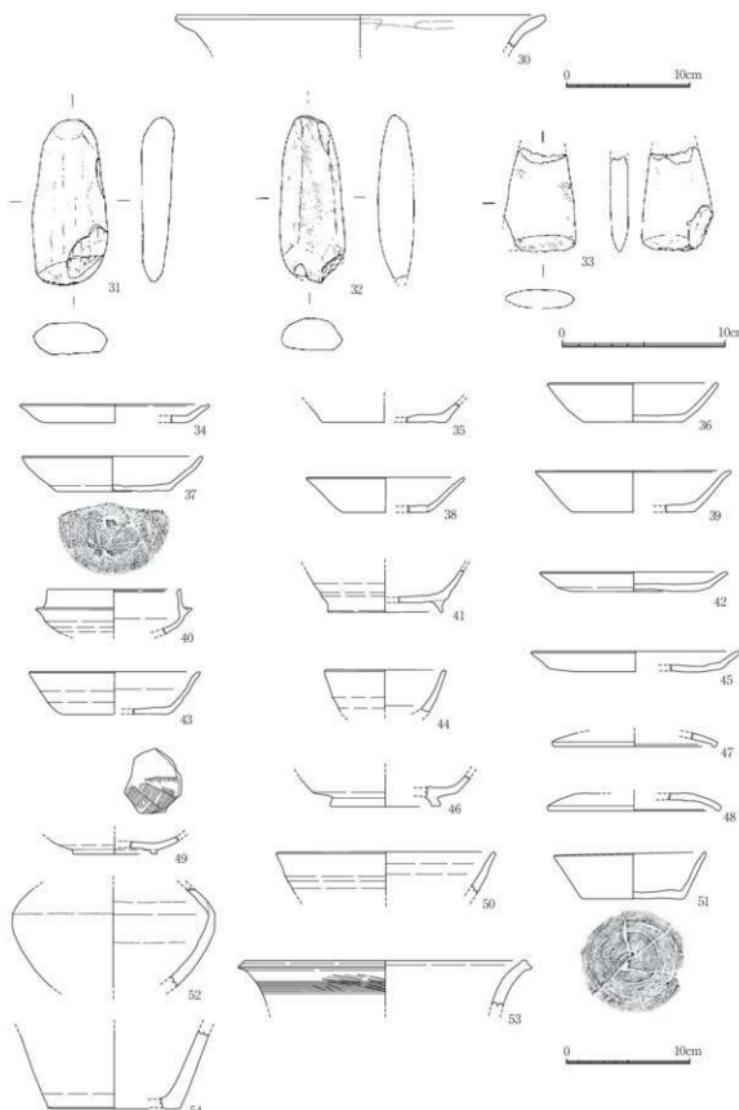


Fig.10 試掘調査遺物実測図②

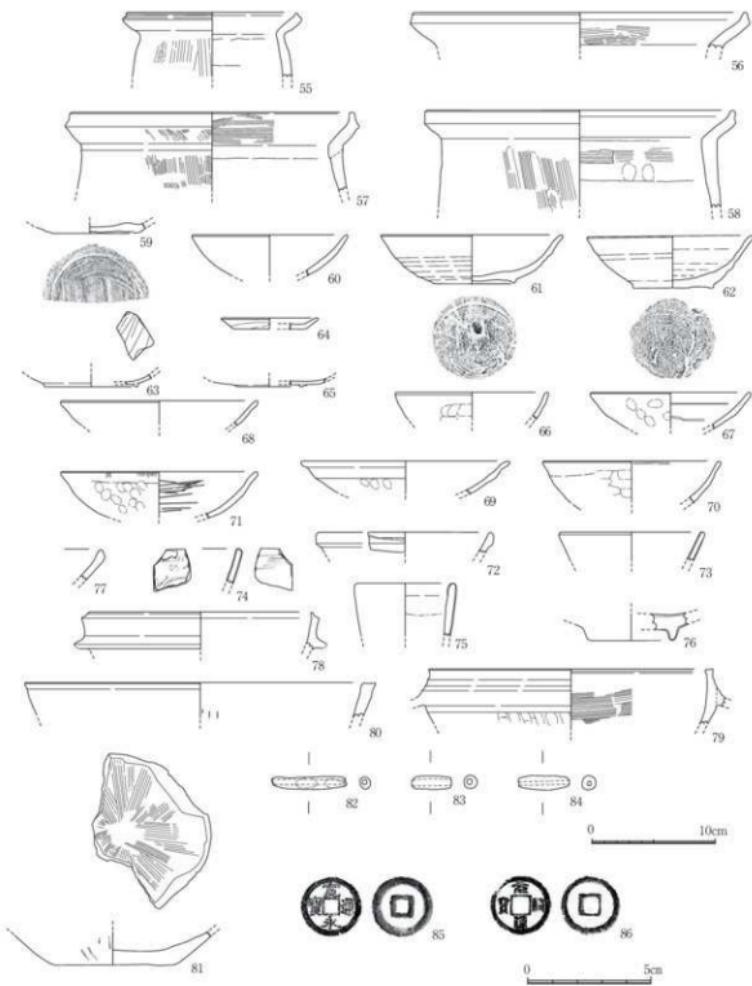


Fig.11 試掘調査遺物実測図③

第IV章 本調査S区

先述のようにここでは、平成17年度と同19年度に実施した1-4区の調査内容について報告するものである。平成17年度の調査面積は2,490 m²（上下2面4,980 m²）、19年度の1-4区は950 m²（上下2面1,900 m²）の計3,440 m²（延べ面積6,880 m²）である。これらの調査区は、南側と北側に分かれ、且つ北側は西側と東側とに分かれるところから、南側をS区1・2、北西部をNW区、北東部をNE区として報告する。なおこれらの遺構検出面は、S区1・2のはほとんどは一面であったが一部については三面、NW区とNE区については上・下二面が存在した。

1 S区1上層の遺構と遺物

(1) 基本層準(Fig.15)

調査区の西側と南側の壁面で基本層準を確認した。

I:客土(山土)。50cm或はそれ以上の層厚である。戦後行われた造成による盛土である。

II:耕作土。層厚2～20cm前後である。かなり削られて浅くなっているところや完全に削られているところもある。

III:橙灰色シルト。層厚0～20cmを測る。調査区東部には認められない。

IV:灰色シルトに黒褐色シルトの粒をブロック状に含む。層厚0～10cmを測る。北部には堆積が認められない。

V:灰色シルトに炭化物を多く含む。層厚0～20cm前後、西側の壁に厚く堆積している。中世の遺物包含層である。

VI:黄色シルト。層厚0～20cm。

VII:茶黄色シルト。層厚5cm前後で西壁の北部でのみ見られる。

VIII:茶色粘性土。層厚10～40cmで、西壁に厚く堆積している。古代遺物包含層である。

IX:黄茶色シルト。層厚0～5cm。

X:濃茶色粘性土。層厚0～10cm前後。西壁に部分的に認められる。無遺物層である。

(2) 上層の検出遺構

① 掘立柱建物

SB1 (Fig.16)

調査区の北東に位置する。SD1を跨ぐように建てられているが、先後関係は不明である。桁行き3間(6m)、梁間2間(3.25m)の南北棟で、軸方向はN-3°-Wである。柱穴は円形で径30～40cmを測る。P1で径20cm、P7で径15cmの柱痕跡がみとめられた。各柱穴から土師器供膳具の破片が多く出土している。P4出土の土師器杯底部(87)、P5の土師器小皿(89)と瓦器碗底部(90)、P8の瓦器小皿(88)を図示することができた。土師器供膳具は回転台成形である。

SB2 (Fig.16)

調査区南よりに位置する。桁行き3間(4.8m)、梁間1間(1.8m)の東西棟で、軸方向はN-86°-Wである。柱穴は円形で径20～40cmを測る。P1で径20cm、P8で径10cmの柱痕跡がみとめられた。P1・5から土師質土器細片が出土している。P1の土師器杯底部(91)のみ図示することができた。回転台成形である。

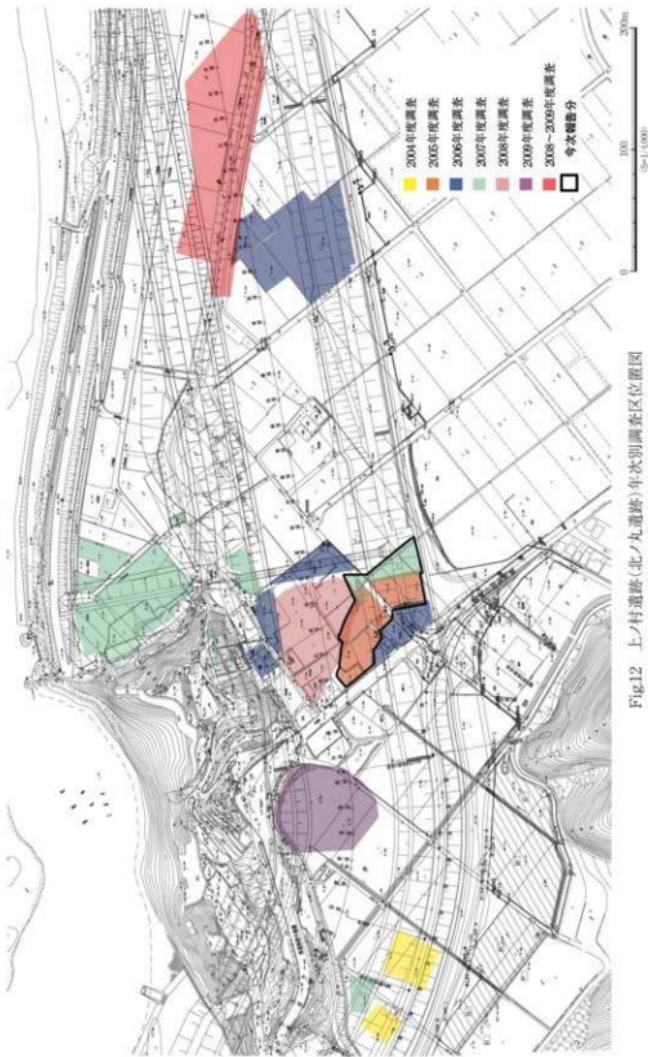


Fig.12 上ノ村道路(北ノ丸道路)年次別調査区位置図

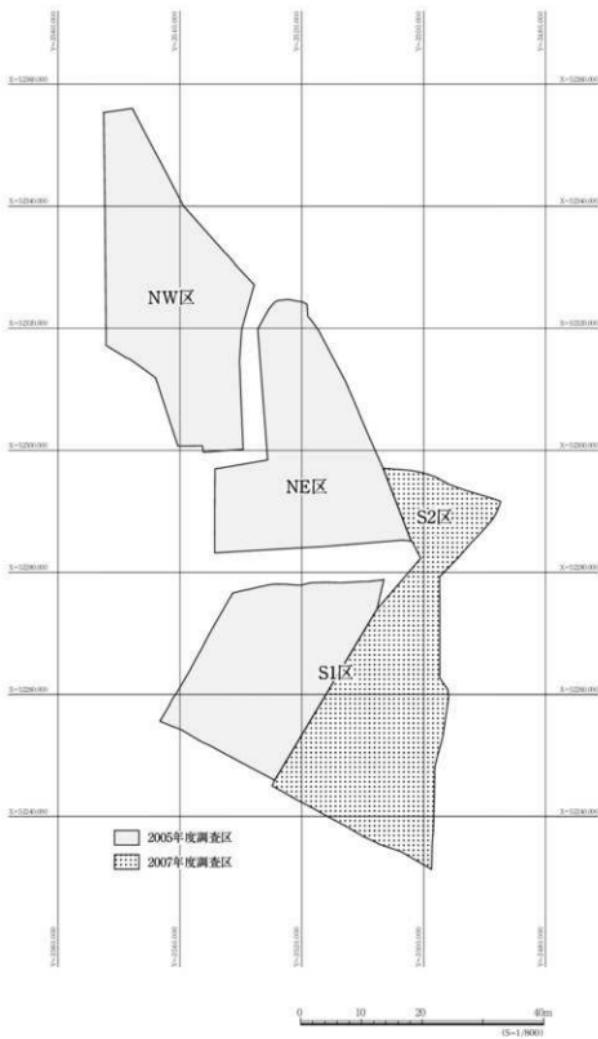


Fig.13 上ノ村遺跡2005年度・2007年度調査区位置図



Fig.14 S区1基本層準



Fig.15 上ノ村遺跡 S 区遺構全体図

0 2 4 8m
0~1/2000

25~26

SB3 (Fig.17)

SB2の西隣に位置する。桁行き4間(10.6m)、梁間2間(3.3m)の東西棟で、軸方向はN-77°-Eである。柱穴は円形で径30~50cmを測る。P11に径20cmの柱痕跡が認められた。各柱穴から土師器供膳具や煮沸具、瓦器などの細片が出土している。P10-11出土の土師器小皿(92-94)、P10の土師器杯(95)、P5の土師器底部(93)、P3の瓦器碗(96-97)、P2の土師器甕口縁部細片を図示した。P11出土の94は、柱を抜き取った後、入れられたものである。96は土師器の発色をしているが成形など瓦器の作りに似ていることから瓦器碗として捉えた。98は古代の土師器甕で混入品である。土師器小皿・杯は回転台成形である。

SB4 (Fig.17-52)

SB1の西隣に位置する。桁行き2間(4.3m)、梁間1間(3.0m)の南北棟で、軸方向はN-0°である。柱穴は円形で径40~60cmを測る。P1に径20cmの柱痕跡が認められる。P4出土の土師器杯底部(99)、同口縁部(101)、P3出土の土師器甕(100)を図示した。土師器杯はともに回転台成形であるが、101の口縁部内部には段部、外面には2条の沈線が走り段部を有する。P4からは北宋錢、大觀通寶(875)が出土している。

(2) 土坑

SK1 (Fig.18)

調査区の東北隅に位置し、SD1を切っている。平面形は隅丸方形を呈し長軸1.9m、短軸1.8m、深さ15cmを測る。南の立ち上がりにピットがあるが先後関係は不明である。埋土は灰褐色シルトである。遺物は土師器杯、瓦器などの破片が多く出土している。土師器底部(104)、瓦器碗(105~107)、小皿(102-103)、東播系捏鉢の口縁部(108)を図示した。土師器杯底部は他に2点出土しているが全て糸切り底である。

SK2 (Fig.18)

調査区の東北隅に位置する。平面形はほぼ円形を呈し直径1.8m前後を測る。壁に沿って幅30cm前後、深さ10cm程の溝が環状に巡っている。中央部の床面の深さは18cm程である。埋土は灰褐色シルトである。土師器や瓦器細片が出土しているが図示できるものはない。

SK5 (Fig.18)

調査区西部に位置し、東端はピットと切り合っている。平面形は不整形、長軸1.2m、短軸1.1m、深さは20cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がっている。埋土は灰褐色シルトに茶・黄色シルトがブロック状に入っている。土師器13点、瓦器細片10点出土しているが、図示できるものはない。

SK6 (Fig.18)

SD3の南に位置する。平面形は楕円形で東端をP95に切られている。長軸1.0m、短軸60cm、深さ35cmを測り、断面形は台形を呈する。埋土はI:灰褐色粘性土、II:Iに黄色~濃茶色シルトがブロック状に入る。遺物は東播系捏鉢口縁部(109)を図示したが、この他瓦器碗細片2点、青磁細片1点が出土している。

SK7 (Fig.18)

SK5の東隣に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.15m、短軸58cm、深さ35cmである。短軸断面は船底状を呈するが、長軸断面の東側の立ち上がりは階段状をなす。埋土はI:灰褐色粘性土、II:濃茶色シルトである。土師器杯底部など細片が4点出土している。

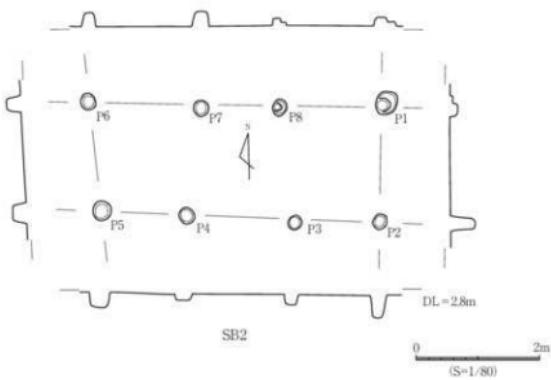
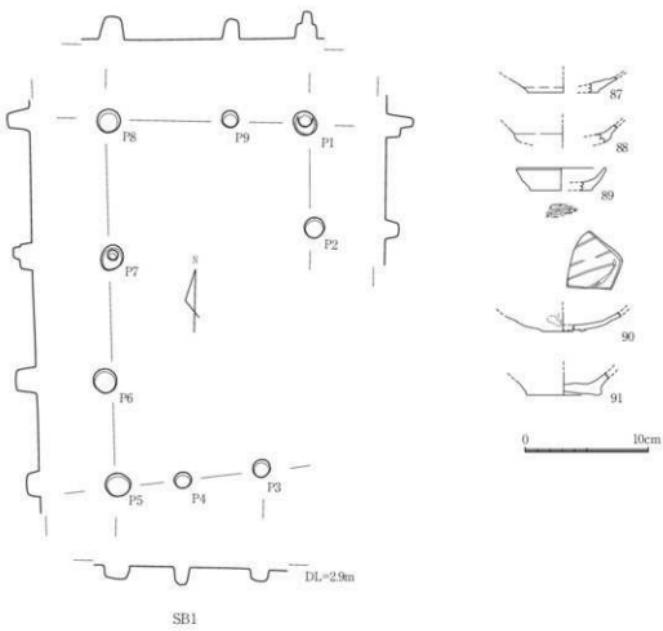


Fig.16 SB1・2遺構及び遺物実測図

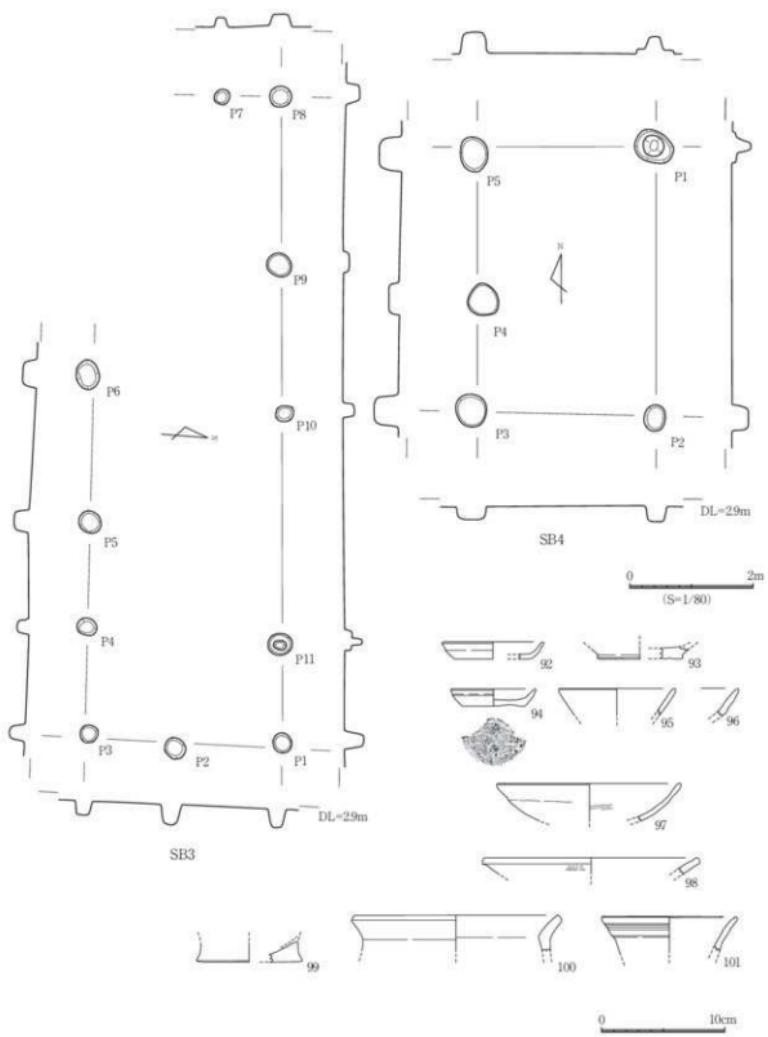


Fig.17 SB3・4造構及び遺物実測図

SK9 (Fig.19)

SK6の南に位置する。平面形は不正形を呈し、長軸93cm、短軸70cm、深さ40cmを測る。断面形はU字形である。埋土は灰褐色シルトである。遺物は土師器が20点や瓦器細片が3点出土している。

SK10 (Fig.19)

SK6の東隣に位置する。平面は不整形を呈するが別の土坑と切り合っている可能性もある。長軸1.7m、短軸1.15m、深さは最深20cm、浅いところで5cm前後である。埋土は暗灰色シルトである。遺物は土師器が出土しているが、図示できたのは小杯2点(110-111)である。

SK11 (Fig.19)

SB3の南にあり、SK13を切っている。平面形は長楕円形を呈し、長軸2.3m、短軸70cm、深さ10cmを測る。床は水平で壁は斜めに立ち上がっている。埋土は灰褐色シルトである。遺物は土師質土器と瓦器の細片が多く出土しているが、瓦器椀底部(112)と土師器土鍤(115)を図示し得た。

SK12 (Fig.19)

SK11の西隣に位置する。平面形は不整形で南部が調査区外に出ている。確認長軸1.15m、幅1.2mを測る。床面は東と北に傾斜しており、最深20cmである。埋土は灰褐色シルトである。土師質土器、瓦器類の細片が多く出土しているが図示できるものはない。

SK13 (Fig.19)

SK11に切られている。平面形は胴丸の長方形を呈し、確認長軸70cm、幅75cm、深さは20cm程度であるが、床面には径20cm、深さ10cmのピットが掘られている。遺物は、土師器や瓦器細片が少量出土している。瓦器椀(113)と土師器土鍤(116)を図示し得た。

SK14 (Fig.19)

SB2の南に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.82m、短軸1.25m、深さ30cm前後を測る。短軸の断面形はU字状である。埋土はⅠ：灰褐色粘性土、Ⅱ：暗灰褐色粘性土である。床面中央に人頭大の角礫が数個積まれており、埋土中からも数点出土している。

遺物は土師器、瓦器の細片が多く、同安窯系の青磁小皿片などが出土しているが、図示できたのは土師器小皿(114)のみである。

SK15 (Fig.20)

SK14の北側に位置する。平面形は隅丸方形を呈する。長軸1.25m、短軸1.15m、深さ10cm前後を測る。床面は水平で断面は皿状を呈し、床面に2個の小ピットが見られる。埋土は暗灰茶色である。遺物は、土師器や瓦器の細片が多く出土しているが、図示できたのは青磁碗(117)と土師器杯底部(118)である。117は森田編年1)の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類(以下ことわりのない場合、青磁・白磁の編年は森田編年による)、後者は糸切り底である。

SK16 (Fig.20)

調査区中央部に位置する。平面形は不整形を呈する。長軸1.0m、短軸0.7m、深さ30～40cmを測り、床面中央部が盛り上がっており、埋土は灰褐色シルトである。遺物は土師器、瓦器細片が少数出土している。

SK18 (Fig.20)

SB3の東隣に位置する。平面形は隅丸方形を呈する。長軸1.2m、短軸1.0m、深さ10cm前後である。床面は水平で断面は皿形を呈する。埋土は灰褐色シルトである。南東隅には、被熱赤変した30cm大

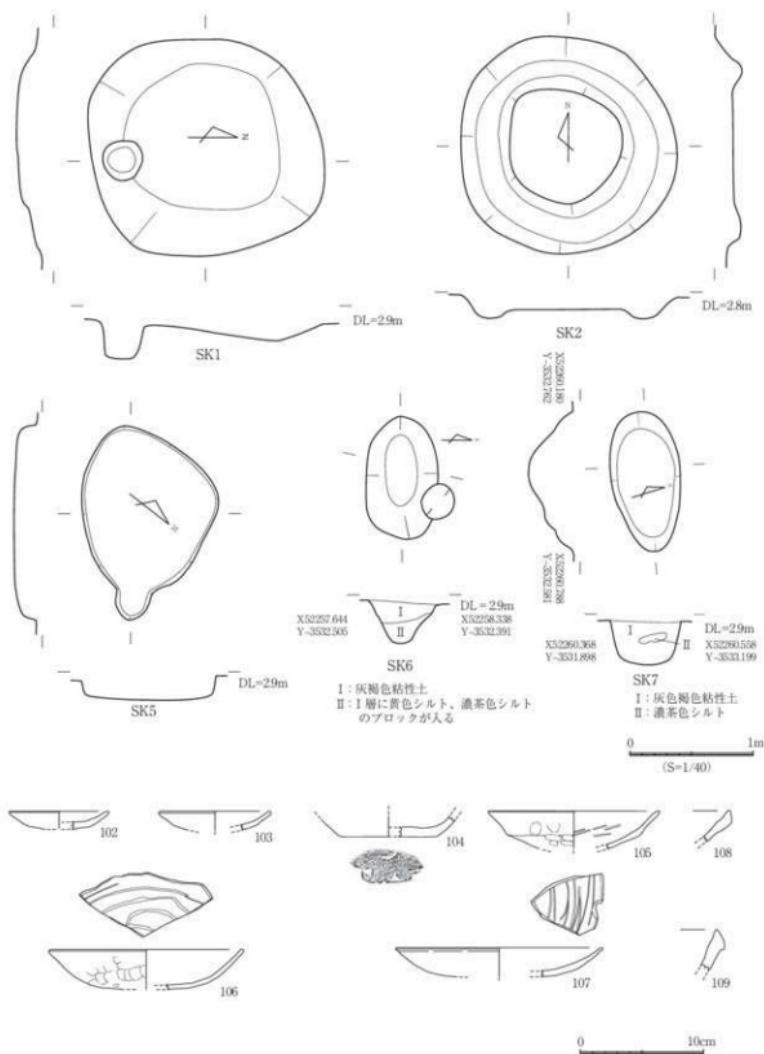


Fig.18 SK1・2, SK5~7造構及び遺物実測図
SK1:102~108 SK6:109

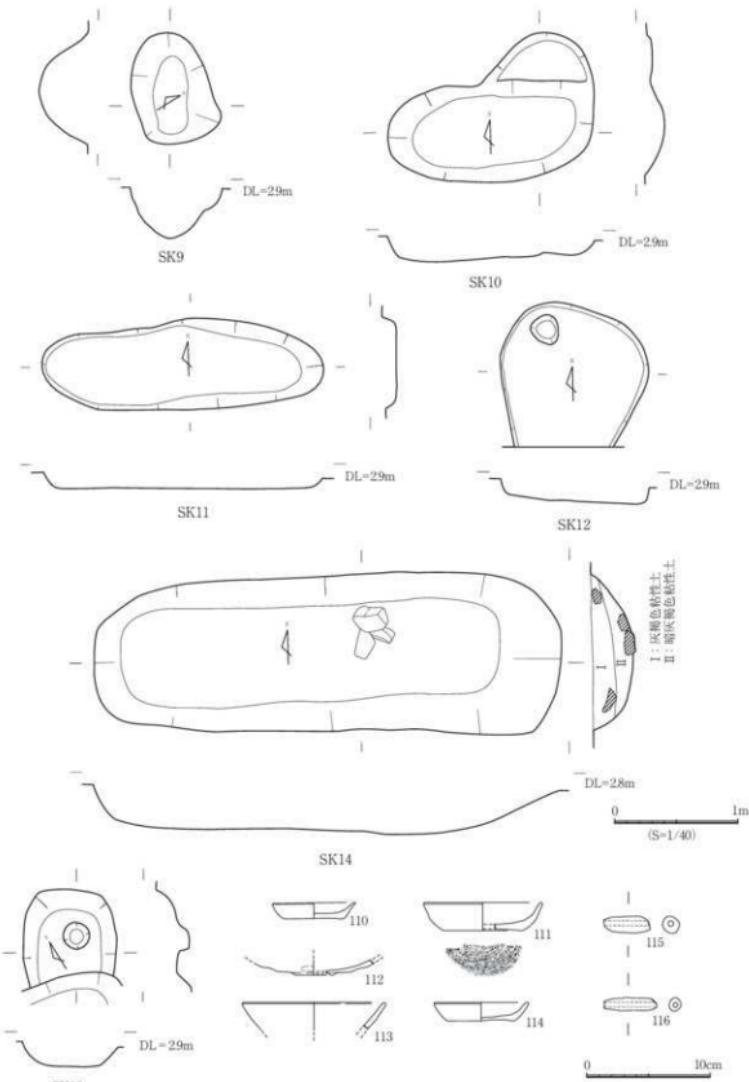


Fig.19 SK9~14構造及び遺物実測図

SK10 : 110·111 SK11 : 112·115 SK13 : 113·116 SK14 : 114

の角礫が床面に深く食込んでいる。床には径30cm、深さ15cmのビットが掘られている。遺物は土師器、瓦器、青磁細片が見られる。瓦器碗(119)のみ図示し得た。

SK19 (Fig.20)

調査区中央部に位置し、SD3と切り合っているが先後関係は不明である。残存長軸65cm、深さ10cmを測り、床面に小ビットが1個掘り込まれている。埋土は灰褐色シルトである。遺物は認められない。

SK20 (Fig.20)

調査区西南部に位置し、SD3に切られている。平面形は略方形を呈する。確認長軸1.4m、短軸1.2m、深さ20cmを測る。床面は水平で断面は皿状を呈する。埋土は灰褐色シルトである。遺物は土師器細片が多く含み、瓦器細片が少し出土している。土錘(120)を図示し得た。

SK22 (Fig.20)

調査区西部に位置しSK26を切っている。平面形は不整形を呈し、長軸1.7m、短軸1.3m、床面は、南側が大きく掘り込まれており深さ60cm、テラス状に広がる平坦面は10cm前後である。埋土は暗灰色粘性土で大小の礫を多く含んでいる。遺物は土師器、瓦器細片が多く出土しているが、図示し得たのはトリベと考えられる土師器(121)である。121は高熱を受けて内面が海綿状を呈する。

SK23 (Fig.20)

調査区中央部に位置しSD6を切っており、南側を水道管に切られている。平面形は略方形を呈する。確認長軸1.1m、短軸90cm、深さ10～20cmを測り、床面は階段状をなしている。埋土は茶灰色粘性土である。遺物は土師器細片が多く出土している。東播系捏鉢胴部(122)のみ図示し得た。122は外面が煤けている。

SK26 (Fig.20)

SK22に切られている。平面形は不整形を呈する。長・半軸1.0m前後、深さ30cmを測り、断面形は船形を呈する。埋土は褐灰色粘性土である。遺物は土師器細片が多く、土師器羽釜片、白磁碗細片などが出土している。黒色土器A類碗(123)と摂津C2型類羽釜(124)を図示し得た。2) 123は搬入品である。

SK80 (Fig.21～24)

調査区東部に位置する。平面形は不整形を呈し東側の壁は鉤状に屈曲する長大な土坑である。長さ6.0m、最大幅2.7m、深さ1.3mを測り、壁はほとんど垂直に立ち上がる。埋土は上層部に茶灰色の粘性土が見られたが、それ以外の大部分は砂岩や蛇紋岩の風化礫で埋まっていた。意識的な埋め戻しがなされたものと思われる。遺物は埋土中に混在して近世陶磁器が大量に出土している。

磁器は肥前産と肥前系で占められている。肥前産は染付小皿(128-132)、染付皿(130-139)、波佐見小皿(143-145)、色絵小杯(129)、染付小碗(135-136)、染付碗(140)、染付中碗(138)、である。肥前系は染付小皿(126-131)、同中碗広東形(125-127-142-146)、同中碗端反形(133)、同猪口(134)、同付瓶(141)、白磁碗(147)、仏飯器(137)は肥前産か肥前系何れかに属するものである。

陶器は、供膳具に加えて貯蔵具、調理具などがある。肥前産の供膳具は、中碗(148-162)、中碗丸形(149～156)、小皿(164-165-167-169)、三島手皿(172)、刷毛目二彩手の皿または鉢(179)、鉢(168)である。肥前系は小皿(166)が見られる。165-167-169は内野山窯、164-166は唐津系灰釉である。中碗丸形(159)は尾戸窯、同(158-160)も尾戸窯の可能性があり、小皿(157)は能茶山窯の可能性がある。こ

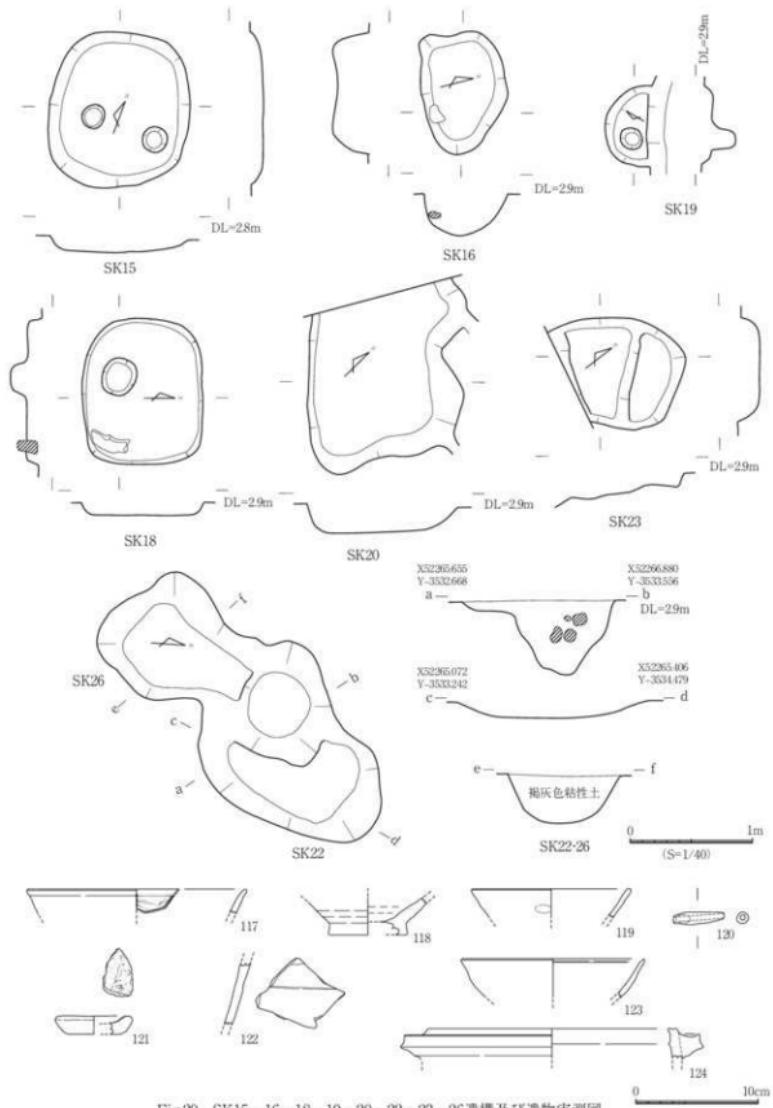
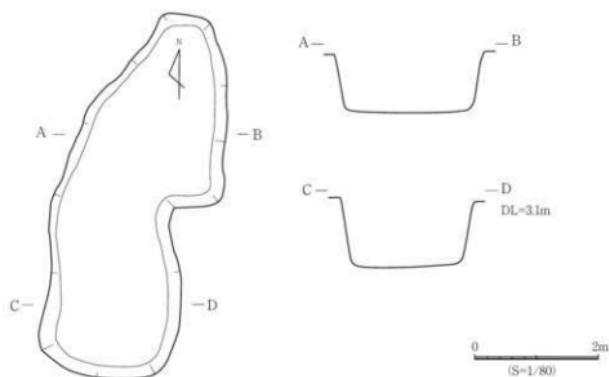


Fig.20 SK15・16・18・19・20・22・23・26遺構及び遺物実測図
SK15: 117-118 SK18: 119 SK20: 120 SK22: 121 SK23: 122 SK26: 123-124



SK80平面・セクション

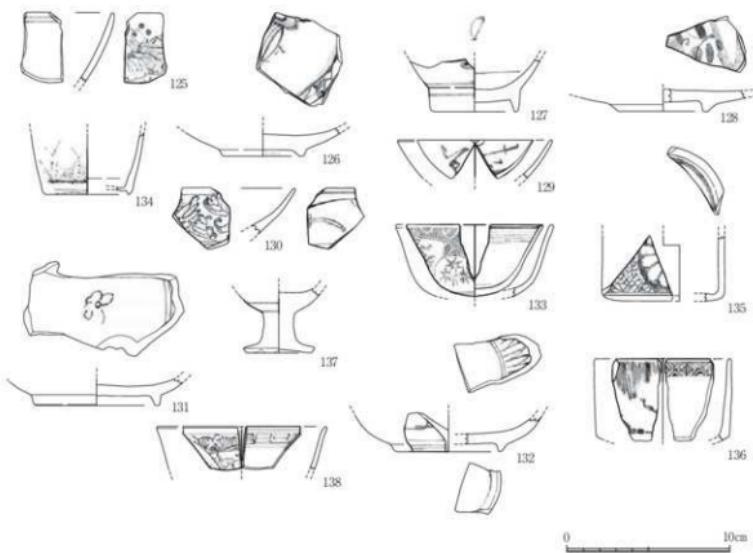


Fig.21 SK80遺構及び遺物実測図①

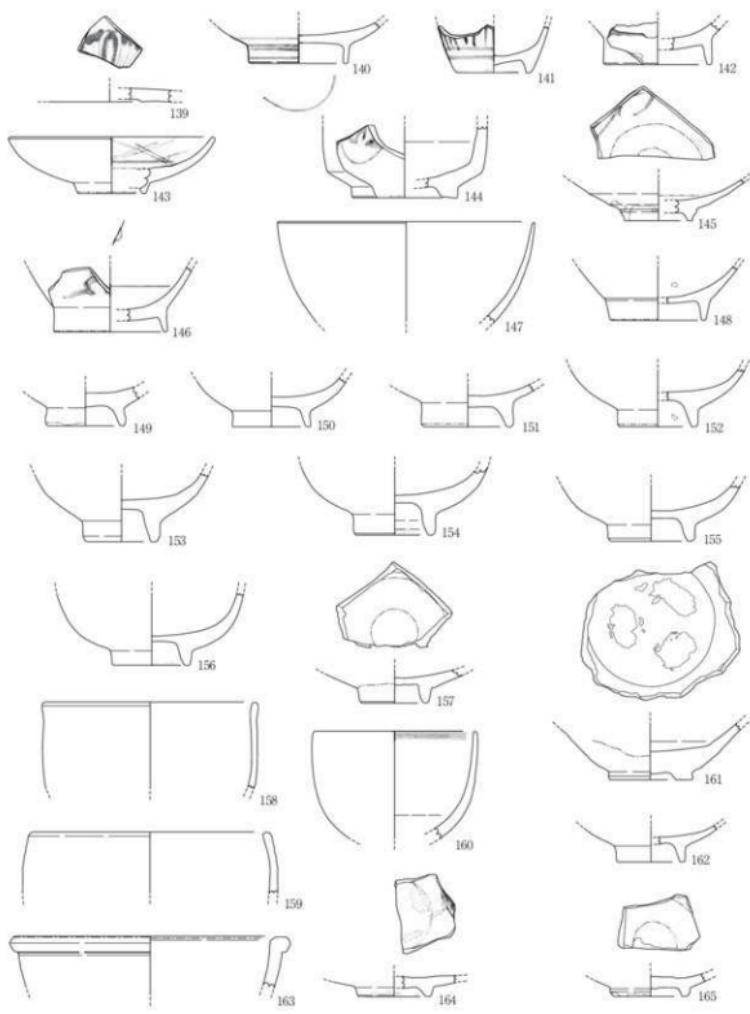


Fig.22 SK80遺物実測図(②)

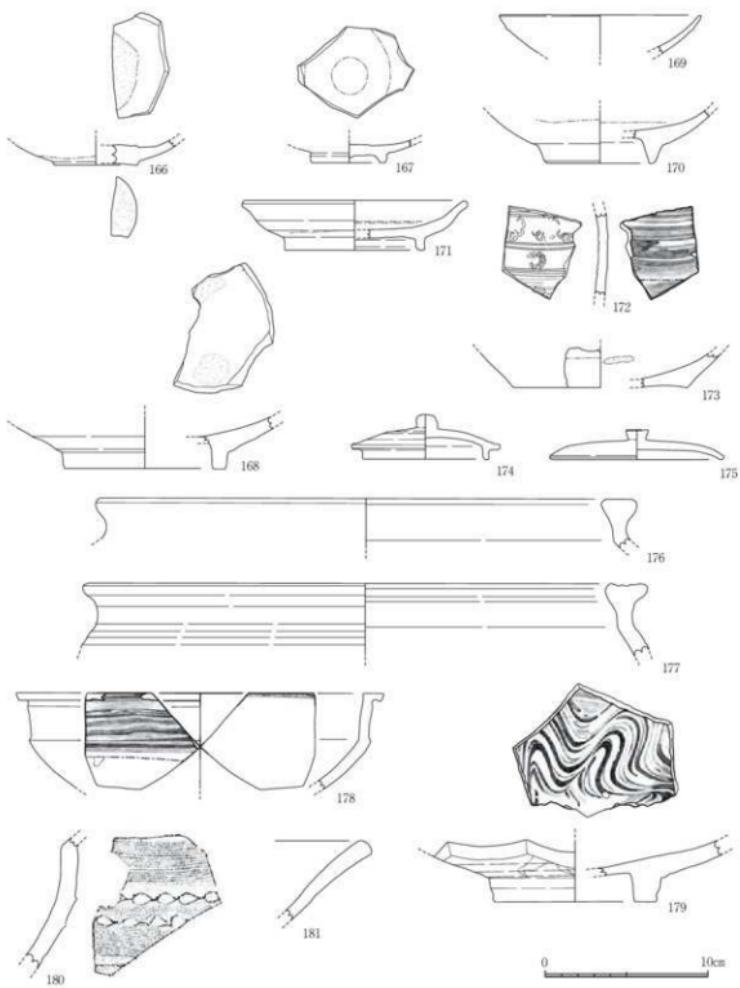


Fig23 SK80遺物実測図③

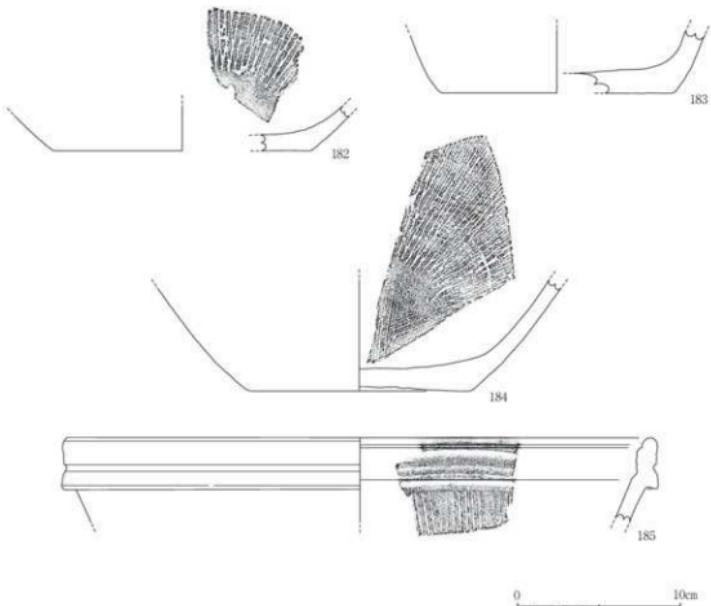


Fig.24 SK80遺物実測図④

の他に、産地を同定することができない皿(170・171)、蓋(174・175)、鉢(178)、底部(173)が見られる。

調理具では、肥前産捏鉢(163)、堺・明石系擂鉢(182・184)、備前擂鉢(185)、土師質土器焰烙(181)がある。貯蔵形態は、丹波産甕(176・177)、肥前産甕(180)、産地不明の底部(183)が見られる。180は叩き成形、内面に格子の当道具痕跡が見られ、外面上には2条の縄状突起を貼付している。これらの他、暖房具として肥前産の陶胎染付火入れ(144)が出土している。

以上の陶磁器類は、碗(133)が1点近代に属しているが、他はすべて近世に属する。18世紀前半を中心とし17世紀前半から幕末期までのものを含んでいる。磁器は肥前産と肥前系で占められているが、陶器は両者を中心としながらも地元の尾戸窯や丹波、堺・明石系など多くの産地からの製品が認められる。

SK81 (Fig.25)

調査区南部に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ10cm前後を測る。床面は水平で、径20cmのピットが掘られている。埋土は灰茶色粘性土である。土師器や瓦器細片が多く出土し、青磁細片1点、東播系捏鉢細片1点が出土している。図示できるものはない。

SK82 (Fig.25)

調査区の東寄りに位置する。南北に長い溝状の平面形を呈する。長軸2.6m、短軸0.77m、深さは70cm前後を測る。埋土は灰茶色粘性土である。埋土中に人頭大の角礫や円礫が入っており、被熱赤変している礫もある。遺物は瓦器小皿(186・187)、同椀(189)、青磁碗(190)、土師器壺胴部(191)、常滑窯底部(192)が出土している。191は外面が煤けている。

SK83 (Fig.25)

調査区の南東寄りに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.5m、短軸85cm、深さ15cm前後を測る。埋土は灰黄褐色粘性土で炭化物を少量含んでいる。東西の壁に径25cm前後のピットが掘られており、西側のピットには径10cmの柱痕跡が認められる。土師器と瓦器細片が多く含むが、図示できるものはない。

SK84 (Fig.25)

調査区の東部に位置しSD33を切っている。溝状の細長い土坑で確認延長2.0m、幅50cm、深さ5～10cm前後を測る。埋土は黄灰褐色シルトである。遺物は認められない。

SK86 (Fig.25)

調査区の東寄りに位置する。東西に長い溝状の土坑である。長軸4.2m、短軸60cm、深さ10cm前後を測る。床面は水平で西部に径20cm、深さ60cmのピットが掘られている。埋土は灰茶色粘性土である。土師器と瓦器細片が多く出土しており、青磁碗細片も1点出土している。瓦器椀(188)を図示し得た。

③ 溝

SD1 (Fig.26)

調査区の中央東よりに位置する。ほぼ東西方向に延びる溝で東は近世土坑SK80に切られており、西はSD6と直角に繋がっている。後述するようにSD6などと共に方形区画SH1を構成する区画溝である。確認延長は9.4m、深さ50～60cmを測る。断面形はおおよそ逆台形状を呈し、床面は少し落ち込んでいる。これは底浚えの痕跡を示すものと考えられる。埋土はI：灰褐色粘性土、II：黄褐色粘性土である。II層は壁の崩落土である。

遺物は土師器、瓦器の供膳形態や煮沸形態が多く出土しており、これらについては、それぞれの破片の合計重量を測って比較した。土師器の杯・皿など供膳形態は910g、同じく煮沸形態は150g、瓦器の供膳形態は960g、煮沸形態420gで、両形態ともに瓦器が多い。この他、東播系捏鉢11点、同甕3点、常滑4点、青磁8点が出土している。図示し得たものは次の通りである。瓦器小皿(193)、瓦器椀(194～203)、青磁碗はI 5b類(204-205)、白磁皿は口禿タイプのIX類(206)、明染付皿(207)、瓦質羽釜(208～212・216)、東播系捏鉢(213～215)、瓦質脚(217-218)、土錐(220)、陶器甕(219)である。これらの遺物は出土状況から見て一括性の高いものである。なお染付皿(207)は検出面出土で混入遺物である。

SD2 (Fig.27)

調査区東北に位置する。確認延長4.6m、幅45cm、深さ10cm前後である。埋土は灰茶色粘性土である。遺物は土師器と瓦器の細片が少量出土している。土師器底部(221)を図示し得たのみである。

SD3 (Fig.27)

調査区の西部に位置し東西方向に走る溝で、東は現代搅乱に切られており西はSK20を切って調査

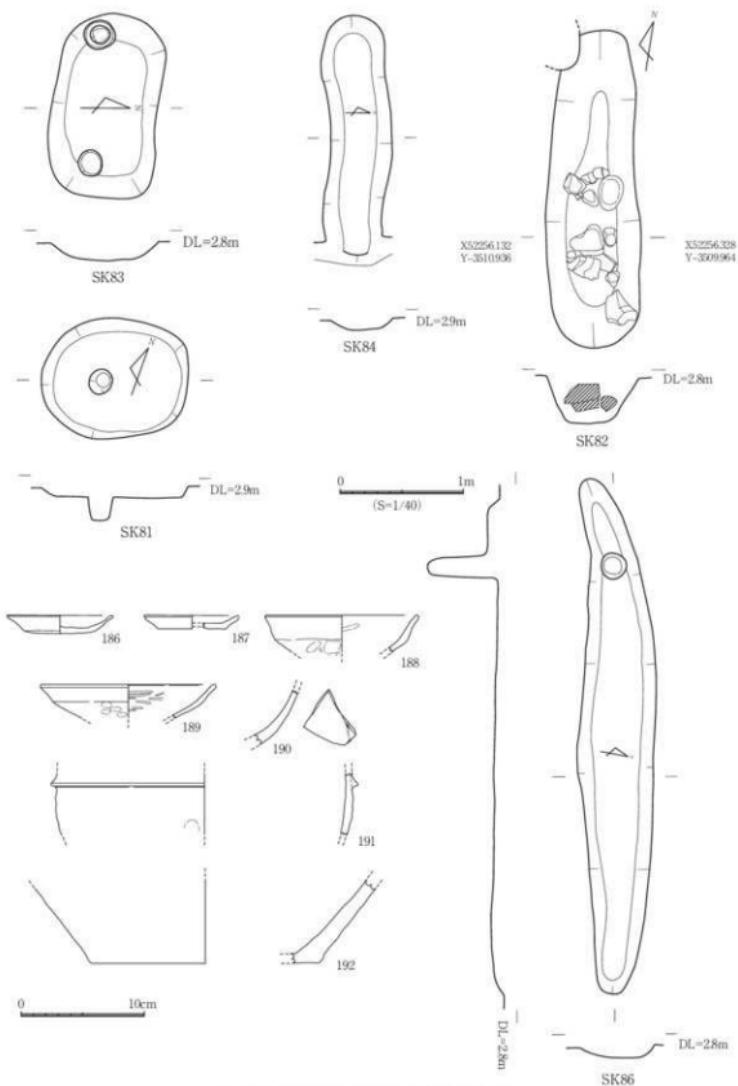


Fig.25 SK81~84・86遺構及び遺物実測図
SK82: 186・187・189~192 SK86: 188

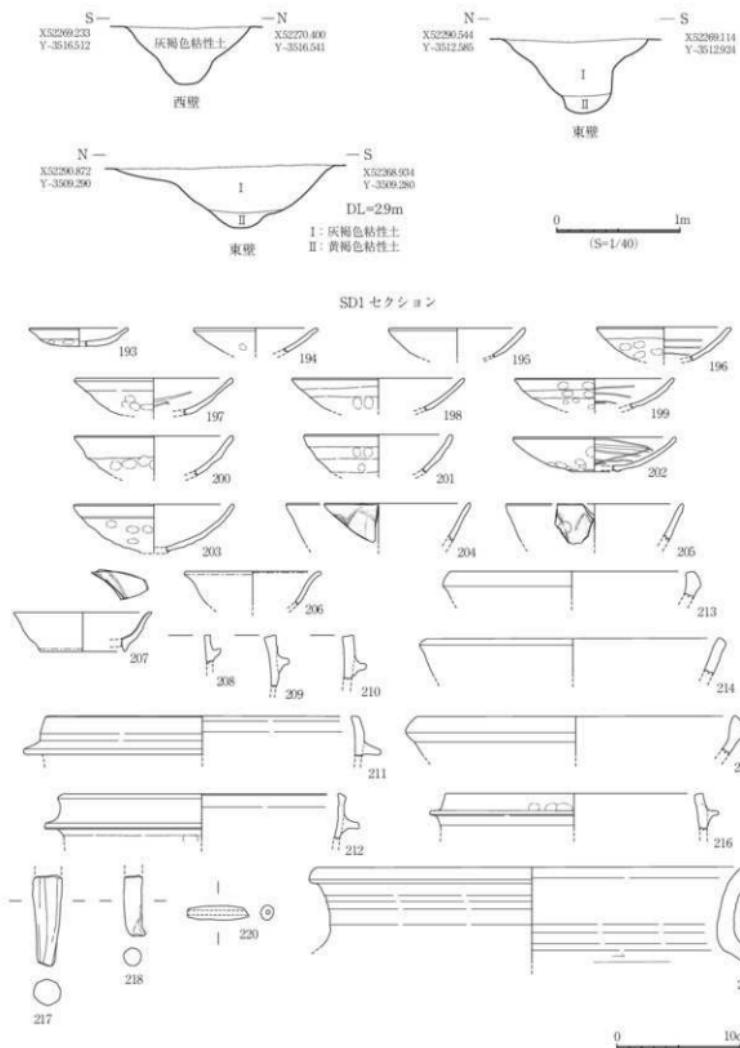


Fig.26 SD1セクション及び遺物実測図

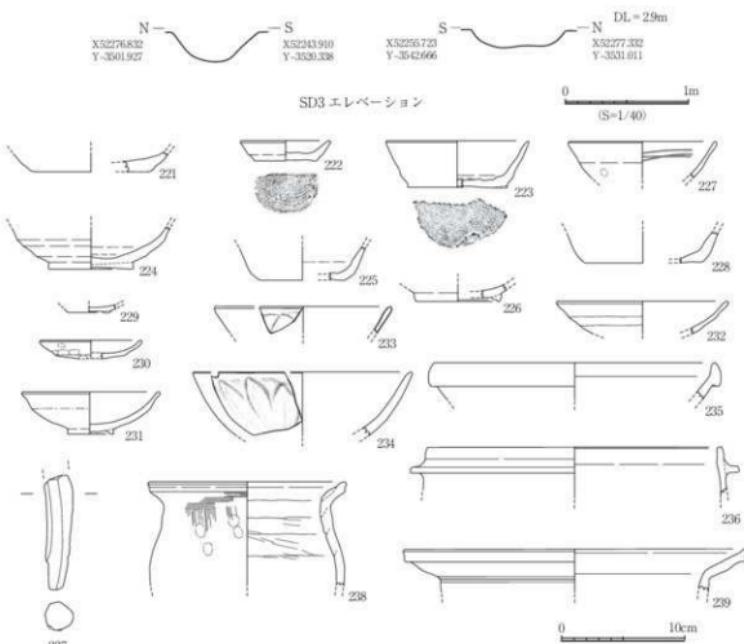


Fig.27 SD3エレベーション及びSD2~4遺物実測図
SD2 : 221 SD3 : 222~230・232~239 SD4 : 231

区外に帶びている。確認延長14.0m、幅6 ~ 12m、深さ10 ~ 22cmを測る。埋土は灰褐色粘性土である。断面形は逆台形状や皿状を呈し場所によって異なる。遺物は土師器供膳具が670g、瓦器のそれが310g出土している。土師器小皿(222)、同杯(223-225-228)、同椀(224)、瓦器椀(227-229-232)、同小皿(230)、青磁碗(233-234)、東播系捏鉢(235)、土師器釜(236)、瓦器脚(237)、土師器壺(238-239)、縁軸皿(226)を図示し得た。青磁碗は龍泉窯系のI 5b類、縁軸皿は軟質で、疊付けが段上を呈する。近江産で平安京III期中段階に属する。土師器杯・椀類はすべて糸切りである。

SD4 (Fig.27)

調査区の南よりに位置する。東西方向に延びる溝で東は現代搅乱によって切られている。SD5と切り合っているが先後関係は不明である。確認延長8.0m、幅30 ~ 60cm、深さ10cm前後である。埋土は灰褐色粘性土である。遺物は、土師器供膳具片100g、瓦器供膳具形態50g、東播系捏鉢細片2点が出土しており、土師器椀(231)のみ図示し得た。手捏ね成形、口内外面横ナデ調整、体部外面には指頭圧痕が見られる。吉備系の椀である。

SD6 (Fig.28)

調査区東北部をL字状に開む溝である。北端を押さえることは出来ないが、東端はSD33と接する

手前で終わっている。南北方向は2005年度、東西部分については2007年度調査である。南北方向に19.0m、東西方向に9.0m伸びている。南北部分の幅は北端で60cm、SD1と交わる地点で1.0m、南のコーナー部分で1.2m、深さはそれぞれ20cm、30cmを測る。東西部分の幅はコーナー近くで1.2m、東端では1.9m、深さもそれぞれ50cm、70cmを測り、東端部分が最も広く、深くなっている。断面形は概ね逆台形を呈し、東西部分については底深い痕跡が認められる。埋土はI:灰褐色粘性土、II:I層に砂礫が混ざる、III:灰黄色粘性土である。

遺物は、供膳形態では、土師器杯(241・242)、同皿(244～246)、瓦器椀(247・248)、同小皿(243)、青磁碗(249・250・253～256)、白磁皿(251・252)を図示し得た。土師器杯は底部糸切りであるが、皿は手捏ね成形である。なお、土師器の供膳形態片は1,700g、瓦器のそれは810gである。青磁碗は龍泉窯系I 5b類(250・253～256)と鎬運弁に樹描文を施すI 6類(249)が見られる。調理形態は東播系捏鉢(257～261)、土師質擂鉢(274)、瓦質擂鉢(262)が見られる。煮沸形態は、瓦質鍋(264)、土師器羽釜(265・266)、瓦質羽釜(267～270)、瓦質脚(271・272)が見られる。貯蔵形態では東播系甕(263・275)、常滑甕(273)、この他に土鍤(276～280)が出土している。SD1とSD6は後述するSD31・32と共に一辺10.0m程に方形に囲む区画溝と考えられ、南北に4区画が認められる。

SD7 (Fig.29・52)

SD6の西側を平行して延びる溝状遺構で、南は現代搅乱に切られている。確認延長13.0m、幅は北部で0.8m、南部で1.7m、深さは北部で10cm、南部で25cm前後を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土はI:灰褐色粘性土、II:灰黄色粘性土である。

遺物は供膳形態では土師器小皿(281・282)、同椀(283)、同杯(284・286)、同足高高台杯(285)、瓦器椀(287～290・293)、黒色土器A類椀(292)、黒色土器B類椀(291)、青磁碗 I 5b類(294)を図示し得た。土師器供膳形態片は970g、瓦器のそれは380gである。煮沸形態では土師器甕(298)、同羽釜(299)、瓦質羽釜(297)、甕(298)は胴部外面に平行叩きが見られる。瓦質脚も2点(300・301)見られる。供膳具は東播系捏鉢(296)が出土している。SD7は古代・中世の遺物がかなり混ざって出土している。この他土鍤(303～306)と砥石(867)が出土している。砥石は、使用面四面で各面に敲打痕が見られ、各面が焼けている。流紋岩製である。

SD8 (Fig.29)

SD7と切り合っており、西側は現代搅乱に削られている。SD7との先後関係は不明である。確認延長1.5m、幅40cm、深さ20cm前後である。埋土は灰褐色粘性土である。遺物は土師器、瓦器の細片が出土しているが、図示し得たのは瓦質脚(302)のみである。

SD30 (Fig.30～33・52)

調査区東部を南北に走る溝状遺構でSD33に切られており、北端はSK80の南あたりで消滅しており、南部は現代搅乱によって切られている。確認延長20.0m、幅は北部で90cm前後、中央部より南で1.5m、深さは15cm前後である。図示したように拳大から人頭大の礫が多量に見られる。SD30は溝のプランよりも最初は石列状の遺構として検出し、礫を出して行く中で溝の肩を確認することができた。礫はほとんどが角礫で、河原石は少ない。また被熱赤変しているものが多い。これらの礫は、床面には見られず5～10cm程浮いていることから、溝が一定埋没した時に一気に礫が捨てられたものと考えられる。埋土は黄褐色シルトである。

遺物は礫の中に食い込むような状態で出土している。供膳形態では、瓦器小皿(307)、同椀

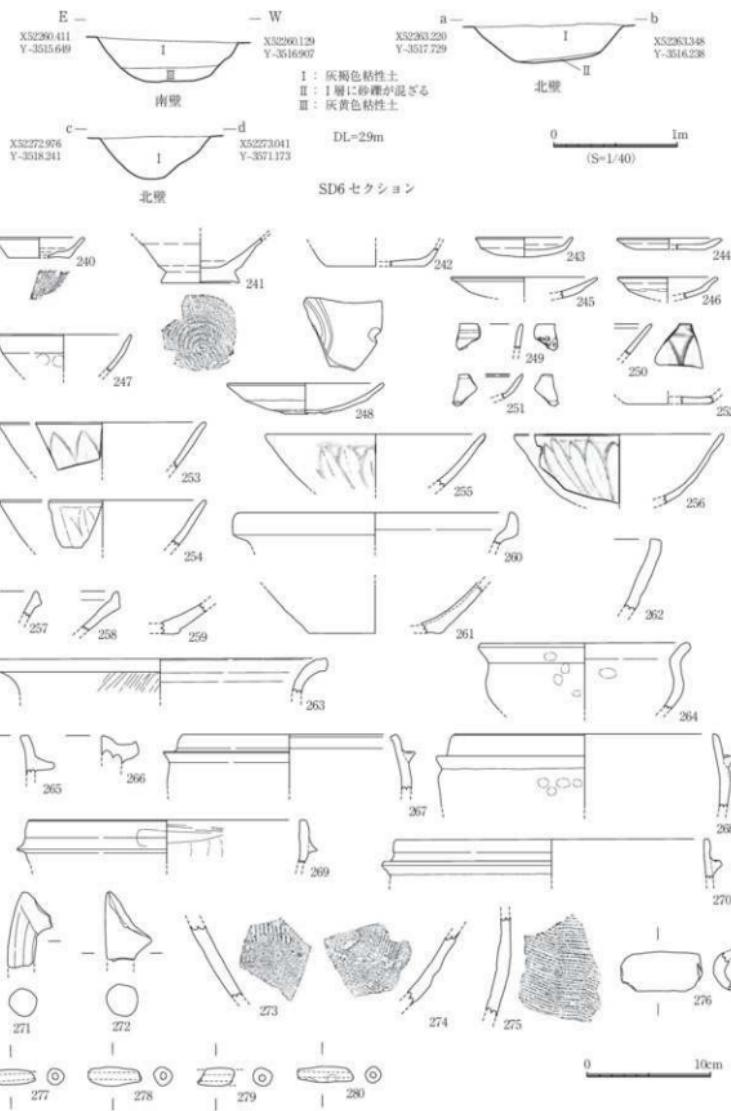


Fig.28 SD6セクション及び遺物実測図

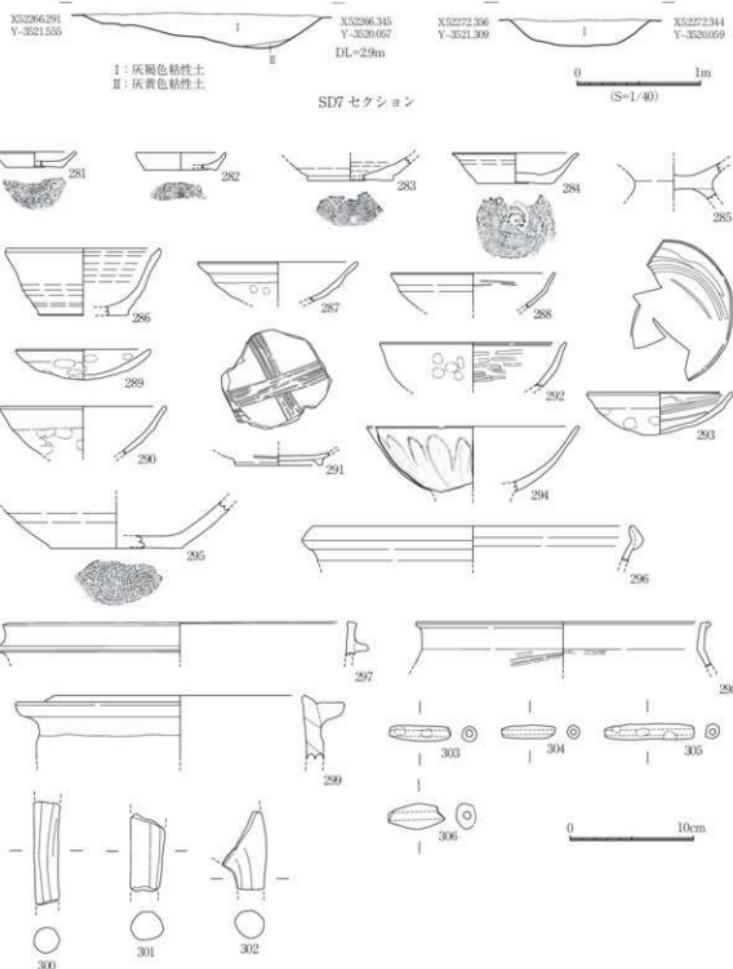


Fig.29 SD7セクション及びSD7・8遺物実測図
SD7 : 281~301 303~306 SD8 : 302



SD30・33 北壁セクション

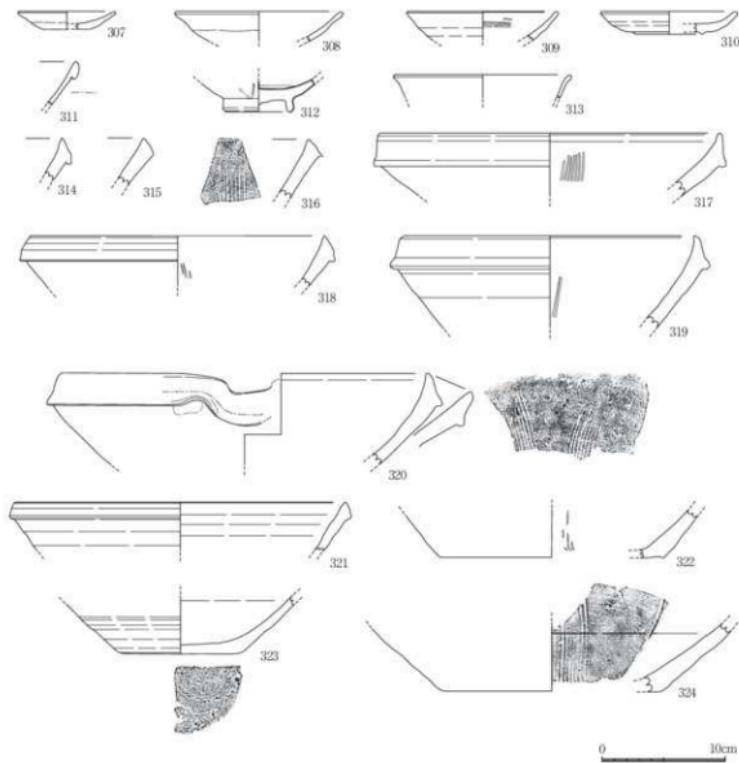


Fig.30 SD30・33セクション及びSD30遺物実測図①

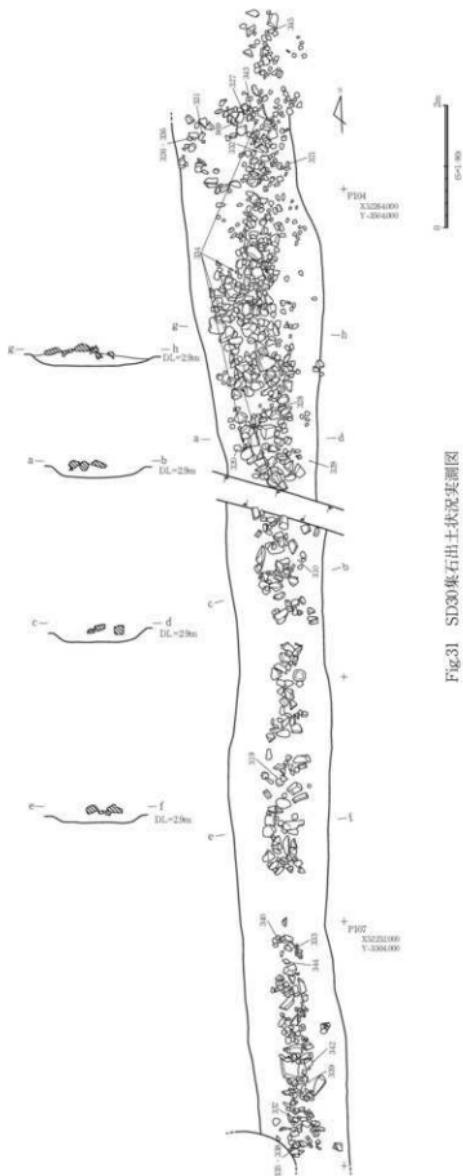


Fig.31 SD30集石出土状況実測図

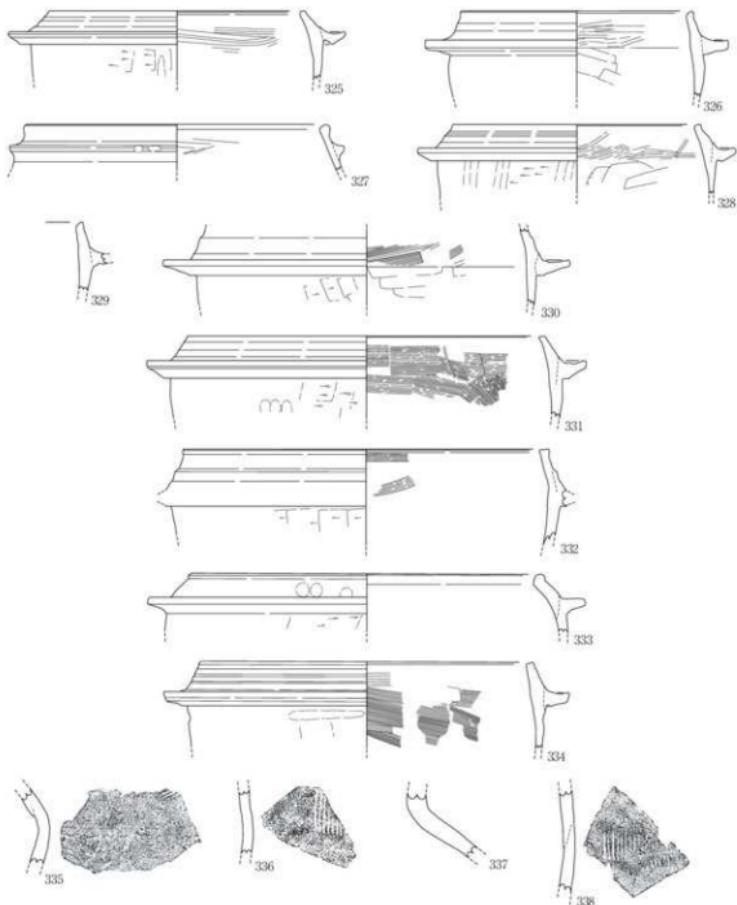


Fig.32 SD30遺物夾測図②

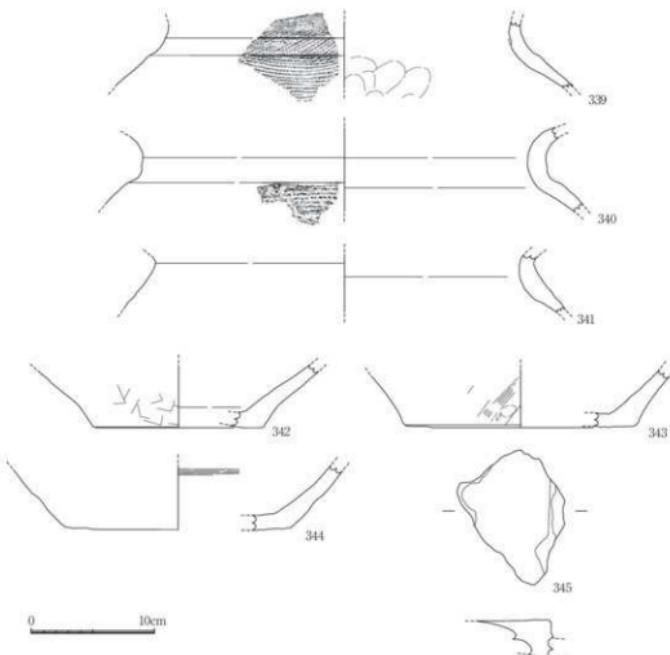


Fig.33 SD30遺物実測図③

(308-309)、志野皿(310)、白磁碗IV類(311)、青磁碗はI 5b類底部(312)と上田分類D類3) (313)を図示し得た。土師器杯なども出土しているが細片が多い。調理具では備前播鉢(314～320-322-324)、東播系捏鉢(321-323)が見られる。煮沸形態では土師質羽釜(326-327-329-333)、瓦質羽釜(325-328・330～332-334)が見られる。327は東播系に属する。貯藏形態では常滑甕(335～338-342～344)、東播系甕(339～341)、その他丸瓦片(345)と砥石(869)が出土している。砥石は砂岩製で4面使用、被熱赤変している。

SD31 (Fig.34)

調査区中央南よりに位置し、南北方向に延びる溝状遺構であり、中程でSD32と直角に交差している。本例は後述するようにSD32と区画溝SH2を構成する。確認延長16.0m、南は調査区外に出ている。幅は北端が最も広く2.0m前後、中央部は1.0m前後、SD32交点から南は幅が減少している。深さは北端と南端付近で30cm前後、中央部付近で50cmを測る。埋土はI：灰黄褐色シルト、II：褐色粘性土、III：灰黄褐色粘性土である。SD31とSD6との間には2.5mの間隔があるが、区画への出入口と考えられる。

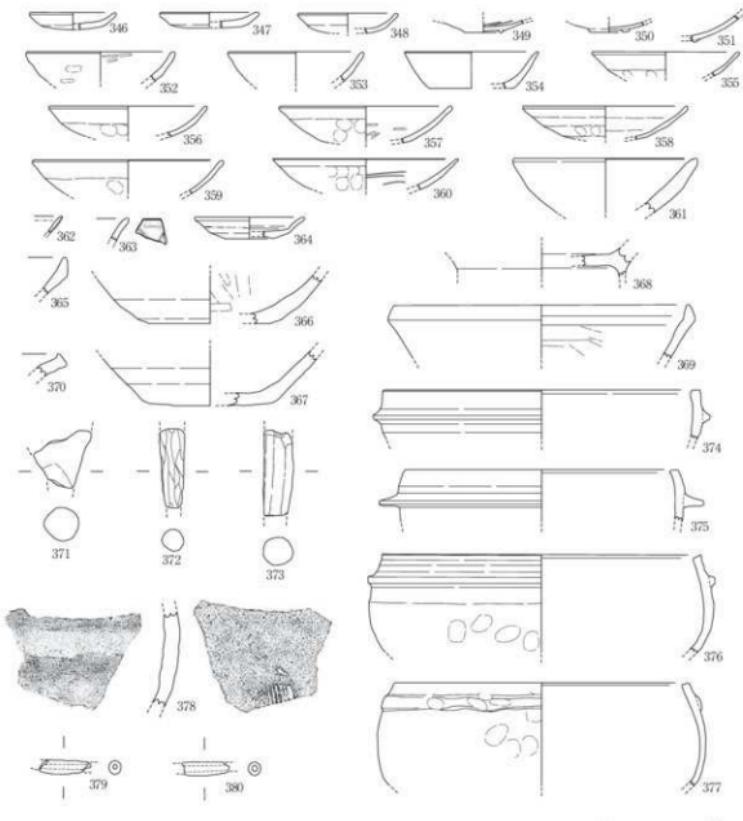
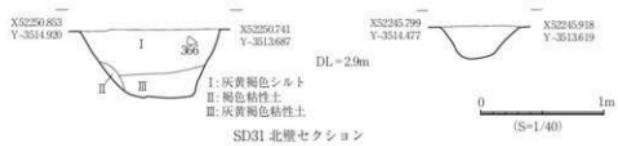
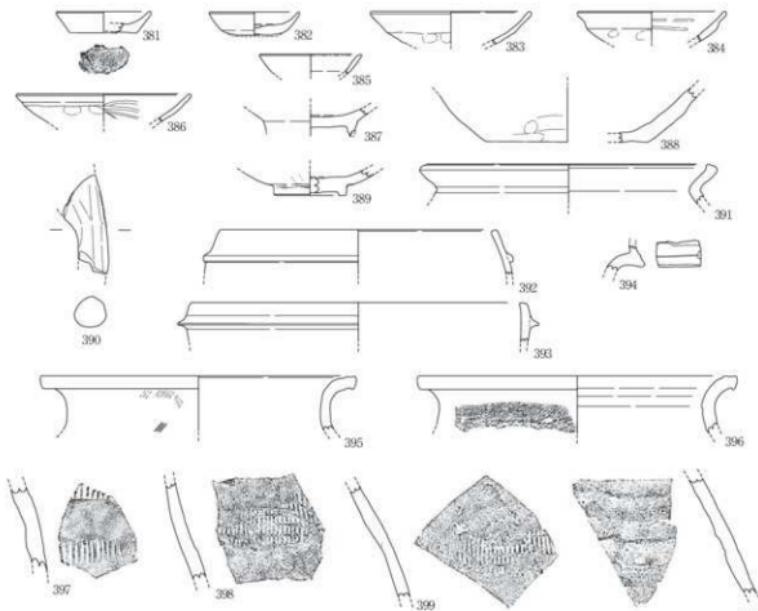
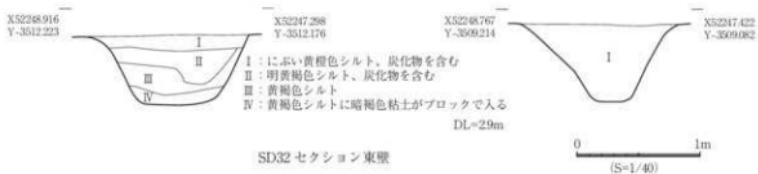


Fig.34 SD31セクション及び遺物実測図



0 10cm

Fig.35 SD32セクション及び遺物実測図

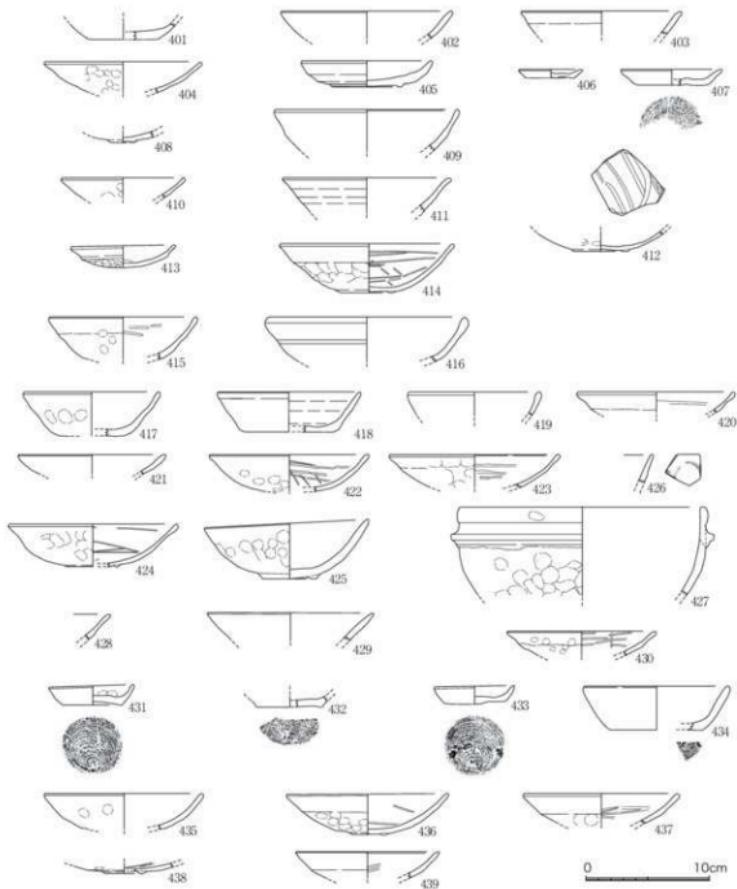


Fig.36 ピット遺物実測図①

P2 : 401~403 P5 : 404·405 P30 : 406·407 P31 : 408·409 P81 : 410~412 P106 : 413·414
 P119 : 415·416 P123 : 417~427 P127 : 428~430 P449 : 431~437 P459 : 438·439

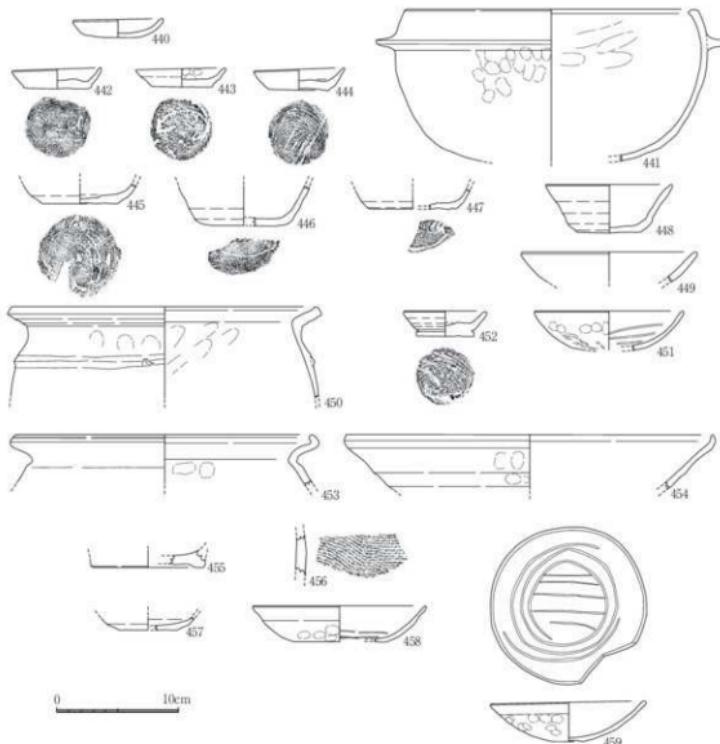


Fig.37 ピット遺物実測図②
P465: 440~441 P471: 442~454 P473: 455~456 P475: 457~459

遺物は、土師器杯(354)、瓦器小皿(346～348)、瓦器椀(349～353・355～360)、常滑鉢(361)、青磁碗I 5b類(363)、同安窯系青磁皿I～I類(364)、白磁皿IX類(362)、東播系捏鉢(365～367・369)、土師器壺(370)、土師器羽釜(375)、瓦質釜(374・376・377)、瓦質脚(371～373)、常滑壺(378)、土鍤(379・380)、368は陶器底部であるが産地は不明である。370は紀伊型壺である。出土量の多かった土師器、瓦器類を重量で比較すると、供膳形態では土師器が1,100g、瓦器が850g、煮沸では土師器100gに対して瓦質は350gである。

SD32 (Fig.35)

SD31と直行する溝状造構であり、東端は現代搅乱によって切られている。確認延長8.0m、幅1.3m、深さ50～60cmを測る。断面は逆台形状を呈する。埋土はI：にぶい黄橙色シルト、炭化物を含む。II：明黄褐色シルト、炭化物を含む。III：黄褐色シルト、IV：黄褐色シルトに暗褐色粘土がブロック状

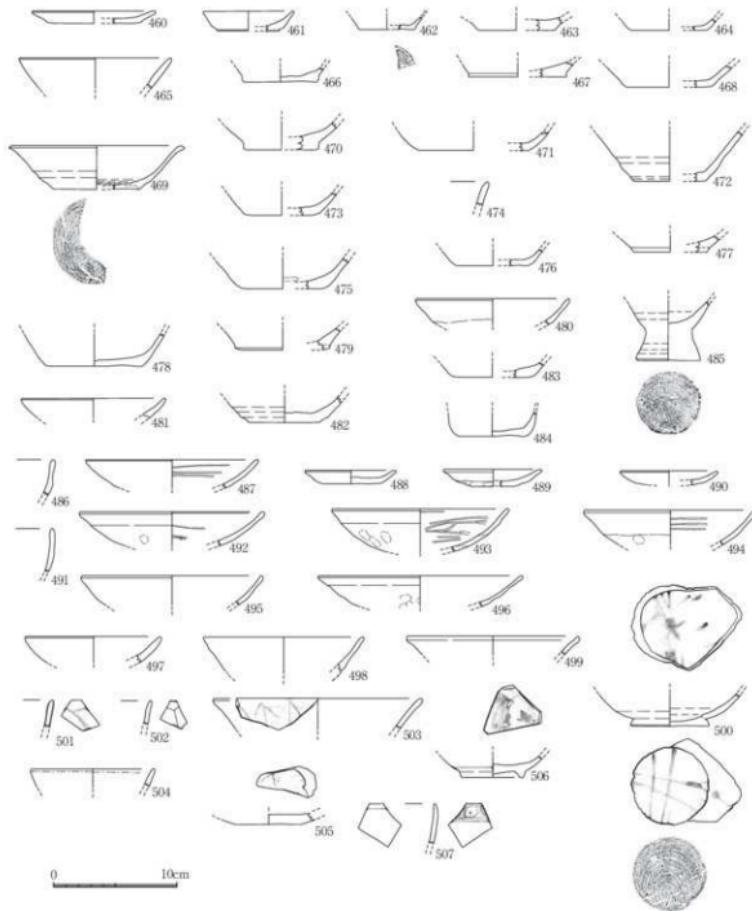


Fig.38 ピット遺物実測図③

P4 : 465	P6 : 470	P7 : 486	P14 : 467	P17 : 468	P20 : 469	P22 : 466	P24 : 500
P28 : 463	P29 : 506	P33 : 471	P34 : 487	P35 : 492	P39 : 498	P47 : 493	P53 : 501
P65 : 473	P66 : 497	P67 : 502	P70 : 464	P77 : 503	P78 : 472	P83 : 474	P89 : 477
P90 : 475	P103 : 476	P105 : 499	P108 : 494	P114 : 491	P121 : 488	P122 : 495	P124 : 460
P129 : 461	P130 : 496	P131 : 478	P132 : 505	P133 : 484	P142 : 462	P143 : 507	P146 : 504
P150 : 479	P152 : 480	P154 : 481	P157 : 483	P158 : 482	P403 : 490	P407 : 485	P504 : 132

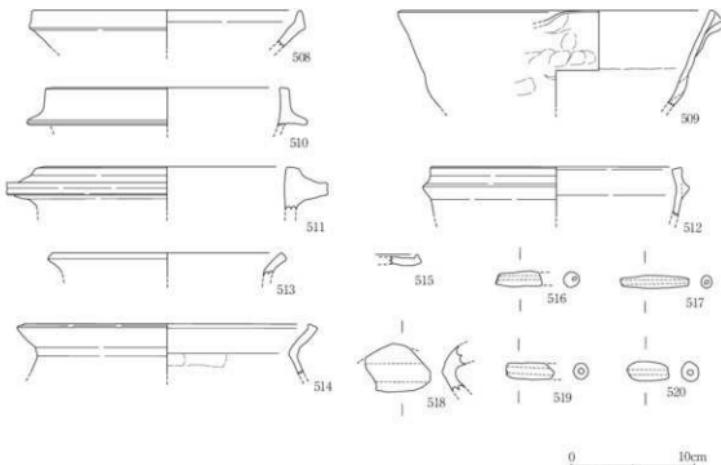


Fig.39 ピット遺物実測図④

P27 : 510 P54 : 516 P69 : 517 P79 : 515 P80 : 508 P87 : 518 P116 : 513
P119 : 514 P138 : 509 P152 : 519 P154 : 520 P436 : 512 P844 : 511

に入る。SD32は、SD6-30-31と共に一辺8～10mの方形区画を形成している。

遺物は、土師器小皿(381-382)、382は底部円板が剥落している。瓦器椀(383-384-386)、青磁碗底部(389)、白磁碗底部(387)、白磁皿X類(385)、東播系捏鉢(388)、土師器甕紀伊型(391)、瓦質釜(392-393)、瓦質脚(390)、東播系甕(395-396)、常滑甕胴部片(397～400)、産地不明の陶器甕(394)がある。397～399の外側には籠状の押印が見られ、400の内面には粘土紐の単位が見られる。

④ ピット出土の遺物

P2 (Fig.36)

土師器杯が3点(401～403)出土している。この他に土師器煮沸形態細片が見られるが瓦器は認められない。

P5 (Fig.36)

瓦器椀(404)と志野小皿(405)を図示し得た。この他、瓦器や白磁皿細片が出土している。

P30 (Fig.36)

瓦器小皿(406)、土師器小皿(407)が出土している。

P31 (Fig.36)

瓦器椀(408-409)が出土している。

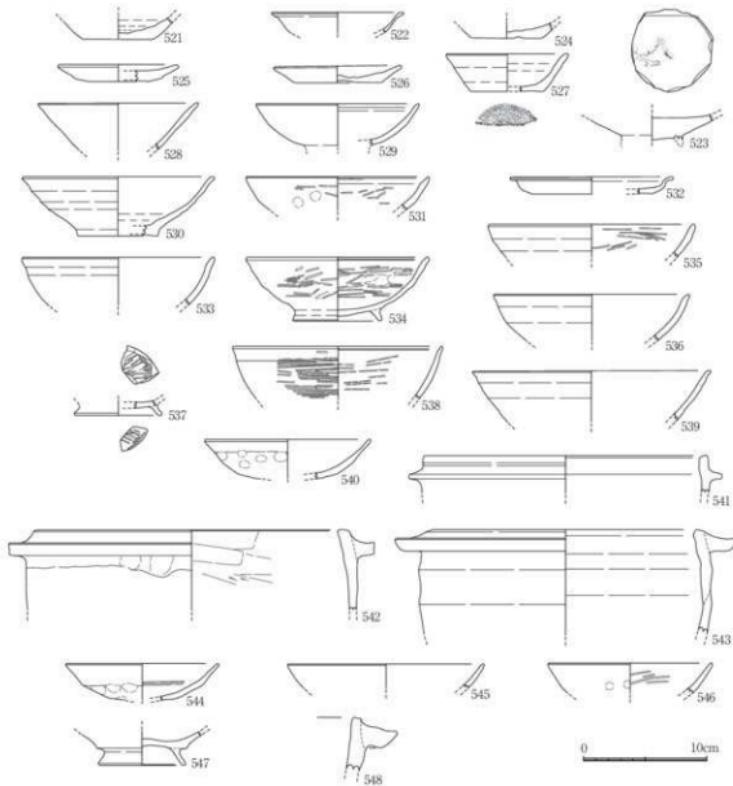


Fig.40 SX1・土器集中1・2・6遺物実測図

SX1 : 521～523 土器集中1 : 524～539・542・543 同2 : 540 同6 : 541・544～548

P81 (Fig.36)

瓦器椀(410・412)、土師器杯(411)

P106 (Fig.35)

調査区中央部のK105 グリッドに位置する。径25 cm、深さ20 cmを測る。埋土中層から瓦器小皿(413)、瓦器椀(414)が出土している。両者とも完形品であり、柱抜き取りの後に意図的に納められた可能性がある。

P119 (Fig.36)

調査区中央部のM106 グリッドに位置する。径50～60 cm、深さ40 cmを測る。埋土中から瓦器椀(415)、土師器杯(416)が出土している。416は手捏ね成形である。

P123 (Fig.36-52)

調査区中央部のL107グリッドに位置する。径50～60cm、深さ45cmを測る。埋土中から土師質土器杯(417～419)、瓦器椀(420～425)、青磁碗I 5b類(426)、瓦質羽釜(427)が出土している。土師質土器杯の418はロクロ成形であるが、417・419は手捏ねである。瓦器椀の425は器壁が厚く、高台が高いなど他の椀に比べて異質である。この他に棒状の鉄製品(871)が出土している。

P127 (Fig.36)

調査区西南のII06グリッドに位置する。径25～30cm、深さ30cmを測る。埋土中より土師器杯(429)、瓦器椀(428・430)が出土している。

P449 (Fig.36)

調査区南寄りのL107グリッドに位置する。径30cm、深さ45cmを測る。下層から土師器小皿(431・433)、同杯底部(432)、埋土中より土師器杯(434)、瓦器椀(435～437)が出土している。

P459 (Fig.36)

調査区中央南よりのM107に位置する。径35～40cm、深さ32cmを測り、底に人頭大の焼けた角礫が置かれていた。埋土中から瓦器椀(438・439)や土師質土器細片が出土している。

P465 (Fig.37)

調査区中央南よりのM107グリッドに位置する。楕円形のプランを呈し長軸85cm、短軸40cm、深さ20cm前後を測る。瓦器小皿(440)や土師質土器羽釜(441)の他に土師質土器や瓦器片が多く出土している。

P471 (Fig.37)

同じくM107グリッドに位置する。径40cm、深さ40cmを測る。遺物は検出面直下から土師質土器小皿(442～444)、同杯(445～448)が、埋土中から土師質土器杯(449)、同甕(450)、瓦器椀(451)が出土している。甕(450)は紀伊型甕である。

P472 (Fig.37)

M107グリッドに位置する。径60～70cm、深さ40cmを測る。検出面直下から瓦質捏鉢(454)、埋土中から土師質土器小皿(452)、同甕(453)や土師質土器、瓦器片が多く出土している。453は紀伊型甕である。

P473 (Fig.37)

調査区南よりのL108グリッドに位置する。楕円形を呈し長軸1.0m、短軸60cm、深さ10cm前後を測る。埋土中から白磁碗IV類底部(455)、外面に平行叩きを施した東播磨系甕細片(456)が出土している。

P475 (Fig.37)

L107グリッドに位置する。不整形で長軸80cm、短軸45cm、深さ8～40cmを測る。埋土中から瓦器椀(458・459)、青磁皿底部(457)が出土している。

⑤ その他の遺構出土遺物(Fig.37-38)

P124・129・142からは土師器小皿(460～462)が、P4・6・14・17・20・22・28・33・65・70・78・83・89・90・103・131・133・150・152・154・157・158・407からは同杯(463～485)が出土している。

P96・121・403からは瓦器小皿(488～490)が、P7・34・47・108・114・122・130からは瓦器椀(486・487・491～496)が出土している。

P66からは近世陶器(497)が、P39からは須恵器杯(498)が、P105からは須恵器皿(499)が、P24か

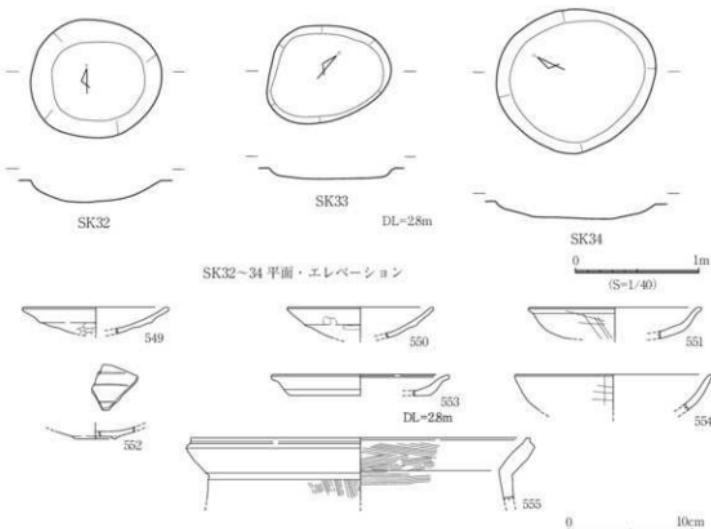


Fig.41 SK32~34造構及び遺物実測図
SK32:549 SK33:551・555 SK34:550・552~554

らは円板状高台で系切り、外面に火拂をもつ須恵器碗(500)が出土している。

P53・77からは青磁碗(501・503)が、P132・146からは白磁皿VII類(505)・同皿類(504)が、P67からは白磁の六角或は八角杯(502)が、P29からは明染付け碗(506)が、P143からは染付け碗(507)が出土している。

P80からは東播系捏鉢(508)、P138からは瓦質捏鉢(509)が出土している。P27・44・436からは、土師質土器羽釜が各1点(510～512)出土しており、512は東播系羽釜である。P79・116・119からは土師器甕が各1点(513～515)出土しており、514は紀伊型甕である。

P54・69・87・152・154からは土錘(516～520)が出土している。518は50g以上の大型、他は5g前後の管状土錘である。

SX1 (Fig.40:521～523)

調査区西南部で検出した不整形な凹状の浅い落ち込みである。土師質土器杯(521)、白磁小皿(522)、青磁碗底部(523)が出土している。白磁小皿は森田編年E2類4)、523の見込みには菊印花文が施されている。

⑥ 土器集中

土器集中1 (Fig.40:524～539・542・543)

調査区西寄りのK102グリッドで、土器の集中分布が見られた。明確な造構に伴うものではないが、被熱赤変した角礫も多く出土しており一括性の高いものと考えられる。土師器杯(524・527・528)、同小皿(525・526)、同碗(529・530・533)、同皿(532)、黒色土器A類(531・534・535)、同B類碗

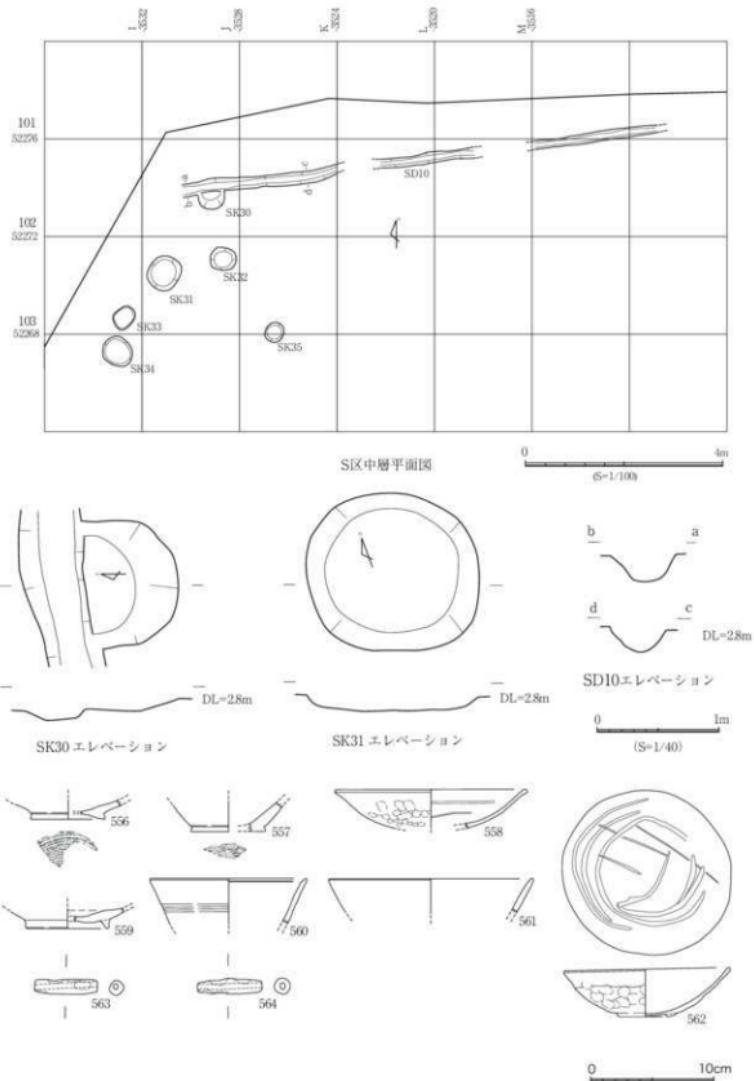


Fig42 S区中層遺構平面図、SK30・31・SD10遺構及び遺物実測図
SK30 : 559・563 SK31 : 560・561 SD10 : 556・558・562・564

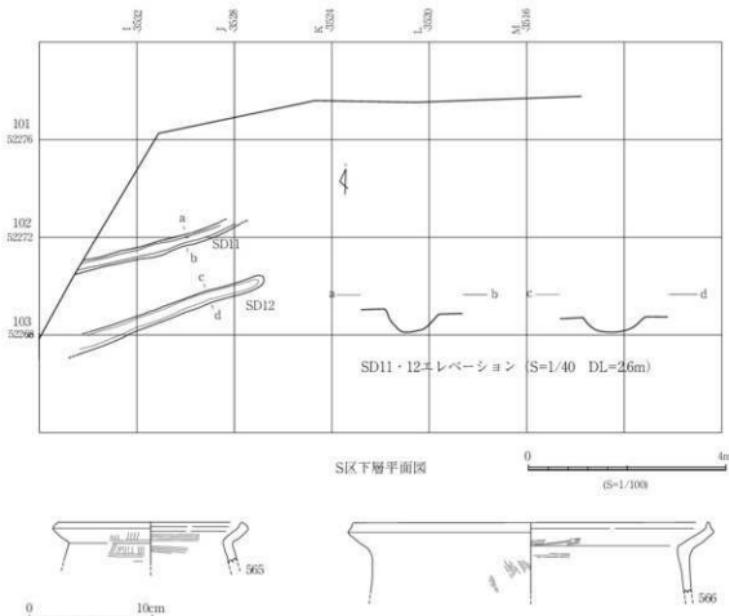


Fig.43 S区下層遺構平面図及びSD11遺物実測図

(537-538)、須恵器碗(536)、陶器碗(539)、土師器羽釜(542-543)が出土している。土師器杯・皿類は回転台成形で、杯(527)が糸切りである他はすべてヘラ切りである。土師器碗の530は回転台成形で円板状高台を持つ。529は胎土から明らかに搬入品である。黒色土器A類は成形手法や胎土から搬入品(534)と在地産(535)に分けることができる。前者は手捏ね成形、後者は回転台成形で特有のチャートを多く含んでいる。口縁部の特徴から楠葉産、後者は模倣形態と考えられる。黒色土器B類は全て搬入品である。

土器集中2 (Fig.40:540)

調査区南西隅のG106グリッドの遺構検出面で瓦器片の集中出土が見られたので土器集中2として取り上げた。図示可能なものは碗(540)のみである。

土器集中6 (Fig.40:541-544 ~ 548)

調査区中央部のL103から土器が集中して出土している。瓦器碗(544 ~ 546)、土師器杯(547)、土師器羽釜(548)、瓦質羽釜(541)を図示し得た。

2 S区1中層の遺構と遺物

調査区北西部のみで検出した。各土坑はIX層、X層を掘り込んでいるが、SD10は西壁の基本層準を見れば明らかのように、古代の遺物包含層を切っていることから中世段階の遺構で上層の掘り残しである。土坑、溝共に埋土は茶褐色粘性土である。

① 土坑

SK30 (Fig.42:559-563)

本来は長軸1.3m程の楕円形を呈する土坑であったと考えられる。SD10に切られているために1.0m前後の短軸が確認できるのみである。深さ10cmである。土師器椀底部(559)と土師器土錐(563)が出土している。

SK31 (Fig.42:560-561)

平面形は楕円形を呈し長軸1.4m、短軸1.3m、深さ10cm前後を測る。埋土中より土師器杯(560)、青磁碗(561)が出土している。上層の掘り残しである。

SK32 (Fig.41:549)

平面形は楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ15cm前後を測る。瓦器椀(549)が出土している。中層で捉えたが本例も上層の掘り残しである。

SK33 (Fig.41:551-555)

平面形は楕円形を呈し、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ7cm前後を測る。土師器皿(551)と同長胴甕(555)が出土している。

SK34 (Fig.41:550-552～554)

平面形は楕円形を呈し、長軸1.3m、短軸1.15m、深さ10cm前後を測る。埋土中から瓦器椀底部(552)、土師器皿(553)、土師器杯(554)が出土している。

② 溝

SD10 (Fig.42:556～558-562-564)

調査区の北を東西方向に走る溝である。途中切れているが確認延長は20m、幅30～50cm、深さ15～20cm前後を測る。埋土中より土師器杯底部(557)、瓦器椀(558-562)、土錐(564)が出土している。

3 S区1下層の遺構と遺物

調査区北西部で検出した。中層の遺構検出面よりさらに30cm程掘り下げ、古代の遺物包含層(Ⅷ層)を除去したX層上面で検出した。確認できた遺構は2条で、埋土はともに黄茶色シルト層(基本層準のIX層に該当する)である。両者とも古代の遺構である。

SD11 (Fig.43)

南西から北東方向に走る溝で、確認延長8.0m、幅40～60cm、深さ20cm前後を測る。土師器甕(565-566)が出土している。

SD12 (Fig.43)

SD11の南を2.0m隔てて平行して走っている。確認延長は9.0m、幅50cm前後、深さ10～20cmを測る。

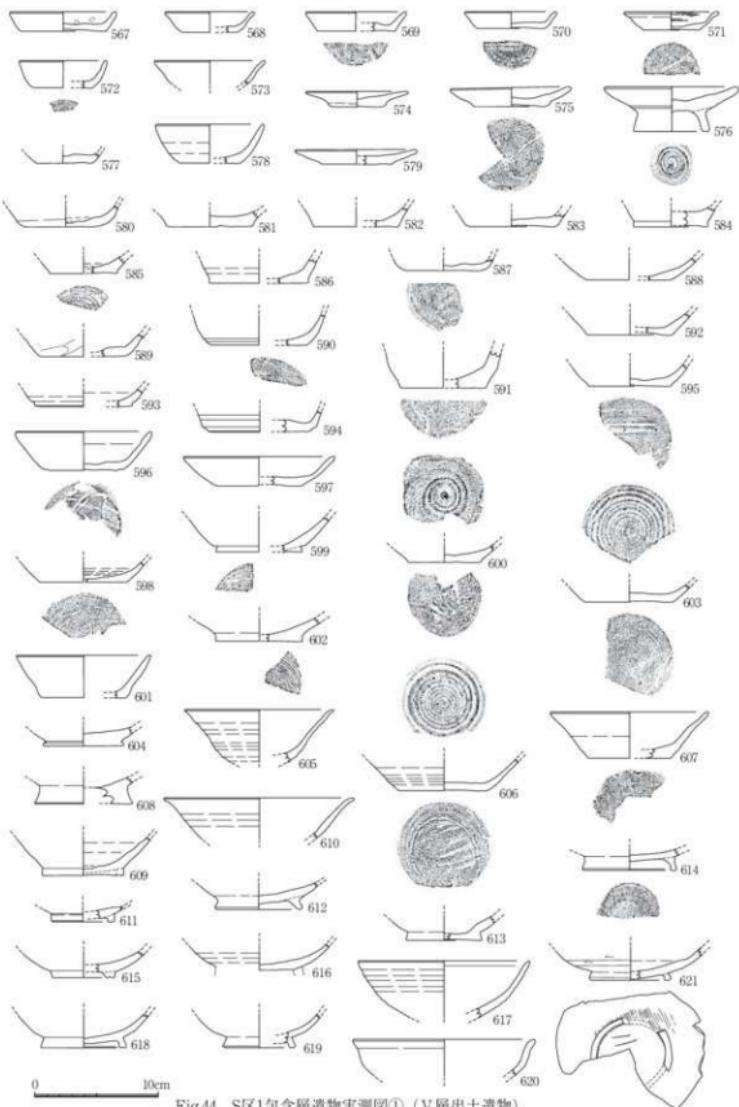


Fig.44 S区1包含層遺物実測図① (V層出土遺物)

土師器小皿: 574~575·579 土師器小杯: 567~573·577·578 高台付小皿: 576
土師器杯: 580~601·603~608·610 土師器椀: 602·609·611~621

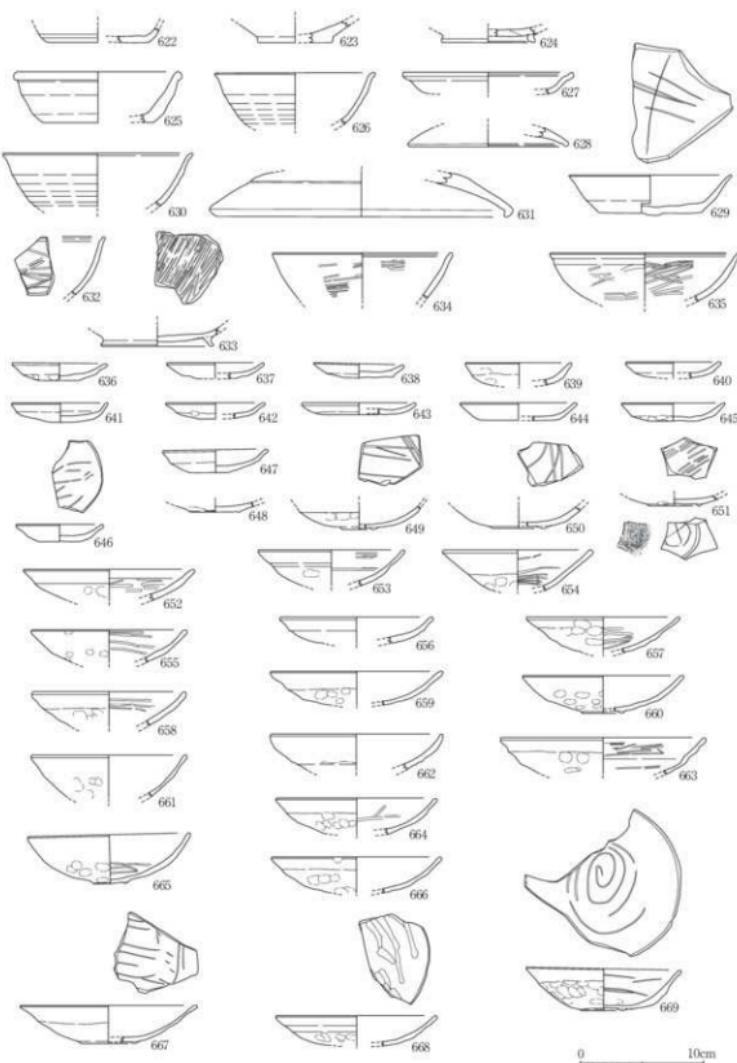


Fig.45 S区I包含層遺物実測図②（V層出土遺物）

須恵器杯：622-624-625-629 同皿：627 同椀：623-626-630 同蓋：628-631 灰釉皿：648
黒色土器A類椀：632-635 同B類椀：633-634 瓦器小皿：636-647 瓦器椀：649-669

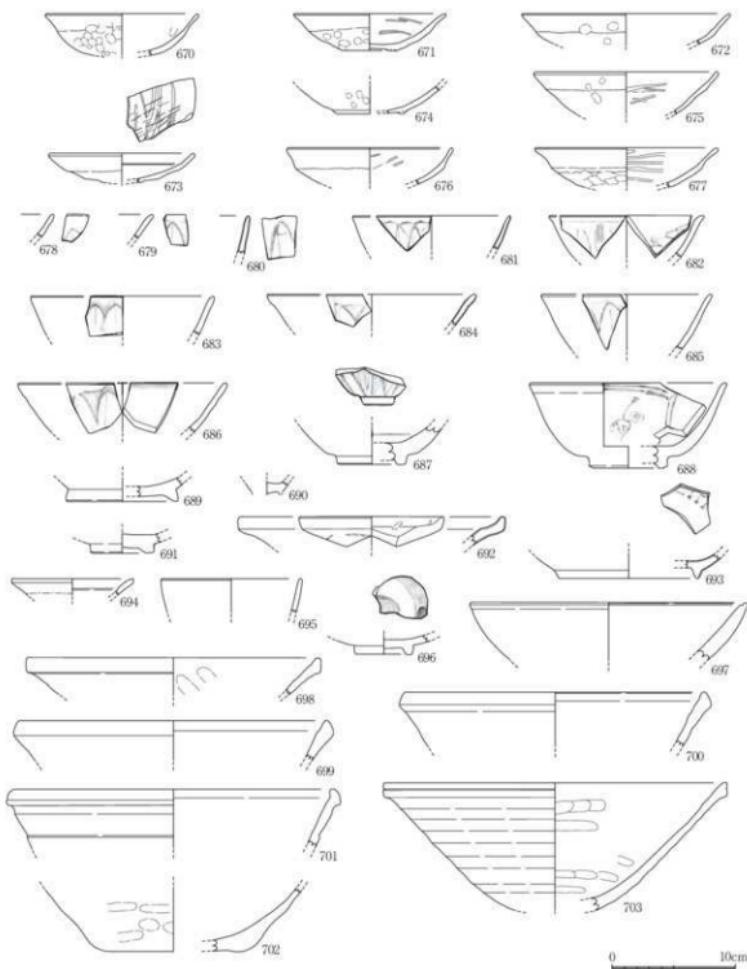


Fig.46 SI X1包含層遺物実測図③ (V層出土遺物)

瓦器碗：670~677 青磁碗：678~688·691 同皿：693 同盤：692 白磁皿：694 白磁小杯：690
美濃山茶碗：689 東播系捏鉢：698~703 近世陶磁器：695·696 常滑鉢：697

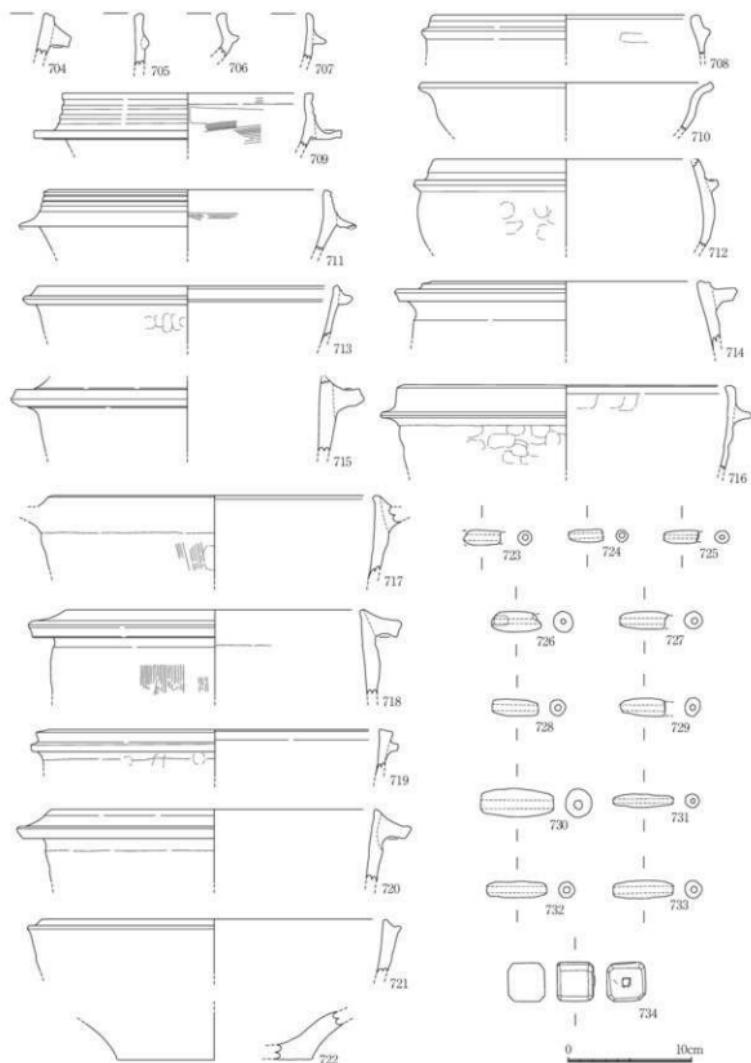


Fig.47 S1区V層出土遺物実測図④

土師器羽釜：704-706～708-711-714-715-717-718-720 土師器鍋：721 常滑甕：722

瓦質羽釜：705-709-712-713-716-719 瓦質鍋：710 土錘：723～733 サイクロ状土製品：734

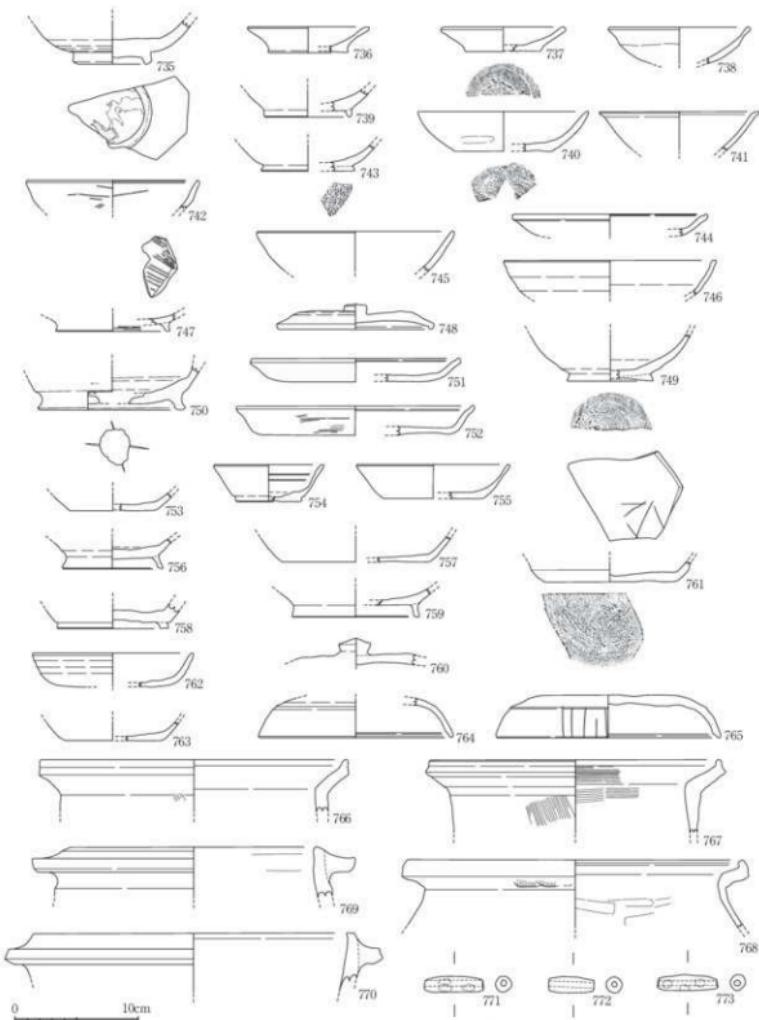


Fig.48 S区1包含層遺物実測図⑤

Ⅳ層 土師器小杯：736-737 同杯：740 同椀：739-741-749 須恵器椀：743 同皿：744 同鉢：746 同蓋：748
瓦器椀：738 黒色土器B類椀：745 黑色土器B類椀：742-747 青磁碗：735 土鍾：771-773

Ⅴ層 土師器杯：754-756-759-762-763 同皿：752 須恵器杯：753-757 同皿：751-761 同蓋：760

須恵器蓋：750-758 土師器甕：766-768 同羽釜：769-770

X層 須恵器蓋：764-765

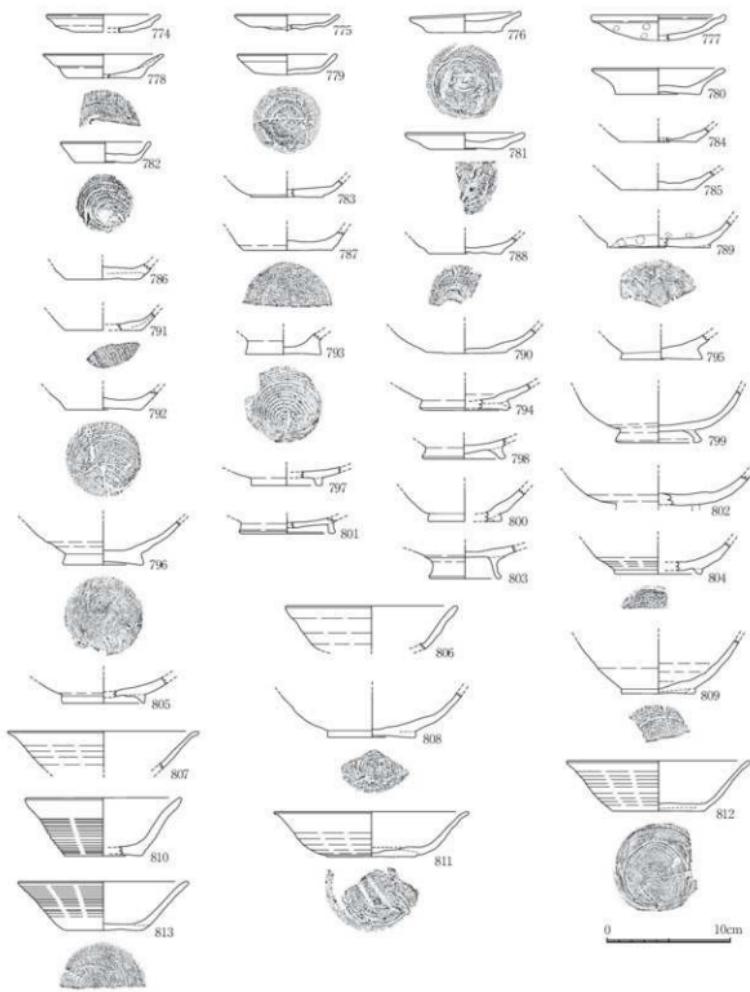


Fig.49 S区1包含層遺物実測図⑥

土師器小杯：778～780-782 同小皿：776-777-781 同杯：783～793-803-806-807-810～813
土師器碗：794～802-804-805-808-809 瓦器小皿：774-775

4 S区1の包含層出土遺物

(1) V層出土の遺物(Fig.44～47)

V層からは、土師器や瓦器の供膳形態を中心に大量の遺物が出土している。

土師器小皿(574・575・579)

底部から直線的に立ち上がる。回転台成形でヘラ切り(574・575)と糸切り(579)がある。

土師器小杯(567～573・577・578)

回転台成形、すべて糸切りである。

高台付小皿(576)

底部外面に糸切り痕を明瞭に留め、長脚の高台を貼付している。

土師器杯(580～601・603～608・610)

底部がほとんどで全体を把握できるものは少ない。すべて回転台成形で底部糸切りが多いが、580・597はヘラ切りである。

土師器椀(602・609・611～621)

円板状高台(609・613)と輪高台(611・612・614～616・618・619・621)がある。前者は糸切り痕が見られる。621の内底には成形の際に生じた段が見られる。

須恵器(622～631)

杯(622・624・625・629)、皿(627)、椀(623・630)、蓋(628・631)が見られる。625は口縁部が肥厚している。

黒色土器(632～635)

A類(632・635)とB類(633・634)がある。両者共に口縁部内面に沈線を有する。近畿からの搬入品である。

瓦器(636～647・649～677)

小皿(636～647)と椀(649～677)が見られる。両者とも口縁部は横ナデ、以下は指頭圧痕が顕著に認められる。椀649の外底には④のヘラ記号が見られる。胎土は総じて精緻であるが、661・665・672にはチャートを含んでいる。

青磁(678～688・691～693)

碗、皿、盤が見られる。碗が最も多く、中でも鍋蓮弁のI 5b類(678～681・683～686)が主流を占める。その他、内面区画に文様を描くI 4b類(688)、蓮弁に櫛描を施したI 6b類(687)が見られる。692は盤、693は皿である。

白磁(690・694)

小杯(690)と皿IV類(694)が見られる。後者は内面に段を有する。

美濃山茶碗(689)

断面三角形のしっかりした割り出し高台を有し、端部には粉の圧痕が多数認められる。

近世陶磁器(695・696)

695は碗、696は皿である。後者は肥前内野山窯産である。

常滑(697・722)

697は鉢である。口唇部に細い沈線を施し、内面は白いゴマふり状の斑点が見られる。722は甕底部である。

東播系捏鉢(698～703)

701は口縁部が玉縁状をなし口縁部外面の下位に凹線が施される。焼成も他と異なり土師器のような発色をしている。703には口縁部外面に細い沈線が巡る。

土師器羽釜・鍋(704-706～708-711-714-715-717-718-720-721)

706～708は口縁部下に断面三角の突帯を貼付している。708は東播系羽釜である。711は口縁部に強い横ナデによる凹線が施されるもので和泉型と呼ばれるタイプである。704-714-715-717-718-720は口縁部または口縁部直下に厚い鉢が貼付された摺津型に属する。721は鍋である。

瓦賀羽釜(705-709-712-713-716-719)

705-712は口縁部下に断面カマボコ状あるいは台形状の小さな突帯を貼付している。713-719は口縁部下にしっかりとした方形の鉢を貼付、713の内面には沈線が1条、719は幅広い口唇を有する。716は直立気味の口縁部が端部で内傾している。

瓦賀鍋(710)

ボール状の体部から口縁部が外反する。

その他(723～733-868-870-874)

723～733は管状土錘、734は棱線を面取りしたサイコロ状の土製品である。868は被熱赤変した石英粗面岩の円礫で、側縁部に研磨による面が認められる。870は釘、874は寛永通宝である。直径2.5cm、方形孔一辺0.52cm、新寛永、文鏡で1668年～1683年に鋳造されたものである。

(2) VII層出土の遺物(Fig.48)

龍泉窯系の青磁碗底部(735)、土師器小杯(736-737)、同杯(740)、同椀(739-741-749)、須恵器椀(743)、同皿(744)、同鉢(746)、同蓋(748)、瓦器椀(738)、黒色土器A類椀(745)、同B類椀(742-747)、土錘3点(771～773)が出土している。黒色土器はA類・B類とともに搬入品である。

(3) VIII層出土の遺物(Fig.48)

754～756-759-762-763は土師器杯で、全て回転台成形、ヘラ切りである。752は同皿、成形手法は杯と同じであるが内外面丁寧なヘラ磨きを施す。753-757は須恵器杯、751-761は同皿、760は同蓋である。761の内底には幾何学的なヘラ記号がある。750と758は壺である。766～768は土師器長胴甕、769-770は土師器羽釜である。

(4) X層出土の遺物(Fig.48)

須恵器蓋が2点(764-765)出土している。765の立ち上がり外面には細い垂下沈線が施されている。共にTK10型式に属する。

(5) 層位別に取上げることができなかった遺物(Fig.49～51)

土師器小杯(778～780-782)

回転台成形であるが、ヘラ切り(778～780)と糸切り(782)がある。

土師器小皿(776-777-781)

回転台成形(776-781)と手捏ね成形(777)が見られる。前者にはヘラ切り(776)と糸切り(781)が見られる。後者は口縁端部を摘み上げてナデ調整している。

土師器杯(783～793-803-806-807-810～813)

全て回転台成形である。底部はヘラ切り(783-785-788)と糸切り(787-789-791～793-810～813)が見られる。793は円板状高台が、803は足高台が付く。810は外面の横ナデ調整が沈線状を呈する。

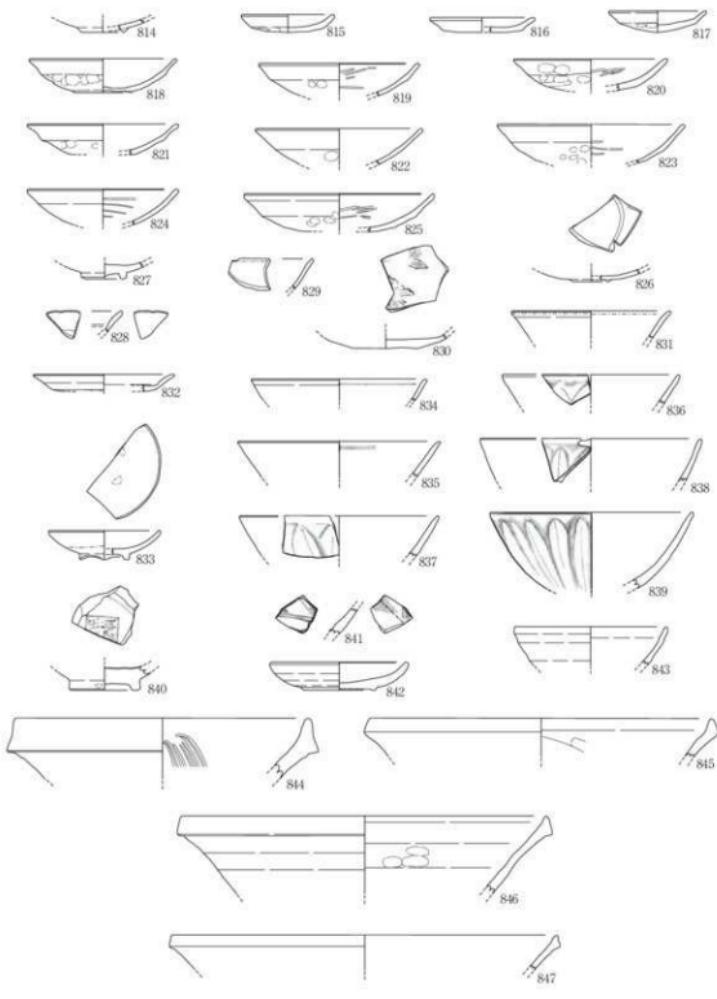


Fig.50 S1区1包含层遗物实测图(7)

瓦器碗：814·818~826 同小皿：815~817 白磁皿：827·829~831·833 青磁碗：828·832·834~841
青磁皿：832 国产陶器：842~847

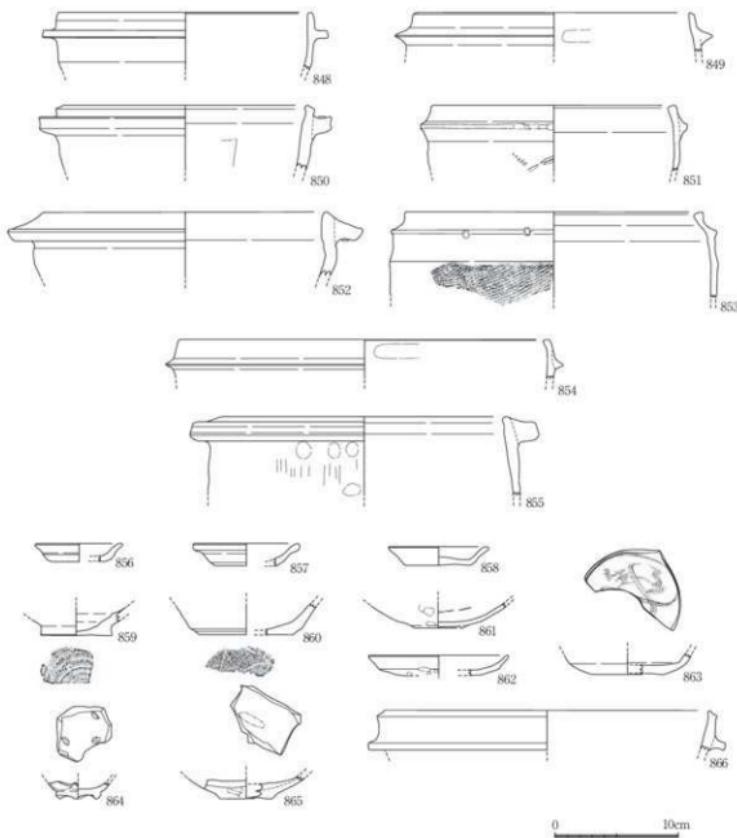


Fig.51 S区1包含層遺物実測図⑧ (848~855) 及び搅乱層遺物実測図 (856~865)

土師器羽釜: 850~853-855 瓦質羽釜: 848-849-854-866 土師器杯: 860

土師器小杯: 856~858 瓦器椀: 861 須恵器椀: 859

瓦器小皿: 862 青磁皿: 863 白磁杯: 864 唐津皿: 865

土師器椀(794 ~ 802-804-805-809)

円盤状高台を持つもの(794 ~ 796-800)と輪高台を持つもの(797 ~ 799-801-802-804-805)がある。前者は全て糸切り、後者の801と804の外底はナデ調整されているが、糸切り痕を認められる。802は高台が剥離している。



Fig.52 石製品（867～869）・鉄製品（870～872）・石鍋（873）・古銭（874・875）実測図

瓦器小皿(774-775-815～817)

口縁部外面は横ナデ調整、底部外面には指頭による凹凸が見られる。

瓦器碗(814-818～826)

口縁部外面横ナデ調整、胴部外面は指頭圧痕があり、内面は横方向の暗文が見られる。

白磁(827-829～831-833)

827と830は白磁小皿底部で、830は見込みに陰刻花が見られる。829-830は口禿皿である。833も小皿で高台がアーチ状に抉られている。

青磁(832-834～841)

841が同安窯系である以外は龍泉窯系である。832は小皿、834-835は口縁部内面に圓線を施している。836～839は外面に鑄蓮弁文を持つ。I 5b類に属する。840は底部で見込みに印刻がある。841は、碗の胴部細片で内外面に櫛描文が見られる。

国内産陶磁器(842～847)

842は、志野焼の小皿で削り出し高台を有し外底まで全面に白湯色の釉がかかっている。843は瀬戸天目である。844は備前捕鉢、845～847は東播系捏ね鉢である。

土師器羽釜(850～853-855)

851-853は胴部外面に叩きを施す東播系の羽釜、850-852-855は長胴の羽釜である。

瓦質羽釜(848-849-854)

848は上胴部に断面長方形、他は断面三角形の鎬が巡っている。

(6) トレンチ出土の遺物(Fig.54)

調査当初に、調査区の南、北、西に任意のトレンチを設け土層の観察を行った際に出土した遺物である。南トレンチからは土師器杯(895)と同安窯系青磁皿I - 2類(893)が出土している。北トレンチからは土師器高杯接合部(888)が出土している。西トレンチからは土師器杯(892)、同小皿(889-890)、瓦器碗(894)、須恵器皿(891)、龍泉窯系青磁碗 I 5b類(897)、土師器土錘(900)が出土している。

(7) 搅乱層出土の遺物(Fig.51)

(856～858)は土師器小杯、(860)は同杯である。すべて糸切りである。(861)は瓦器碗底部、(862)は同小皿、(866)は瓦質羽釜である。(859)は須恵器碗で円板状高台を有し糸切り底である。(863)は同安窯系の青磁皿I - 2類、(864)は白磁多角形の小杯で森田分類D類に属する。(865)は唐津皿で、内面に砂目が認められる。

5 S区2の遺構と遺物

土坑1基と溝3条、ピット数個を検出した。この内SD35がS区-1の下層に対応する。他の遺構は上層に対応する。

(1) 土坑

SK90 (Fig.53)

調査区中央部に位置する隅丸長方形の土坑である。長軸3.25m、短軸1.17m、深さ8cm前後を測る。埋土は褐色粘性土と焼土が互層に堆積している。床面と焼土中から出土している。土師器は、杯(876-878-882)と碗(877)、同甕(887)が出土している。杯は全て底部ヘラ切りである。882は内外黒色に発色しており、大振りであることから黒色土器の模倣形態である可能性がある。879は白磁碗V

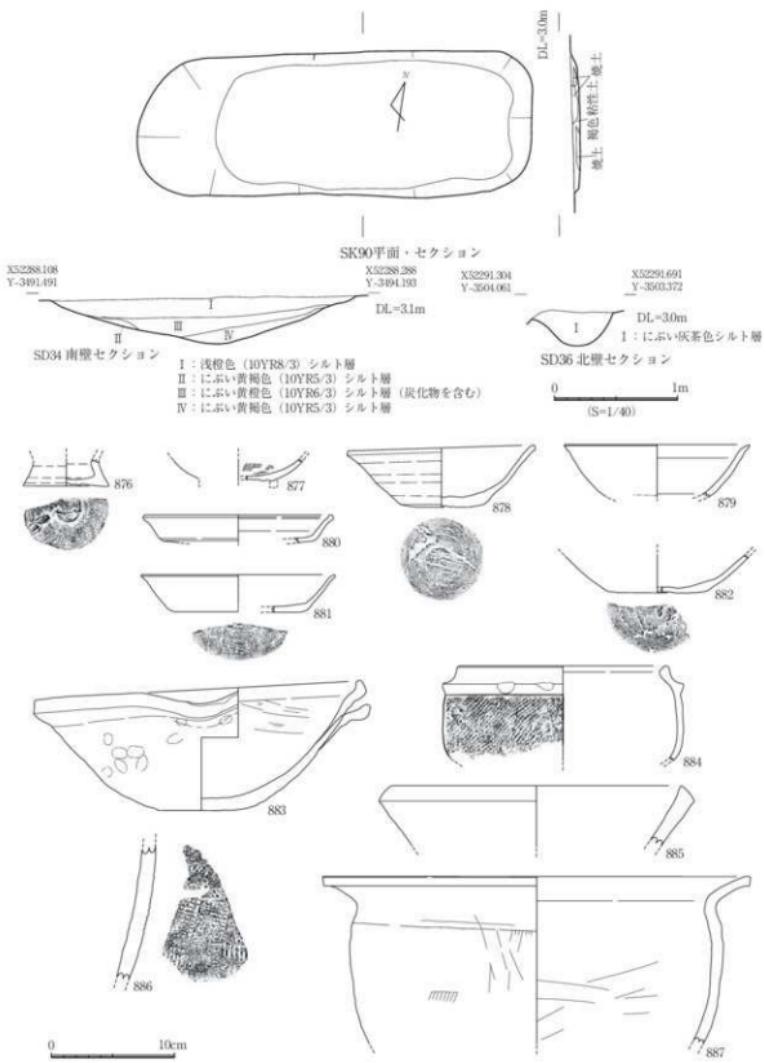


Fig.53 SK90・SD34・36 遺構及び遺物実測図
SK90 : 876~879-882-887 SD34 : 883~886 SD35 : 881 SD36 : 880

類と考えられる。図示した土器は、887が焼土中、他はすべて床面出土で一括性の高い出土状況を示している。しかし白磁V類と878・882のようなヘラ切り土師器杯が共伴することは不可解である。

(2) 溝

SD34 (Fig.15-53)

調査区東部で確認した南北方向に延びる溝であるが、両端部は現代搅乱に切られている。確認延長4.5m、幅2.5m、断面は逆三角形状をなし深さは中央部で40cm程である。埋土はシルト層がI～IV層に分かれで堆積している。遺物は東播系捏鉢(883)、東播系羽釜(884)、備前捏鉢(885)、常滑(886)が埋土中から出土している。883は全面煤けしており煮沸具として使われている。

SD35 (Fig.15-53)

SD34の検出面から30cm下がったところで検出した。確認延長3.5m、幅60cm、深さ20cmの溝である。埋土は黄色シルト層、床面から土師器杯(881)が出土している。古代の溝である。

SD36 (Fig.15-53)

確認延長8.0m、幅0.8m、深さ30cm前後を測る。埋土は灰茶色シルト層で、埋土中から須恵器皿(880)が出土している。この遺物は流れ込みと考えられる。

(3) ピット (Fig.54)

8個検出し、各ピットから土師器などの細片が出土しているが、図示可能なものはP489出土の土師器碗(898)のみである。内外に横方向のヘラ磨きを施し、下地には擦痕が認められる。

(4) S区1トレチ及びS区2包含層出土の遺物 (Fig.54)

供膳形態では、土師器杯(896-916-917-921-922-923-925-926)、同椀(898-908)、同小皿(890)、瓦器椀(919-924)、須恵器杯(918-920)、同椀(911)が出土している。土師器杯はすべて回転台成形で、916-926がヘラ切りである以外はすべて糸切りである。瓦器椀894は外面全面に丁寧なナデ調整がなされ異質である。

煮沸形態では、瓦質鍋(915)、同羽釜(914)、東播系土師器羽釜(927)が出土している。(915)は土佐型5)と呼ばれているものである。国内産陶器では常滑窯(909)、東播系捏鉢(913)が出土している。

貿易陶磁器は、龍泉窯系青磁碗I 5b類(897)、同I 4類(899)、同底部(907)、同安窯系青磁皿I - 1類(910)、同I - 2類(893-905)、白磁小皿底(903)、同皿IX類(904-912)、同碗(906)、青白磁合子蓋(901-902)が出土している。白磁碗(906)は内面にヘラで文様が描かれておりVII類に属する。本県では初めての出土である。その他、石鍋(873)が出土している。

参考文献

- 1) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について - 型式分類と編年について - 」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館1978年
- 2) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論集』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集1983年
- 3) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会1982年
- 4) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会1982年
- 5) 菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』国立歴史民俗博物館1989年

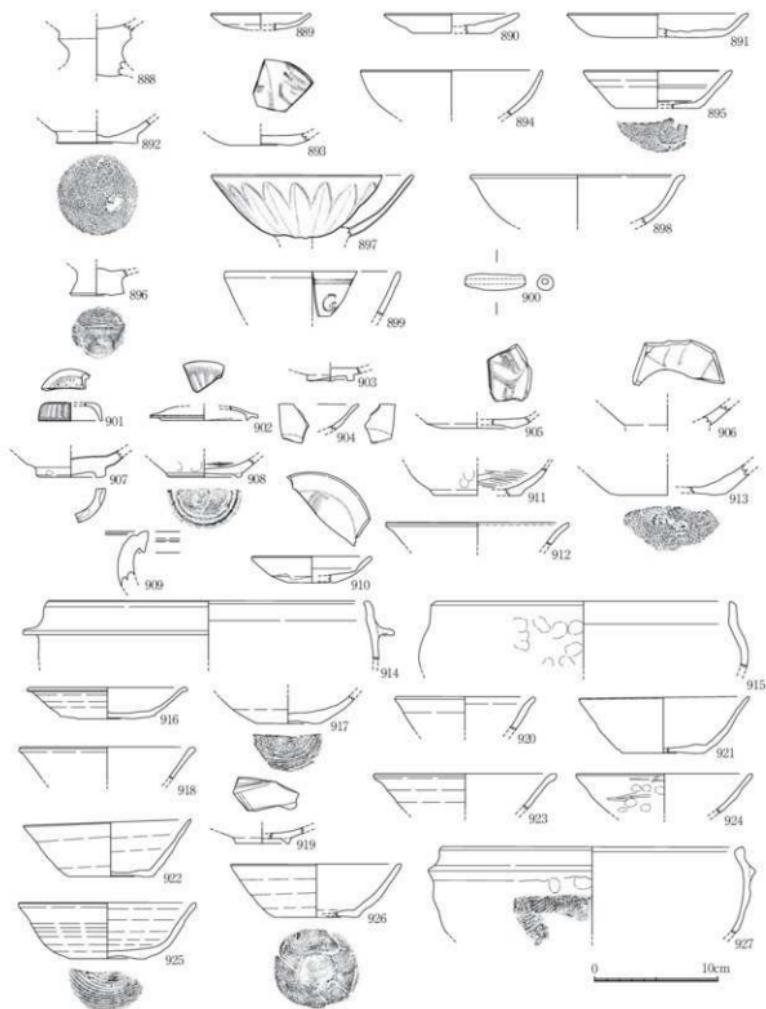


Fig.54 SII-1トレーナー・SII-2包含層及びP489の遺物実測図

- SII-1トレーナー遺物
土師器高坏: 888 同小皿: 889-890 同杯: 892-895 須恵器皿: 891 瓦器碗: 894
青磁碗: 897 同皿: 893 土鍬: 900 P489 土師器楕: 898
SII-2包含層遺物
土師器杯: 896-916-917-921~923-925-926 同碗: 898-908 瓦器碗: 919-924 須恵器杯: 918-920
瓦質鍋: 915 同羽釜: 914 土師器羽釜: 927 常滑甕: 909 捺鉢: 913 青磁碗: 899-907
青磁皿: 905-910 白磁碗: 906 同皿: 903-904-912 青白磁合子蓋: 901-902 須恵器楕: 911

第V章 本調査NW区

1 基本層準(Fig.55)

本調査区は、しばしば壁面の崩壊があり東壁の一部において観察した。

客土(山土)：層厚70cm以上、戦後行われた造成による盛土である。

I：耕作土。層厚20cm前後である。戦後まで使われていた耕作土である。

II：黄灰色粘性土。層厚14～20cmを測る。中世の遺物包含層である。

III：灰茶色粘性土。層厚10～20cmを測る。古代の遺物包含層である。

IV：茶色粘性土。層厚25～40cm以上を測る。S区のⅧ層に対応する層準である。

V：黄色粘性土。層厚15cm以上を測る。S区のⅨ層に対応する層準である。

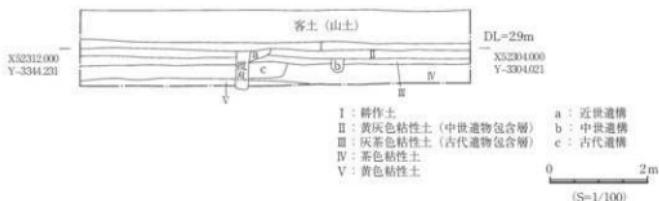


Fig.55 NW区基本層準(東壁)

2 下層(古代)の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB5 (Fig.57)

北部にある。梁間2間(4.6m)×桁行2間(4.85m)の建物で、棟方向はN-65°-Eである。一辺0.8～1.15mの方形の掘り方を有し、深さは20～60cmを測る。東側の2個所の柱は検出できなかった。埋土は濃茶色粘性土である。

遺物は、P5床面には残存高52cm、径25cm前後の柱根が認められた。土器は、P2の埋土中から須恵器蓋(932)、P3の埋土中から須恵器蓋(931)、P4の柱痕から須恵器蓋(929)・土師器皿(934)、同理土中から須恵器蓋(928)、P5の埋土中から須恵器蓋(930)・同杯(933)、製塩土器(935)が出土している。

SB6 (Fig.57-58)

中央部にある。梁間2間(5.3m)×桁行1間(5.5m)の建物で、棟方向はN-71.5°-Eである。西側には2間の廂が付く。一辺0.6～1.0cmの方形の掘り方を有し、深さは7～40cmを測る。P2の床面には径20cmの柱痕が見られる。廂は、径30～40cm、深さ5～50cmを測り、身舎の西側から1.8mの間隔を保っている。埋土はP8が黄褐色シルトである以外は濃茶色粘性土である。P1の検出面には焼土が多く見られた。

遺物はP1から土師器杯(937)、P2から須恵器皿(938)同杯(936)、P3から須恵器皿(939)が出土している。全て埋土中からの出土である。

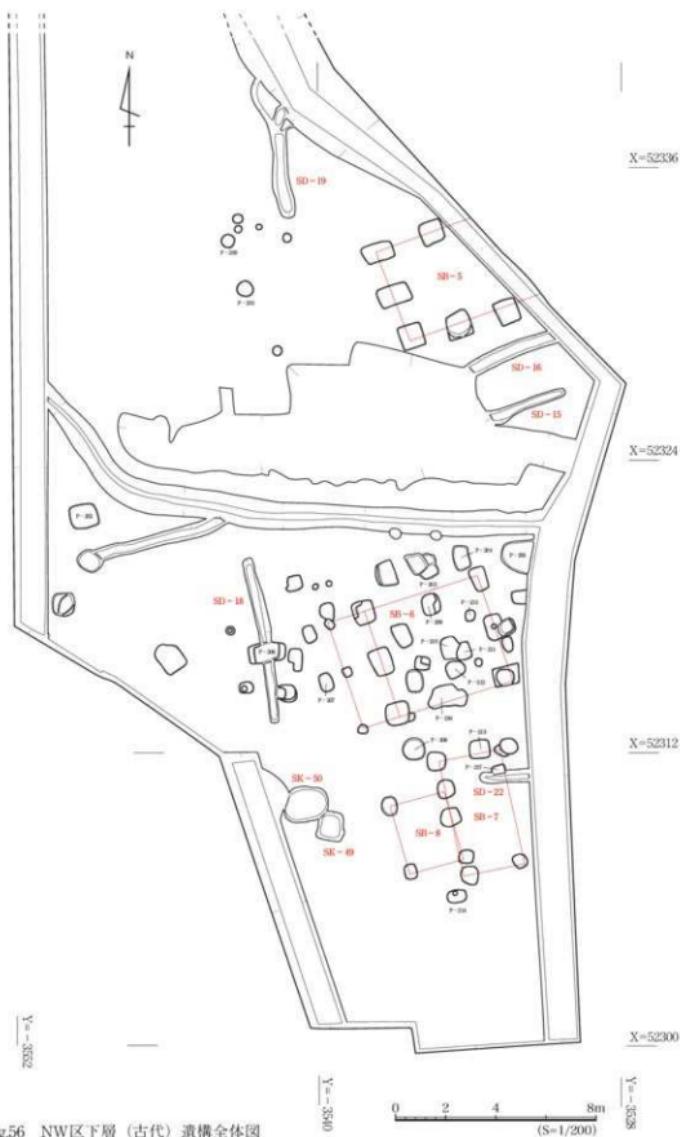


Fig.56 NW区下層（古代）遺構全図

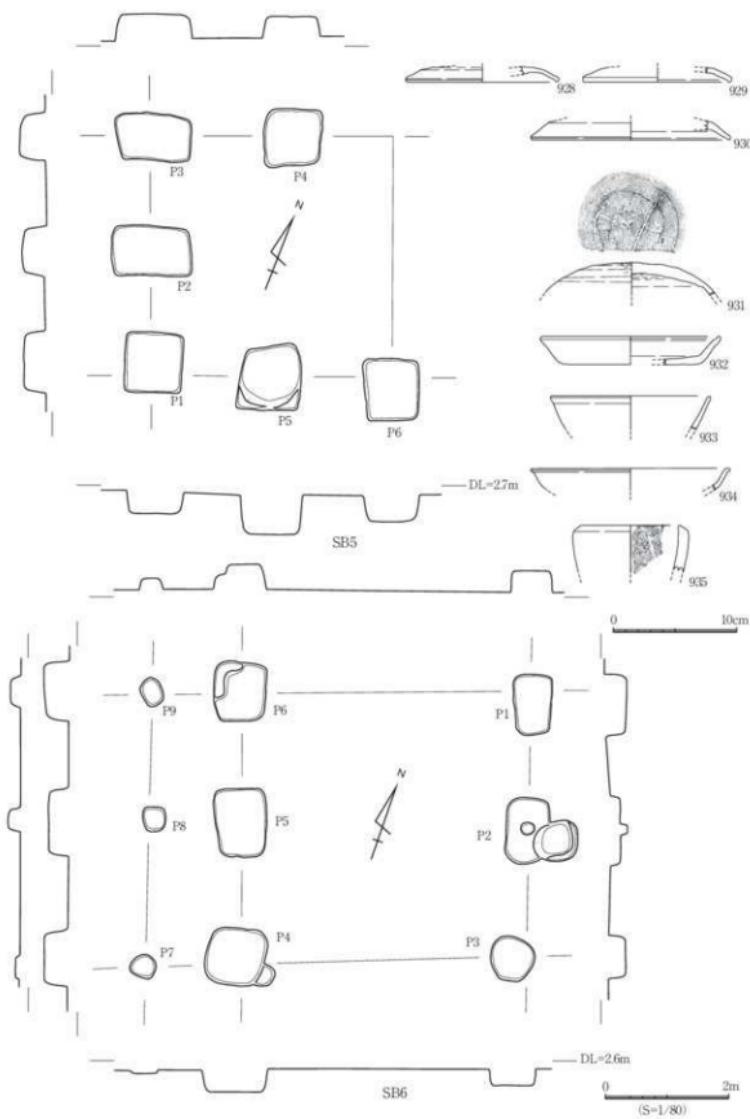


Fig.57 SB5・6 遺構及びSB5 遺物実測図

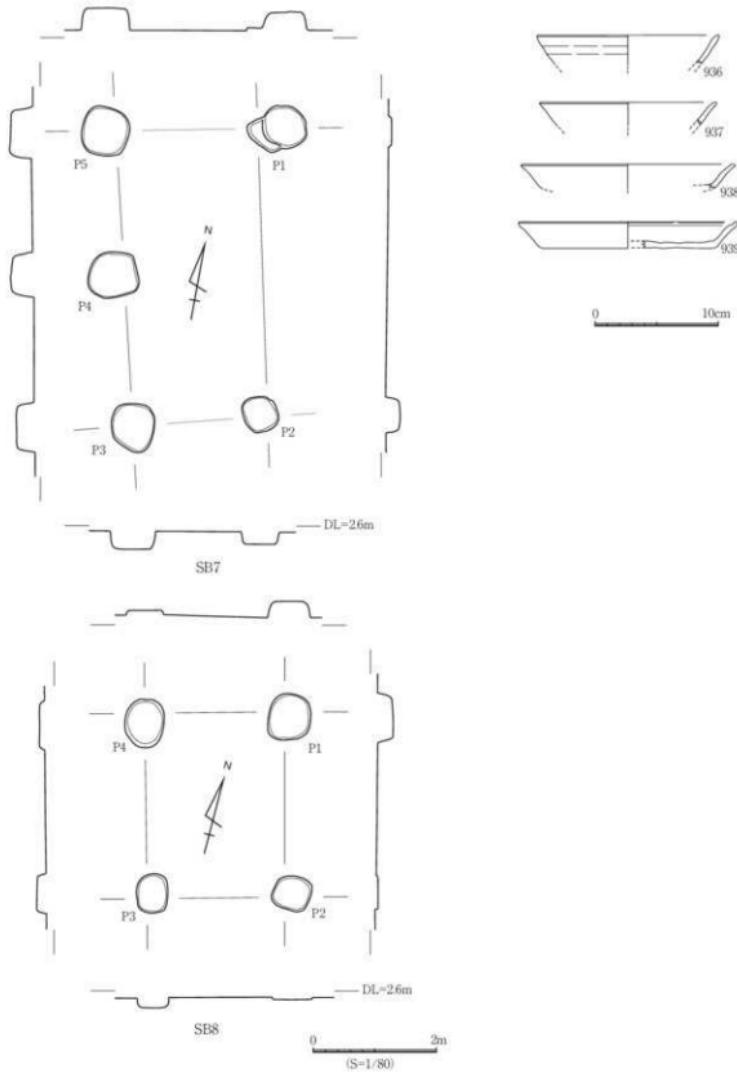


Fig.58 SB7・8 遺構及びSB6 遺物実測図

SB7 (Fig.58)

SB6の南隣にある。梁間1間(4.2m)×桁行2間(4.8m)の建物で、棟方向はN-11°-Wである。柱掘り方は、不整形をなすものが多く、長軸は50~80cm、深さは5~30cmを測る。埋土は濃茶色粘性土である。遺物は各埋土中から土師器、須恵器、製塙土器の細片が出土しているが、図示できるものはない。

SB8 (Fig.58)

SB7と重複している。梁間1間(2.3m)×桁行1間(2.3m)の建物で、棟方向はN-15°-Wである。長軸0.6~0.8mの隅丸方形~楕円形の掘り方を有し深さは6~20cmを測る。埋土は濃茶色粘性土である。遺物はP1・2の埋土中から土師器、須恵器の細片が少量出土しているが図示できるものはない。

(2) 土坑

SK49 (Fig.59)

南西部に位置し、SK50と一部切り合っているが、先後関係は不明である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ25cm前後を測る。埋土は黄茶色粘性土に炭化物を多く含んでいる。遺物は、埋土中から土師器・須恵器の細片が多く出土しているが、図示できたものは須恵器皿の2点(953・954)である。この他、製塙土器片15点(140g)、粘土塊6点(30g)が出土している。

SK50 (Fig.59-60)

南西部に位置する。西部を搅乱坑に切られ、東南部をSK49と重複している。平面形は楕円形を呈し、長軸1.7m、短軸1.47m、深さ30cm前後を測る。埋土はI:黄灰色粘性土で炭化物を多く含む、II:灰色粘性土である。

遺物は、埋土中および床面から須恵器を中心とする供膳形態、土師器の煮沸形態が一括性の高い状況を示して多量に出土している。須恵器皿(951・952・955・957・958)、同杯(940~944・956・959~961)、同蓋(945~950)である。須恵器皿(958)の内面には広く赤色顔料が付着、同杯(959)の外面中央部にも赤色顔料の付着が認められる。また杯(956・960)底部外面には「×」のヘラ記号が見られる。須恵器も全体に丁寧な作りである。供膳形態は、土師器壺(962~964)が見られる。口縁部が「く」字状に外反し、ハケ調整を多用するタイプで占められている。その他製塙土器(965~967)、被熱赤変した大小の粘土塊が300g出土している。粘土塊の大きさは、小さいものは1×1cm、大きいものは5×5cm、個々の重さは1~35gである。970は両端が摩耗している結晶片岩製の棒状の石製品である。長さ15.1cm、幅2.6cm、厚さ1.5cm、重さ91.9gを測る。

供膳形態について図示し得なかったものも含めて、土師器と須恵器の組成比を重量で見ると土師器:須恵器=250g:2350gで須恵器が圧倒的に多くを占めている。SK50出土の遺物は一括性の高いものであり今後この地域の土器編年を進める上での基準資料となる。

(3) 溝

SD15 (Fig.60)

SB5の南を東西方向に走る溝であるが、西方は現代搅乱に切られている。確認延長3.0m、幅40~60cm、深さ10cm前後である。埋土は濃茶色粘性土である。遺物は、土師器皿(971~974)、同杯(975~980)、灰釉碗(981)を図示し得た。土師器皿・杯はすべて回転台成形でヘラ切り、ヘラ切り後は丁寧にナデ調整されているものが多い。供膳形態では、土師器760gに対して須恵器は60gである。灰釉碗はO53号窯式に属する。この他、製塙土器や土師器壺片が出土している。

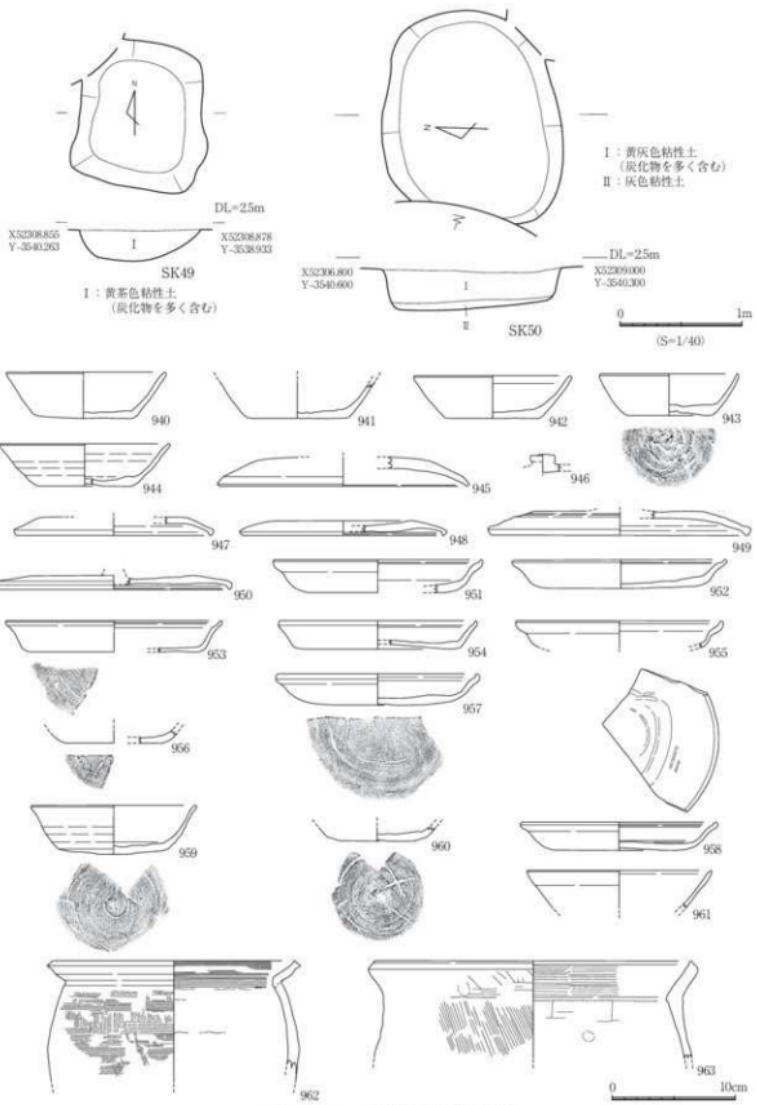


Fig.59 SK49・50 遺構及び遺物実測図

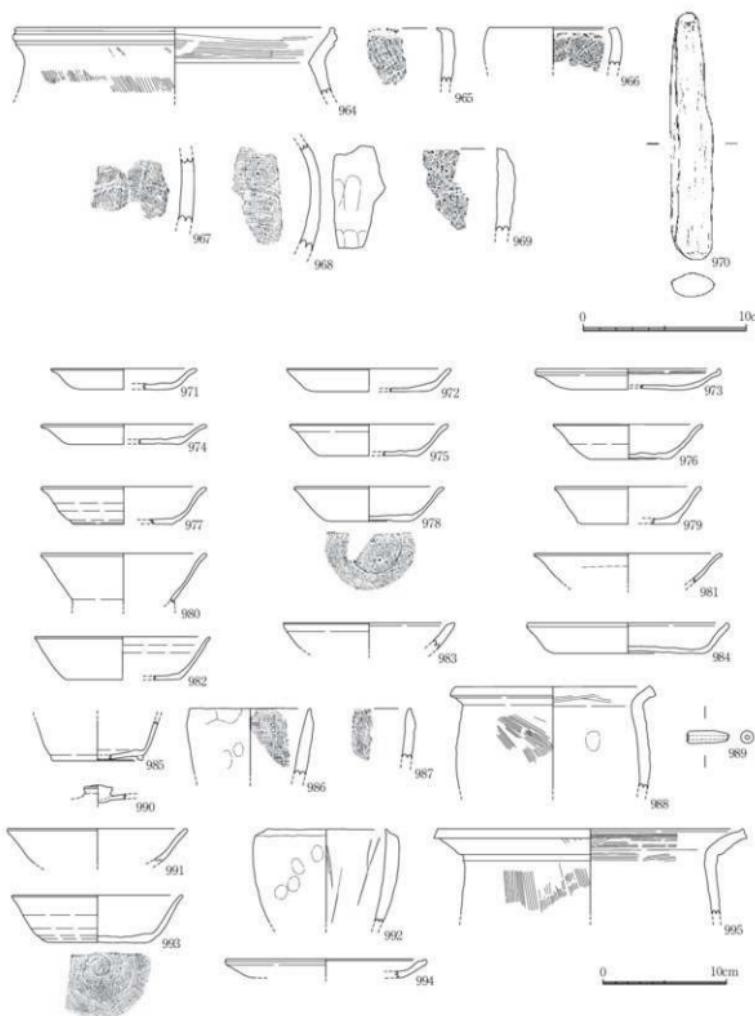


Fig.60 SK50, SD15・16・22, ピット遺物実測図

SK50 : 964~970
 SD15 : 971~981 SD16 : 982~988 SD22 : 983~987·989
 P204 : 993 P205 : 992·994·995 P206 : 990 P213 : 991

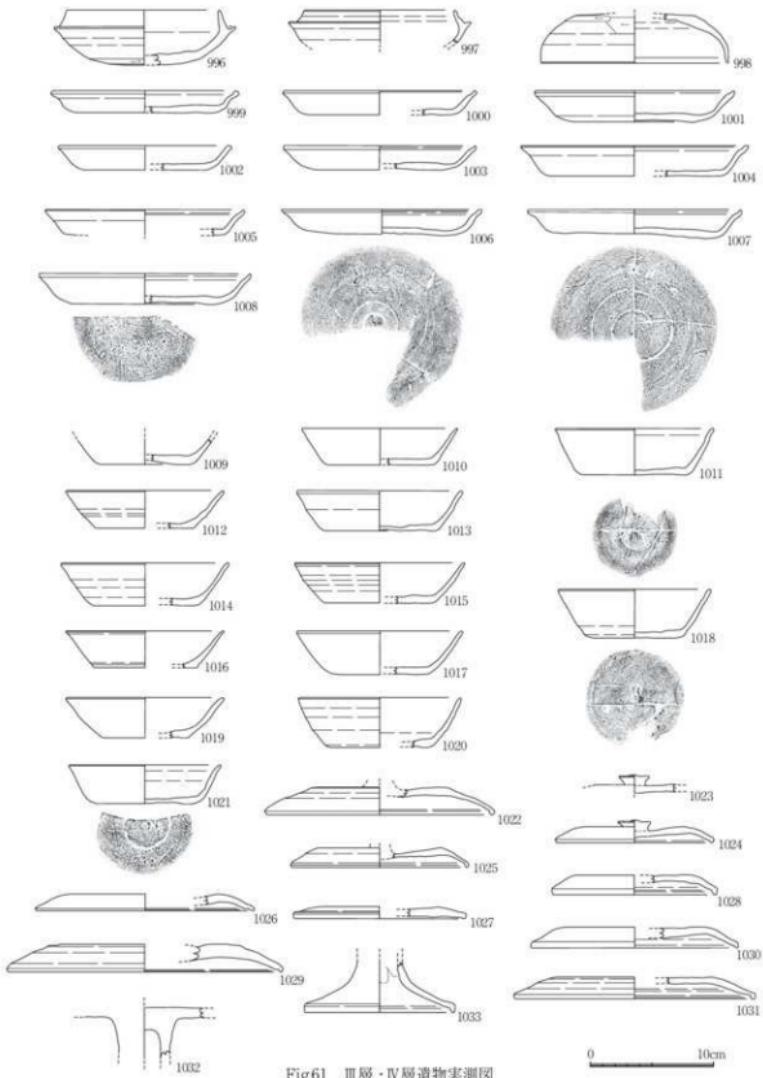


Fig. 61 III層・IV層遺物実測図

III層 須恵器杯：996・1009～1021 同皿：999～1008 同蓋：1022～1031 同高坏：1032・1033

IV層 須恵器杯：997 同蓋：998

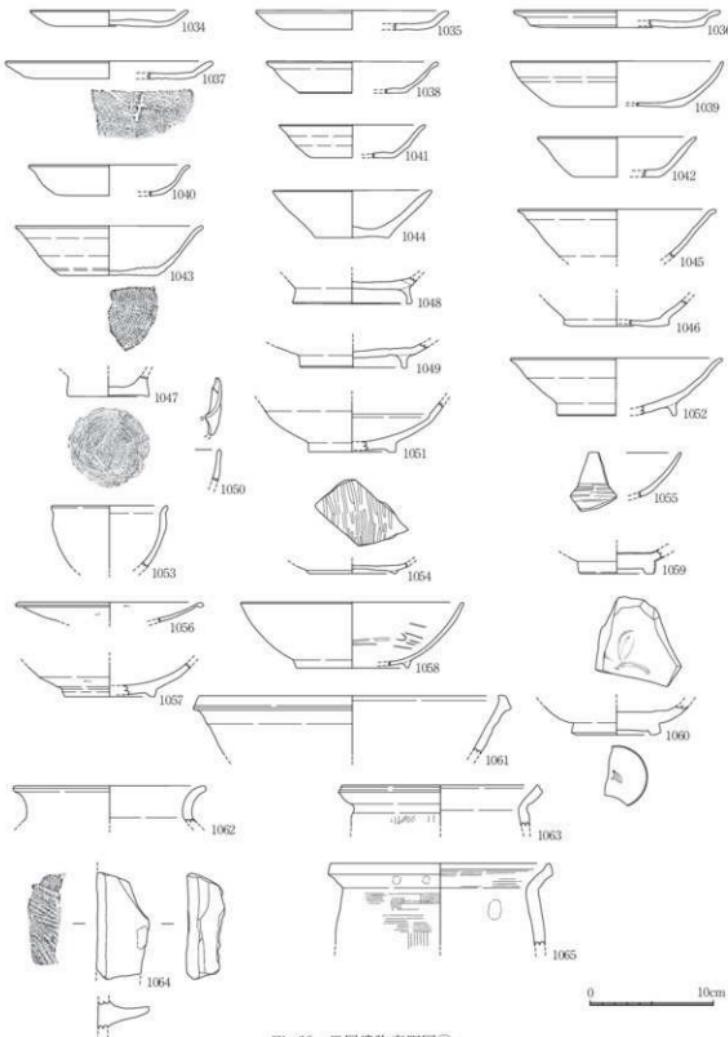


Fig.62 Ⅲ層遺物実測図①

土器皿：1034～1037 同杯：1038～1047 同椀：1048-1049-1052 緑釉椀：1051-1057 同耳皿：1050
黒色土器A類椀：1054-1055-1058 土器器皿：1062-1063-1065 青磁碗：1059-1060 同甕：1064
東播系捏鉢：1061 濱戸天目：1053

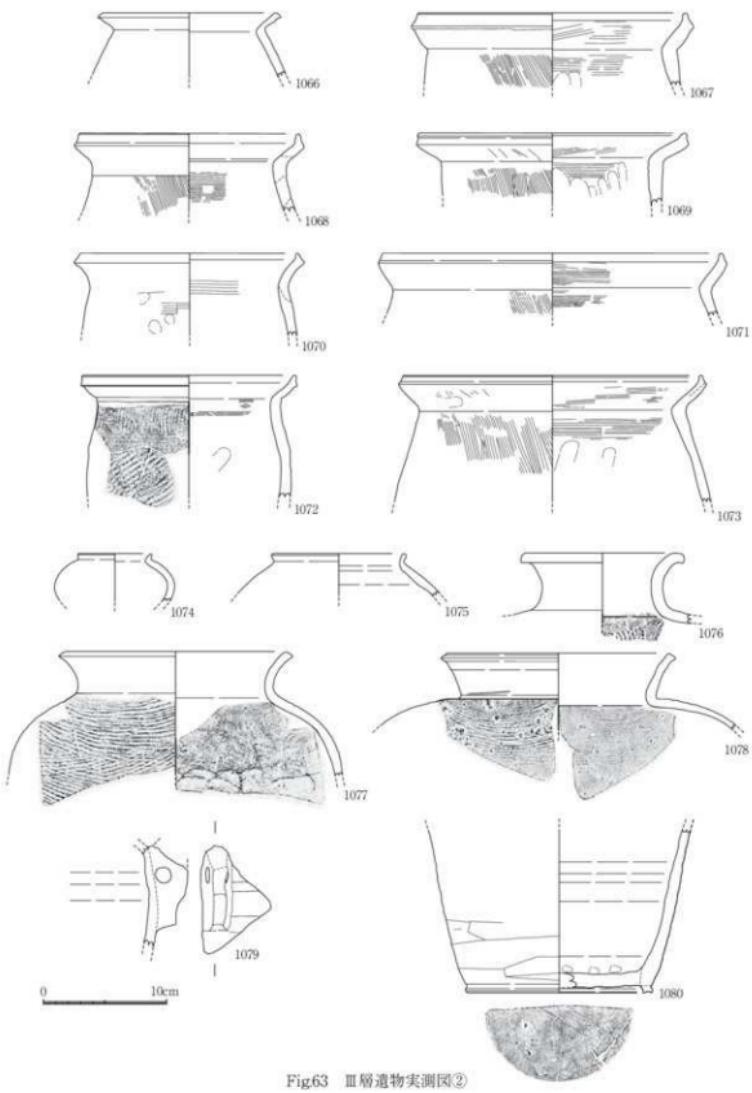


Fig.63 Ⅲ層遺物実測図②

土師器壺：1066～1073 須恵器壺：1074・1075・1079・1080 同壺：1076～1078

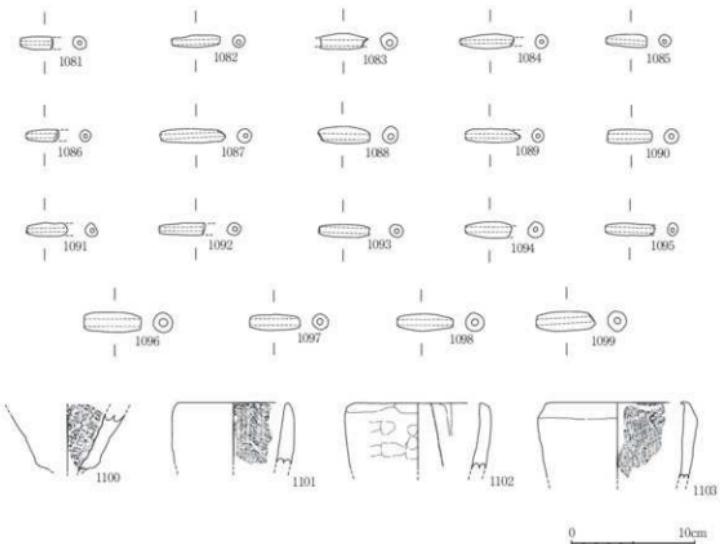


Fig.64 III層遺物実測図③

土錘: 1081~1099 製塙土器: 1100~1103

SD16 (Fig.60)

SB5の棟方向に平行して南側を走る溝である。確認延長4.5m、幅0.5m、深さは10~20cmである。西に向って深くなっている。埋土は濃茶色粘性土である。遺物は須恵器杯(982)、土師器甕(988)などが出土している。供膳形態で土師器:須恵器の比率を重さで見ると、土師器:須恵器=100g:160gである。

SD22 (Fig.60)

南部に位置しP217と切り合っているが先後関係は不明である。東西方向に走る溝で確認延長は2.0m、幅5.5m、深さ20~30cmを測る。埋土は濃茶色粘性土である。遺物は須恵器杯(983-985)、同皿(984)、製塙土器(986-987)、土師器土錘(989)などが出土している。

(4) ピット (Fig.60)

古代に属するピットは40数個検出しており、その多くから土師器や須恵器、製塙土器などの破片が出土しているが、図示し得たのはP204の須恵器杯(993)、P205の土師器皿(994)、土師器甕(995)、製塙土器(992)、P206の須恵器蓋(990)、P213の須恵器杯(991)である。

(5) III層・IV層出土の遺物

III層は、中世遺物を少量含むがほとんど古代の遺物で占められている。IV層は古墳時代の遺物を少量含んだ層準である。発掘現場では、III層を包含層2、IV層を包含層3として遺物を取り上げた。

Ⅲ層出土の遺物

須恵器(Fig.62-63)

器種を問わず経じて丁寧な作りのものが多い。999～1008は皿である。999-1006-1007の外底には1～1.5cm幅の粘土帯の単位が見られるが、他は丁寧なナデ調整で消されている。1008の外底にはヘラ磨き状の平行圧痕が広がっている。1009～1021は杯である。1013の外底は削りを加えた後にナデ調整で仕上げている。1013-1021の外底には「×」のヘラ記号が、1018の内底には平行沈線状のヘラ記号が見られる。1022～1031は蓋である。1032-1033は高杯脚部である。1074-1075は短頸壺、1079は双耳壺の耳部、1080は長胴壺の下胴部で高台を有する。1076～1078は壺である。

土師器(Fig.62-63)

1034～1037は皿である。1035には内外ヘラ磨きが施されている。1037の外底には「×」のヘラ記号が見られる。1038～1047は杯である。1039～1042はヘラ切り、1043-1044-1047は糸切りである。1048-1049-1052は土師器碗である。1052は太い高台が張り出し内外面焼けている。本例は、その形状から黒色土器A類の模倣形態の可能性がある。1062-1063-1065～1073は壺で、1062は丸く外反する口縁部を有し、他はく字状に外反する口縁部を有する。後者はハケ調整を基調とするが1072は胴部中位に右上がりの平行叩き目が施されている。1064は移動式壺である。

黒色土器A類碗(Fig.62)

1054-1055は同一個体の可能性がある。1054は小さな高台、1058は断面三角形の大きな高台を有する。3点ともに撇入品である。

綠釉陶器(Fig.62)

1050は耳皿の細片である。1051-1057は碗である。共に削り出し高台を有し、外底まで全面施釉している。1051は内面に段を持つ稜碗である。すべて平安京II期中段階に属し、1051はヘラミガキもしっかりしている。1050-1051洛北産、1057は洛西か洛北の何れかの製品である。

その他の国内産陶器(Fig.62)

1053は古瀬戸天目、1056は灰釉皿、後者は無施釉である。1061は東播磨系の捏ね鉢である。

貿易陶磁器(Fig.62)

1059は広東系の可能性のある青磁碗である。1060は龍泉窯系の青磁碗である。外底の釉を蛇の目状に削り取っている。見込みに片切り掘りによる花文が見られる。

土鍤と製塙土器(Fig.64)

1081～1099は土師質の管状土鍤で、3～5gを測る。1100は製塙土器下胴部、1101～1103は上胴部である。内面には布目压痕が見られる。

3 上層(中世)の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

調査区の中央部に集中している。大きく地点を変えることなく、棟方向をほとんど共有しながら建て替えが繰り返し行われている。

SB9 (Fig.66)

梁間3間(4.2m)×桁行3間(4.95m)の建物で、棟方向はN-86°-Eである。各柱穴は円形を呈し径20～40cm、深さ15～47cm測る。P9は柱穴中程に一辺20cm、厚さ10cm程の扁平な碟が置かれていた。

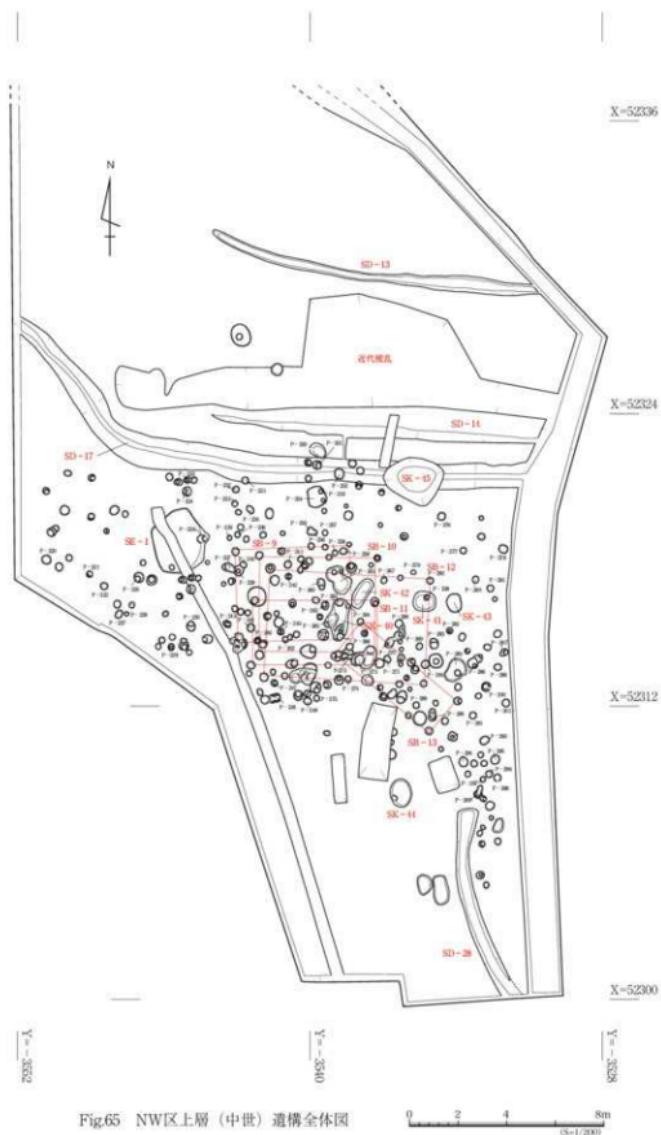


Fig.65 NW区上層（中世）遺構全体図

0 2 4 8m
(S=1/200)

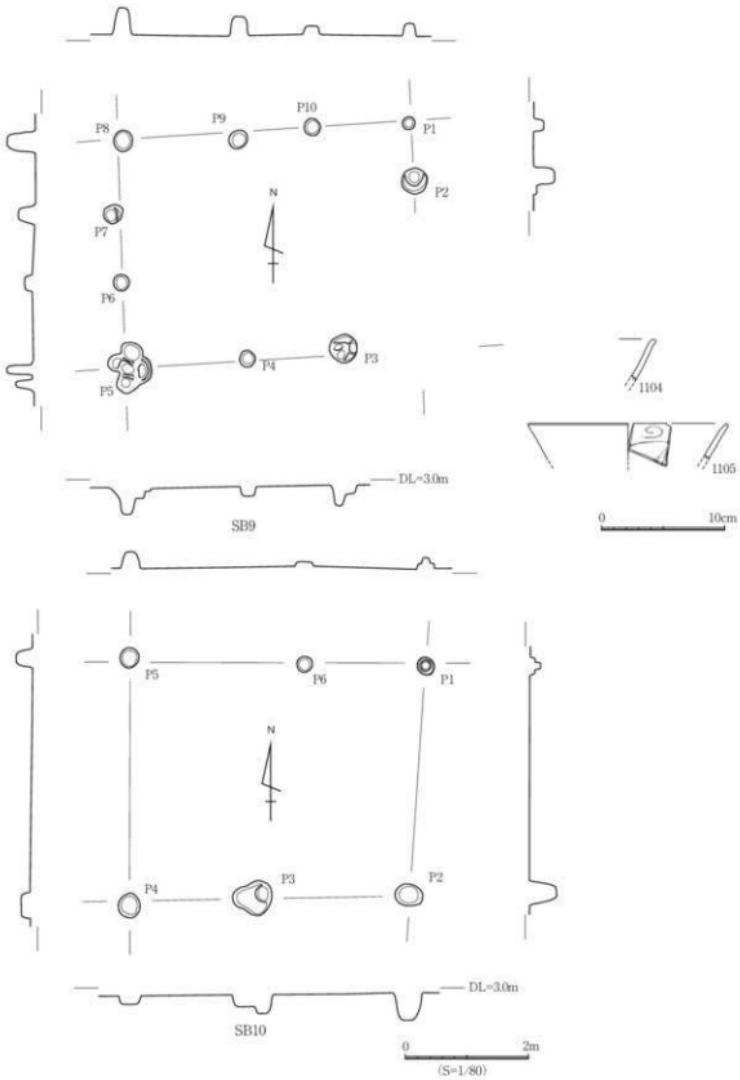


Fig.66 SB9 · 10 駕構及びSB9 遺物実測図

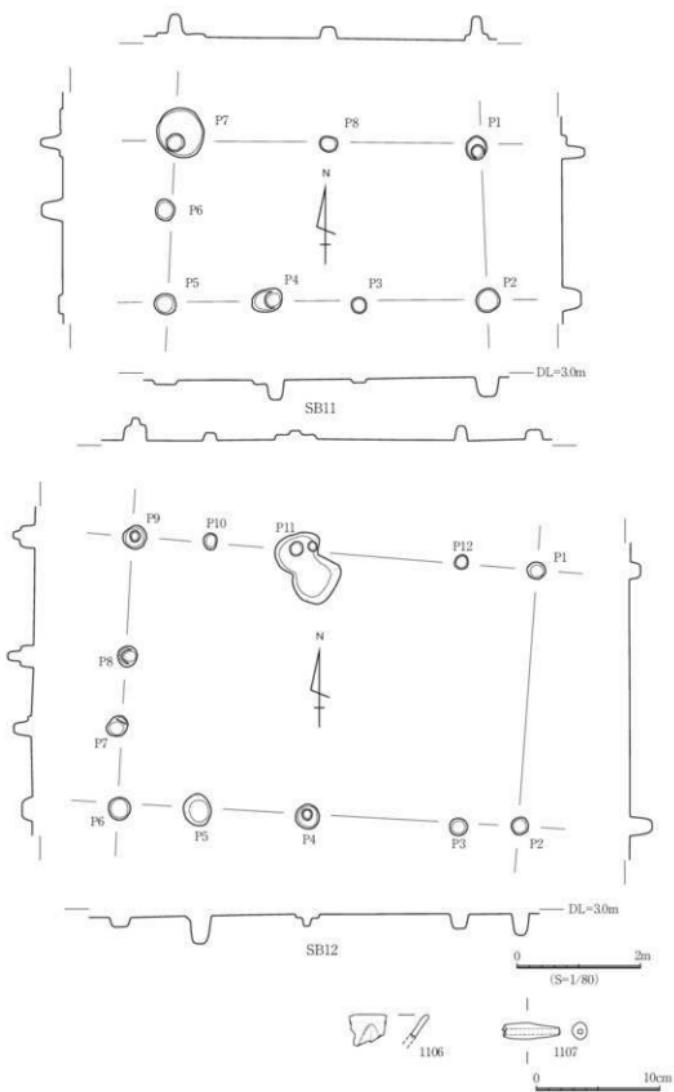


Fig67 SB11・12 遺構及びSB12 遺物実測図

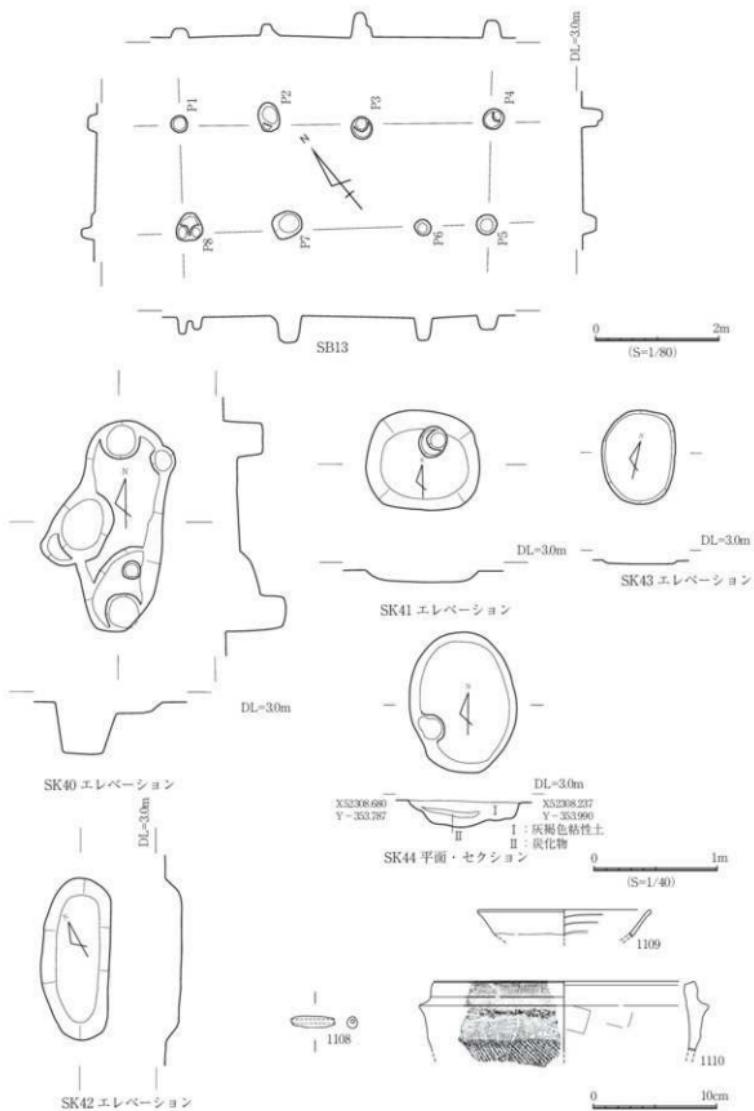


Fig.68 SB13・SK40～44 造構及びSK44 造物実測図

柱穴の埋土中から土師器、瓦器などの細片が出土しているが、図示できたものはP5の龍泉窯系青磁碗2点(1104・1105)のみである。

SB10 (Fig.66)

SB9と重複している。梁間1間(4.0m)×桁行2間(5.1m)の東西棟で、棟方向はN-90°である。各柱穴はおおよそ円形で、径25~60cm、深さ8~45cmを測る。P1とP3には柱痕跡が見られ径15~20cmを測る。柱穴からは土師器、瓦器の細片が出土しているが、図示できるものはない。

SB11 (Fig.67)

SB10・11と重複している。梁間1間(2.5m)×桁行3間(5.1m)の東西棟で、棟方向はN-90°である。柱穴掘り方は、おおよそ円形を呈し径25~50cm、深さ6~36cm程度である。P1とP4に柱痕跡が見られ径20cmを測る。柱穴埋土から土師器、瓦器などの細片が出土しているが図示できるものはない。

SB12 (Fig.67)

梁間3間(4.2m)×桁行4間(4.95m)の東西棟で、棟方向はN-86.5°-Wである。柱穴の掘り方はおおよそ円形で、径20~50cm、深さ13~43cmである。P4とP9に径15cm前後の柱痕跡が認められる。遺物はP2・P3・P5・P6から土師器、瓦器などの細片は出土しているが、図示できたのはP5出土の龍泉窯系青磁碗I 5b類(1106)と土師質土錘(1107)である。

SB13 (Fig.68)

SB9~SB12と重複関係にあるが、これまでの建物とは棟方向を異にする。梁間1間(1.8m)×桁行3間(5.1m)の建物で、棟方向はN-51°-Wである。柱穴の掘り方はおおよそ円形で、径30~50cm、深さ13~44cmである。P3・P4・P8には、径20cm前後の柱痕跡が認められる。遺物はP2・3などから土師器片が出土しているが図示できるものはない。

(2) 土坑

SK40 (Fig.68)

掘立柱建物の集中部分にある。平面形は楕円形状をなすものと考えられるが、数個のビットと切り合っており正確には掴めない。長軸1.75m、短軸0.7m、深さ15cm前後を測る。埋土は暗灰色粘性土である。遺物は土師器や瓦器細片が出土しているが、図示できたものは土師質土錘(1108)のみである。

SK41 (Fig.68)

SK40の東に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸95cm、短軸80cm、深さ10cm前後を測る。断面形は皿状を呈する。小ビットに切られている。埋土は暗灰色粘性土である。遺物は土師器細片が数点出土している。

SK42 (Fig.68)

掘立柱建物の集中地点に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長軸1.32m、短軸5.5m、深さ15cm前後を測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗灰色粘性土である。遺物は土師器細片が数点出土しているが、図示できるものはない。

SK43 (Fig.68)

SK41の東隣に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸78cm、短軸60cm、深さ5cm前後を測る。埋土は暗灰色粘性土である。遺物は土師器と瓦器の細片が1点ずつ出ているのみである。

SK44 (Fig.68)

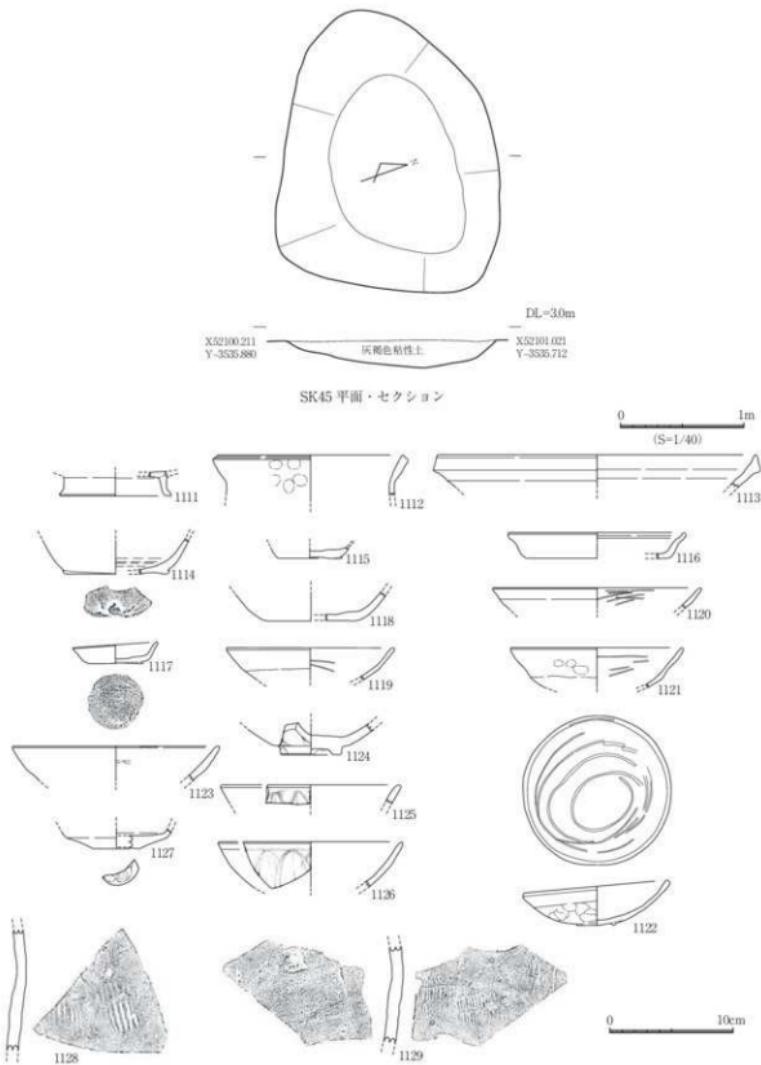


Fig.69 SK45 遺構及びSK45・SE1 遺物実測図

SK45 : 1111-1112-1114 SE1 : 1113-1115-1129

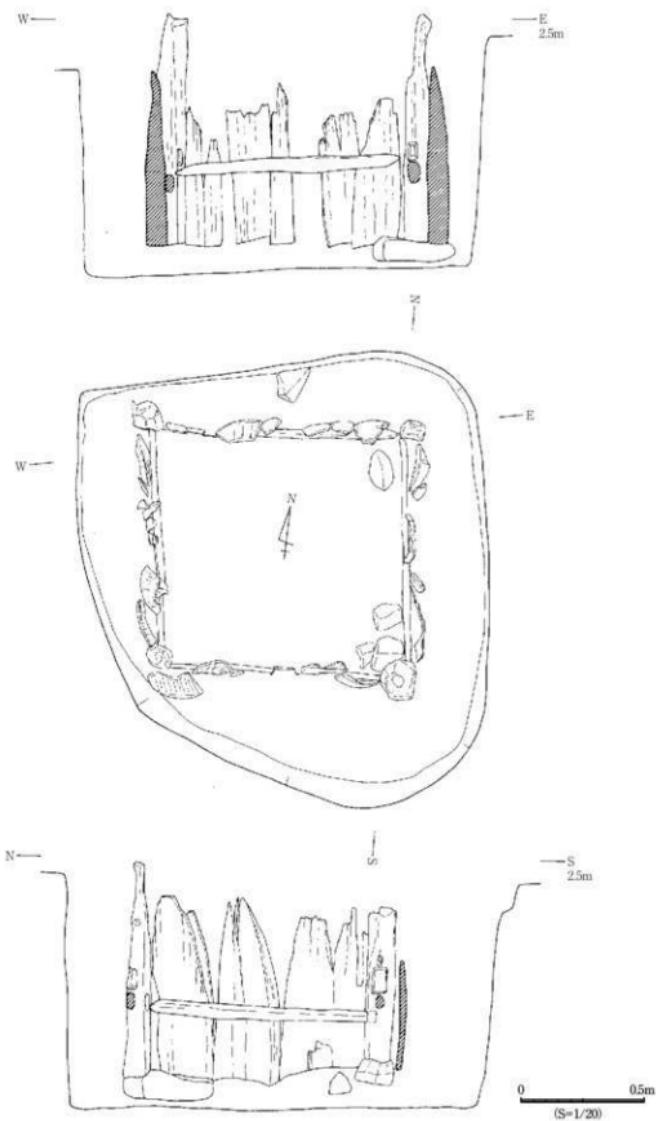


Fig.70 SE1平面及び側面図

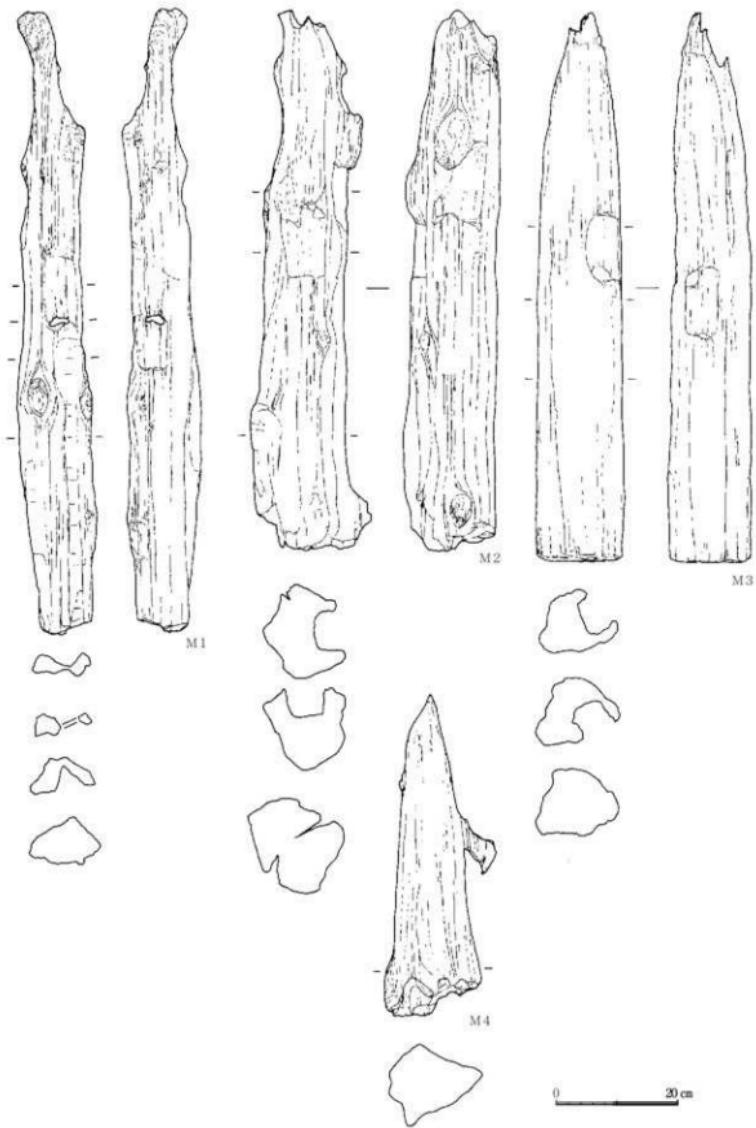


Fig.71 SE1柱材実測図

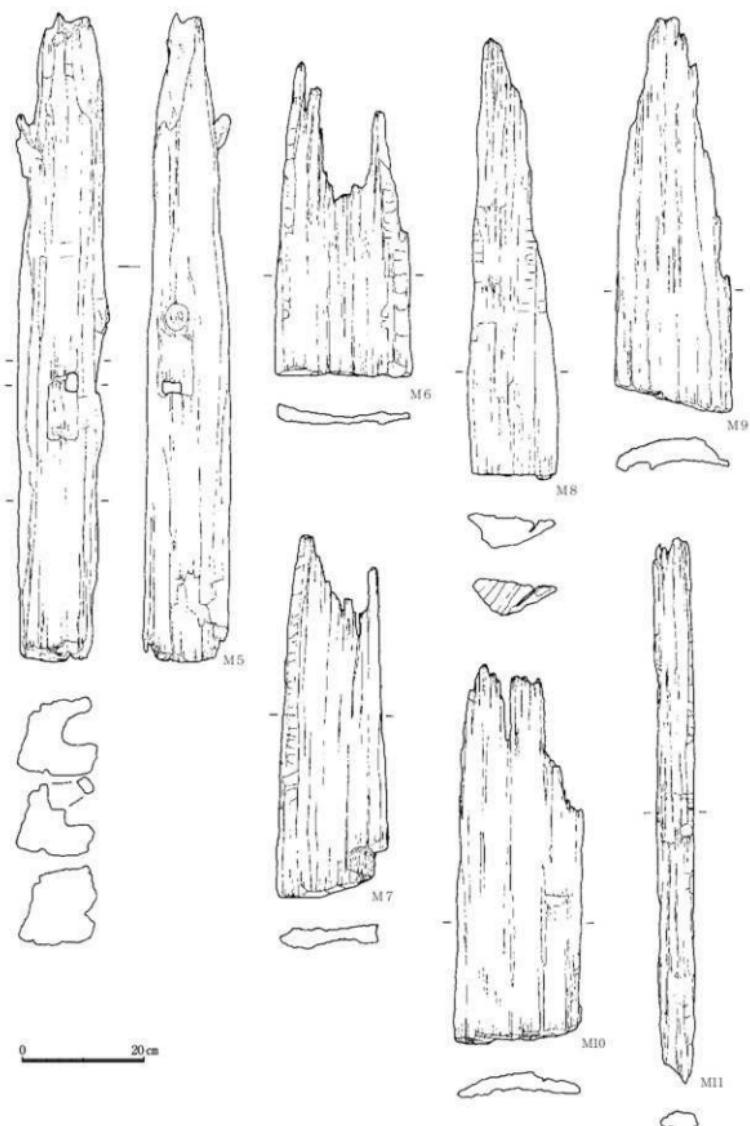


Fig72 SE1側板実測図①

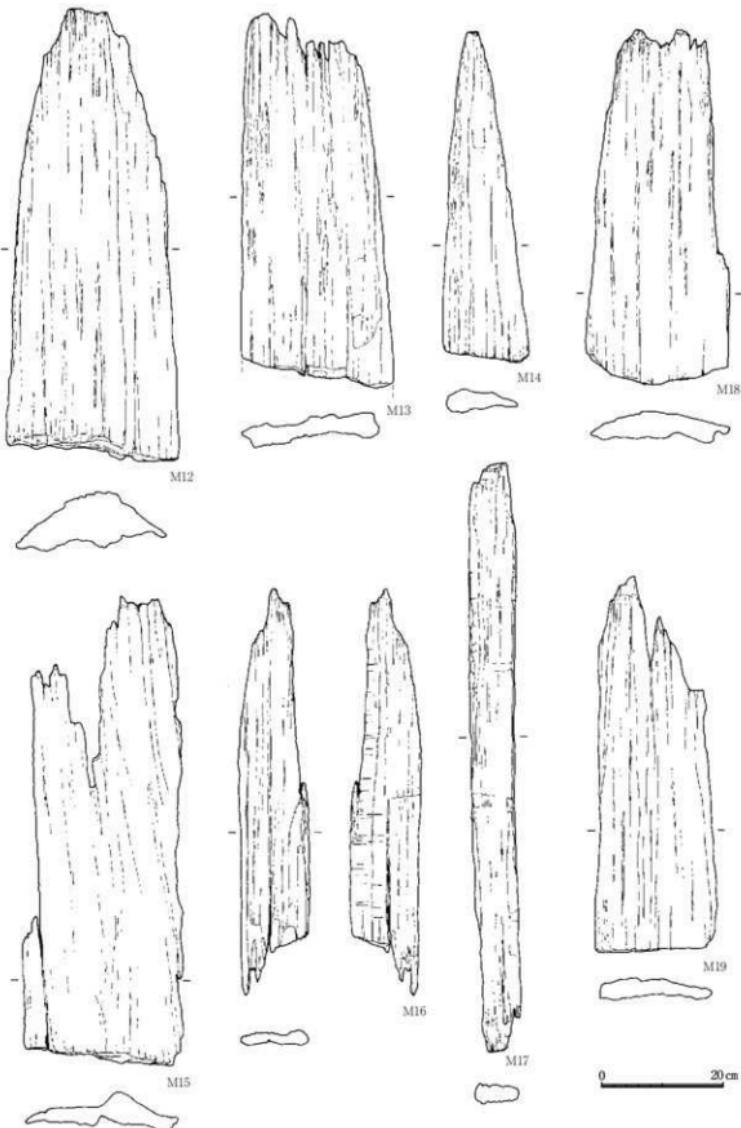


Fig.73 SE1側板実測図②

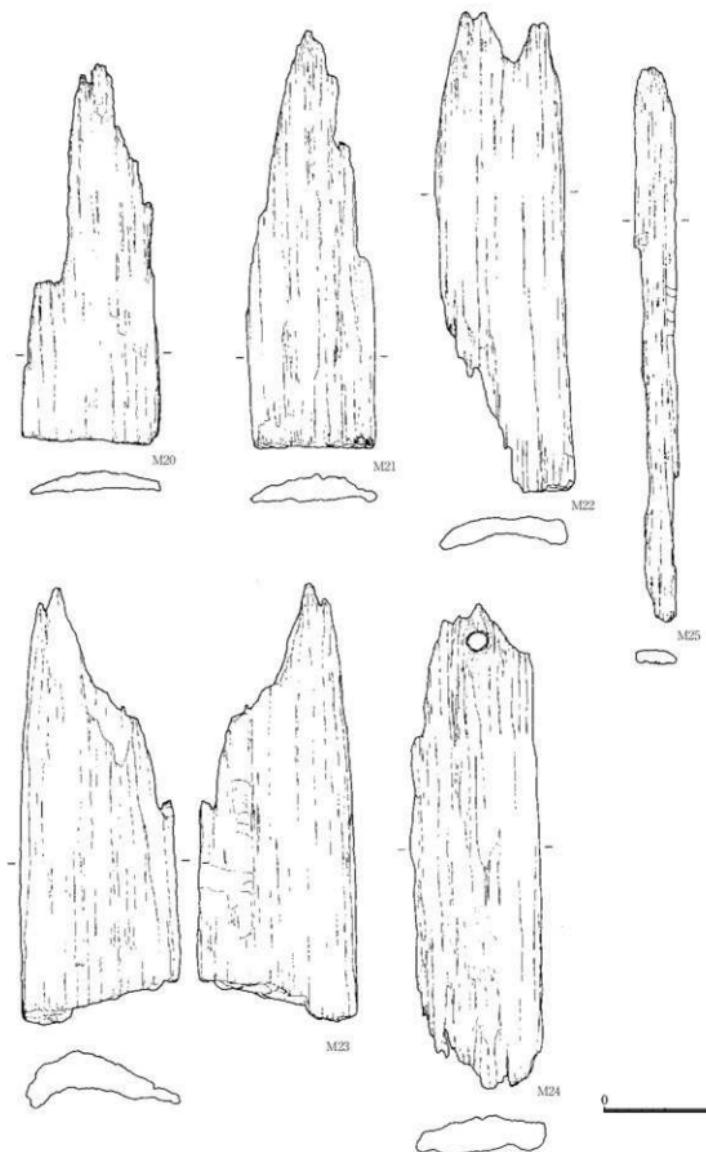


Fig.74 SE1断面実測図③

南寄りに位置する。平面形は椭円形を呈し、長軸1.15m、短軸0.9m、深さ20cm前後を測る。埋土は、灰褐色粘性土で中程に炭化物の層(Ⅱ層)が堆積している。遺物は土師器や瓦器の破片が多く見られるが、図示し得たものは瓦器椀(1109)と東播系羽釜(1110)である。1110は床面出土である。

SK45 (Fig.69)

中央部に位置しSD17を切っている。平面形は不整形を呈し、長軸2.3m、短軸1.8m、深さ20cmを測る。埋土は灰褐色粘性土である。遺物は、土師器、瓦器細片が多く出土しているが、図示できたものは、土師器杯高台部分(1111)、同杯(1114)、瓦質鍋(1112)である。

(3) 井戸

SE1 (Fig.69 ~ 74)

掘立柱建物の集中地点の西隣に位置する。中世の遺構検出面では、長軸2.6m、短軸2.1mの不整形の平面形として検出した。20cm程掘り下げて古代の面まで下げたところで、拳大～人頭大の角礫が多く出土し、井戸であることが明らかとなった。さらに掘り下げると半ば腐蝕した側板が検出された。20cm程下げたところでの掘り方の平面形は、略方形を呈し長軸1.9m、短軸1.9m、底までの深さは90cm、中世の遺構検出面からだと1.1mとなる。

井戸枠は方形に組まれている。床面には、1～6cm大的河原石が敷かれていた。四隅に柱を立て、方形の柄穴を穿ち横木を渡している。その間に板材を立てて枠を作っている。柱の下には扁平な礫を置いて基礎としている。柱と柱の間隔は、北面で1.1m、東面で1.05m、南面で1.0m、西面で1.0mを測る。東西壁の南北方向の横木は西に10°程振っている。4本の柱は0.9～1.0m程であるが、どれも上端は風化により尖っている。基部は残りが良く一辺15～20cmの角材である。南東隅のM2と南西隅のM3は、芯持ち材で後者は断面扇状を呈する。何れも下端から35～50cm程のところに、10cm×5cm、深さ5cm前後の柄穴が2個所に穿たれている。横木の挿入用である。横木は4面に見られたが南面のそれは腐蝕が激しく取上げることができなかった。北・東・西面の横木は長さ89～96cm、幅6～7cm、厚さ2～3cmを測る。何れも両端は腐蝕しており柄穴に挿入された状態ではなく、下に落ちた状態で検出されている。側板は何れも残りが悪いが、北面5枚(M6～M10)、東面5枚(M12～M16)、南面5枚(M18～M22)、西面2枚(M23-24)を図示した。残存長は60～80cmが多く、先端部は腐蝕によって細くなっている。基部では幅20～25cm、厚さ5～8cm前後のものが多い。これらの板材は、一部重なるように立て並べて枠としていた。

材は、柱がヒノキ、横木と枠板はすべてツガである。後者の木取りはM17が追柾である以外は全て板目取りである。また枠板の年輪から推定して樹径60～70cmの材が使用されている。

遺物は、埋土中から出土している。1115-1118は土師器杯底部、1117は同小杯、1116は須恵器皿(1116)、1119～1123は瓦器椀、1124～1125は青磁碗I 5b類、1127は同皿、1128-1129は常滑の斐胴部片である。1117、1121～1123は埋土中層、青磁皿(1127)は、西面の横木直上、常滑(1128)は、西側側板(Fig.74～M24)の脇から出土している。他の遺物は上層からの出土である。埋土中層や横木直上の遺物は、SE1が機能しなくなった直後に廃棄されたものと考えられる。

(4) 溝

SD13 (Fig.75)

北部を東西に延びる溝で、東は調査区外に出ている。確認延長14.0m、幅30～50cm、深さ10cmを測る。埋土は暗灰色粘性土である。遺物は、土師器杯(1130-1131)、須恵器杯(1132)、同蓋(1133-1134)

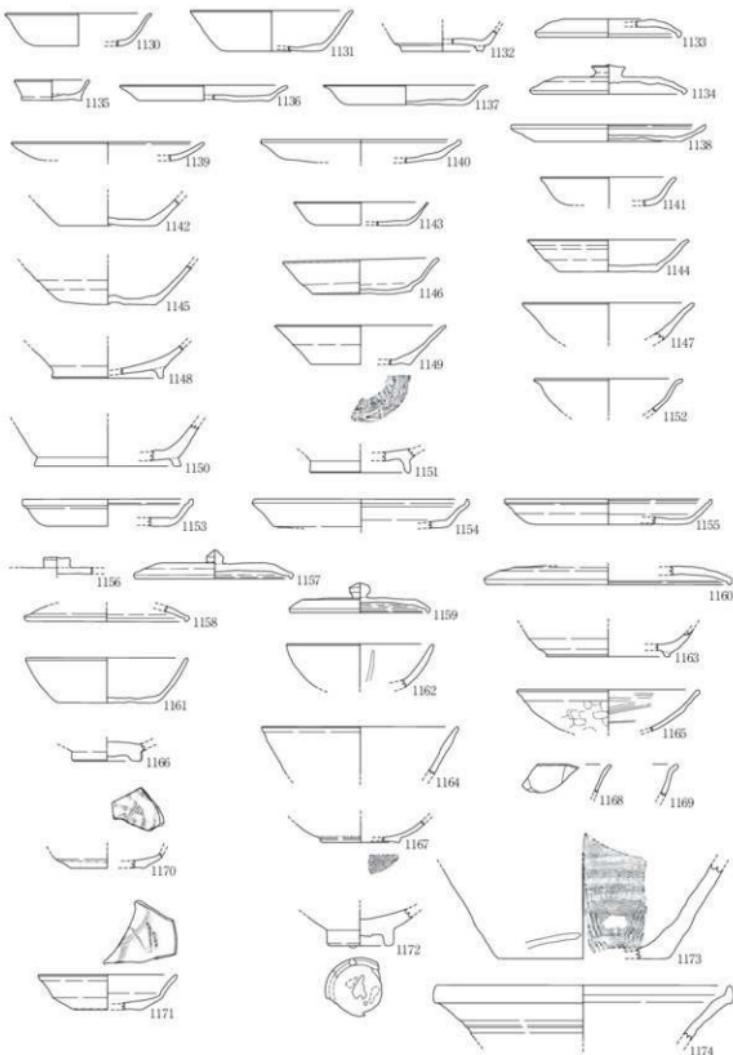


Fig.75 SD13・14 遺物実測図

SD13 : 1130~1134 SD14 : 1135~1174

0 10cm

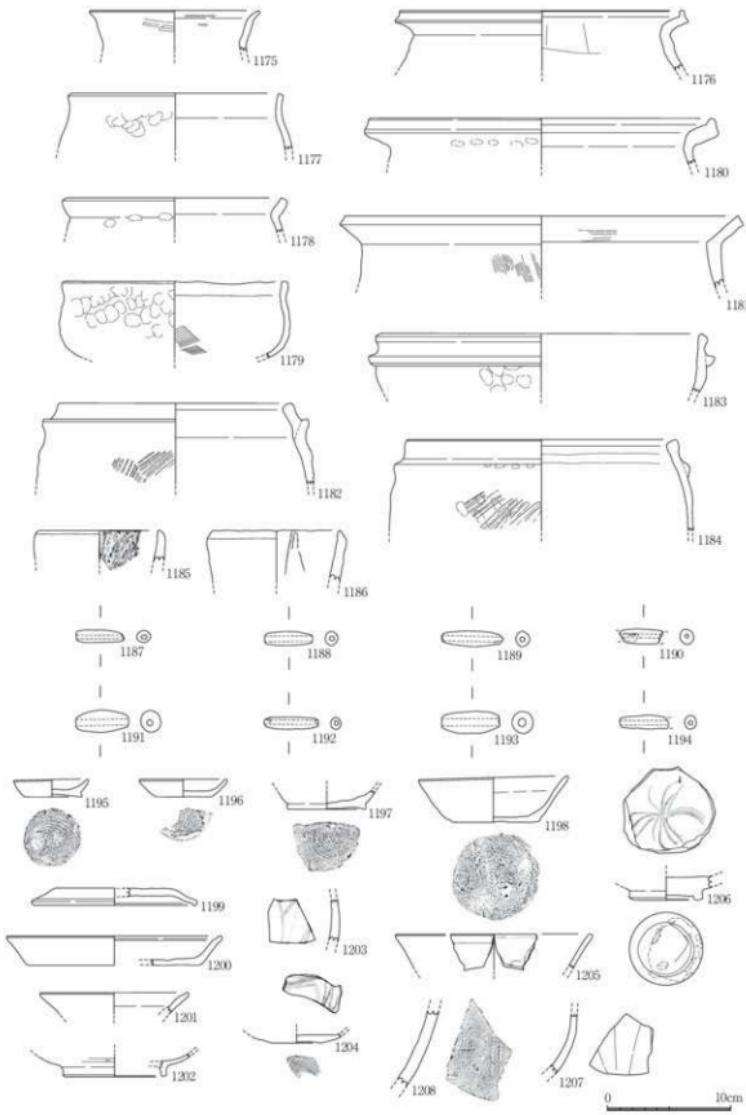


Fig76 SD14・17 遺物実測図 SD14 : 1175~1194 SD17 : 1195~1208

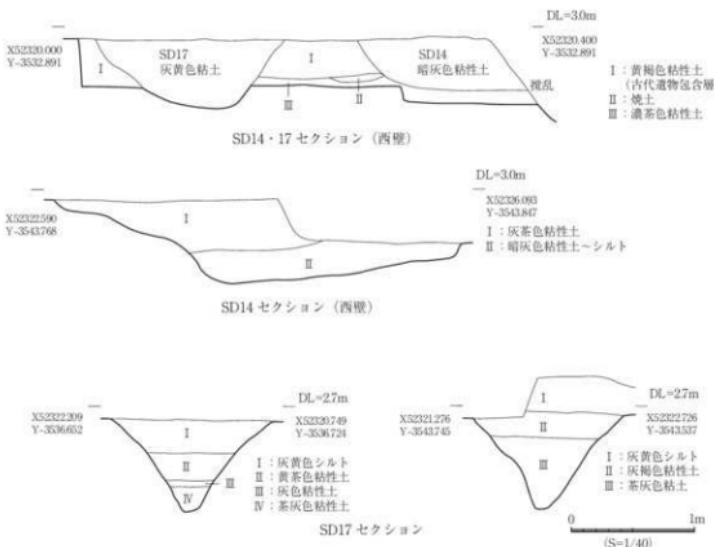


Fig.77 SD14・17セクション実測図

である。上層で検出したが古代の溝である。

SD14 (Fig.75～77)

遺構集中部の北を東西に延びる溝である。北側の肩は現代擾乱によって大きく抉り取られている。東は調査区外に出ているが、西端は調査区内にあったものと考えられるが、擾乱のため捉えることができない。南肩の確認延長は13.2m、深さは40～70cmを測り、SD14（西壁）セクションを見るとき床面幅が2.0m程確認できる。検出幅4.0m前後を推定することが可能で相当大きな溝であったことが考えられる。埋土は、中央部付近でI：灰茶色粘性土、II：暗灰色粘性土～シルトである。

遺物は、人工層位で上・中・下層に分けて取り上げた。上層からは、同安窯系の青磁皿I-1b類(1170)、備前播鉢(1173)が出土している。中層からは土師器皿(1137)、同杯(1149)、青磁碗底部(1172)、瓦質鍋(1177)、同羽釜(1183)、東播磨系土師器皿(1182)が出土している。下層からは、土師器小杯(1135)、同皿(1140-1143)、同杯(1144～1148-1150-1153)、須恵器皿(1155)、同杯(1161～1164)、同蓋(1156-1160)、瓦器椀(1165)、縁釉碗(1167)、白磁多角舟(1168)、同安窯系青磁皿I-2類(1171)、東播系捏鉢(1174)、土師器皿(1175-1176-1180-1181)、瓦質鍋(1178-1179)、東播系羽釜(1184)、製塙土器(1185-1186)、土鍤(1188-1190-1192～1194)が出土している。1167はこの他、層位的に取り上げることができなかった遺物として、土師器皿(1136-1138-1139-1141)、同杯(1142)、同椀(1152)、須恵器皿(1154)、青磁碗(1166-1169)、土鍤(1187-1189-1191)が出土している。下層から最も多くの遺物が出土しているが、SD14が古代の遺物包含層を切っているために、古代の遺物が多く含まれているが、東播系羽釜や瓦器椀(1165)、土師器杯(1149)などからSD14の廃絶年代は14世紀頃に求めなければなら

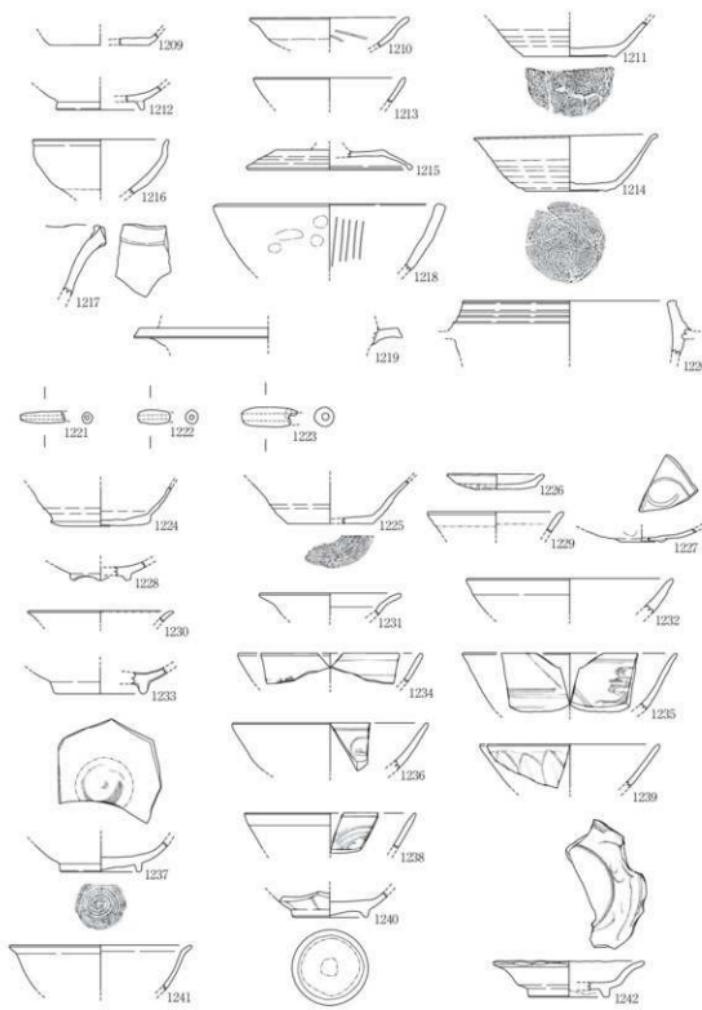


Fig.78 ピット・包含層(Ⅲ層)遺物実測図

0 10cm

ピット P222: 1211・1214 P225: 1218 P231: 1213 P240: 1210 P253: 1220 P254: 1221・1222

P257: 1216 P259: 1209 P266: 1212 P267: 1215 P272: 1217 P297: 1219

包含層 土師器杯: 1224・1225 瓦器楕: 1227 同小皿: 1226 濱戸美濃系皿: 1229・1232 白磁皿: 1228・1230

青磁碗: 1233～1241 青磁皿: 1231・1242 土鍤: 1223

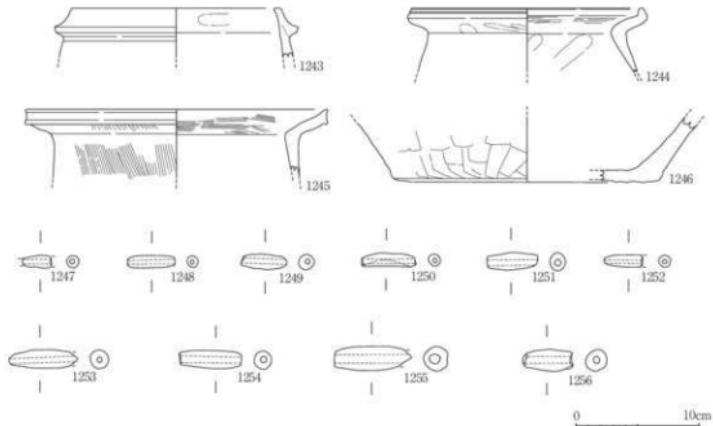


Fig.79 中世包含層遺物実測図
土師器壺：1244・1245 同羽釜：1243 常滑壺：1246 土錘：1247～1256

ない。

SD17 (Fig.76-77)

SD14の南1.0mを併行して東西に走る溝である。西部で北西方向に振っている。SK45に切られている。確認延長は22.0m前後、上場幅は中央部付近で1.4m前後、西に寄るにしたがって狭くなっている。深さは中央部付近で90cm前後を測る。断面形はV字状を呈する。埋土はI:灰黄色シルト、II:黄茶色粘性土、III:灰色粘性土、IV:茶灰色粘性土である。

遺物は、上・下二層に分けて取り上げた。上層からは土師器小杯(1195-1196)、同杯(1197)、須恵器蓋(1199)、灰釉碗(1202)、白磁皿IV類(1201)、龍泉窯系青磁I4類(1205)が出土している。須恵器蓋の1199は内面の摩耗が激しく墨汁痕が残ることから転用硯と考えられる。下層からは土師器杯(1198)、須恵器皿(1200)、龍泉窯系青磁碗(1203-1206-1207)、同安窯系青磁皿I-2類(1204)、常滑胴部片(1208)が出土している。青磁碗1203と1207はI5b類に属する。SD17からも古代に属する遺物が出土しているが、包含層中からの混入であり、SD17の埋没時期はSD14とほぼ同時期と考えられる。

(5) ピット出土の遺物(Fig.78)

ピット出土遺物で図示し得たものを列挙する。P222の土師器杯(1211-1214)、两者とも回転台成形で糸切り底である。P225の瓦質擂鉢(1218)、P231の瓦器椀(1213)、P240の瓦器椀(1210)、P253の瓦質羽釜(1220)、P257の瀬戸天目茶碗(1216)、P259の須恵器杯(1209)、P266の灰釉(1212)、P267の須恵器蓋(1215)、P272の東播系捏ね鉢(1217)、P297の土師器羽釜(1219)、P254の土師器土錘(1221-1222)、P302の同土錘(1223)である。

(6) 中世の遺物包含層出土の遺物(Fig.78-79)

中世の遺物包含層(II層)からは、土師器、瓦器などの供膳形態、貿易陶磁器、煮沸形態などが出土し

ている。土師器杯は回転台成形で1224はハラ切り、1225は糸切りである。瓦器は小皿(1226)と椀(1227)がある。1229と1232は瀬戸美濃系の皿である。白磁は皿が出土している。1228はアーチ状高台を持つ小皿、1230は口禿の皿である。青磁碗は龍泉窯系(1233-1235～1241)と同安窯系(1234)の両者が見られる。1231と1242は青磁皿で後者は棱花皿である。

煮沸形態では、土師器羽釜(1243)、同甕(1244-1245)が、貯蔵形態では常滑甕底部(1246)が、その他土錘(1247～1256)が出土している。

第VI章 本調査NE区

1 基本層準(Fig.81)

調査区東壁の基本層準である。

- I:客土。戦後の造成に伴う客土で層厚60～70cmである。
- II:耕作土。北部に認められる。戦後も使われていた耕作土である。層厚20cm前後である。
- III:旧耕作土。全体に認められる。層厚10～15cmを測る。
- IV:灰黄色粘性土。層厚1～5cmを測る。
- V:灰褐色粘性土(中世遺物包含層)。北部では層厚10cm前後と薄く、南は厚く堆積し40cm程を測る。
NW区のII層に対応する層準である。
- VI:黄灰色粘性土。北部に見られ南部には一部でしか確認できない。層厚0～20cmを測る。
- VII:茶色粘性土(古代遺物包含層)。本層準も中央部分では明確にすることはできない。層厚15～40cmを測る。NW区のIII層に対応する層準である。
- VIII:濃茶色粘性土。層厚10cm以上を測る。

2 下層(古代)の遺構と遺物

(1) 土坑

SK76 (Fig.82)

調査区の北寄りにある。平面形は隅丸方形を呈し小ピットに切られている。長軸1.5m、短軸1.5m、深さ25cm前後を測る。埋土は灰茶色粘性土で炭化物を多く含んでいる。埋土中より土師器供膳具を中心に多くの土器が出土しているが、図示し得たのは土師器皿(1257)と東播磨系鉢(1258)である。

SK77 (Fig.82)

SK76の南隣にある。SK78に切られているが、平面形は梢円形を呈していたものと考えられる。長軸1.25m、短軸0.95m、深さ10～15cmを測る。埋土は灰茶色シルトである。遺物は土師器と須恵器の細片が数点出土している。

SK78 (Fig.82)

平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.05m、短軸0.95m、深さ20cmを測る。埋土はI:黄色シルトのブロックが入った茶色粘性土、II:黄色シルトである。遺物は土師器甕(1259)と須恵器細片が出土している。

SK79 (Fig.82)

SK77の南隣にある。西側半分が側溝に切られている。平面形は梢円形を呈し、長軸1.35m、短軸は1.0m前後と考えられる。深さ20cm前後を測る。埋土はI:茶灰色粘性土、II:黄色シルトである。遺物は少なく土師器底(1260)を図示し得たのみである。

SK80 (Fig.83)

調査区中央部にある。SK82を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.5m、短軸1.3m、深さ10～15cmを測る。埋土は灰黄色砂～シルトである。遺物は見られない。

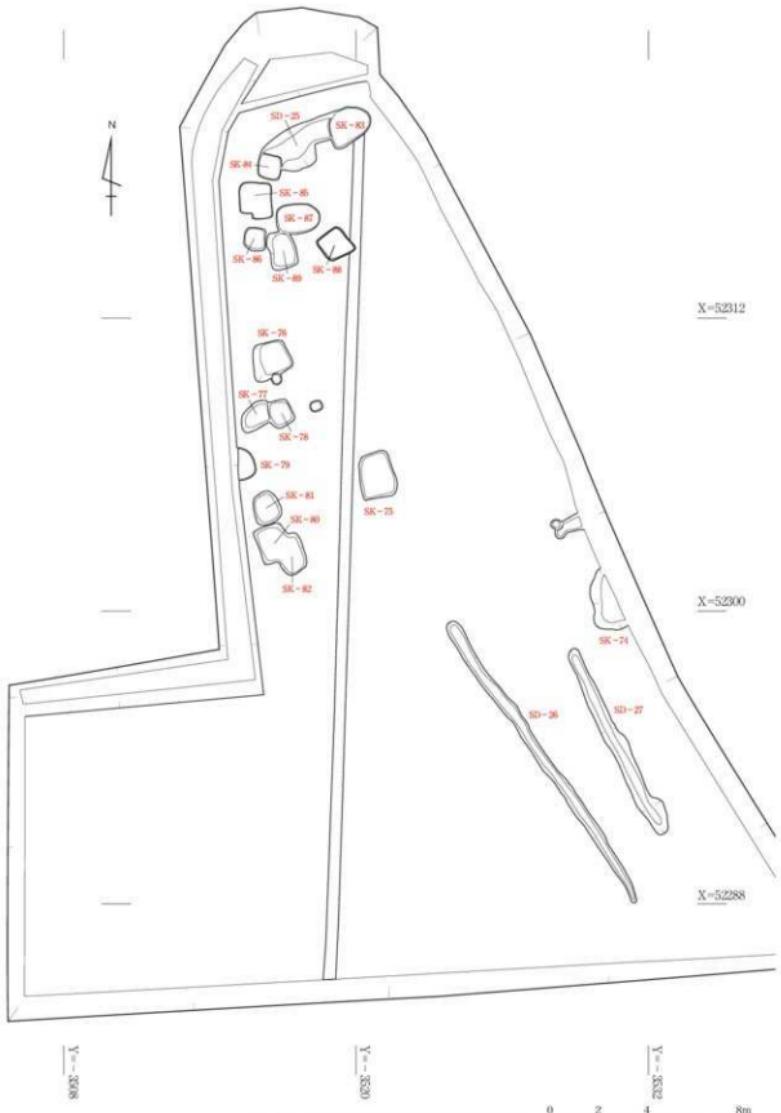


Fig.80 NE区下層（古代）遺構全図

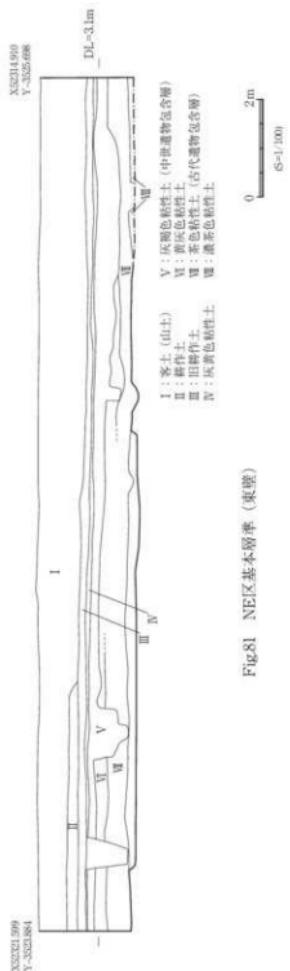


Fig.81 NE区基本剖面 (東壁)

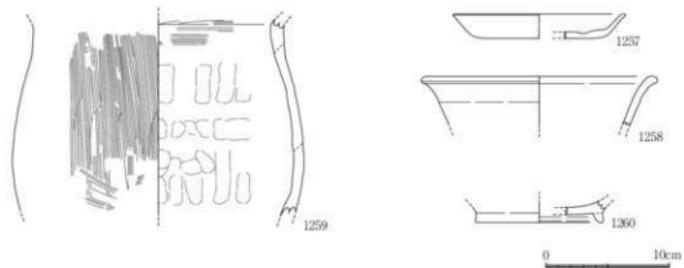
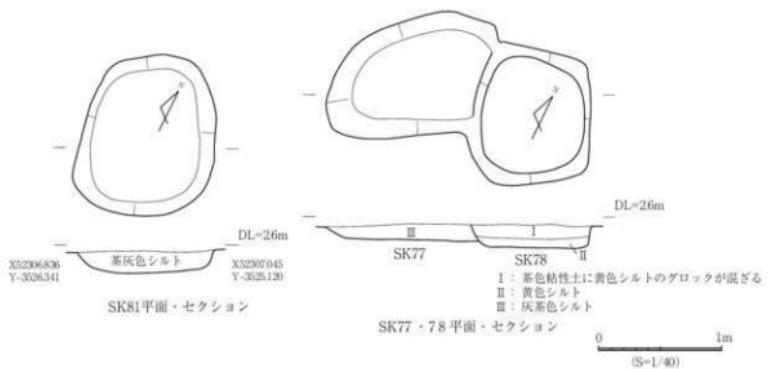
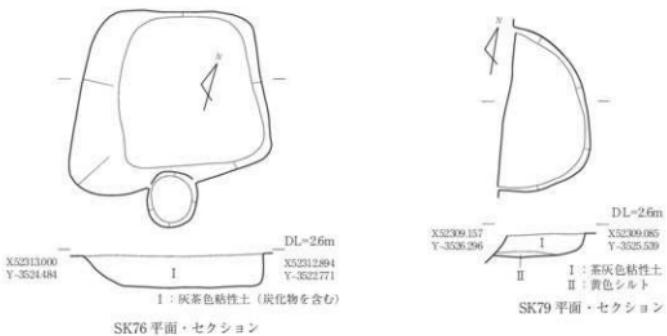


Fig.82 SK76～79・81 遺構及びSK76・78・79 遺物実測図
SK76 : 1257・1258 SK78 : 1259 SK79 : 1260

SK81 (Fig.82・83)

SK80の北に接している。平面形は梢円形を呈し長軸1.3m、短軸1.1m、深さ20cmを測る。埋土は灰茶色シルトである。遺物は土師器、須恵器の供膳具が多く出土している。土師器皿(1261)、須恵器杯底部(1262)、同蓋(1264)、土師器甕(1268)、製塙土器(1272・1275)、土師器土錘(1276～1281)を図示した。甕1268は搬入品である。土師器と須恵器の供膳形態の比率を破片の重さで求めると土師器250gに対して須恵器は81gである。

SK82 (Fig.83)

SK80に切られている。平面形は隅丸方形状を呈し、長軸1.6m、短軸1.1m、深さ20cm前後を測る。埋土は灰褐色シルトである。遺物は土師器皿(1263)、同杯(1266)が出土している。

SK83 (Fig.83)

調査区の北部にありSX2と切り合っているが先後関係は不明である。平面形は不整形を呈し長軸1.9m、幅1.4m、深さ30cmを測る。埋土はI：灰茶色粘土、II：炭化物を多く含んだ暗灰茶色粘性土である。遺物は、須恵器杯(1265)、同高杯(1267)、土師器甕(1269～1271)、製塙土器(1273・1274)、土師器土錘(1282・1283)を図示した。土師器と須恵器の供膳形態の比率を破片の重さで求めると土師器170gに対して須恵器は290gとなり、SK81とは逆転している。

SK84 (Fig.84・85)

調査区北部にありSX2を切っている。平面形は一辺1m程の隅丸方形状を呈し深さは30cm前後を測る。埋土は上層に焼土が見られ、灰茶色シルトに黄色シルトのブロックが混ざっている。土師器、須恵器の供膳形態片が数点出土しているが、図示できたものは須恵器蓋(1297)と土師器甕(1302)である。

SK85 (Fig.84・85)

SK84の南隣にある。平面形は、方形であるが、南面がクランク状に屈曲している。二つの土坑の切り合いの可能性も考えられるが、ここでは一基の土坑として扱った。長軸1.5m、短軸1.3m、深さ30～35cmを測る。埋土は複雑な堆積を示している。I：黄色シルト、II：灰茶色砂層で炭化物を多く含んでいる。III：灰黄茶色粘性土、IV：灰黄色粘性土に炭化物を多く含んでいる。

V：灰色砂層である。遺物は土師器杯(1284・1290)、須恵器皿(1287)、同蓋(1298・1299)、製塙土器(1305～1307)、土師器土錘(1308～1313)がある。この他土師器、須恵器の供膳形態片も多く見られるが、両者の重さによる比率を求めるとき、土師器110gに対して須恵器は250gである。

SK86 (Fig.84・85)

SK85の南隣にある。平面形は隅丸方形状を呈し、長軸95cm、短軸90cm、深さ20cmを測る。埋土は炭化物を多く含んだ灰茶色粘性土である。遺物は、土師器甕(1304)の他、須恵器の供膳形態片が見られる。土師器供膳形態は認められない。

SK87 (Fig.84・85)

SK86の東隣にある。平面形は梢円形を呈し長軸1.8m、短軸1.25m、深さ35cmを測る。埋土は、I：灰茶色粘性土に黄色粘性土のブロックが混ざっている、II：焼土、III：炭化物を多く含んだ灰色粘性土、IV：黄茶色粘性土である。遺物は、須恵器皿(1289)、同杯(1295)、土師器甕(1301)などが出土している。供膳形態は須恵器のみで占められている。

SK88 (Fig.84・85)

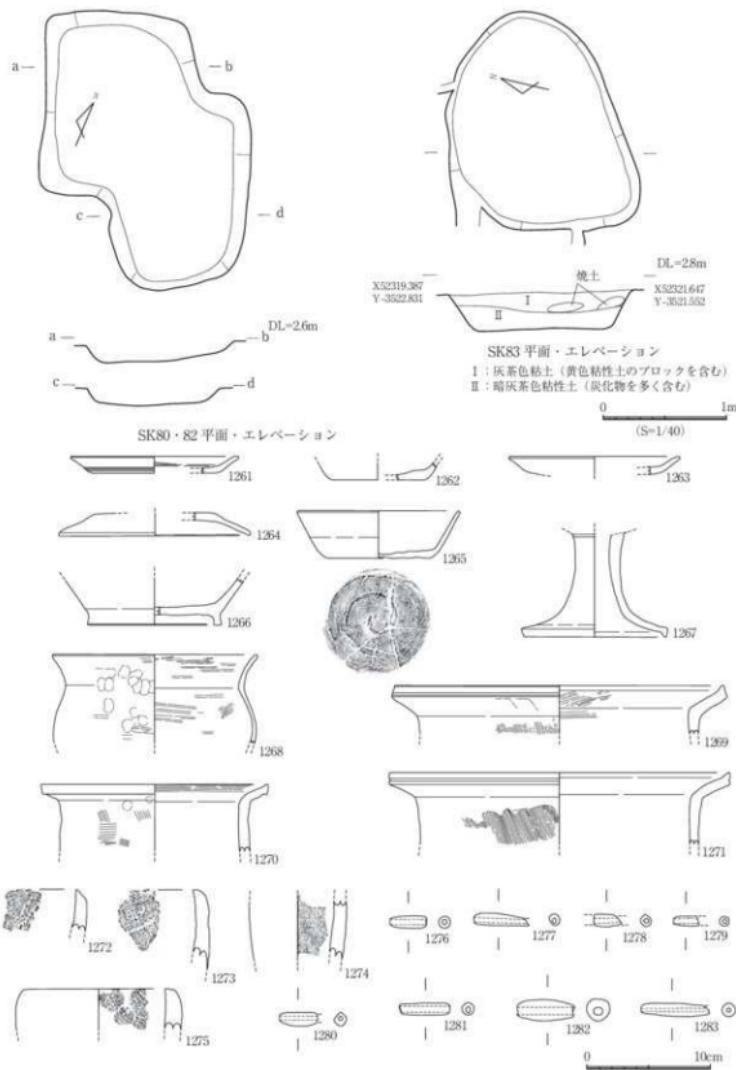


Fig.83 SK80~83 遺構及び遺物実測図

SK81: 1261・1262・1264・1268・1272・1275・1276~1281 SK82: 1263・1266

SK83: 1265・1267・1269~1271・1273・1274・1282・1283

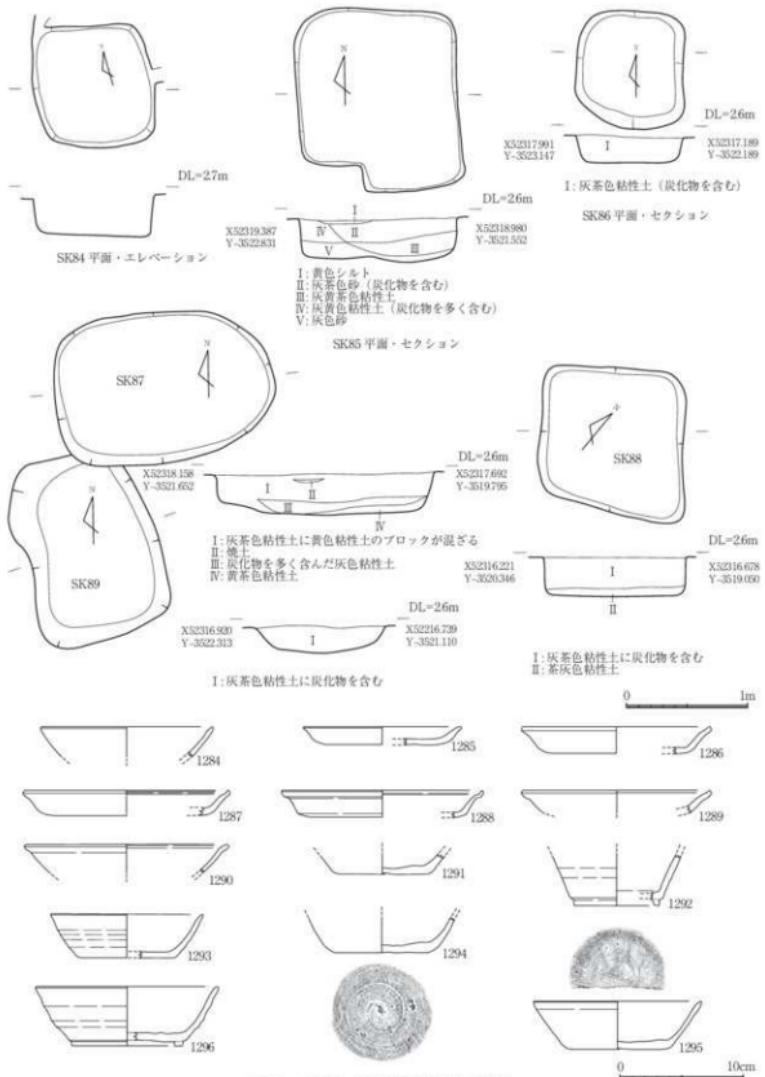


Fig.84 SK84~89 遺構及び遺物実測図

SK85 : 1284·1287·1290 SK87 : 1289·1295

SK88 : 1286·1288·1291~1294·1296 SK89 : 1285

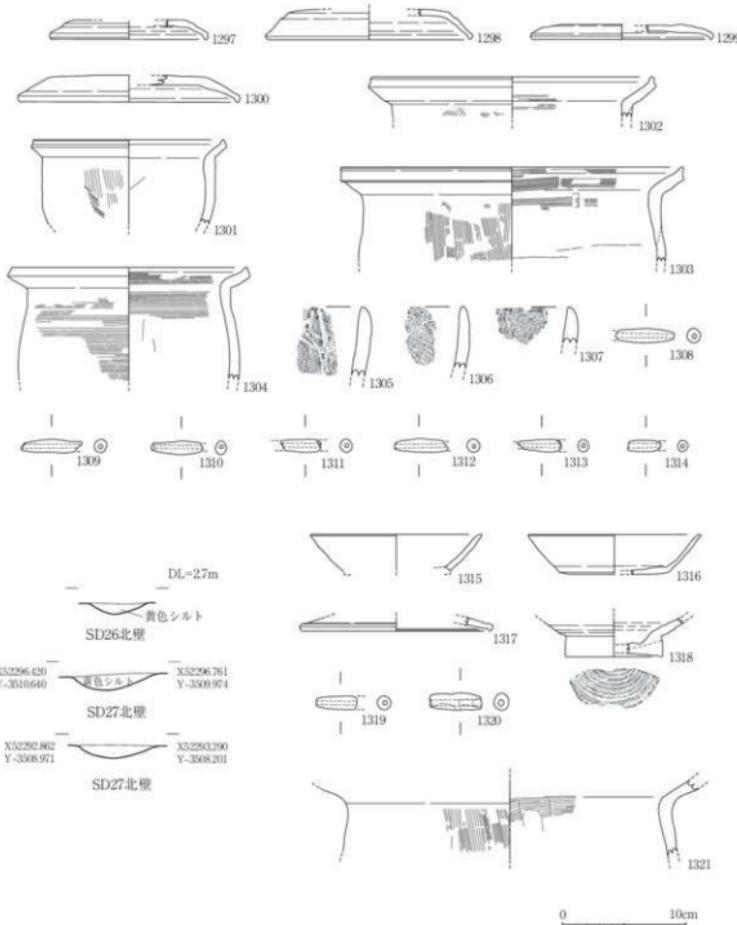


Fig85 SD26・27 エレベーション及びSK84~98, SD26・27 遺物実測図
 SK84 : 1297-1302 SK85 : 1298-1299-1305~1307-1308~1313
 SK86 : 1304 SK87 : 1301 SK88 : 1300-1303 SK89 : 1314
 SD26 : 1317-1320 SD27 : 1315-1316-1318-1319

SK87の東隣にある。平面形は隅丸方形を呈し長軸1.2m、短軸1.2m、深さ32cmを測る。埋土はI：炭化物を含んだ灰茶色粘性土、II：茶灰色粘性土である。遺物は須恵器皿(1286-1288)、同杯(1291～1294-1296)、同蓋(1300)、土師器甕(1303)を図示した。供膳形態は須恵器片が450gを測るが土師器のそれは認められない。遺物の大半はⅡ層から出土している。

SK89 (Fig.84-85)

SK87と接している。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.5m、短軸1.1m、深さ20cmを測る。床面中央部にピット状の落ち込みが斜めに認められる。埋土は炭化物を含む灰茶色粘性土である。遺物は土師器皿(1285)、土師器土錘(1314)が見られる。

(2) 溝

SD26 (Fig.85)

調査区南部を斜めに走る溝である。延長14.0m、幅45cm、深さ7cm前後、断面は船底状を呈する。埋土は黄色シルトである。遺物は須恵器蓋(1317)、土師器土錘(1320)である。

SD27 (Fig.85)

SD26の東隣を走る溝である。延長8.5m、幅70～80cm、深さ10～15cmを測る。埋土は黄色シルトである。遺物は南北の中程から集中して出土している。須恵器杯(1315-1316)、土師器杯(1318)、同甕(1321)、土師器土錘(1319)である。

(3) 土器集中7出土の遺物(Fig.86)

調査区南部のJ97から古代の土師器が集中して出土した。土器を残して周辺を精査したが遺構を確認することはできなかった。土師器小皿(1322-1323)、同小杯(1324～1328)、同杯(1329～1336)、同椀(1339)、須恵器杯(1338)、同鉢(1340)、黒色土器A類椀(1337-1343)黒色土器B類椀(1341-1342)、土師器羽釜(1344～1346)、製塙土器(1347)、土師器土錘(1348)が見られる。土師器皿、杯類はすべて回転台成形で、底部はヘラ切り後ナデ仕上げをしている。黒色土器A・B類は搬入品である。土師器杯1333は、底部円板上に粘土を巻き上げて成形している手法が断面で確認できる好例である。

(4) 性格不明の落ち込み(SX2)

北部に位置する。SK83、SK84と切り合っている。前者には切られているが後者との先後関係は不明である。不整形な平面形を呈し、長軸2.4m、短軸1.7m、深さ10～15cmを測る。埋土は灰茶色砂～シルトである。遺物はほとんど見られないが古代あるいはそれ以前の落ち込みである。

(5) 遺物包含層下層(VII層)出土の遺物(Fig.87～89)

1349～1362-1364は土師器皿である。回転台成形、ヘラ切りで横ナデ調整を基調とするが1358は内外面ヘラ磨きを行っている。1363-1365～1368-1370-1371-1373-1375-1377は土師器杯である。例外なく回転台成形、ヘラ切り、1375と1377は高台付である。1369-1372-1374-1376は土師器椀である。1372と1374は円板状高台を有し糸切りである。1378～1390は須恵器皿である。口縁部が外反するタイプや直線的に立ち上がるタイプ、端部を摘み上げるタイプ(1380-1386-1388)などが見られる。1390の外底には×のヘラ記号が認められる。1391～1397は須恵器蓋である。1398～1406-1408～1412は須恵器杯である。1408の底部は糸切りである。1413-1414は須恵器壺底部、1415は同長頸壺の頸部、1416は短頸壺である。

1417は瓦器小皿である。1418-1420は黒色土器A類椀で、前者には口縁部内面に沈線が巡る。1421は同B類である。外面は4分割してヘラ磨きを施し、内面には沈線を有する。A・B類とともに搬入品

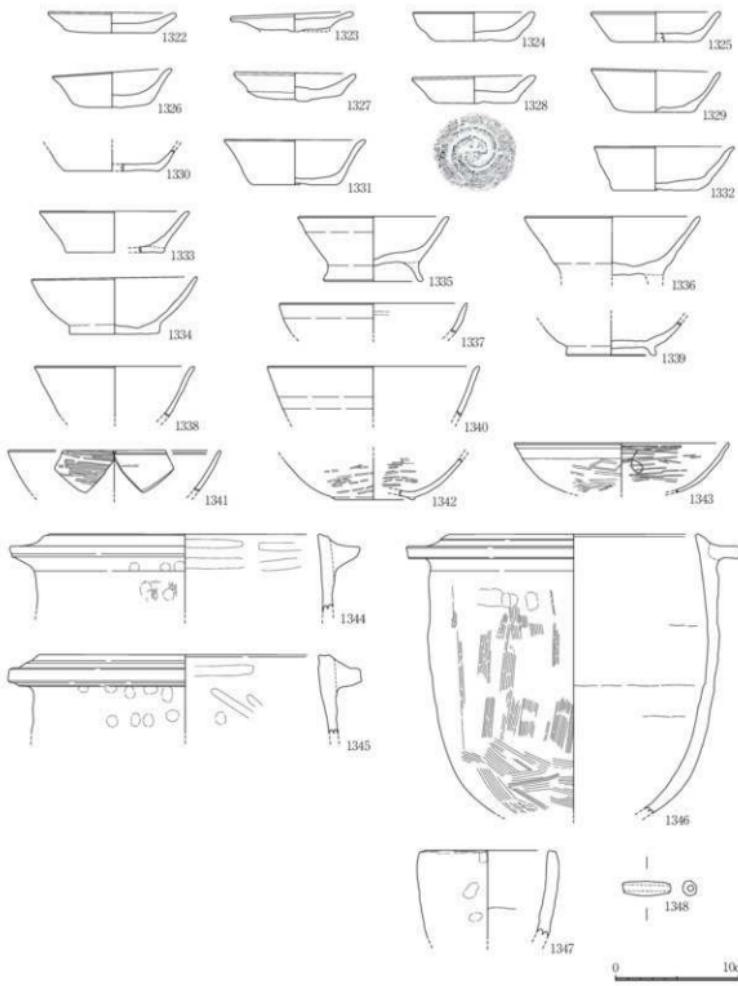


Fig.86 土器集中7遺物実測図

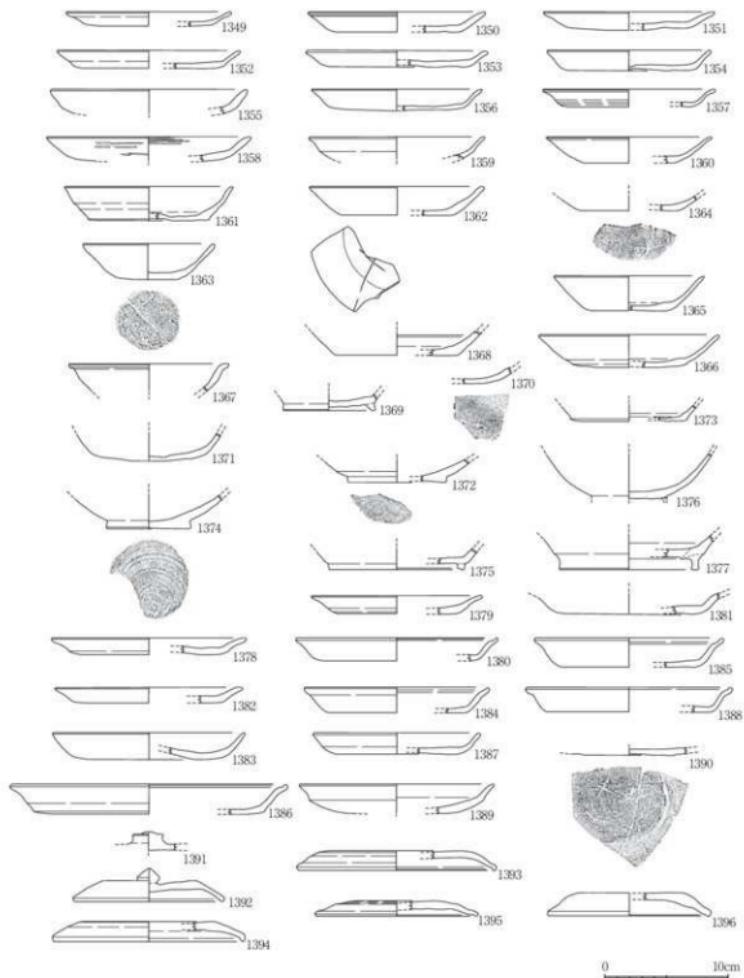


Fig.87 遺物包含層（VII層）遺物実測図①

土師器皿：1349～1362・1364 同杯：1363・1365～1368・1370・1371・1373・1375・1377
土師器椀：1369・1372・1374・1376 須恵器皿：1378～1390 同蓋：1391～1396

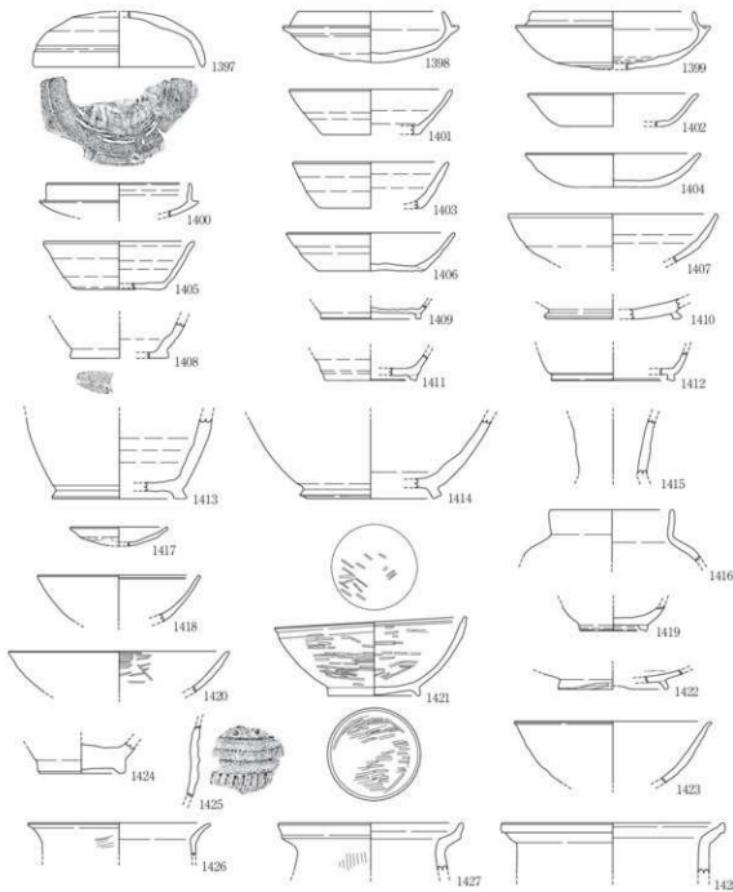


Fig.88 遺物包含層（VII層）遺物実測図②

須恵器蓋：1397 同杯：1398～1412 同壺：1413～1416

綠釉碗：1419～1423 灰釉皿：1422 黒色土器 A 類椀：1418～1420 同 B 類椀：1421

瓦器小皿：1417 白磁碗：1424 土師器甕：1426～1428 弥生土器：1425

0 10cm

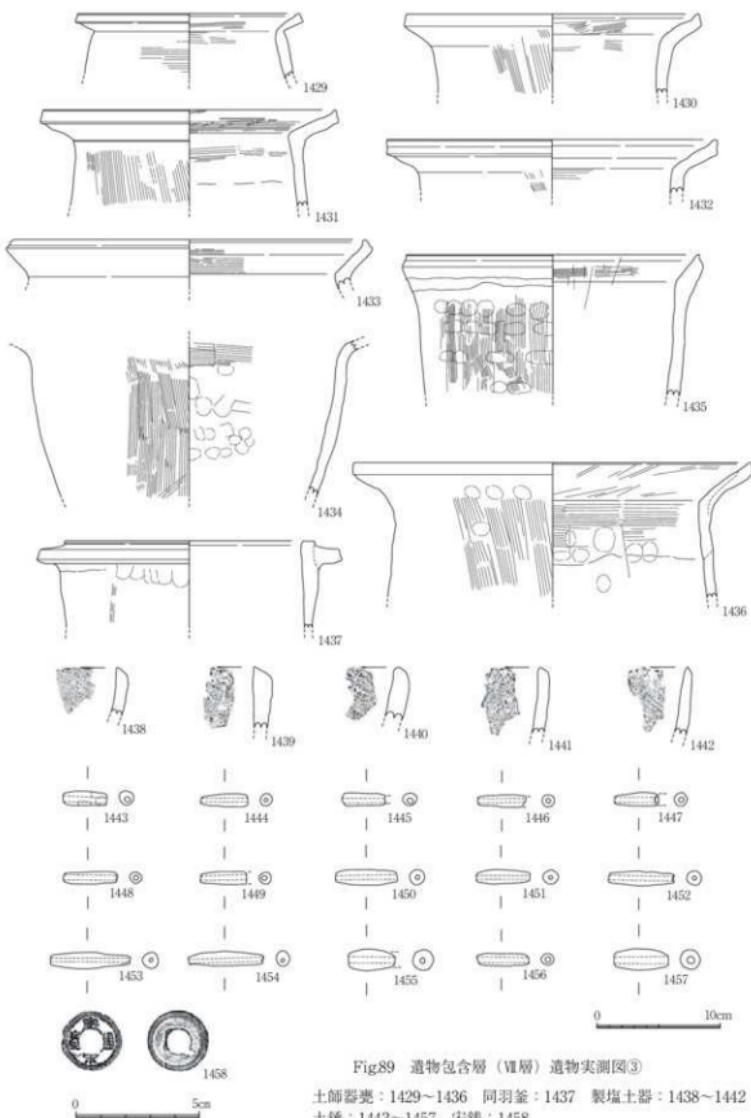


Fig.89 遺物包含層（VII層）遺物実測図③
 土師器甕：1429～1436 同羽釜：1437 製塩土器：1438～1442
 土鍾：1443～1457 宋錢：1458



Fig.90 NE区上層（中世）造構全体図

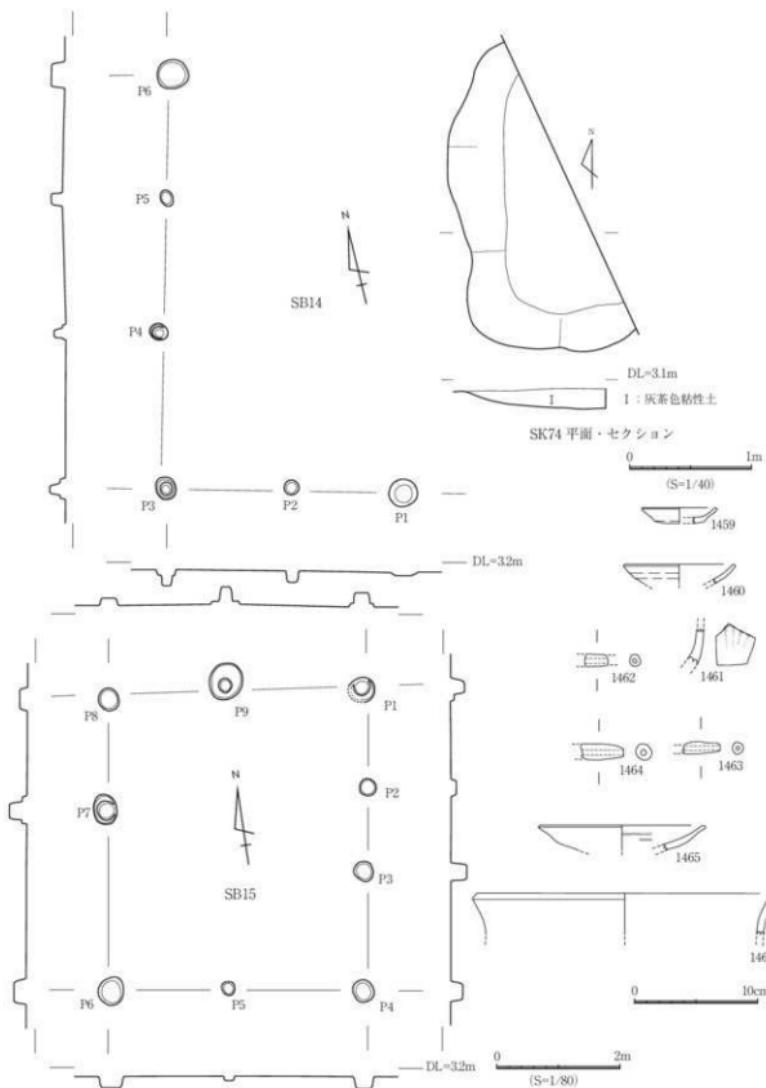


Fig.91 SB14・15, SK74 造構及び遺物実測図
SB15: 1459-1464 SK74: 1465-1466

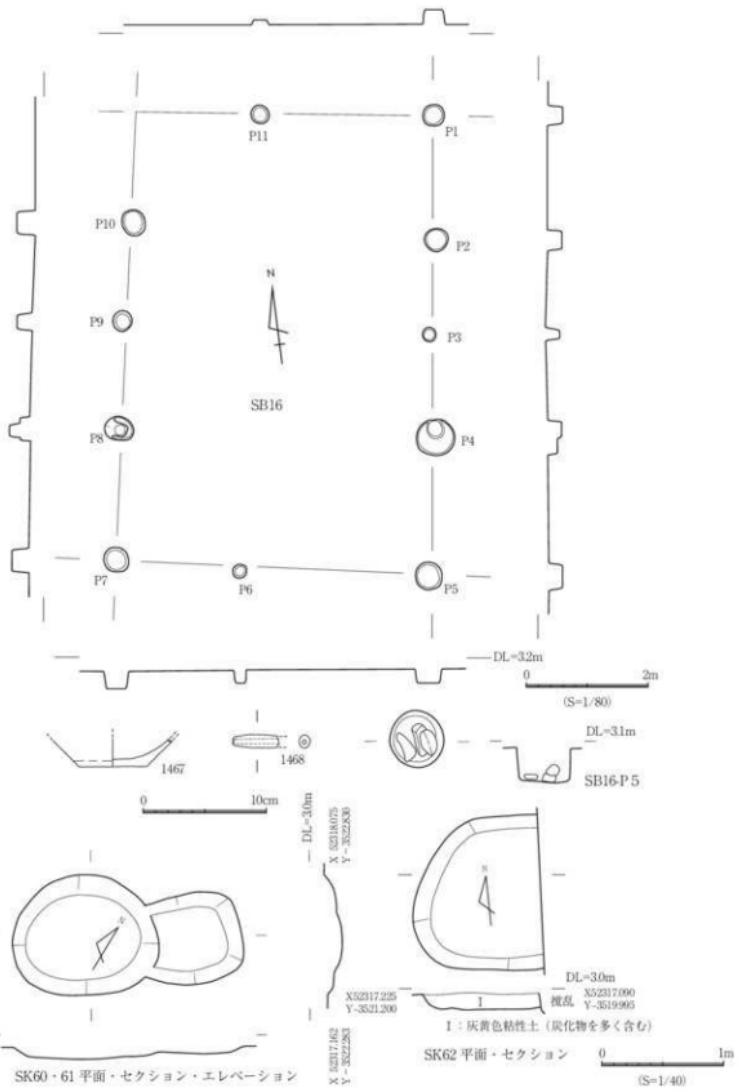


Fig.92 SB16, SK60~62 遺構及び遺物実測図
SB16 : 1467 SK62 : 1468

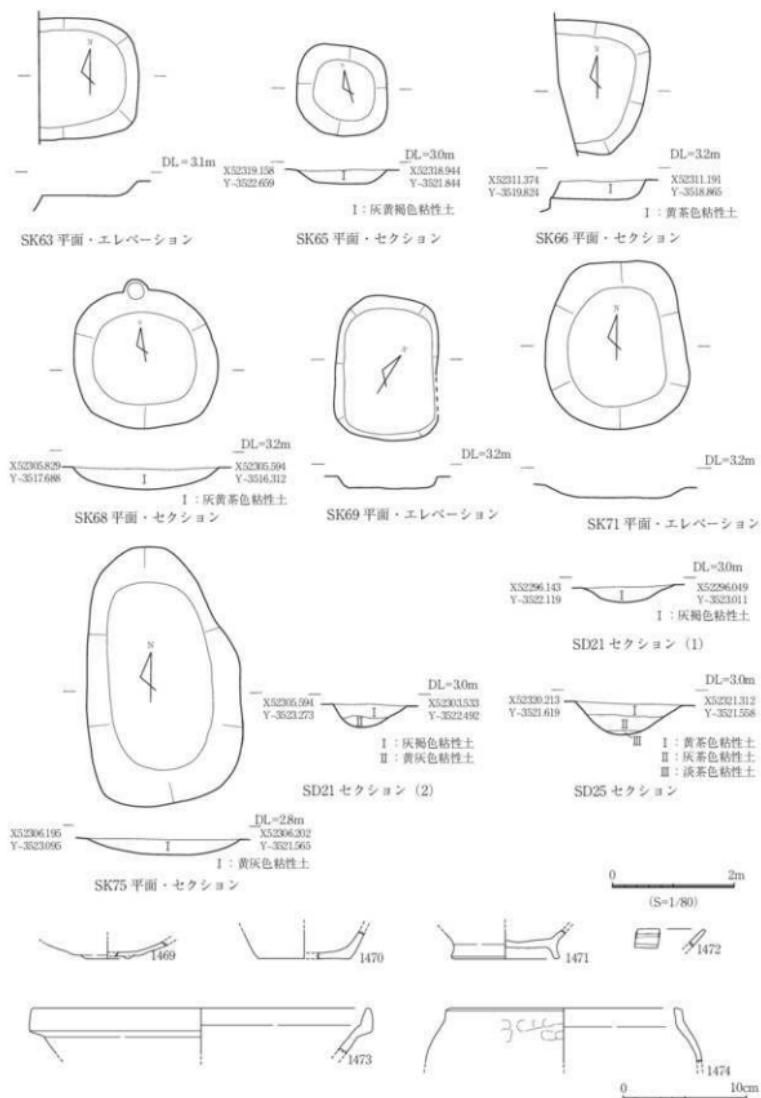


Fig.93 SK63・65・66・68・69・71・75, SD21・25 遺構及びSD20 遺物実測図

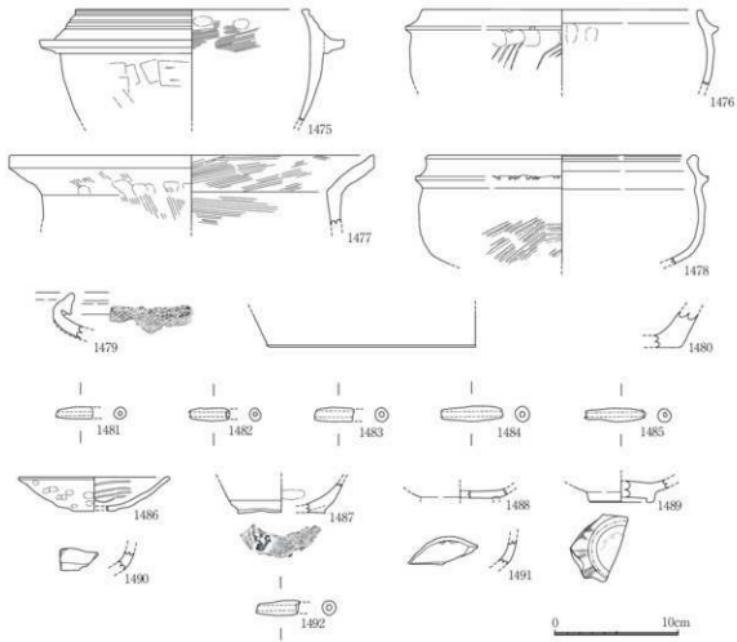


Fig.94 集石1・2平面・エレベーション及びSD20・24, ピット遺物実測図

SD20 : 1475 ~ 1484 SD24 : 1485

P314 : 1491 P321 : 1487 P329 : 1490 P382 : 1486 P389 : 1489・1492

P332 : 1488

であり、B類1421は楠葉彌で10世紀後半に時期比定できる。1419-1423は緑釉陶器で、ともに近江産、平安京Ⅲ期中段階に属する。1422は灰釉陶器皿である。1424は白磁碗底部である。1425は弥生土器の上胴部である。微隆起帯を巡らし上下に円形浮文と棒状浮文を貼付している。中期末の壺である。

1426～1436は土師器壺である。1426は口縁部が外反、他は「く」字に屈曲する。1426は搬入品である。1437は同羽釜である。1438～1442は製塙土器である。内面には布目压痕があり、何れも堅緻に焼きしまっている。1443～1457は土師器土錘である。1458は古錢「皇宋通宝」(真書)である。銭径2.5cm、内径1.81cm、中央部分に径1cmの円孔を二次的に穿っている。北宋銭で初鑄は1038年である。

3 上層(中世)の遺構と遺物

(1) 挖立柱建物

SB14 (Fig.91)

調査区中央部に位置しSB15と重複している。一部調査区外に出ているが、梁間2間(4.0m)×桁行3間(6.8m)の南北棟で、棟方向はN-11°-Eである。柱穴の掘り方はおおよそ円形で、径20～50cm、深さ10～30cmである。P3に径15cm前後の柱痕跡が認められる。埋土は茶色粘性土である。遺物はP4・P6などから土師器細片が出土しているが図示できるものはない。

SB15 (Fig.91)

梁間2間(4.2m)×桁行3間(5m)の南北棟で、棟方向はN-8.5°-Eである。柱穴の掘り方はおおよそ円形で、径25～60cm、深さ13～43cmである。P1、P7、P9には径20～25cm前後の柱痕跡が認められる。埋土は茶色粘性土である。遺物はP3から白磁小皿D類(1460)と土師器土錘(1462-1463)、P4から瓦器小皿(1459)と細蓮弁文を有する青磁碗(1461)、P7から土師器土錘(1464)、瓦器などの細片は出土している。

SB16 (Fig.92)

SB15の南隣にある。梁間2間(5.2m)×桁行4間(7.6m)の南北棟で、棟方向はN-11°-Eである。柱穴の掘り方はおおよそ円形で、径20～55cm、深さ13～43cmである。P4とP8に径20cm前後の柱痕跡が認められる。埋土は茶色粘性土である。遺物はP2・P5などから土師器細片が出土しているが、図示できたのはP2の土師器杯(1467)のみである。P5床面には10×20cm大の角礫3個が置かれている。

(2) 土坑

SK60 (Fig.92)

調査区の北部にある。SD24とSK61を切っている。平面形は楕円形を呈し長軸1.2m、短軸0.95m、深さ10～15cmを測る。埋土は灰色粘性土である。土師器杯・皿などの細片が出土しているが図示できるものはない。

SK61 (Fig.92)

西をSK60に切られている。平面形は隅丸長方形状を呈するものと考えられる。埋土は茶色粘性土である。土師器細片が極少量出土している。

SK62 (Fig.92)

SK60の東隣にある。東側は搅乱坑に切られている。平面形は不整形を呈し、長軸は1.2m以上、短軸は1.25m、深さ12cmを測る。埋土は炭化物を多く含んだ灰黄色粘性土である。遺物は土師器細片

を多く含むが土錐(1468)を図示し得たのみである。

SK63 (Fig.93)

SK62の南にある。西側を擾乱溝によって切られている。平面形は短軸1.0mの隅丸方形を呈し、深さは10cmを測る。埋土は灰色粘性土である。遺物は、土師器片が極少量出土している。

SK65 (Fig.93)

北部にある。平面形は隅丸方形である。長軸75cm、短軸70cm、深さ10cm前後を測る。埋土は灰黄褐色粘性土である。土師器細片が極少量出土している。

SK66 (Fig.93)

SK63の南にあり西側を擾乱坑に切られている。平面形は隅丸方形を呈するものであろう。南北方向に1.0m、深さ15cm前後を測る。埋土は黄茶色粘性土である。遺物は土師器片が少量出土している。

SK68 (Fig.93)

中央部にある。平面形は隅丸方形を呈し、北壁で小ピットと切り合っている。長軸1.2m、短軸1.1m、深さ20cm前後を測る。埋土は灰黄茶色粘性土である。土師器細片が多く出土しているが図示できるものはない。

SK69 (Fig.93)

SK68の東隣にある。平面形は隅丸方形を呈し、東壁でピットと切り合っているが先後関係は不明である。長軸1.2m、短軸0.85m、深さ10cmを測る。埋土は灰茶色粘性土である。土師器細片が出土している。

SK70

SK69の南にある。長軸2m前後の不整形の浅い土坑で、SK72と切り合っている。埋土は灰茶色粘性土である。遺物は、土師器、瓦器の細片が出土しているが、図示できるものはない。

SK71 (Fig.93)

SB16と重複する位置にある。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.35m、短軸1.15m、深さ10cm前後である。埋土は灰茶色粘性土である。遺物は見られない。

SK72

平面は不整形を呈し、長軸1.3m前後、深さは数cmと浅い。人工的な遺構ではないかもしれない。埋土は灰黄色粘性土である。瓦器細片が少量出土している。

SK74 (Fig.91)

東壁際に位置する。下層で検出したが本来は上層で検出すべき遺構である。半分近くが調査区外に出ているが、平面形は隅丸長方形を呈するものであろう。長軸2.5m、短軸1.3m、深さ15cm前後を測る。埋土は灰茶色粘性土である。遺物は瓦器椀(1465)と瓦質鍋(1466)が出土している。

SK75 (Fig.93)

調査区中央部の西寄りにある。上層では検出できずに下層で検出したが中世の遺構である。平面形は楕円形状で長軸2.1m、短軸1.25m、深さ15cm程を測るが、本来の深さは65cm前後であったものと考えられる。埋土は黄灰色粘性土である。土師器細片が出土しているが図示できるものはない。

(4) 溝

SD20 (Fig.93-94)

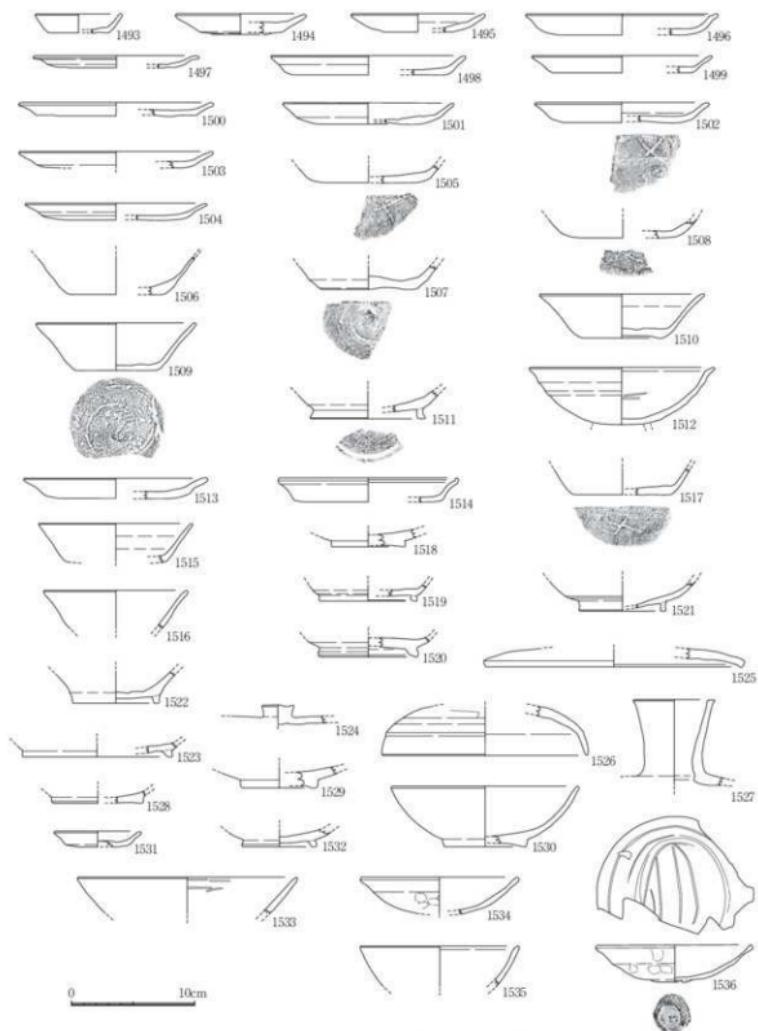


Fig.95 遺物包含層（V層）遺物実測図①

土師器小杯：1493 同杯：1505～1511 同小皿：1494・1495 同皿：1496～1504 同椀：1512
 須恵器皿：1513・1514 同杯：1515～1517・1519・1520・1522・1523 同椀：1521
 須恵器蓋：1524～1526 同蓋：1527 緑釉椀：1518・1528～1530
 黒色土器A類椀：1533・1535 同B類椀：1532 瓦器小皿：1531 瓦器椀：1534・1536

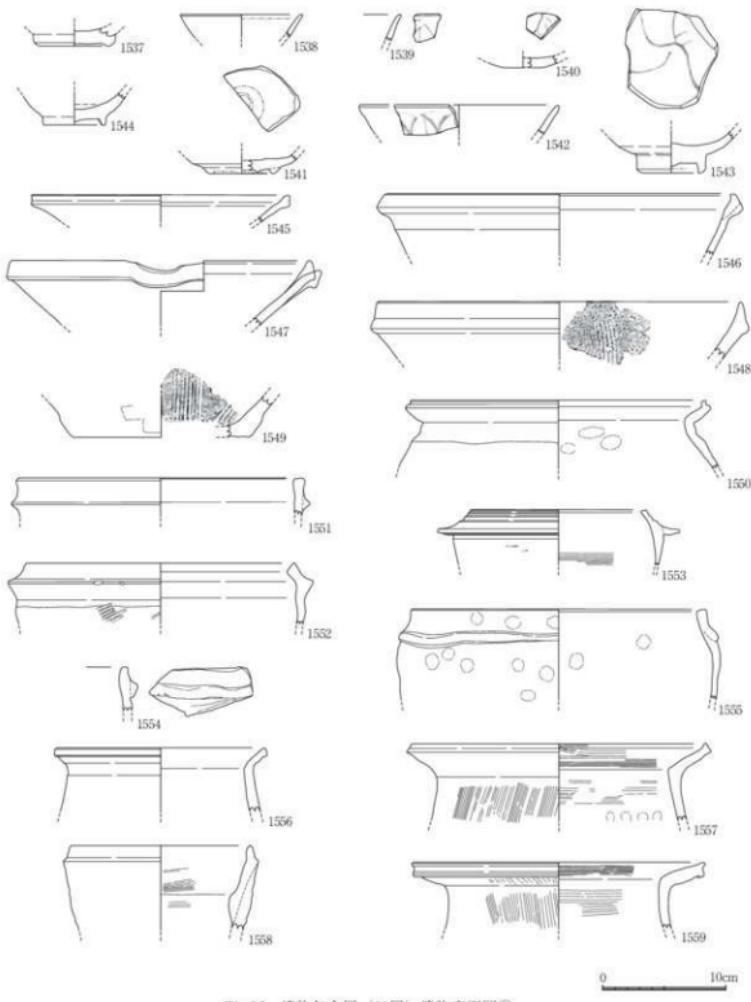


Fig. 96 遺物包含層（V層）遺物実測図②

白磁：1537・1538 青磁碗：1539・1542・1543 同皿：1540・1541 東播系鉢：1545～1547
備前擂鉢：1548・1549 土師器甕：1550・1556・1557・1559 土師器羽釜：1551・1552
瓦質羽釜：1553～1555 製塙土器：1558

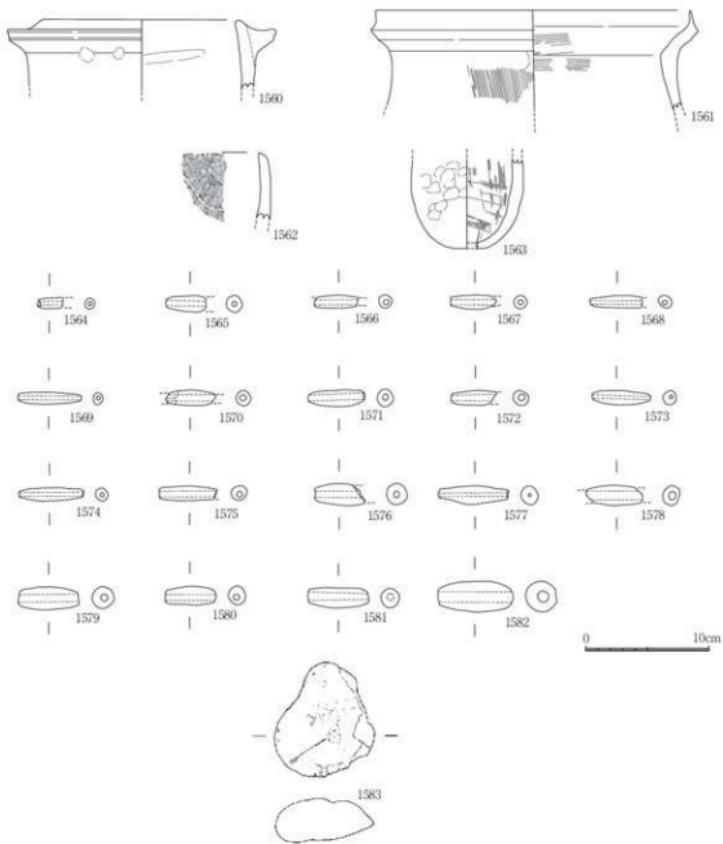


Fig.97 遺物包含層（V層）遺物実測図③

土師器甕：1561 土師器羽釜：1560 製塙土器：1562~1563 土錘：1564~1582 軽石：1583

調査区の西を南北に走る埋土の広がりが確認され、SD20とした。北は試掘坑に切られ、南は側溝に切られており、さらに西側の肩も側溝に切られている。確認延長18.0m、最大幅は70cm前後を測る。深さは15～20cmを測る。北端で確認したSD25に繋がる可能性がある。埋土は灰茶色砂～シルト層である。

遺物は、土師器甕(1470-1471)、瓦器椀(1469)、青磁碗I 4類(1472)、東播系捏鉢(1473)、瓦質鍋(1474)、瓦質羽釜(1475)東播系土師器釜(1476-1478)、土師器甕(1477)、瓦質甕(1479)、偏前甕(1480)、土師器土錘(1481～1484)を図示することができた。東播系土師器釜(1478)の鉢には刻目が施されている。

SD21 (Fig.93)

SD20の東隣を併行して走る溝である。確認延長16.0m、中央部で70cm、深さは10～20cmを測る。埋土はI：灰褐色粘性土、II：黄灰色粘性土である。遺物は見られない。北部で検出しているSD24に繋がるものと考えられる。

SD24 (Fig.94)

調査区北部にある。南は試掘坑に切られており北はSD25と切り合っているが、先後関係は不明である。確認延長10.0m、幅60cm、深さ25cm前後を測る。埋土は灰茶色粘性土である。遺物はほとんど認められなく、図示し得たのは土師器土錐(1485)のみである。

SD25 (Fig.93)

調査区北部にある。東西に走る確認延長7.0m、幅90cm、深さ25cm前後を測る。両端が調査区外に出ているが、西部は南に大きく曲がっているものと考えられ、SD20に繋がっている可能性がある。埋土はI：黄茶色粘性土、II：灰茶色粘性土、III：淡茶色粘性土である。遺物はほとんど認められない。

(5) ピット出土の遺物(Fig.94)

P314とP329からは青磁碗(1490-1491)、P321からは土師器杯(1487)、P332からは陶胎の綠釉碗(1488)、P382からは瓦器椀(1486)、P389からは青磁底部(1489)と土師器土錐(1492)が出土している。

(6) 集石

集石1 (Fig.94)

調査区南部J96グリッドで2.5×1.5mの範囲から角礫が集中して検出された。大きさ30cm以上の入頭大から10cm未満の拳大ほどの大きさで、その多くは火を受けて赤変している。礫群の南から土師器椀(1374)が出土している。西側には杭列が南北方向に見られるが関連性は不明である。

集石2 (Fig.94)

中央部のK93において、角礫が南北70cm、東西60cmの楕円形状に配されている。角礫の大きさは15～30cmを測る。石材は全て砂岩ではほとんどが火を受けて赤変している。

(7) 遺物包含層上層(V層)出土の遺物(Fig.95～97)

1493は土師器小杯、1505～1511は同杯である。1505と1508の外底には「×」のヘラ記号がある。1494と1495は土師器小皿、1496～1504は同皿である。土師器杯・皿共に回転台成形で、杯1510は糸切りであるが、他はヘラ切りである。1512は土師器椀である。1513-1514は須恵器皿、1515～1517-1519-1520-1522-1523は須恵器杯である。1521は同椀で高台を有し、外面にヘラ磨きが認められる。1524～1526は須恵器蓋、1527は同壺である。1518-1528～1530は綠釉陶器である。1518-1528は陶胎、1530は軟胎で共に洛西産、平安京II期中～新段階に属する。1529は陶胎で山城産、平安京II期中段階に属する。

1533と1535は黒色土器椀A類、1532は同B類椀である。1533は搬入品である。1531は瓦器小皿、1534-1536は瓦器椀である。

1537は白磁碗底部、1538は白磁皿IX類である。1539-1542は龍泉窯系青磁碗I 5b類、1543は同底部である。1540と1541は青磁皿で、前者は同安窯系、後者は龍泉窯系の稜花皿である。1544は近世陶磁器である。1545～1547は東播系捏鉢、1548-1549は備前擂鉢である。1550-1556-1557-1559-1561は土師器壺で、1550は紀伊型に属する。1551-1552は東播系土師器釜、1560は摂津型羽釜、1553～1555は瓦質羽釜である。1558-1562-1563は製塙土器、1564～1582は土師器管状土錐である。

第VII章 考察

1 古代・中世の土器様相

上ノ村遺跡からは縄文時代晚期から近世にかけての遺物が出土しており、当遺跡が長期間にわたって存続していたことを物語っている。今次調査においては古代から中世の土器がもっとも多く出土している。これらの中には、黒色土器B類や常滑、紀伊型壺などこれまで本県では出土例がそれほど多くなかったものも見られる。また、東部の物部川とは異なった特徴を見せており、ここでは、古代・中世の土器を中心に、供膳具、煮炊具、調理具、貯蔵具に別けて、各形態別に型式分類を行い、編年的位置付けや諸特徴の抽出を行う。

南四国における当該期の土器編年については、松田直則¹⁾、池澤俊幸²⁾・吉成承三³⁾等が精力的に取り組まれ充実しつつある。さらに近年の資料の増加によって、小地域での編年や地域性の抽出なども試みられるようになり、仁淀川流域においては、田中(徳平)涼子の論考⁵⁾がある。

今次調査の出土土器は、遺構一括資料は少なく包含層資料が多い。上記の研究成果に依拠しながら主として口縁部形態や法量などによって型式分類を行うことにする。土師器の編年については特に断りのない場合は池澤編年による。²⁾³⁾

(1) 供膳具

① 土師器

出土土器の中で最も多く、杯、皿、椀が見られる。

杯

形態や製作手法、法量などから大きく12タイプに分類することができた。ほとんどすべてが回転台成形で、手捏ねは例外的な存在である。

A類：底部から丸味を帯びて立ち上がるタイプである。口縁部は直線的に延びるタイプが多いが外反するものや内湾するものも少量見られる。すべてヘラ切りである。551にはヘラミガキが見られる。(551・762・1130・1360・1362・1365・1402)

B類：底部脇が僅かに凹む。口径12cm前後のものと15cm前後のものが見られる。すべてヘラ切りである。(597・740・881・1366)

C類：底部脇に凹み、あるいは段を持ち、体部は僅かに外方に膨らみ、口縁部はほとんど例外なく外反する。底部の凹み、段はB類とともに円盤の上に体部を成形して行く分割成形技法の採用と関係するものと考えられる。B類に比して器壁が薄くシャープな作りである。口径12～13cm前後、器高指數20～25前後のC I類(975～979・1038・1040・1041・1141・1144・1146・1361)と30近くを示すC II類(1509)がある。すべてヘラ切りである。

D類：器壁、特に底部の厚い作りの一群である。口縁部に向って直線的に立ち上がるものが多い。すべてヘラ切りである。法量分化が見られる。口径10cm前後で器高2.5cmのD I類(1324・1325・1327・1328など)、口径10cm前後で器高3cm前後のD II類(284・754・1326)、口径11cm前後で器高3.5cm前後のD III類(1329・1331・1332・1333)、口径13～15cm、器高5cm前後と大振りのD IV類(878)である。

E類：D類に高さ1.5cmほどの高い高台が付くものである。点数が少ないのでここでは一括するが上

の細分タイプに対応するものと考えられる。(576・1335・1336)

F類: 口径10cm前後で器高指数20前後の浅い杯で口縁部が強く外反する。すべてヘラ切りである。(736・737・778・780)

G類: 形態的には上のD I・D II類に類似するが糸切りである。(111・354・527・578・596・601)

H類: 底部から比較的直線的に立ち上がり、口径12cm前後、器高指数25～30前後のものが多い。

すべて糸切り。(223・354・418・434・601・607・895・1198・1510)

I類: 口径15cm前後の大振りのものが多く内外面にロクロ目が顯著で、口縁部は外反し、底部は糸切りである。土器器杯の中で最も出土例が多い。(469・605・610・807・811・812・813・1043・1214など)

J類: 胎土中に砂粒をほんと含まない。水築粘土をつかっている。I類より小振りである。ロクロ成形であるが内外面にロクロ目を残さない。(1044・1363)

K類: 口径7～8cm、器高2cm以下の小杯である。ヘラ切りのK I類(779)と糸切りのK II類(110・281・568・571・782・858・1135など多数)がある。

L類: 手捏ね成形の杯。(416・417・419)

杯高台

A類: 円盤状高台、B類: 輪高台、C類: 中空高台に大別され、さらに細分される。

A I類: 高台高が1cm前後のもの。(99・118・241・793・1047)

A II類: 高台高が2cm前後のもの。(485)

B I a類: ハ字状にしっかりと踏ん張るタイプ。(1150)

B I b類: ハ字状を呈するがI a類より小振りである。(1148)

B I c類: ハ字状を呈し更に細くなったタイプ。(547・756)

B II a類: 垂直に立ち上がる高台で、端部が丸みを持つ。(759・1049・1151・1266)

B II b類: 垂直に立ち上がる高台で、端部が強いヨコナデによって肥厚する。(759・1048・1377)

C類: 円柱状の中空高台を持つもの。(876)

皿

A類: 口径12cm以上を測り口縁部に向かって斜めに立ち上がる。口縁形態によって細分される。

A I類: 口縁端部を摘まみ上げる。(553・752・973・994・1138・1139・1140・1496)

A II類: 口縁部に向かって直線的に立ち上がる。(972・1034・1035・1037・1257・1358など)

A III類: 口縁部に向かって外反する。(971・974・1136・1261・1263・1285・1498・1499・1500～1504など)

A IV類: 口縁部が強く外反する。(532・1036・1137・1357・1497)

B類: 内湾気味に立ち上がり口縁部が外反する。(934)

C類: 杯D類と作りが共通する。口径10cm前後、器高1.5cm程の小振りの皿である。(525・526・579・890・1322・1323・1494・1495)

D類: C類と同様な形態を有し糸切りによるもの。(575・776・781)

E類: 手捏ね成形によるもの。(244・245・777)

碗

碗は全体の形態を捉えることのできる資料が僅少であるため、主に高台の形態で分類する。大きく円盤状高台(A類)と輪高台(B類)に別けることができる。

- A I類: ヘラ切りを採用するもの。(1334)
- A II類: 糸切りを採用するもの。(224・530・599・602・609・613・794・795・808・809・1372・1374など)
- B I a類: 断面三角形状をなし、高台径7cm前後。(559・612・798・805・1369)
- B I b類: 断面三角形状をなし、高台径9～10cmと大振り。(1052・1260)
- B II類: 断面長方形のしっかりした高台が外方に踏ん張る。底部外面はヘラ切り後に丁寧なナデ調整が施される。(1339)
- B III類: 長さ1cmほどのやや高めの高台で、端部は強いヨコナデ調整により肥厚、高台径は6～7cm。(614・618・619・799・801・1511)
- B IV類: 長さ1cmほどのやや高めの高台で端部を丸くおさめる。(739)
- B V類: 高台の高さは5～6mmと低い。高台径5～6cm。底部外面は糸切りが多い。(611・615・621・797・804)
- B VI類: 高台径3.8cmと小振りで、体部は手捏ね成形。(231)

杯A・B類は古相の様相を呈する。A類の1130は古代の溝SD13から須恵器杯A・B類と共に出土する。B類の881もSD35で須恵器と共に出土している。他のA・B類は包含層出土例が多いがほとんど下層からの出土である。A類は池澤の編年のI～6～7期に、B類はII-1期に併行関係を求めていい。C類はSD15(975～979)からまとまって出土している。C類は成形手法や法量から小龍遺跡⁶⁾のSK130・136出土の杯類に類似しておりII-2期に併行関係が求められよう。小龍遺跡の場合は器高の低いものと高いものが相半ばしていたが、ここではC II類とした後者は1例見られるのみである。このような現象は旧稿⁷⁾でも指摘したように西分増井遺跡⁸⁾や西鴨地遺跡⁹⁾でも見られる。西部地域の特徴であるかもしれない。

D I・II・III類、E類は、土師器皿C類(525)とともにS区の土器集中地点1やNE区の土器集中7から共伴出土している。これらのタイプは、ひびのきサウジ遺跡SE1や土佐国衙SX11から出土しており10-11)、III-1期の指標となるものである。またD IV類は形態的には後述のI類と似ているが成形技法が全く異なる。出土例は僅少であるがSK90で白磁碗V類(879)、土師器碗(877)、同杯高台C類(876)などと共に出土していることからIII-1期に近似する時期であろう。E類はいわゆる「足高高台」杯と呼ばれるものである。F類は、遺構での共伴関係はないが法量や成形技法から同時期に位置付けることができよう。G類は底部糸切りである。S区の土器集中1で、先に挙げた土器群と共に出土している。東部のひびのきサウジ遺跡SE1では在地の小型の杯・皿において糸切りが出現し始めるが、G類も同様の現象として捉えることができよう。

H類はSD3やP123で瓦器碗や貿易陶磁器と共に出土している。III-3期からIV期にかけて盛行する杯である。I類もほぼ同時期の所産と考えられるが良好な共伴例がない。812・1043・1214など口径15cm前後の大振りタイプは曾我遺跡SK5などIII-3期に比定できると考えられるが量的には少ない。12) J類は田村遺跡Loc.42のSD7やSK96から大量に出土している一群に一致するタイプで15世紀代とすることができる。13) K類は、ヘラ切りのK I類の出現を杯小型化のなかで捉えるならばIII-1期に求めなければならないであろう。糸切りのK II類は以後大量に見られるタイプで中世を通して見られる。L類とした手捏ね土器は、田村遺跡では大量に出土しているが、それ以外の遺跡では僅少な存在である。今次調査では3点が図示し得たのみである。417はP123で、尾上編年IV期14)の和泉

型瓦器椀が伴っている。L類の比較的まとまった資料としては仁淀川流域では千本杉遺跡P2016から同様の瓦器椀底部やK II類を伴っている。また十万遺跡SK11からも杯H類などと共に出土している。(5-16)

杯高台

A類はSD6から241が出土している以外は共伴関係がつかめない。III-2期に初現が求められるタイプである。仁淀川流域では13世紀前半とされている林口遺跡IIのSD112やSD201から大量の土師器杯H・I類や瓦器椀などと共に出土している。A II類は僅少な存在で管見の限りでは類例を田村遺跡Loc.14のP34に見るのみである。

B I a類は、古相である。作り形態から律令的土器様式の中に位置付けられる。SD14の出土であるが明らかに混入である。B II類(1266)はSK82で土師器皿A III類(1263)と共に出土しており、II-1・2期に属する。

皿

A I類は土師器皿の中では最も古相のタイプで、I期の範疇にある。SD15でA II・III類と一緒に出土しているが、これは混入としなければならない。このA II・III・IV類は、I期皿の矮小化・小型化の中で捉えられるべきものでありII-1・2期の中で捉えることができよう。B類は出土状況からI期に属する。C類はS区・NE区の土器集中出土例が多いことからIII-1期の所産とすることができる。糸切りのD類は先に見た杯G類と同様の背景からIII-1期として捉えることができよう。手捏ね皿E類の777はIII-3期の指標となっている曾我遺跡SK5出土例と類似している。

椀

底部が確認できるものは41点出土しており A類:B類=15点(36.6%):26点(63.4%)でB類が多くを占めている。A I類ではヘラ切りは1点(1334)、他はすべて糸切りである。後者は前者に比べて高台径が小さくなる傾向が見られる。B類は底部切り離し後、ナデ調整が施されるために切り離し痕跡を確認することが難しいが、5点において糸切り痕跡が見られた。これらは何れもB III・V類に属する。

A I類の1334とA II類の530は、土器集中からの出土で、おおよそIII-1期に比定することができよう。B類については共伴関係を掴むことができないが、類似例をひびのきサウジ遺跡のSE1に求めることができよう。高台径の小さなB V類については後出するものと考えられる。

B VI類は、吉備系椀である。徳島県では中島田遺跡17などから多量に出土しているが本県では初めての出土である。口径から橋本編年のIV-1期18)に該当させることができよう。

② 須恵器

杯

A類:口縁部が直線的に外方に立ち上がる。(1010・1012・1018・1019・1021・1293・1401など)

B類:高台を持つ杯である。体部全体を把握できるのは1296のみである。

皿

A I類:口縁端部を擒み上げる。土師器皿A I類に類似した形態。

(627・880・932・954・957・999・1000・1003・1107・1384・1385・1514など多数)

A II類:口縁部が直線的に外方に延びる。土師器皿A II類に類似した形態。(891・1383・1387)

A III類:口縁部に向って外反する。土師器皿A III類に類似した形態。

(938・1378・1379・1382・1389・1513)

蓋

全体の器形を把握できる例がほとんど見られないが、総じて丁寧な作りが多い。

A類:宝珠形の摘みをもつ。天井部内外面のナデ調整が丁寧になされる。(1157・1159)

B類:扁平なボン状の摘みをもつ。全体にA類に比べてナデ調整がやや粗雑。(748・946・990・1023・1024・1134・1156)

C類:両者の中間的な形態の摘みをもつ。(760)

椀

全体の形状を把握できる例がないので高台形態で分類する。

A類:円盤状高台を有し系切り。(283・500・623・743・800・859)

B類:輪高台を有する。(1521)

杯A類はSK50・83・88、SD13から良好な状態で出土している。これらの遺構からは、供膳形態は須恵器のみか、須恵器が9割以上を占める。A類はその形態的な特徴からI-6～7期に時期比定できる。B類はバリエーションが多く見られる。体部形態を明らかにできないものが多いが、SK88出土の1292・1296やその類似相はI-6～7期に該当させることができよう。しかし包含層出土の1410・1520などは明らかに先行するタイプである。

皿A I類は、SK50・88で杯A類と共に伴っている。A II・III類は僅少であるが、単純にA I類の退化形態と理解すればII-1期に属する可能性がある。SK50出土の皿はすべてA I類の端部摘み出しで占められているが、すでに指摘されているように、東部では当該期この手法は残らない。西部の特徴である。

蓋は、A類は共伴例がないが、B類はSK50やSD30で杯A類と共に伴している。他の遺跡に比べて蓋の出土が多い。

椀も良好な共伴例を欠くが、A・B類とともに製作手法・形態からひびのきサウジ遺跡SE1出土のものに一致する。500・1521などはその典型で、626・630のような体部を有する。

③ 黒色土器

黒色土器A類

A類:口径が大きく、器高は5.5cmほどで杯指向のタイプ、全体にシャープでヘラミガキも丁寧である。断面三角形のしっかりした高台を持つものもある。(292・1055・1058・1420・1533)

B類:A類に比べてヘラミガキが粗雑となり小さな高台をもつものが見られる。

(123・531・1054・1343・1418)

C類:A・B類に比べて小振りで椀形態をなす。内面に沈線が巡るものもある。外面の調整は粗雑で器面に凹凸が見られる。(534・632・635・745)

D類:回転台成形で内面の炭素の吸着があまり良くない。在地生産である。(535・1337・1535)

高知平野における黒色土器の出現は、野田遺跡出土の畿内からの搬入品に求めることができる。A類は、それに継ぐタイプである。平安京II期中段階に属するもので、9世紀末に位置付けられる。すべて畿内からの搬入品である。B類は、小型化した高台に特徴があり小龍遺跡SK130・136や馬場末遺跡IIA北区SD1、光岡・岡ノ下遺跡、西鶴地遺跡などに類例を求めることができる。¹⁹⁻²⁰⁾平安京II期新段階に属し10世紀前半に位置付けができる。B類もすべて搬入品と考えられるがA類とは異なる胎土も見られる。

C類は深椀指向タイプでありA・B類とは異なる。西鶴地遺跡でI a②・I b①類としたものに一致するものと考えられる。534と632には外面に化粧土が施されている。D類は明らかに在地生産品である。西鶴地遺跡でI b③類としたものや林口遺跡で田中が椀B-4類としたものに該当させることができる。²¹⁾東部ではひびのきサウジ遺跡SE1出土例を挙げることができよう。

これらの共伴関係を求めれば、S区の土器集中1からB類(531)、C類(534)、D類(535)が、NE区の土器集中からB類(1343)、D類(1337)が出土しており、SK26からB類(123)が揖津型羽釜と出土している。

黒色土器B類

11点を図示し得たが、全体の形状を把握できるものは1421のみである。口縁部内面には沈線が施されている。すべて畿内からの搬入品である。細片が多く詳細な時間的な位置付けをするのは難しいが、大きく古相と新相に別けることができる。

古相:全体に丁寧な作りで、しっかりした高台を持つ。1421をもって代表させることができる。

(531・538・1341・1421など)

新相:内底に十字のミガキを持ち、外底のミガキを省略する。(291など)

古相はS区とNE区の土器集中から531・538・1341・1421が出土しており、新相はSD7から291が出土している。古相は平安京III新段階に属し、10世紀末～11世紀初頭に位置付けることができる。高知平野における黒色土器B類の出土例は、西鶴地遺跡で1例、栄工田遺跡で1例、深淵北遺跡で3例が知られているに過ぎない。一遺跡の出土量としては本遺跡が最多く、遺跡の性格と深く関わっているものと考えられ興味深い。

④ 緑釉陶器

図示し得なかったものも含めて13点出土している。中世の溝の混入遺物(226)を除くとすべて包含層出土であるが、型式的には大きく古相と新相に別けられ前者は2つに細分される。

古相1:ほとんどが洛北産、平安京II期中段階に属し、9世紀後半に位置付けられる。(1050・1051・1057・1529)

古相2:洛西産で平安京II期中～新段階に属し10世紀前半に位置付けられる。(1518・1528・1530)

新相:近江産で平安京III期中段階に属し、10世紀後半に位置付けられる。(226・1419・1423)

⑤ 灰釉陶器

5例を図示した。981と1056は平安京II期中段階に、1202・1212・1422は同II新段階に属する。981はSD15で土師器杯C類と共伴している。本県での灰釉陶器の初現は深淵遺跡の黒笠90号窯タイプであるが今回の例は、それに後続する折尾53号窯に属するものと考えられる。

⑥ 瓦器椀

大量に出土しているが、口径を正確に復元できる資料は20例ほどである。これらの口径を見れば、最大でも14.4cm、最も多いのは12~13cm代で全体の9割近くを占める。見込みの暗文の施し方や口縁部形態などからほとんどが和泉型に属し、尾上編年のⅣ期に属する。仁淀川流域は東部に比べて瓦器椀の出土が多く、尾上編年のⅢ期から一般化することが知られているが、今次調査においてはⅢ期の資料を見出すことはできなかった。SD1・6・7・30・31などから多く出土している。なお、本文中でも触れたがS区出土の425と894は、和泉型とは異なる。

⑦ 貿易陶磁器

太宰府編年や森田編年、上田編年によって見て行きたい。22~24)

青磁

碗は、分類可能なものは図示したもの図示し得なかったもの含めて74点である。龍泉窯系がほとんどで同安窯系は3点である。このうち鍋運弁を持つI 5b類が53点(256・294・503・685など)と7割以上を占めている。他は、I 2類(117・1105・1060)、I 3類(1235)、I 4類(688・899・1205・1236)、I 6類(249・682・687)などが見られ全体的に古相を示している。時期の下る上田分類D類は4点(1169・1241)、線描運弁文は1点(1461)である。

皿は同安窯系のI -2類が5点(863・893・905・1171・1204)、同じくI -1a類が1点(364)、I -1b類が3点(910・1127・1170)、輪花皿(828)も見られる。時期の下る龍泉窯系稜花皿は1点(1242)を認めるのみであり、碗との整合性が見られる。この他に盤(692)、大振りの皿(693)が見られる。前者は稜花皿などと共に伴することが知られている。

白磁

碗は玉口縁のIV類(311)が4点、V類(879)が1点、VI類(906)が1点出土している。皿は、口禿口縁のIX類(206・504・829・831・1230など)が11点と最も多く、次いでIV類(694・1201)やVII類と考えられる底部(505・830)が見られる。後出のタイプとしては、端反の小皿であるE2類(522)、アーチ状高台や多角形皿のD類(502・833・864・903・1168・1228・1460)が見られる。これらの他、菊花で飾った景德鎮窯系の青白磁合子蓋が2点(901・902)出土している。902は、光永・岡ノ下遺跡出土品に類例を求めることができる。

貿易陶磁器は大きく4時期に区分して変遷を捉えることができる。1期：白磁碗IV-V類。2期：白磁碗VII類、同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗I -2~4・6類。3期：龍泉窯系青磁碗I 5b類、白磁皿IX類、4期：龍泉窯系青磁碗D類、青稜花皿、白磁皿D類やE2類。1・2期は僅少であり、3期になって飛躍的に増加し盛行期を迎えている。これまでの研究から1期は11世紀後半~12世紀前半、2期は12世紀後半~13世紀前半、3期は13世紀後半~14世紀前半、4期は14世紀後半~16世紀に時期比定することができよう。量的には僅ながら2期の青磁碗I 3・6類や白磁VII類は、これまでほとんど知られていなかったものであり貿易陶磁器の流入を知る上で、あるいは上ノ村遺跡の位置付けを知る上で重要な資料となろう。

3期に盛行期を迎えた後、4期に入ると量的に急減している。白磁小皿などは一定量見られるが、3期とは比べるべくもない。特にこの時期の中心となる青磁細運弁文碗や雷文帶碗がほとんど見られない。この様な現象が遺跡の動向とどのように関わるのか興味深い問題である。ただこの様な特

徵は、高岡地域に展開する諸遺跡の状況に一致する。

⑨ 他

美濃の山茶碗(689)、瀬戸の直縁皿(1232)、古瀬戸天目茶碗(1053)、志野小皿(310)などが出土している。山茶碗は本県では初めての出土である。本例は美濃須衛型に属し12世紀後半に位置付けられるものと考えられる。²⁵⁾

(2) 煮炊形態

① 土師器

壺

A類:口縁部がく字状に屈曲し、胴部がほとんど張らない。口縁部外面ヨコ方向、胴部外面タテ方向のハケ調整が施される。端部が拡張されるものやそのまま終わるものなどバリエーションが見られる。総じて石英粒を多く含み、チョコレート色に発色する。(555・566・963・988・1271・1301・1302・1303など多数)

B類:口縁部がく字状に強く屈曲し上胴部が僅かに膨らむ。チャートの小窪が多く含む。(887)

C類:A・B類に比して小振りである。口縁部がく字状に屈曲胴部中位に最大径を持つ。(962・1066)

D類:A・B類に比して小振りである。口縁部外面が肥厚し端部を上に拡張する。胴部中位に平行叩きを施す。(565・1063・1065・1070・1072・1270・1304・1428・1556)

E類:河内型と呼ばれている薄手壺である。すべて搬入品である。(1175・1268・1426)

F類:口縁部端部が丸味を帯びて肥厚する。紀伊型と呼ばれているタイプである。ほとんどが搬入品である。(391・450・453・514・515・768・1176・1180・1244・1550)

G類:上胴部で内側に屈曲するタイプである。(238)

壺で最も注目すべきはF類とした紀伊型の存在である。SD32やP119・471などから尾上編年IV期の瓦器や東播系壺、常滑V期などと共に13世紀後半に置くことができよう。南四国ではこれまで田村遺跡や坂本遺跡²⁶⁾などから僅かに出土しているだけで、今次調査での10例は当地と紀伊との地域間交流を窺わせるものとして興味深い。

A類は8世紀代から10世紀前半代に広く見られる壺であり、時期が新しくなると端部を拡張する傾向が知られている。B類は、SK90から白磁碗V類や土師器杯C類と共に共伴している。これまであまり例を見ないタイプであるが、松田直則が12世紀代の土師器鍋としている国衙出土の例に類似している。²⁷⁾

C類も少数であるがSK50でA類と共に共伴している。D類は1072に典型例を求めることができる。共伴関係を明らかにできる出土例がないが、ひびのきサウジ遺跡SE1出土の壺に類例を求めることが可能である。10世紀末から11世紀初に位置付けることができる。E類は、9世紀末以降10世紀代の遺跡から点数は少ないが散見される搬入品で、特徴的な胎土・色調から細片でも識別できる。流域の遺跡では西鶴地遺跡や馬場末遺跡などから出土している。

羽釜

A類:揖津C2型²⁸⁾と呼ばれているタイプである。胎土は壺A類に近い。(124・299・511・542・543・714・718・769・855・1334～1346・1560など多数)

B類:内湾して立ち上がる口縁部に幅1.5cm前後の広い锷が巡る。端部がすべて面取り、全体的にナ

テ調整で仕上げる。441に典型を求めることができる。(211・265・375・441・510)

C類: B類に似ているが、口縁部端部が外方に肥厚する点や胴部外面にヨコ方向の割りが施されるところから分離した。(333)

D類: 口縁部が直立し、幅1cm前後の鈎が巡る。(212・236・707)

E類: いわゆる東播系羽釜である。叩きの単位や鈎の大きさ、端部の処理などバリエーションが見られる。(327・512・884・1110・1182・1184・1476・1478・1551など多数)

A類とした摂津C2型は10～11世紀に広く見られる羽釜で、今回最も出土量が多い。S区、NE区の土器集中地点から複数例が出土している。B類は、SD1・6・31などの溝からI 5b類青磁碗やIV期瓦器碗などと出土している。これまであまり知られていないタイプであり、すべて搬入品の可能性がある。13世紀後半頃に位置付けることができよう。C類も高知平野では初めてのタイプである。SD30から後述の瓦質羽釜C類と共伴している。胴部外面の割りは瓦質羽釜C類に共通する。D類もあまり知られていないタイプであり口縁部のみの資料であるが、B類と同様の出土状況を示している。13世紀後半に属するものと考えられる。E類は中世後期に普遍的に見られるタイプである。今次調査でもB・D類とは共伴していない。僅かに1点(327)がC類や瓦質羽釜C類と出土しているのみである。E類は、鈎の形態や端部の処理などによって細分することが可能と思われる。叩きの単位も細かなもの、長めのもの、間隔を置いて施すもの(1476)など3種類程に別けることができる。

鍋

口縁部が拡張されたタイプが1点見られる。(721)

堀

東播系のものが1点見られる(298)。高知平野では初めての出土である。羽釜E類と同様の胎土であり東播からの搬入品である。

② 瓦質土器

羽釜

A I類: 口縁部下に断面方形あるいは台形状のしっかりした鈎が巡る。端面は面取るものが多い。

(297・712・713・716・719・848・866)

A II類: 口縁部下に断面三角形の鈎が巡る。端部は面取るものが多い。

(208～210・216・267～270・392・393・427・541・849・854)

A III類: 口縁部下に断面カマボコ状の鈎が巡る。端部は面取るものが多い。

(374・376・377・705・1554・1555)

B類: 口縁部が内湾気味に長く立ち上がり鈎の幅も広い。(914)

C類: 和泉・河内型(29)と呼ばれているものである。(325・326・328～332など多数)

何れも鉄釜の模倣形態である。A I類は共伴関係が認めないが、A II類はSD6・32で土師器堀F類(紀伊型堀)や東播系堀、青磁碗I 5b類などと、A III類はSD31で土師器堀B類やIV期の瓦器碗と共に伴している。A II・III類は13世紀後半に求めることができよう。A I類は形態的にそれに先行することが考えられる。瓦質の脚が数多く出土しているが、これらのタイプに付くものである。

C類はSD30からまとまって出土している。AⅡ・Ⅲ類の後継型式として捉えることができる。高知平野においては、芳原城など15世紀代に盛行期を迎える遺跡から多く出土しており、土師器羽釜E類とした東播系羽釜と共に伴することが知られている。

鍋

土佐型30)と分類されているもので、口縁部の形態から3つに分類した。

A類：口縁部がく字に外反する。(264・1178)

B類：口縁部が丸味を帯びて外反する。(710)

C類：口縁部が直立気味に立ち上がる。(915・1112・1177・1179・1466・1474)

(3) 調理形態

① 捏鉢

東播系捏鉢

SD1・6・31から多く出土している。これらは口縁部が上方に拡張するタイプで、概ねⅢ期(13世紀代)に位置付けることができよう。包含層出土例の中には703や1545のように口縁部の拡張が見られない古相の例も見られる。

常滑

SD31出土の361と包含層出土の697の2例である。

② 捏鉢

備前

Ⅲ期とⅣ期が見られる。Ⅲ期はSD34出土の885、Ⅳ期に属するものはSD30から集中出土している(315～320)。基本的に東播系捏鉢とは共伴せず、見事に転換している。

他

土師器(274)と瓦質(266・1218)が見られる。

(4) 貯蔵形態

① 常滑甕

胴部片が多く口縁部はSD32の394のみである。本例はL字口縁部を有することから5型式、13世紀代に時期比定することができる。胴部片はSD6・30・32・34から多く出土している。SD30出土例は褐色に発色しているが、他はすべて灰色に発色し自然釉を帯びている。

② 備前甕

底部がSD20から1例(1480)が見られるのみである。

③ 産地不明の甕

瓦質の甕と陶器甕が見られる。前者はSD6・20・30・32から出土している。SD20の1479が口縁部端部を上下に拡張するのに対して、他は丸く収めている。後者はSD1の219で玉縁状の口縁部形態を有する。

2 上ノ村遺跡変遷

以上のような土器の検討をもとに上ノ村遺跡の変遷を見て行きたい。ここでは、遺構が確認された古代と中世に別けてその変遷や広がりについて述べる。

(1) 古代

① 1期

まとまった土器が出土したSK50やSK83・88、出土遺物は少ないが方形掘り方をもった建物SB5～8が該当する。すでに触れたように、これらの時期は池澤編年のI-6～7期に該当させることができる。おおよそ9世紀前半に時期比定することができよう。これの遺構はNW・NE区に存在しておりS区には見られない。これらの遺構の性格を明らかにすることは難しいが、当該期の遺跡に特徴的な製塙土器片が多く伴うなどの共通点を見出すことができる。流域で類例を求めれば西分増井遺跡SK5などを挙げることができる。上流域の光永・岡ノ下遺跡からは先行する遺構が検出されており、暗文を駆使した畿内からの搬入土器も見られる。近接する野田遺跡では8世紀末～9世紀前半に野田庵寺の建立が想定されるなど古代の盛行期を迎えることが知られている。仁淀川右岸における古代の中心的な遺跡は、上流の高岡地域に求めなければならないが、当遺跡はそれらの周辺部に位置する遺跡として位置付けられる。これらの一連の動きは、『続日本後紀』承和八年に見える高岡郡の成立と無関係ではあるまい。

当該期は律令制土器様式の最終段階であるが、土器の特徴として杯・皿とともに土師器がほとんど見られず90%以上を須恵器が占めている。このような須恵器偏在の傾向は他の遺跡では認められない現象である。

② 2期

明確な遺構はSD15が挙げられるのみである。土師器杯C1類と土師器杯A I～IIIで構成されている。すでに触れているように池澤編年のII-2期に併行関係を求めることができる。SD15からは平安京II期中段階に平行する灰釉碗(981)が出土しているが、II-2期の標準資料である小龍遺跡の

表3 中世掘立柱建物一覧

掘立柱建物	地点	方向	梁間(m) × 檻行(m)	面積(m ²)
SB1	S1区	南北棟	2間(3.25) × 3間(6.0)	19.5
SB2	タ	東西棟	1間(1.8) × 3間(4.8)	8.6
SB3	タ	タ	2間(3.3) × 4間(10.4)	34.3
SB4	タ	南北棟	1間(3.0) × 2間(4.3)	13.0
SB9	NW区	東西棟	3間(4.2) × 3間(4.95)	不明
SB10	タ	タ	1間(4.0) × 2間(5.1)	20.4
SB11	タ	タ	1間(2.5) × 3間(5.1)	12.7
SB12	タ	タ	3間(4.2) × 4間(4.95)	20.8
SB13	タ	タ	1間(1.8) × 3間(5.1)	9.18
SB14	NE区	南北棟	2間(4.0) × 3間(6.8)	27.2
SB15	タ	タ	2間(4.2) × 3間(5.0)	21.0
SB16	タ	タ	2間(5.2) × 4間(7.6)	39.5

SK130 からも類似の灰釉椀や平安京Ⅱ期新段階に属する黒色土器A類が出土している。Ⅱ-2期の年代は10世紀前半に求めることができるが、平安京Ⅱ期中・新段階の遺物が伴うものとしなければならない。従って、縁釉陶器では古相1・2とした洛北(1050・1051・1057・1529)、洛西(1518・1528・1530)が伴うものと考えられる。

③ 3期

明確な遺構は確認できなかったが、S区の土器集中1とNE区の土器集中7が該当する。土師器杯はD～G類が見られバリエーションが豊富である。更に新たな形態として土師器・須恵器に椀、黒色土器B類椀が加わる。煮炊具も浜津C2型が登場する。この時期は、土器製作手法にも変化が見られ底部糸切りが出現し、ヘラ切りと共に存しながら次第に糸切りに移行していく。これら一群の土器は、池澤編年のⅢ-1期に該当させることができる。黒色土器B類椀の古相とした一群(531・538・1341・1421)は平安京Ⅲ期新段階に該当させることができる。近江産の縁釉(226・1419・1423)もこの時期に該当する。3期は、10世紀末から11世紀初めに時期比定することができる。

古代の遺構は山麓に近いNW・NE区に存在しており、3期において土器集中がS区に見られるのみである。包含層出土の遺物もこれに対応している。上ノ村遺跡の古代は、山麓部の限られた範囲に営まれた比較的小規模な遺構群として捉えられる。しかしながら、黒色土器B類の出土量には注目すべきである。すでに述べたように南四国は最も多い出土量を示している。この種の土器について森隆は「特定階層向けの特殊な生産のされ方をしていた可能性が高い」³¹⁾との指摘をしている。おそらく縁釉陶器など共にもたらされた遺跡で消費されたことは、当遺跡が仁淀川右岸の遺跡にあって祭祀など重要な役割を担っていたことが考えられる。県道を隔てて西隣にある北ノ丸遺跡からは、古墳時代後期の琴、衣笠の鏡板、儀杖など祭祀の存在を窺わせる本製品が出土している。³²⁾当地が伝統的に祭祀に関わる空間であった可能性もある。

(2) 中世

古代に比べて遺構が調査区全体に広がっており集落規模の拡大が窺われる。検出遺構は掘立柱建物12棟、土坑50基、溝22条、井戸1基、ピット400個余りを検出した。しかし遺構からの遺物の出土状況は良好とは言い難く時期比定は困難なものが多いが、まず時期比定可能な遺物が出土している遺構について検討し、その後、変遷について触れてみたい。

① 掘立柱建物

S1区から4棟、NW区から5棟、NE区から3棟が検出されている。これらのうちS1区の4棟は、軸方向は東西と南北を示しているが、柱穴間距離などにまとまりが見られず、図示したような復元を想定することが可能なのかどうか疑問が残る。NW区では5棟すべてが重複している。棟方向を共通する4棟のうち3棟(SB9・10・12)は、平面積が20m²余と共通しており、長期にわたって建物空間として利用されたことを示している。集落の中で一定中心的な位置を占めていた可能性がある。後述する井戸(SE1)が隣接していることからもそのことが窺われる。

建物の時期比定は難しいが、S区のSB1・3は尾上編年のⅣ期の瓦器椀が柱穴から出土していることから13世紀後半～14世紀前半頃、NW区のSB9・12は龍泉窯系青磁碗 I 5a類から13世紀代に成立しそれ以降建て替えが行われ一定期間継続していたことが考えられる。NE区のSB15からは細運弁青磁や白磁小皿から15世紀代に求めることができる。

② 溝

出土遺物が最も多かったのは溝である。中でもS区のSD1・6・30～32は遺物が多く安定している。これらのうちSD1・6・31・32は東西南北の軸線上に載っており、規模や断面形も共通している。位置関係から見ても区画溝として捉えられる性格を有している。すなわち北側をSD1、西側と南側をSD6に三方を囲まれた方形の空間、その南隣にも西側をSD31、南側をSD32に囲まれた方形の空間が見られる。北の区画をSH1、南の区画をSH2とする。両者の規模は共に10m×10mで約100m²を測る。SH1の北隣にはさらに区画が作られていた可能性もある。これらの区画溝は屋敷を区画する溝と考えるのが一般的である。このことについては、後述する。SD1・6・31・32出土の貿易陶磁器は、先に3期に対応するものが多く占めており、13世紀後半に求めることができよう。

SD30は位置的にはSH1・2の東側の区画溝的存在であるが、溝の断面形や規模、遺物の出土状況が大きく異なっている。SH1・2の区画溝の断面形が逆台形上で深さも50～60cmを測るのに対して、SD30の断面形は皿形で深さは15cm前後である。すでに述べたようにSD30からは拳大から人頭大の焼けた角礫が石列状に検出されている。出土土器も備前のIV期擂鉢や瓦質羽釜が多く見られる。埋没期を15世紀代としなければならない。なお16世紀代と考えられる志野焼の小皿が1点(310)含まれているが、これについては混入と考えられる。

NW区のSD17は、断面形がS区の区画溝と類似しており、遺物も古代土器を除けば区画溝とほぼ同時期と考えられる。先に見た掘立柱建物群との関係で理解すべきであろう。NE区のSD20は遺物が少ないが東播系土器群などから15世紀代と考えられる。SB15との時間的併行関係を求めることができよう。

③ 方形区画SH1・2について

中世集落あるいは中世社会を象徴するものに溝で区画された屋敷や屋敷群を挙げができる。高知平野においては、東部の物部川右岸の田村遺跡が最も著名な存在である。田村遺跡からは中世から一部近世にかかる方形区画を有する屋敷地が31基確認されている。これらの方形区画は、守護代細川氏の田村城館を中心に展開する家臣団の屋敷群として捉えられている。報告書によれば14世紀から15世紀初頭に登場し始め、15～16世紀に盛行期を迎えている。敷地面積は最も小さいものでは312m²、大きなものでは1,920m²を測り、1,000m²以上のものは17例を数える。建物の規模、棟数、井戸を持つ屋敷は1,000m²以上の規模を有する例が多いなど内部構造にも差異が見られ、階層性も窺われる。

上流域の高岡は、中世における高知平野西部の中心舞台であったが、その中核となった蓮池城に近い林口遺跡では、12世紀後半から13世紀に至り、建物跡など内部の構造は不明としながらも一辺59m以上を測る大規模な溝に区画された屋敷地が数区画存在しているとの指摘がある。同様の遺構は、林口遺跡東方の野田遺跡や京間遺跡においても確認されている。方形区画の出現は東部よりも西部地域が早かった可能性がある。

SH1・2は、周囲面積が100m²と田村遺跡や林口遺跡例に比べれば余りにも小規模である。NW区で検出されている20m²規模の建物であれば区画内に十分に収まるが、後述するような当遺跡の性格と関連するのかもしれない。すでに見たようにSH1・2を構成する溝は13世紀後半に埋没していることから成立年代は、高岡の諸例とほぼ同時期とすることが可能であろう。

④ 中世上ノ村遺跡の変遷

前期

S区では、方形区画SH1・2、掘立柱建物SB1・3、溝SD1・6・31・32を、NW区では掘立柱建物SB9・12、溝SD17、井戸SE1を挙げることができる。微妙な差はあるが遺物から見ればNW区の掘立柱建物がSH1・2に先行する可能性がある。古代遺跡の中心地点に重なるように中世建物が建ち始め、やがて南にSH1・2が登場するなど集落空間が拡大していることを示している。遺物は古代から断続することなく続いているが、明確な遺構は、13世紀から14世紀に求めることができよう。掘立柱建物と井戸と区画溝という中世集落景観のセットがこの時期に揃っている。

上ノ村遺跡の変遷を考える時、新居城の成立年代が大きな問題となる。城主など詳細は不明であり、「詰め」をはじめ多くの遺構は破壊されており、明瞭な遺構としては東側にも設けられた堀り切りが残るだけである。2007年に実施した南斜面の試掘調査において東播系捏鉢形の口縁部が1点出土していることから、前期に遡る可能性も考えられる。

後期

S区のSD30が該当する。NW区では明確な遺構を把握することはできないがSB9・12に後続する掘立柱建物としてSB10・11の存在を想定することは可能であろう。NE区はSB15とSD20を挙げができる。時期的には15世紀を中心に一部16世紀に求められるが、集落規模は前期に比べて縮小していると考えられる。

遺物も前期と後期とでは大きく変化している。供膳形態では後期になると瓦器椀がほとんど見られなくなり、煮炊具では前期の土師器羽釜B類や瓦質羽釜A I・II・III類から後期の土師器羽釜E類(東播系羽釜)と瓦質羽釜C類(和泉・河内型)に、前期の東播系捏鉢から後期の備前擂鉢へ、貯蔵具も常滑から備前へと見事に転換を遂げているが、全体的には後期にいたって交易活動は衰退傾向にある。それを端的に示すのが貿易陶器、特に青磁類の減少に現れている。上ノ村遺跡は後期にいたって交易活動に衰退が見られる。しかし大平氏の活躍が伝えられるのはこの時代である。

(3) 近世

近世の明確な遺構は、S区のSK80がある。18世紀を中心とする多量の陶磁器が出土している。建物跡などを確認することはできなかったが近世、新居庄を構成する集落の存在を示している。天正十七年(1589年)に新居庄で実施した検地を記載した『長宗我部地検帳』³³⁾には新居城山麓の中世遺構付近は「土居ヤシキ」の記載(現在の小字図では「土器屋敷」となっている)があり、新居城東斜面下の仁淀川岸には「十文字の渡し」³⁴⁾が近世には成立している。

3 まとめ

(1) 「川津」としての上ノ村遺跡と「海上の道」

冒頭に述べたように、上ノ村遺跡の存在はこれまで全く知られていないかった。仁淀川河口近くにあってこのような遺跡が存在しているとは誰も想像できなかつたことであろう。今次調査によつて仁淀川右岸に豊かな歴史のあることが明らかとなつたのである。

出土遺物から見れば縄文時代晩期に遡るが、遺構が確認できるのは9世紀からである。承知八年(841年)の高岡郡の成立との関連があるかもしれない。周辺の地形から見て古代の上ノ村遺跡は、仁淀川の氾濫原や後背湿地が広がつており、安定した地形環境にあるのは城山南麓の狹隘な平場のみ

であったと考えられる。ここに4棟の小規模な建物が立てられている。遺物分布を見ると11世紀には南に向かって広がっており活動空間の拡大が見られる。古代における遺跡の性格を明らかにすることは難しいが、畿内からの搬入品が多く見られることや隣接する北ノ丸遺跡の存在などから祭祀的な性格、立地から河川交通と結びつきを持った祭祀空間であったことが考えられる。同様な性格を帯びた遺跡として四万十市の風指遺跡³⁵⁾がある。

中世前期には、調査区全面に遺構が広がり大量の遺物が出土するようになる。飛躍的な発展を遂げると共に遺跡の性格にも質的な転換が生じていることは明白である。河川敷に臨む不安定な地形環境に何故、このような遺跡が登場したのであろうか。周辺の小字を見れば、「土居ヤシキ」の周辺には、「古津」「渡場」「番匠」「渡シ上り」など河川交通に関連する地名が多く見られる。³⁴⁾これらの中には「古津」など先の『長宗我部地検張』³⁵⁾が記された天正年間にまで遡って確認できるものもある。さらに遡ることも十分に考えられよう。

中世遺物の特徴としては、列島内外からの搬入品が多量に見られることが挙げられる。在地産の土師器杯類を除けばほとんどが東海や和泉、河内、播磨、備前、紀伊などで生産された土器や陶磁器類、それに貿易陶磁器類である。これらの多くは民衆の日常必需品であり、古代の縁袖や黒色土器などの特定階層の需要を満たすものではない。ここに古代の僅少な搬入品から大量の商品流通へと質的な転換を遂げた中世の流通経済の活発な実像を垣間みることができる。池澤俊幸は、四国各地の中世前期の諸遺跡において貿易陶磁器を含めた流通土器が急増することを指摘した上で、その要因として「港津機能を有する遺跡や居館が成立してくる遺跡の勃興」³⁶⁾を挙げている。こうした背景には、列島各地や中国をはじめとした東アジア地域との海上交通の興隆とそれと結びついた政治的な動向があった。入宋貿易を掌握していた平氏滅亡後、鎌倉政権は土佐に対して佐々木氏や三浦氏など海運との関係が強い「海の領主」と呼称すべき守護職を次々と投入していたことからも明らかなように、当該期太平洋は、瀬戸内や日本海と共に「海の道」として重要な物流動脈を形成していた。そして「土佐は海とのかわりでのなかで、時の政権から熱い視線を注がれて」³⁷⁾いたのである。

上ノ村遺跡は、このような新たな経済活動や政治的動向を背景に成立した新興集落として捉えることができよう。新居城も川津の防衛や河川交通の掌握が目的であったと考えられる。内陸部ではほとんど例を見ない紀伊型壇や吉備型壇などは、他地域の人々の往来が盛んな川津ならではの出土品と見ることもできよう。

仁淀川流域の中世の中心舞台は高岡にあり、後述するように12～13世紀に盛行期を迎える。上ノ村遺跡は中心地の繁栄を支えた川津に営まれた交易を生業とする集落であり、高岡の遺跡群とは不可分の関係にあったものと考えられる。周知のように上ノ村遺跡から西方に新居坂を越えた宇佐の井ノ尻は、大平氏の外港であり堺などと結ぶ海上交通の拠点であった。交易船など大船の発着場として重要な位置を占めていたことが知られている。しかし、大平氏の活躍や井ノ尻が登場するのは15世紀以降であり、上ノ村遺跡の盛行期とは合致しない。大平氏以前すなわち中世前期においては、上ノ村遺跡が水上交通の中心的な役割を果たしており、後期にいたって井ノ尻がそれに代わった可能性もある。

高知平野では、近年、高知市の土佐神社西遺跡³⁸⁾や神田ムク入道遺跡³⁹⁾などで中世前期の集落跡が明らかになりつつある。前者は土佐最大の要港である浦戸に注ぐ国分川、後者は同じく神田川の水運との関連が指定されている。両者ともに遺物は、12世紀後半～13世紀を中心とする貿易陶磁

器をはじめ列島各地からの流通品が目立つ。特に前者は3～4型式40)に亘る常滑壺がまとまって出土している。後者は区画溝の可能性がある遺構が検出されている。このように高知平野では、中世前期の歴史像が具体性を帯びて明らかになりはじめた。

(2) 中世の町並み「高岡町」の成立と上ノ村遺跡

1990年代後半以降、高岡地域では発掘調査が多く実施されるようになり、これまでほとんど知ることのできなかった遺跡の内容や特徴が明らかになりはじめた。東部の物部川流域の事例との比較検討を通して、より豊かな高知平野の歴史を描写することが各時代を通して可能になりつつある。

高知平野における中世集落遺跡の研究は、1980年から始まった田村遺跡の調査以降次第に調査事例が増加しているが、全体的な傾向として15世紀以降の中世後期に属するものが多い。田村遺跡は守護代細川氏の田村城館を中心とした拠点集落であり、14世紀にその成立をみるとが盛行期は15～16世紀である。周辺の十万遺跡や岩村遺跡も大きな方形区画を持った在地有力者層の居館を中心とする集落であるが、その中心は同時期に求められる。土佐国衙跡や押原遺跡は前期にまで遡るが、その実態は不明なところが多い。

これに対して上ノ村遺跡や高岡の諸遺跡は、前半期に盛行期を迎えることが明らかになってきた。現在の高岡市街地の西端に位置する蓮池城から東に向かって、林口遺跡、天神遺跡、光永・岡ノ下遺跡、野田遺跡、京間遺跡が、東西2km足らずのところに数珠繋ぎ状に展開している。各遺跡共に部分的な調査ではあるが、検出遺構、出土遺物共に充実した内容を持っており、大規模集落の存在を彷彿させるものがある。例えば最も東の京間遺跡の中世では、44棟の建物、区画溝も検出されている。その西隣にある野田遺跡は、古代から継続する遺跡であるが、中世においては3ブロックからなる溝で区画された屋敷群が確認されており、掘立建物54棟が検出されている。最も大きな「西ブロック屋敷」は東西40m、南北30～40mの規模を持っている。光永・岡ノ下遺跡も古代から続く遺跡で、中世には建物17棟、多数の溝、柵列などが見られ、12世紀代に比定される屋敷墓からは、「瀬州方鏡」が出土している。林口遺跡からは、建物は明確にし得ないがやはり12世紀後半～13世紀にかけて営まれた溝に囲まれた複数単位の屋敷地の存在が報告されている。ここからは、南四国初の「蝙蝠扇」も出土している。

これらの遺跡は、12世紀～16世紀まで営まれるが、そのほとんどが13世紀を前後する時期に盛行期があり、上ノ村遺跡で見たような国内外からの大量の遺物が出土している。このような状況から、現在の高岡市街地の大部分は中世前期段階に「蓮池城」を中心、溝で区画された屋敷群、商業施設や手工業者、芸能集団なども組み込んだ中世的町並み=「高岡町」が成立していたと考えるのが妥当であろう。今後、高岡市街地は、中世町場遺跡として把握することが緊要であろう。上ノ村遺跡は、仁淀川流域に生じた中世への胎動のなかで「高岡町」を支えた川津=「港町」として交易機能を分掌していたのである。

そしてこれは、大平氏が登場するよりも遙かに遡る。「高岡町」は、高知平野において中世前期に遡る「町場」の形成を知ることのできる最古の事例であり、このような土台の上に大平氏が活躍の舞台は築かれたのであろう。溝に囲まれた屋敷群に象徴される中世的景観・町並みの形成は、田村遺跡など高知平野東部よりも西部が早かった可能性がある。このことは、高知平野における中世の政治的社会の形成とも密接に関わる問題であり、在庁官人層など政治的に成長を遂げた有力在地勢力層の存在が窺われる。吾妻鏡に登場する蓮池権守家綱は、そのような動向を象徴的に示す存在であろう。

中世前期に成立した町並みは、後期にも継続して営まれているが、出土遺物から見る限り盛行期のそれには及ばない。先に見たように、貿易陶磁器において顯著に見られる。中世後期は田村遺跡が盛行期を迎え、各地に山城が築かれ山麓には土居や町屋が形成され、そこからは大量の青磁類(特に細蓮弁文碗や雷文帶碗)が出土することが知られているが、ここでは見られない。この変化の背景には何があったのであろうか。おそらく守護代細川氏領国支配によって政治・経済的な求心性が田村城館を中心とする高知平野東部に形成されたことと無関係ではなかろう。

上ノ村遺跡の報告書は、次年度以降継続して刊行される。中心となる中世遺構・遺物は、今次報告の数倍の量を有しており、上ノ村遺跡の内容や位置付けはさらに充実したものとなるであろう。

参考文献

- 1) 松田直則「土佐における古代末から中世の土器様相－模倣系土器の展開を中心にして－」『中近世土器基礎研究V』日本中世土器研究会1989年
- 2) 池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相－下ノ坪遺跡の成果を中心にして－」『下ノ坪遺跡II』高知県野市町教育委員会1998年
- 3) 池澤俊幸「土佐から見た平安時代の土器」『中近世土器基礎研究XV』日本中世土器研究会2000年
- 4) 吉成承三「土佐の古代末から中世前期にかけての土器様相－高知平野を中心に－」『中近世土器基礎研究XII』日本中世土器研究会1989年
- 5) 田中涼子「古代から中世の遺物について」『林口遺跡II・蓮池城跡北面遺跡』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター2001年
- 6) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『小龍遺跡II』1996年
- 7) 出原恵三「高知平野西部の古代土器」「馬場木遺跡」(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター2004年
- 8) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『西分増井遺跡I』2003年
- 9) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『西鶴地遺跡』2001年
- 10) 高知県香美郡土佐山田町教育委員会『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』1990年
- 11) 高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第9集1989年
- 12) 高知県香美郡野市町教育委員会『野市町埋蔵文化財調査報告書 曾我遺跡』1989年
- 13) 高知県教育委員会『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第10分冊1986年
- 14) 尾上実「南河内の瓦器輿」「藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢」藤澤一夫先生古稀記念論叢刊行会1983年
- 15) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『千本杉遺跡』2004年
- 16) 高知県香美町教育委員会『十万遺跡発掘調査報告書』1988年
- 17) 福家清司「中世土器の流通をめぐって－徳島市中島田遺跡出土遺物を通して－」『中近世土器の基礎研究IX』日本中世土器研究会1993年
- 18) 橋本久和『中世土器研究序論』真陽社1992年
- 19) 7)に同じ
- 20) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『光岡・岡ノ下遺跡』2000年
- 21) 5)に同じ
- 22) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年について－」

「九州歴史資料館研究論集4」九州歴史資料館1978年

- 23) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会1982年
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会1982年
- 24) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会1982年
- 25) 山下峰司「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社1995年
- 26) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター「坂本遺跡」2008年
- 27) 松田直則「土佐」前掲25)
- 28) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論集』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集1983年
- 29) 菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』国立歴史民俗博物館1989年
- 30) 29)に同じ
- 31) 森隆「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社1995年
- 32) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター「北ノ丸遺跡」2008年
- 33) 高知県立図書館「長宗我部地検張 高岡郡 上の一」1963年
- 34) 土佐市「土佐市史」1978年
- 35) 高知県教育委員会「後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 風指遺跡 アゾノ遺跡」1989年
- 36) 池澤俊幸「四国における搬入品と流通・交通」『中近世土器の基礎研究X IX』日本中世土器研究会2005年
- 37) 市村高男「鎌倉幕府の成立と土佐国」『高知県の歴史』山川出版社2001年
- 38) 浜田恵子「第V章 考察」『土佐神社西遺跡・土佐神社』高知市教育委員会2006年
- 39) 田上浩「第3章 まとめ」『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2005年
- 40) 中野晴久「常滑・渥美」前掲25)

遺物觀察表

FigNO 造形番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	厚さ (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig9_1	深鉢	(63)		(4.5)			口斜面部取り。内外面ナデ調整。	チャート他の粗粒砂多し。	
Fig9_2	*	*		(6.5)			口斜部丸く仕上げる。内外面鐵錫状原体(木口に似る)と横方向ナデ調整。	チャート他の粗粒砂多し。	
Fig9_3	*	*		(7.2)			口斜面部取り。内面横方向柔直、横ナデ調整。	チャート、赤色風化鐵粗粒砂多し。	
Fig9_4	*	*		(6.3)			内外面ナデ調整。	チャート他の小裡、粗粒砂多し。	
Fig9_5	*	*		(4.7)			突起あり。	チャート他の粗粒砂多し。	
Fig9_6	*	*		(3.5)			外面棒状原体で横ナデ調整、内面ナデ調整。	チャート他の粗粒含む。	
Fig9_7	*	*		(5.0)			口斜面部取り。外面鐵錫状原体でナデ調整。内面ナデ調整。	チャート、赤色風化鐵粗粒砂多し。	
Fig9_8	*	*		(5.3)			口斜面部取り。外側条状の横方向調整。原体は鐵鍊状の形か? 内面ナデ調整。	チャート他の粗粒多し。	
Fig9_9	*	*		(5.3)			内外面横ナデ調整。	チャート、赤色風化鐵多し。	
Fig9_10	*	*		(3.8)			内外面ナデ調整。	チャート、風化鐵などの小裡、粗粒砂を多く含む。	
Fig9_11	*	*		(6.1)			口斜部尖り気味。内外面ナデ調整。	チャート、粗粒多し。	
Fig9_12	*	*		(5.4)			外面横方向柔直。	チャート他の小裡、粗粒砂を含む。	
Fig9_13	*	*		(3.8)			外面口縁下無別突起、内面無U字沈跡。	石英、長石粒を多く含む。	
Fig9_14	*	*		(3.5)			口斜部尖り気味。ハケ状原体様の横方向調整、内面一筋横筋的ミガキ。	粘土。	
Fig9_15	*	*		(2.4)			内外面横ナデ調整、無別突起。	石英他の粗粒砂含む。	
Fig9_16	*	*		(4.2)			内面横ヘラミガキ、外面ナデ調整。沈縫2条。	粘土。	
Fig9_17	有支深鉢	*		(4.4)			口斜部鋸下取り。外面横ヘラミガキ。かき氷に屈曲する口縁。外側U縁2条、無別U縁、内面U縁の沈跡。	粘土、石英、角閃石含む。	
Fig9_18	浅鉢	*		(4.9)			口縁に突起あり。内外面横方向ヘラミガキ。黑色磨研。	粘土、雲母を含む。	
Fig9_19	*	*		(2.9)			内面丸く肥厚。内外面ナデ調整。	チャート、雲母を含む。	
Fig9_20	*	*		(1.8)			黒色碧砂、口縁端部に突起有り。	粘土。	
Fig9_21	深鉢	*		30.0	9.0		内外面鐵錫道のような原体で横方向ナデ調整。	チャート、石英などの粗粒多し。	
Fig9_22	*	*		13.0	7.0		口斜部丸味。外面横ナデ調整。	チャート、粗粒砂多し。	
Fig9_23	*	*		44.0	(9.2)		内外面ナデ。		*
Fig9_24	*	*		36.0	(19.2)		内外面ナデ。	チャート他の小裡、粗粒砂多し。	
Fig9_25	深鉢底部	*		(2.6)	4.8		外面スクエ、鍛熱半実。	チャートの粗粒砂を多く含む。	
Fig9_26	*	*		(1.7)	6.0			チャート他の粗粒砂を多く含む。	
Fig9_27	*	*		(2.6)	7.6		内面ススケ。	石英、粗粒砂を多く含む。	
Fig9_28	*	*		(3.4)	8.6		内外面ナデ調整。	チャート他の粗粒多し。	
Fig9_29	*	*		(3.7)	6.0			チャート他の粗粒多し。	
Fig10_30	深鉢	*		(30.0)	(2.7)		口斜部強い横ナデ調整。	チャート他の粗粒砂多し。	
Fig10_31	碧玉石斧	(27)					全長102cm 全幅44cm 全厚19cm 重量143g	結晶片岩	
Fig10_32	*	*					全長102cm 全幅37cm 全厚19cm 重量125g	結晶片岩	
Fig10_33	*	(63)					全長6.3cm 全幅4.4cm 全厚1.1cm 重量51.8g	結晶片岩	
Fig10_34	土細器 皿	(19)	V	15.4	1.5		内外面横ナデ調整、環状がわざかに肥厚。	粘土。	
Fig10_35	土細器 杯	(2)	V1下層	(1.6)	(10.0)		内外面横ナデ調整、ヘラ切り、ナデ調整。	粘土。	
Fig10_36	*	(17)	IV	13.7	3.2	8.0	内外面横ナデ調整、ヘラ切り、ナデ調整。	粘土、赤色風化鐵を多く含む。	
Fig10_37	*	*	*	14.7	4.9	9.6	内外面横ナデ調整、ヘラ切り、ナデ調整。	粘土。	
Fig10_38	*	(25)	*	(13.0)	(2.9)	(7.0)	内外面横ナデ調整、外底削り、ナデ調整。	粘土。	

Fig NO. 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig.10 39	土器 杯	(10)	N	(15.8)	(3.4)		口縁部彫み出し。へき切り。器表の荒れが激しい。	粘土	
Fig.10 40	頭蓋骨 軸身	(63)		10.8	(3.7)		受压下強い横ナデ調整。底付部削り。ロクロ回転左まわり。整埋うなぎ。	粘土	
Fig.10 41	土器 杯	(19)	V		(3.5)	9.3	内外面横ナデ調整。	赤色風化処理など、粗粒砂多し。	
Fig.10 42	頭蓋骨 軸	*	*	15.2	1.6	10.4	内外面強い横ナデ調整。底部丁寧なナデ調整。	粘土	
Fig.10 43	頭蓋骨 杯	(23)	N	(13.8)	(3.5)	(9.0)	内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.10 44	*	(10)		9.8	(3.5)		内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.10 45	頭蓋骨 皿	(17)	V	(17.0)	(1.7)		内外面横ナデ調整。	粗粒砂を含む。	
Fig.10 46	頭蓋骨 杯	(2)	III		(2.7)	(8.8)	内外面横ナデ調整。蓋付も四状を呈す。高台は八字に踏んづる。	粘土	
Fig.10 47	頭蓋骨 皿	(17)	N	(13.2)	(1.1)		内外面丁寧なナデ調整。	粘土	
Fig.10 48	*	(20)	II	(14.0)	(1.4)		内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.10 49	頭蓋骨 碗	(4)	*		(2.0)	6.8	内側はハケ目が彫刻。高台は内側を強く押さえて横ナデ調整。	粘土	
Fig.10 50	頭蓋骨 杯	(10)	N/F層	18.0	(3.5)		ロクロ成形。内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.10 51	*	*		(12.0)	(3.7)	(8.4)	内外面横ナデ調整。へき切り、ナデ調整。	粘土	
Fig.10 52	頭蓋骨 皿	(27)	PI		(8.3)		外側横ナデ調整。	粗粒砂を多く含む。	
Fig.10 53	*	(10)		(23.0)	(3.8)		内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.10 54	*	*	N下層		(6.5)	11.0	内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.11 55	土器 皿	(17)	N	13.8	(5.3)		口縁内外強い横ナデ調整。ロ谷は上方に弧張り強い横ナデ調整。側外面削りハケ。内縁横ナデ調整。	粗粒砂を多く含む。	
Fig.11 56	*	(10)		27.0	(3.0)		口縁内外強い横ナデ調整。ロ谷縁部は上方に弧張り強い横ナデ調整。	石英、小礫、粗粒砂を含む。	
Fig.11 57	*	(19)	V	23.0	(6.5)		ロ谷縁部を上方に彫りこむ横ナデ調整。口縁内面横ハケ。外縁下部がハケ。側外面削りハケ。	石英粒を多く含む。	
Fig.11 58	*	*	*	(25.0)	(8.0)		口縁内外強い横ナデ調整。ロ谷縁部は上方に弧張り横ナデ調整。側外面削りハケ。内縁横ハケ。外縁スケ。	石英粒を多く含む。	
Fig.11 59	土器 杯	(9)	III	(0.9)	8.0		外縁彫り、ナデ調整。平行仕組。		
Fig.11 60	土器 碗	(92)	*	12.6	(3.4)		口縁内外面横ナデ。側外面強なナデ。外縁に大きな墨痕あり。	粘土	
Fig.11 61	土器 杯	(60)	VII	(15.0)	4.0	6.5	内外面横ナデ調整。希切り。	粘土	
Fig.11 62	土器 杯	(7)	III	(12.5)	(4.3)	6.4	内外面横ナデ調整。希切り。外縁スケ。	粗粒砂多し。	
Fig.11 63	黑色土器 A型	(18)	N		(1.1)	7.5	内面丁寧なうなぎ。	粘土、雲母多し。	
Fig.11 64	瓦器 小皿	(63)		(4.8)	(0.9)		削部側面強い横ナデ調整。外底削り仕組。	粘土	
Fig.11 65	瓦器 碗	(59)	VII		(0.7)	5.1		粘土	
Fig.11 66	*	(92)	III	12.4	(2.3)		内溝して立ち上がる。口縁内面横ナデ調整。側外面ナデ調整。	チャマート他の細粒砂を含む。	
Fig.11 67	*	(9)	*	13.0	(3.0)		口縁内外面横ナデ調整。外底削り仕組者。内面底付附近にうなぎ。	粘土	
Fig.11 68	*	*	*	(16.0)	(2.0)		口縁内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.11 69	*	(24)	V	(17.0)	(2.8)		土縁部の削成。内面丁寧なナデ。外縁削り仕組者。白縁部削成。横ナデ調整。	粘土	
Fig.11 70	*	(63)		14.4	(3.5)		口縁内外横ナデ調整。側外面削り仕組者。	粘土	
Fig.11 71	*	*		(16.0)	(3.8)		口縁内外面横ナデ調整。内面平行磨化した縦文。外縁削り仕組者。口縁外面磨化状の仕組あり。	粘土	
Fig.11 72	青磁 碗	(60)	VII	14.1	(1.7)			白色精緻	青磁
Fig.11 73	青磁 碗	(3)	V上層	11.8	(2.4)			薄緑色の釉。	青磁
Fig.11 74	*	(61)	N		(2.9)		口縁内外面直文帯。内面草花文。	灰白色精緻	
Fig.11 75	青磁 碗	(30)	上層	(8.0)	(4.5)		内面露胎。	灰绿色	
Fig.11 76	青磁 碗	(30)			(2.2)	6.8	釉は厚くかかる。高台内面まで施釉。費付外縁まで削る。	灰绿色	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	厚さ (cm)	底径 (cm)	特徴	勘定・材質	備考
Fig.11 77	束縛 鉢	(59)	VII	226			内外面横ナゲ調整。	真石細粒を含む粗い粘土	
Fig.11 78	瓦器 鉢	(8)	III	18.3	(3.1)		口縁内外面横ナゲ調整。口縁端部を構み上げてナゲ構造。	粘土	
Fig.11 79	土器器 鉢	(9)	*	23.2	(4.5)		口縁内外面強い傾ナゲ調整。側内面横ハケ。外縁左→右削り、外縁スクラウド。	長石細粒跡を多く含む。	
Fig.11 80	瓦器 鉢	(52)	II	28.8	(2.9)		内面に細い条溝がわずかに見える。	粘土	
Fig.11 81	壠築底部	(1)	シルト	(23)	10.1		外縁削り、内面の条溝はハケ目状で細く浅い。	頁岩他の粗粒砂含む。	産地不明
Fig.11 82	土塊	(17)	N'				全長6.2cm 全幅10cm 全厚9cm 孔径0.4cm 重量3.9g	粘土	
Fig.11 83	土器器 土器	(19)	II				全長3.2cm 全幅11cm 全厚11cm 孔径0.5cm 重量3.5g	粘土	
Fig.11 84	*	(9)	III				全長4.2cm 全幅12cm 全厚11cm 孔径0.3cm 重量4.8g	粘土	
Fig.11 85	古鏡	(63)					鏡水道宝 径2.5cm 鏡幅28mm 方形孔一辺5.1mm		
Fig.11 86	*	(19)	II				4字中1字不明 径24.5cm 鏡幅22mm 方形孔一辺6.1mm		
Fig.16 87	土器器 杯	S	SB1-P4	(13)	5.8			粘土	
Fig.16 88	瓦器 小皿	*	SB1-P8	(14)				チャート、赤色風化輝合む。	
Fig.16 89	土器器 小皿	*	SB1-P5	7.2	1.9	5.2	赤切り。	赤色風化輝合む。	
Fig.16 90	瓦器 碗	*	*	(16)	3.6			粘土	
Fig.16 91	土器器 杯	*	SB2-P1	(19)	6.0		赤切り。	赤色粒を含む。	
Fig.17 92	土器器 小皿	*	SB3-P10	7.2	1.4	6.0	横ナゲ調整。赤切り。	磁粒砂含む。	
Fig.17 93	土器器 杯	*	SB3-P5	(10)	6.8		赤切り。	磁粒砂含む。	
Fig.17 94	土器器 小皿	*	SB3-P11	6.8	1.4	5.1	赤切り。口縁端部横ナゲ調整。	磁粗粒砂含む。	
Fig.17 95	土器器 杯	*	SB3-P10	9.4	(23)		口縫内外面横ナゲ調整。	粘土	
Fig.17 96	瓦器 碗	*	SB3-P11	(23)			口縫内外面横ナゲ調整。瓦器根脚土頭掩か?	チャート、赤色粒多し。	
Fig.17 97	*	*	SB3-P3	(15.0)	(3.1)		口縫外縁横ナゲ調整。	粘土	
Fig.17 98	土器器 裏	*	SB3-P2	17.6	(14)		外縁横ハケ。横ナゲ調整。	チャート粗粒。小輝合む。	
Fig.17 99	土器器 杯 底部	*	SB4-P4	(16)	8.6		身消済。	粘土	
Fig.17 100	土器器 裏	*	SB4-P3	16.7	(3.0)		外縁粗熱赤変。スクラウド。	チャート、粗粒砂多し。	
Fig.17 101	土器器 杯	*	SB4-P4	(11.0)	(3.0)		内外面横ナゲ調整。制御外縁わずかに段有。	粘土	
Fig.18 102	瓦器 小皿	*	SK1	8.2	1.4		口縫内外面横ナゲ調整。	粘土	
Fig.18 103	*	*	*	9.0	(1.6)		口縫外縁横ナゲ調整。	粘土	
Fig.18 104	土器器 杯 底部	*	*	(17)	(8.0)		赤切り。	赤色粒を含む。	
Fig.18 105	瓦器 杯	*	*	(14.0)	(3.1)		口縫が屈曲して立ち上がる。内面に短文をわずかに認める。制御外縁上面横ナゲ調整。下部斜削圧痕あり。	石英粒を多く含む。	
Fig.18 106	*	*	*	15.8	3.3		外縁端頭圧痕顯著。内面わずかに短文。	粘土	
Fig.18 107	*	*	*	17.0	(2.4)		口縫横ナゲ調整。口縫端部構みだし状。内面短文。	粘土	
Fig.18 108	束縛系 鉢	*	*	(25)				石英細粒を含む。	
Fig.18 109	*	*	SK6	(34)			口縫部や丸味。	石英細粒砂を含む。	
Fig.19 110	土器器 小杯	*	SK10	6.8	1.3	4.9		赤色風化輝を多く含む。	
Fig.19 111	*	*	*	9.7	2.3	6.4	赤切り。	チャートの細粒多し。	
Fig.19 112	瓦器 碗	*	SK11	(12)	3.2			石英他の粗粒砂を多く含む。	
Fig.19 113	瓦器 碗	*	SK13	11.6	(2.3)			粘土	

Fig.NO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	厚さ (cm)	高さ (cm)	特徴	地土・材質	備考
Fig.19 114	土器 小皿	S	SK14	7.8	1.5	5.6	舟切り。	粘土	
Fig.19 115	土器 土鉢	*	SK11				分径3.6cm 全幅1.4cm 全厚1.4cm 重量57g 孔径0.4cm	粘土	
Fig.19 116	*	*	SK13				分径4.3cm 全幅1.1cm 全厚1.0cm 重量34cm 孔径0.4cm	粘土	
Fig.20 117	青磁 碗	*	SK15	18.0	2.0		透明感の高い緑色の釉。内面片切形草花文。	灰色精緻	I-2類
Fig.20 118	土器 杯	*	*	(3.1)	6.4		円板状高台・内凹部クロ口。系切り。	チャート他の細粒多し。	
Fig.20 119	瓦器 碗	*	SK18	(13.0)	(2.4)		内面わずかに縮文。口縁外張強い模ナメ調整。	粘土	
Fig.20 120	土器 土鉢	*	SK20				全径42cm 全幅0.9cm 全厚1.0cm 重量28g 孔径0.5cm	粘土	
Fig.20 121	土器 トリベ	*	SK22	6.4	1.5	4.4	高熱により海綿状を呈す。内面が特に激しい。	砂粒を含む。	
Fig.20 122	東播系 持珠側面	*	SK23		(5.2)		外面スクエ。外縁に段有り。	石英粗粒、岩母を多量に含む。	
Fig.20 123	黒色土器 A型 槌	*	SK26	(15.0)	(3.2)		内面弱い沈痕。口縁外張出舟形ナメ調整。	粘土。岩母等を含む。	贈入品
Fig.20 124	土器 羽釜	*	*	20.4	(2.5)		内径17cm。口縁内外、底上部に横ナメ調整。被熱 半径、スクエ。	石英粗粒を多く含む。	既津C2型 年代～垂木
Fig.21	細部染付 中輪広変形	*	SK80		(4.4)		外面草花文。内面二重團鑽。	白色精緻	肥前系1780 年代～垂木
Fig.21	細部染付 小盤	*	*	(1.8)	5.0		内面山水文。透明釉は灰白色を帯びる。貫入、台形狀 の削出し窓台。	*	肥前系
Fig.21	細部染付 中輪広変形	*	*	(3.1)	5.4		高台外周團鑽。見込み團鑽・略化した不明文様。外周 は灰白色に變色する。	*	肥前系1780 年代～垂木
Fig.21	細部染付 小皿	*	*	(1.4)	5.6		内面草花文。透明釉は明瞭灰白色を帯びる。	*	肥前系
Fig.21	細部色絵 小M	*	*	9.4	(2.4)		内面上絞付(率・薄緋・黒)による文字[三]と不明 文様。文字は率・文様は薄緋・黒で強く。外面上絞付 (率)による文字[めでたい文]。	*	肥前系
Fig.21	細部染付 皿	*	*	(2.9)			外面花唐草文。内面花唐草文。	*	肥前系
Fig.21	細部染付 小皿	*	*	(1.7)	7.7		既成不良で透明釉は白濁する。	*	肥前系
Fig.21	*	*	*	(2.3)	6.4		内面網目文。外面連続唐草文。	灰白色精緻	肥前系
Fig.21	細部染付 通鑽	*	*	9.6	(4.5)		外面網目文等による意に竹・紅葉・菊花による地塊 の内面多重重團鑽。	白色精緻	肥前系 明治一正
Fig.21	細部染付 扇口	*	*	(3.8)	5.2		外面網代文。透明釉は白濁する。	灰白色精緻	肥前系
Fig.21	細部染付 小柄	*	*	(4.1)	7.5		外面菊花・水藻文。見込み二重團鑽。	白色精緻	肥前系 18世紀後～19 世纪初頭
Fig.21	*	*	*	8.4	(5.1)		外面不明。内面四方輪。外領は渦巻。	*	肥前系
Fig.21	細部染付 仏教器	*	*	(4.05)	4.0		外面團鑽。	*	肥前系又は 肥前系
Fig.21	細部染付 半輪	*	*	10.4	(2.7)		外面團鑽による宝文・花卉。内面書文帶。	*	肥前系 19世紀
Fig.22	細部染付 盤	*	*	(0.85)	4.0		内面三方斜綱文。蛇の目四型高台。	*	肥前系
Fig.22	細部染付 瓶	*	*	(2.6)	6.0		高台外周三重團鑽。高台内面團鑽。	*	肥前系
Fig.22	細部染付 瓶	*	*	(2.9)	4.6		外面蓮瓣文。内面無釉。	灰白色精緻	肥前系
Fig.22	細部染付	*	*	(2.65)	6.6		外面不明。	灰白色	肥前系1780 年代～垂木
Fig.22	細部染付 中輪広変形	*	*	12.6	3.5		内面網目文。見込み蛇の目輪消溝。透明釉は灰白色 を帯びる。	*	肥前系 見 18世紀
Fig.22	陶筋染付 大丸	*	*	(4.5)	6.4		外面唐草文。外領は青灰白色に變色。	灰色精緻	肥前系 18世紀前半
Fig.22	細部染付 小皿	*	*	(2.6)	4.2		内面唐草文。見込み蛇の目輪消溝。高台無釉。	白色精緻	肥前系 見 18世紀
Fig.22	細部染付 中輪広変形	*	*	(4.1)	7.1		外面不明。見込み團鑽・不明。	灰色精緻	肥前系1780 年代～垂木
Fig.22	白磁 碗	*	*	15.9	(6.3)		貫入あり。	白色やや粗い。	肥前系
Fig.22	陶器 中輪	*	*	(3.4)	6.0		灰釉。高台施釉。内底に日皿。	灰色精緻	肥前系 18世紀前半
Fig.22	陶器 中輪丸形	*	*	(2.45)	4.8		灰釉。高台施釉。灰釉は焼成不良で白濁。	黄白色やや粗い。	肥前系 18世紀前半
Fig.22	*	*	*	(3.1)	4.8		灰釉。高台施釉。浅黃色を帯びる半透明の釉。	*	肥前系 18世紀前半

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	特徴	地土・材質	備考
Fig.22 151	陶器 中國丸形	S	SK80		(2.7)	5.3	灰釉、高台施釉。浅黄色を帯びる半透明の釉。	淡褐色やや粗い。	更古系17 貴紀後-18 世紀前半
Fig.22 152	*	*	*	(3.6)	4.7		灰釉、高台施釉。浅黄色を帯びる半透明の釉。	赤茶色	肥前系 18世紀前半
Fig.22 153	*	*	*	(4.3)	4.4		灰釉、高台施釉。に少し黄色を帯びる半透明の釉。	淡茶色やや粗い。	肥前系 18世紀前半
Fig.22 154	*	*	*	(4.3)	4.8		灰釉、高台施釉。に少し黄色を帯びる半透明の釉。	淡黄灰色精緻	肥前系 18世紀前半
Fig.22 155	*	*	*	(3.5)	5.2		灰釉、高台施釉。に少し黄色を帯びる半透明の釉。	淡褐色精緻	肥前系 18世紀前半
Fig.22 156	*	*	*	(4.5)	4.8		灰釉、高台施釉。浅黄色を帯びる半透明の釉。	*	肥前系 18世紀前半
Fig.22 157	陶器 小皿	*	*	(2.1)	4.0		見込み焼の日輪調溝。釉調溝部に白泥を刷毛塗り。	淡茶色やや粗い。	肥前山窯か
Fig.22 158	陶器 中國丸形	*	*	13.2	(5.4)		灰釉。脚本が入る。	淡褐色やや粗い。	尾ノ瀬か
Fig.22 159	*	*	*	14.3	(3.65)		灰釉。灰釉は証跡不良好味で部分的に白濁。	灰色精緻	尾ノ瀬か
Fig.22 160	*	*	*	10.0	(6.7)		灰釉。灰釉は証跡不良好味で部分的に白濁。	*	尾ノ瀬か
Fig.22 161	陶器 小皿	*	*	(3.6)	5.1		唐津系灰釉陶器。外面下平無釉。内底に砂目。	*	肥前系1610- 1620年代
Fig.22 162	陶器 中皿	*	*	(2.3)	4.2		灰釉、高台施釉。黄褐色を帯びる半透明の釉。	*	肥前系 18世紀前半
Fig.22 163	陶器 呑鉢	*	*	17.4	(3.2)		口縁部無釉。灰釉は焼成不良で白濁する。	褐色精緻	肥前系
Fig.22 164	陶器 小皿	*	*	(1.8)	4.4		唐津系灰釉陶器。外底施釉。灰釉は部分的に白濁。内 底に砂目。	淡褐色精緻	肥前系1630- 1640年代
Fig.22 165	*	*	*	(1.4)	4.6		見込み焼の日輪調溝。釉調溝部に砂が付着。灰釉。釉 はオリーブ色に発色。高台無釉。	灰色精緻	肥前内野窯 18世紀前半
Fig.23 166	*	*	*	(1.6)	5.2		唐津系灰釉陶器。ベタ底。外底回転系切り。底部無釉。 内底全面に砂目。	*	肥前系
Fig.23 167	*	*	*	(1.4)	4.5		見込み焼の日輪調溝。絆釉。絆釉は暗緑色に発色。 高台無釉。	*	肥前内野窯 18世紀前半
Fig.23 168	陶器 鉢	*	*	(3.3)	10.0		内外面に釉を刷毛塗り。高台無釉。内底に砂目痕。	セビア色精緻	肥前系
Fig.23 169	陶器 小皿	*	*	12.4	(2.5)		内底絞釉。外面灰釉。絆釉はオリーブ灰色に発色。	灰色精緻	肥前内野窯 18世紀前半
Fig.23 170	陶器 皿	*	*	(3.35)	6.6		見込み焼の日輪調溝。高台無釉。灰は焼成不良で白 濁する。	茶色精緻	
Fig.23 171	*	*	*	13.6	3.1	8.6	灰釉。高台無釉。内底に側体側の高台痕が残る。	灰色精緻	
Fig.23 172	*	*	*	(5.3)			三鳥手。内面白象嵌による芭花文と團扇。外面鉄筋 を刷毛塗り。	茶色精緻	肥前系 17世紀
Fig.23 173	陶器 底座	*	*	(2.2)	10.8		外面に黒褐色の鉄筋。内面に灰釉。内底に灰白色の 砂目痕。	灰色精緻	
Fig.23 174	陶器 蓋	*	*	7.8	2.8		釉を貼付。灰釉。内底無釉。灰釉はオリーブ黄色を 帯びる半透明の釉。	*	
Fig.23 175	*	*	*	10.4	1.85		灰釉。内底無釉。	*	
Fig.23 176	陶器 蓋	*	*	33.0	(3.1)		口縁部外側に灰釉。灰釉はオリーブ色を帯びる。	灰色やや粗い。	丹波
Fig.23 177	*	*	*	30.4	4.5		口縁部に陶繩。口縁部内側に灰釉。灰釉はオリーブ黃 色。	黃白色やや粗い。	丹波
Fig.23 178	陶器 鉢	*	*	30.2	(6.0)		内外面に灰釉施釉の後、外面上方に開泄の釉を重ね せしめ。	セビア色精緻	
Fig.23 179	陶器 裏又は鉢	*	*	(3.8)	10.0		刷毛目2彩手。内面白化粧刷毛目・刷緑釉。底部無 釉。	茶色精緻	肥前系17世紀 -18世紀前半
Fig.23 180	陶器 蓋	*	*	(8.2)			可成形。内面に椅子目状の当て具痕が残る。外面上位に2 条の縦状突起を馳せ。灰釉は焼成不良で白濁。	セビア色精緻	肥前系
Fig.23 181	土師質土器 渣壺	*	*	(5.05)			外縁部ビオサエ・テ。内面横ナデ。	織・粗粒を含む。	讃岐同本系 に埋
Fig.23 182	陶器 鉢	*	*	(2.8)	16.0		内面に鷹目。外表面ナデ。外底に凹凸。	砂粒を含む。	埋・明石系
Fig.23 183	陶器 底座	*	*	(4.0)	14.6		外底ナデ。	灰色精緻	
Fig.23 184	陶器 鉢	*	*	(7.0)	14.0		内面に鷹目。外表面ナデ。外底に凹凸。	セビア色精緻	埋・明石系
Fig.24 185	*	*	*	37.4	(5.4)		口縁部外側に円窪。内面鷹目。	*	機削
Fig.25 186	陶器 小皿	*	SK82	8.6	(1.4)			粘土。	
Fig.25 187	*	*	*	7.8	1.1	5.5	側部。口縁横ナデ調整。底部指紋有り。	*	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	跡高 (cm)	英尺 (cm)	特徴	地土・材質	備考
Fig.25 188	瓦器 瓶	S	SK86	12.6	(3.0)		口縁外部横ナテ調整。体部粗粒砂、削り有り。	粘土	
Fig.25 189	*	*	SK82	14.2	(2.7)		口縁外部横ナテ調整。内面横方向噴文。側部外面部 削り。	粘土	
Fig.25 190	青磁 瓶	*	*		(4.6)		瓶は比較的うすくかかる。外面丸ノミ状工具による 洗鑿。	精緻な粘土。	龍皇窯
Fig.25 191	土師器 壺	*	*		(5.1)		側部外面部ラミガキ。外面スクエア。	石英砂の粗粒砂多し。	
Fig.25 192	常滑 甕	*	*		(6.8)	18.5	内部拵点状に自然施。外底に砂付着。	粘土	
Fig.26 193	瓦器 小皿	*	SD1上層	(8.0)	(1.5)		口縁横ナテ調整。	粗粒砂を含む。	
Fig.26 194	瓦器 碗	*	SD1下層	(10.0)	(2.0)		口縁外面部横ナテ調整。外面部削り。	粘土	
Fig.26 195	*	*	SD1上層	(11.0)	(2.5)		口縁外面部横ナテ削り。	粗粒砂を含む。	
Fig.26 196	*	*	SD1	(11.0)	(2.7)		口縁外面部横ナテ調整。内面わずかに彫文残る。	粘土	
Fig.26 197	*	*	SD1上層	12.6	(3.0)		側部外面部削り。内面わずかに彫文。	チャート他の粗粒砂を含む。	
Fig.26 198	*	*	*	(14.0)	(2.7)		口縁外面部二段横ナテ調整。	粘土	
Fig.26 199	*	*	*	13.0	2.5		口縁外面部二段横ナテ調整。内面喷文。	粘土	
Fig.26 200	*	*	*	(13.0)	(3.3)		口縁外面部横ナテ調整。側部外面部削り。内面 喷文。	粘土	
Fig.26 201	*	*	SD1中層	(6.0)	(3.2)		口縁部外面部ミガキ。側部外面部横ナテ調整。	粘土	
Fig.26 202	*	*	SD1上層	13.2	2.7	3.8	口縁外面部の彫ナデが見られない。外底下半部削り。	粗粒砂を多く含む。	
Fig.26 203	*	*	*	(13.0)	(4.0)		口縁部外面部横ナテ調整。体部中下部炭吸着なし。 体部内面全体炭吸着なし。	粗粒砂を含む。	
Fig.26 204	青磁 瓶	*	SD1	15.0	(3.3)		薄緑色。	灰白精緻	1-5-2類
Fig.26 205	*	*	*	14.4	(3.2)		薄緑色。	灰白精緻	*
Fig.26 206	白磁 皿	*	SD1中層	(11.0)	(2.8)		口先。	白色精緻	飯糰
Fig.26 207	青釉 皿	*	SD1	(11.4)	(3.2)	(7.0)	口移端、費付高部。明るい色調の焼成。内底に1条の 滑擦。	白色精緻	明染付
Fig.26 208	瓦質 鉢	*	SD1上層		(2.4)		内面横ナテ調整。外面部スクエア。	粘土	
Fig.26 209	*	*	SD1下層		(4.3)			チャート他の粗粒砂を含む。	
Fig.26 210	*	*	SD1		(3.7)		内外面横ナテ調整。	チャート他の繊・粗粒砂 を多く含む。	
Fig.26 211	*	*	*	24.4	(3.35)		内幅15.5cm・口径面取り。内外面横ナテ調整。	チャート他の粗粒砂を多 く含む。	
Fig.26 212	*	*	SD1上層	22.6	(3.7)		口縁は垂直に立ち上がる。口部外縁する削取り。	石英粒多く含む。	
Fig.26 213	東播系 西林	*	*	(10.0)	(2.3)		内外面横ナテ調整。	粗粗粒を含む。	
Fig.26 214	*	*	*	(24.0)	(3.1)		内外面自然施。	石英その他の粗粒砂を含 む。	遺地不明
Fig.26 215	*	*	*	(26.0)	(3.3)		内外面横ナテ調整。焼成があまい。口部部重ね焼き 痕跡。	粗粒砂を含む。	
Fig.26 216	瓦質 刷毛	*	SD1	21.0	3.1		口部部面取り。断面三角形の溝を描み出し、横ナデ 調整。	チャートの小穂・粗粒砂 を多く含む。	京都府南淡 の在地か?
Fig.26 217	瓦質 三足脚	*	SD1上層				全長(74cm) 全幅(24cm) 全厚(2.2cm)	チャートの粗粒砂を多量 に含む。	
Fig.26 218	*	*	SD1				全長(49cm) 全幅(15cm) 全厚(1.5cm)	チャート・粗粒砂を多く含 む。	
Fig.26 219	陶器 甕	*	*	35.0	(7.9)		玉縁口縁。口縁外面部横ナテ調整。口縁と体部の窪内 面に削り。	風化した小穂を多く含 む。(チャートなし)	遺地不明
Fig.26 220	土總	*	*				全長5.0cm 全幅12cm 全厚1.1cm 孔径 0.25cm 重量4.5kg	チャート他の粗粒砂を含 む。	
Fig.27 221	土師器 底部	*	SD2		(1.6)	(0.8)	ハウ切り、ナテ調整。	精緻な粘土。	
Fig.27 222	土師器 小皿	*	SD3	7.2	1.6	5.0	赤切り。	チャート、石英などの粗 粒砂を含む。	
Fig.27 223	土師器 杯	*	*	(11.6)	(3.8)	8.0	赤切り。	粗粒砂を多く含む。	
Fig.27 224	土師器 杯	*	*	(3.5)	7.0		円板状高台。赤切り。内外面着耗が激しい。	粘土精緻。赤色風化粗粒 砂を含む。	
Fig.27 225	土師器 杯	*	*	(2.8)	7.0		赤切り。内外面横ナテ調整。	チャート。石英を多く含 む。	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig.27 226	縦楕円 (直筒)	S	SD3	(1.4)	6.8		豊付段状。	胎土特徴	
Fig.27 227	瓦器 椀	*	*	(12.0)	(3.0)		内凹、口縁外周横ナギ調整。内面、縮文をわずかに認める。	胎土	
Fig.27 228	土器器 杯	*	*	(2.1)	(9.4)		外底に撫痕有り。	チャート、石英粒を多く含む。	
Fig.27 229	瓦器 碗	*	*	(0.6)	3.4			石英粒の繊維多し。	
Fig.27 230	瓦器 小皿	*	*	8.4	(1.5)		内面横ナギ調整。口縁外周横ナギ調整。体部外縁下、手指捺印痕有。	精緻な胎土だがチャートの小粒を含む。	
Fig.27 231	土器器 吉備系楕	*	SD4	11.3	3.5	3.8	内面へラッシュ。外底指捺痕。比較的小さな高台。	石英、長石、小礫、粗粒砂を含む。	
Fig.27 232	瓦器 椀	*	SD3	14.0	(2.7)		口縁部外周横ナギ調整。	胎土	
Fig.27 233	青磁 碗	*	*	14.4	(2.2)		緑褐色。	灰色精緻	I-5-b類
Fig.27 234	*	*	*	17.8	5.3		厚壁が厚い。	堅緻	*
Fig.27 235	東播系 捏跡	*	*	23.0	3.1		口縁外周自然點。	小礫、粗粒砂を含む。	
Fig.27 236	土器器 蓋	*	*	24.0	(4.2)		口背面取り。捏幅1cm、内外周横ナギ調整。	チャート、小礫、粗粒砂を多く含む。	
Fig.27 237	瓦器 三足鍋の脚	*	*				全長(9.4cm) 全幅(2.4cm) 全厚(1.3cm)	チャート、小礫、粗粒砂を多く含む。	
Fig.27 238	土器器 甕	*	*	(16.0)	(8.5)		口部底面の横ナギ、口縁内外周横ナギ調整。胴部上半段ハイケ、外底スクラーク、内面に混合低鉛跡有。	チャート、小礫多し。	
Fig.27 239	*	*	*	28.0	(3.6)		口縁は上方に描み上げて横ナギ調整。口縁面、口縁内外周横ナギ、横ナギ。胴部外周横ハイケ。	チャートの小礫を多く含む。	
Fig.28 240	土器器 小皿	*	SD6	7.2	1.7	5.0	断面台形状の凹板状高台。	精緻	
Fig.28 241	土器器 杯	*	SD6上層	(3.7)	6.4			赤色風化層の粗粒砂含む。	
Fig.28 242	*	*	SD6下層	(1.5)	8.0		赤切り、ナギ調整。	粗粒砂を多く含む。	
Fig.28 243	瓦器 小皿	*	SD6	3.8	1.6		口縁部外周強い横ナギ調整。	胎土(木炭している?)	
Fig.28 244	土器器 裏	*	*	8.6	0.9		手づくね成形。口縁を描み出し、横ナギ調整。	胎土	
Fig.28 245	*	*	SD6上層	12.0	1.7		手づくね成形。内面横ナギ調整。	胎土	
Fig.28 246	*	*	SD6下層	8.0	1.8		手づくね成形。口縁内外周強い横ナギ調整。	胎土	
Fig.28 247	瓦器 椀	*	SD6	11.0	(3.1)		口縁内外周横ナギ調整。	胎土	
Fig.28 248	*	*	*	12.7	2.5	3.5	内面ナギ調整。底部付近に縮文有り。口縁部外周横ナギ調整。胴部下手指捺印痕有。	*	
Fig.28 249	青磁 碗	*	*	(2.1)			外底端溝を削り出し、その上から梅目を縦に入れ込む。内底、側面下部沿うる。薄緑色。	灰色精緻	I-6類
Fig.28 250	*	*	SD6上層	(2.5)			内面に細い圓線。胎座がやや薄い。緑褐色。	灰色精緻	I-5-b類
Fig.28 251	白磁 碗	*	SD6	(2.0)			白色口縁。外底下部露胎。	白色精緻	II-2類?
Fig.28 252	*	*	*	(0.7)	6.8		外底も施釉。	白色精緻	
Fig.28 253	青磁 碗	*	*	17.0	(4.9)		輪連弁。胎は薄いのある薄緑色。	胎土は頗る白色。	I-5-b類
Fig.28 254	*	*	*	17.0	(3.9)		白色、全面貞入。	灰色精緻	*
Fig.28 255	*	*	*	18.0	(4.4)		端オーリーブ釉。	灰茶色精緻	*
Fig.28 256	*	*	*	(17.0)	(5.8)		連弁の幅が比較的の狭い。	灰色堅緻	*
Fig.28 257	東播系 捏跡	*	*	(2.2)			内外周横ナギ調整。	砂粒を含む。	
Fig.28 258	*	*	*	(3.3)			灰色。	粗粒砂を多く含む。	
Fig.28 259	*	*	*	(2.5)			ナギ調整。	胎土	
Fig.28 260	*	*	SD6上層	24.0	(2.7)		内外周横ナギ調整。	中・粗粒砂を含む。	
Fig.28 261	*	*	SD6床	(4.0)	11.0		外底ナギ調整。	石英他の粗粒砂多く。	
Fig.28 262	瓦質 錆び	*	SD6	(5.9)			外底凹凸、口縁底部取り。	褐色～粗粒砂、小礫を多く含む。	
Fig.28 263	東播系 甕	*	SD6上層	27.0	(3.0)		上陸貝殻の焼成、外底黄褐色。前面暗茶色。口縁上面は凹凸。口部等は丸味。外面右上がりのハケ。	チャート、石英他の粗粒砂多し。	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺物名・出土 地点・層位	口径 (cm)	厚さ (cm)	英単語 (cm)	特徴	動物・材質	備考
Fig.28 264	瓦質 鋸	S	SD6 上層	(17.0)	(5.5)		外縁に崩落が痕多し。外縁スクエ。全体にナゲ調整。	チャート小穂・粗粒砂を多く含む。	
Fig.28 265	土師器 羽茎	*	SD6		(3.3)		鶴嘴15cm。内面凹。齊上下横ナゲ調整。内面スクエ。	石英粒を多く含む。	
Fig.28 266	*	*	SD6 上層		(2.3)		鶴嘴2cm。内面凹。齊上下横ナゲ調整。	石英、粗粒砂を多く含む。	
Fig.28 267	瓦質 鋸	*	SD6	17.4	(5.5)		口部部面取り。鶴嘴3角形を呈し。しっかりといる。	チャートの小穂・粗粒砂を多く含む。	
Fig.28 268	*	*	SD6 Y層	(21.0)	(5.1)		齊上下、内面外縁横ナゲ調整。削部内面ナゲ削り。	チャートの粗粒砂を多く含む。	
Fig.28 269	*	*	SD6 上層	22.8	(3.7)		口部部面取り。鶴嘴上横ナゲ調整。削部外縁ナゲ削り。	チャートの細・粗粒砂を多く含む。	
Fig.28 270	*	*	SD6 下層	23.4	(3.3)		口部内外縁横ナゲ調整。削部三角形帶を上向きに貼付。削部外縁ナゲ削り。外縁スクエ。	チャートの粗粒砂を多く含む。	
Fig.28 271	瓦質鋸 鋸	*	SD6				口部内外縁横ナゲ調整。削部三角形帶を上向きに貼付。削部外縁ナゲ削り。内面スクエ。	チャートの細・粗粒砂を多く含む。	
Fig.28 272	*	*	*				口部内外縁横ナゲ調整。削部外縁ナゲ削り。内面外縁横ナゲ調整。	チャート他の細粒砂を多く含む。	
Fig.28 273	常滑窯	*	SD6 上層		(5.9)		削部外縁形状の突帯を上向きにつける。口縁内外縁横ナゲ調整。外縁スクエ。	チャート他の細粒砂を多く含む。	
Fig.28 274	土師質 錠体	*	*		(7.2)		7本単位の条縫を認める。外縁凸凹顯着。	結晶片岩、赤色風化を多く含む。	
Fig.28 275	東播系 錠	*	SD6		(8.2)		平行叩き痕。	粘土	
Fig.28 276	土錠	*	*				全長6.6cm 全幅(3.2cm) 重量(24.0g)	粘土	
Fig.28 277	*	*	*				全長(3.5cm) 全幅13cm 全厚1.4cm 重量3.8g	粘土	
Fig.28 278	*	*	SD6 上層				全長4.3cm 全幅1.6cm 全厚1.5cm 重量6.8g	粘土	
Fig.28 279	*	*	SD6 下層				全長(2.0cm) 全幅1.5cm 全厚1.6cm 重量4.2g	粘土	
Fig.28 280	*	*	SD6 上層				全長4.6cm 全幅1.3cm 全厚1.3cm 重量5.5g	粘土	
Fig.29 281	土師器 小皿	*	SD7 下層	68	1.3	4.6	舟切り。	細・粗粒砂多し。	
Fig.29 282	*	*	SD7 上層	7.4	1.4	6.0		細・粗粒砂を含む。	
Fig.29 283	土師器 碗	*	SD7		1.9	7.0	円板状高台。外底に火捺文。	粘土	
Fig.29 284	土師器 杯	*	*	10.2	2.5	6.4	ヘラ切り。	石英、チャート他の細・粗粒砂を含む。	
Fig.29 285	土師器 足高高台 杯	*	*		(3.2)		脚の大部分の接合部から剥離。	石英他他の細粒砂を多く含む。	
Fig.29 286	土師器 杯	*	SD7 下層	12.4	5.5	7.4	外縁口クロ目顯着。	粘土	
Fig.29 287	瓦質 碗	*	SD7	(13.0)	(3.3)		口縁部外縁横ナゲ調整。削部内面指痕有。	粘土	
Fig.29 288	*	*	SD7 上層	13.4	(2.9)		口縁部外縁横ナゲ調整。削部外縁ナゲ調整。器壁がくずす。	粘土	
Fig.29 289	*	*	*	(11.0)	(2.5)		口縁部横ナゲ調整。削部外縁指痕有。	チャートの小穂を多く含む。	
Fig.29 290	*	*	SD7	13.6	(4.0)		口縁部外縁横ナゲ調整。削部外縁指痕有。内外面スクエ。	粘土	
Fig.29 291	黒色土器 日輪	*	*		(1.1)	7.2	見込みに十字のミガキ。	粘土、雲母を多く含む。	個人品
Fig.29 292	黒色土器 A型 碗	*	*		(15.0)	(3.7)	内面横方向ヘラミガキ。外縁横方向の弱い削り。ヘラミガキ。	金雲母他の細粒砂を含む。	個人品
Fig.29 293	瓦器 碗	*	*		11.8	3.6	外縁指痕有。内面ナゲ調整。短丈。	粘土	
Fig.29 294	青磁 碗	*	*	17.4	(5.4)		輪廻弁文。	*	I-5-6期
Fig.29 295	東播系 鉢	*	SD7 下層		(3.9)	11.0	舟切り。	粗い粘土	
Fig.29 296	*	*	SD7 上層	26.0	(3.0)		内面横ナゲ調整。	粗い粘土	
Fig.29 297	瓦質 羽茎	*	SD7 下層	29.0	(2.9)		内外面横ナゲ調整。口縁端はわずかに内側に構み出す。	石英、黄石の粗粒砂を多く含む。	
Fig.29 298	土師器 葉	*	SD7 上層	31.0	(3.8)		削部外縁平行叩き。外縁スクエ。口縁端部外方に構み出しう。	粘土・石英、黄石など花崗岩地帯の土。	播磨タイブ
Fig.29 299	土師器 羽茎	*	SD7 下層	(30.4)	(5.3)		舟幅2.3cm。内外面横ナゲ調整。	石英、黄石を多く含む。	
Fig.29 300	瓦質 鋸	*	SD7 上層				全長(8.5cm) 全幅2.0cm 全厚2.1cm 幅7cm前後の面取りが行われている。	チャートの粗粒、小穂を含む。	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig.29 201	瓦質 鋤	S	SD7上層				全長(6.7cm) 全幅(2.7cm) 全厚(2.3cm) 幅1cm前後の面取りが見られる。	チャートの粗粒鉱、小穂 多し。	
Fig.29 302	*	*	SD8				全長(6.4cm) 幅幅(2.4cm) 全厚(2.3cm) 縫合部で削離している。	チャート、小穂、粗粒鉱多 し。	
Fig.29 303	土鋤	*	SD7				全長5.0cm 全幅12cm 全厚1.2cm 重量5.3g	焼成	
Fig.29 304	*	*	*				全長4.4cm 全幅11cm 全厚1.0cm 重量3.6g	焼土	
Fig.29 305	*	*	*				全長7.3cm 全幅12cm 全厚1.1cm 重量10.2g	焼土	
Fig.29 306	*	*	SD7上層				全長4.6cm 全幅21cm 全厚(1.6cm) 重量10.0g 孔径0.6cm	焼土	
Fig.30 307	瓦器 小皿	*	SD30	79	145		内面、口縁外面横ナデ調整。	焼土	
Fig.30 308	瓦器 碗	*	*	13.5	(2.5)		口縁部外面横ナデ調整、側面部外側面直角、ナデ調整。	チャート他の粗粒鉱、小 穂を含む。	
Fig.30 309	*	*	*	12.2	(2.4)		口縁部外面横ナデ調整、内面へラミガキ。	焼土	
Fig.30 310	志野 皿	*	*	11.0	185	5.5	陶器皿、頸い縁帯状の削り出し高台、内外面灰釉。	やや粗い胎土。	
Fig.30 311	白磁 碗	*	*	(3.6)			玉縁状口縁。	灰色精緻	IV類
Fig.30 312	青磁 碗	*	*	(2.8)	5.3		見込みに1条の横縫、外底突出を残して削り、豊付付 て施釉、施達文。	灰色精緻	I~5~6類
Fig.30 313	*	*	*	14.4	(19)		灰色の釉。	灰色 やや粗い胎土	上田分類 D類
Fig.30 314	備前 挂錶	*	*	(3.5)			内外面横ナデ調整。	粗粒鉱を含む。	
Fig.30 315	*	*	*	(4.0)			内外面横ナデ調整。重ね焼き底有り。	砂粒を含む。	
Fig.30 316	*	*	*	(5.1)			内外面横ナデ調整。内面6条単位の条縫。	砂粒を含む。	
Fig.30 317	*	*	*	27.8	(5.2)		内外面横ナデ調整。内面7条の条縫、外面上に重ね焼き 底。	小穂、砂粒を含む。	
Fig.30 318	*	*	*	24.0	415		内外面横ナデ調整。	小穂を多く含む。	
Fig.30 319	*	*	*	23.6	(7.6)		内外面横ナデ調整。	粗粒鉱を多く含む。	
Fig.30 320	*	*	*	29.8	(7.5)		外面重ね焼きの底筋有り。口縁部ゴマフア、内外面 横ナデ調整。底端7本。	小穂、粗粒鉱を多く含む。	
Fig.30 321	東御系 鉢鉢	*	*	27.0	(4.0)		内外面横ナデ調整。	砂粒を含まない。	
Fig.30 322	備前 挂錶	*	*	(4.0)	184		内面使用による消耗が激しい。条縫がすり消えてい る。	砂粒を多く含む。	
Fig.30 323	東御系 鉢鉢	*	*	(4.8)	10.0		外表面横ナデ調整。底切り。	砂粒を多く含む。	
Fig.30 324	備前 挂錶	*	SD30裏石下層	(5.7)	18.0		内面は使用により消耗が激しい。8本の条縫。	小穂を多く含む。	
Fig.32 325	瓦質 羽釜	*	SD30	21.0	(5.7)		口縁外周に1條ナデ、3条の内に1に1縫合状、縫幅 2cm、跨上下横ナデ調整、側面部 左→右の割り。内 面横ナデ、ナデ、口縫部面取り、跨下端部面取り。	焼土	
Fig.32 326	土継質 羽釜	*	*	18.8	7.1		口縫外周、跨上下横ナデ調整、側面部面取り、口縫部 内面横ナデ、ナデ、口縫部面取り、跨下端部面取り。側 面部内面横ナデ調整。	石英他の小穂、粗粒鉱を 多く含む。	
Fig.32 327	*	*	*	21.2	3.8		口縫内面横、跨上下横ナデ調整。跨に部分的に指頭 による消耗有り。	焼土	東播系
Fig.32 328	瓦質 羽釜	*	*	30.2	(5.7)		口縫内面横、跨上下横ナデ調整、側面部内面横ナデ、側 面部外縫 右→左の割り。外縫スカス、口縫部面取り。	焼土	
Fig.32 329	土継質 羽釜	*	*	(5.6)			外縫跨下割り調整、激しいスカス。口縫内外面横ナデ 調整、口縫部面取り。	焼土	
Fig.32 330	瓦質 羽釜	*	*	(6.4)			跨縫25cm、跨先端部面取り、口縫内外面横ナデ調 整、側面部外縫 左→右方向の割り。跨下スカス。内面 横ナデ、横ナデ調整。	焼土	
Fig.32 331	*	*	*	29.2	(6.8)		跨縫25cm、口縫外周、跨上下横供方向ナデ。脇外縫 左→右方向割り。激しく保ける。口縫部、跨先端部面 取り。	焼土	
Fig.32 332	*	*	*	30.0	(7.95)		口縫内面横ナデ調整。外縫は段状を呈す。跨 外縫、脇外縫部面取り、内面横ナデ調整。口縫部面取り。	石英の小穂、粗粒鉱を 多く含む。	
Fig.32 333	土継質 羽釜	*	*	28.5	(4.7)		口縫は大きく内面 跨縫1.8cm。跨上下、口縫内外面 横ナデ調整、側面部外縫 右→左方向のウカ割り。	石英他の小穂、粗粒鉱を 多く含む。	
Fig.32 334	瓦質 羽釜	*	*	27.0	7.15		口縫内面横ナデ調整。外縫3条の内に1縫合、跨縫 2cm、跨上下横ナデ調整。口縫部、跨先端部面取り。跨下外 縫スカス。	石英、粗粒鉱を多く含む。	
Fig.32 335	常滑 甕	*	*	(6.2)			押印の一部が見える。	粗粒鉱を含む。	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	深さ (cm)	底径 (cm)	特徴	黏土・材質	備考
Fig.32 326	雷滑 便	S	SD30	(5.2)			外面すだれ状の押印。	粗粒砂を含む。	
Fig.32 337	*	*	*	(5.4)			内外面横ナブ調整。	粗粒砂、小礫を含む。	
Fig.32 338	*	*	*	(8.6)			外面すだれ状の押印。内面に粘土帶複合部有り。復合部に対して押印。	粗粒砂を含む。	
Fig.33 339	東播系 便	*	*	(5.05)			頭部外縁石造り。側面部外縁平行叩き。内面指頭による凹凸が激しい。	チャート他の粗粒を含む。	
Fig.33 340	*	*	*	(6.9)			側面部外縁平行叩き。	チャート他の小礫、粗粒砂を含む。	
Fig.33 341	*	*	*	(4.8)			表面剥離。	粗土	
Fig.33 342	雷滑 便	*	*	(5.25)	140		外面板状取体によるナブ調整。	粗土	
Fig.33 343	*	*	*	(4.8)	190		外面右上がりハケ。内面奥ナブ調整。	粗土	产地不明
Fig.33 344	*	*	*	(5.4)	188		内面の一部に横ハケ。	粗土(チャート他の粗粒を少量含む。)	
Fig.33 345	丸瓦片	*	*				全長11.0cm 全幅8.8cm 全厚3.3cm 重量1653g	粗土	
Fig.34 346	瓦器 小皿	*	SD01下層	7.0	1.4		口縁内外面横ナブ調整。外底指頭による凹凸。	粗土	
Fig.34 347	*	*	SD31	(8.0)	(1.3)		口縁外縁直い楕ナブ調整。外底指頭直指頭者(指紋有り)	*	
Fig.34 348	*	*	*	8.0	(1.65)		口縁外縁楕ナブ調整。	粗土	
Fig.34 349	瓦器 楕	*	SD31下層	(1.0)	3.0		画面三角形の高台。	粗土	
Fig.34 350	*	*	SD31	(0.9)	3.0		画面カマガコ伏の高台。	粗土	
Fig.34 351	*	*	*	(2.3)			外面直いナブ調整。	粗土	
Fig.34 352	*	*	*	(12.0)	(2.5)		内面ヘラミガキ。口縁外縁の横ナブは弱い。厚い造り。外底スラスト。	石英他の細～粗粒砂を含む。	
Fig.34 353	*	*	*	(11.0)	(2.5)		口縁外縁直い横ナブ調整。側認外縁ナブ調整。	粗土	
Fig.34 354	土師器 杯	*	*	11.0	3.0	7.0	内外面横ナブ調整。	粗土	
Fig.34 355	瓦器 楕	*	*	12.0	(2.0)		口縁外縁楕ナブ調整。	粗土	
Fig.34 356	*	*	SD01下層	12.6	(2.5)		口縁外縁楕ナブ調整。側認外縁指に粗、弱い削り有り。	粗土	
Fig.34 357	*	*	SD31	140	(3.0)		口縁外縁楕ナブ調整。側認外縁指に粗。内面はわずかに横ヘラミガキが見られる。	石英他の粗粒を含む。	
Fig.34 358	*	*	*	134	(2.7)		口縁外縁楕ナブ調整1段。側認外縁指直指頭者、内面強ナブ調整。	粗土	
Fig.34 359	*	*	*	154	(2.8)		口縁外縁楕ナブ調整。	*	
Fig.34 360	*	*	*	152	(2.65)		口縁外縁楕の弱い横ナブ調整。側認外縁直指、内面磨文。	粗土	
Fig.34 361	雷滑 鉢	*	*	15.0	(4.5)		内面自然釉。ゴマフリ状。外縁直方向ナブ調整。	砂粒をほとんど含まない。	
Fig.34 362	白磁 皿	*	SD31下層	(1.4)			口先。	白色精緻	汎用
Fig.34 363	青磁 瓶	*	SD31	(1.9)			肩通弁。	精緻	1-5号型
Fig.34 364	青磁 皿	*	*	9.0	1.8	4.0	外底部中央まで施釉。	灰色精緻	岡安源系 1-1類
Fig.34 365	東播系 青鉢	*	*	(3.1)			内外面横ナブ調整。	粗粒砂を多く含む。	
Fig.34 366	*	*	*	(4.0)	10.0		外縁横ナブ調整。内面擬ナブ調整。	石英他の粗粒砂を含む。	
Fig.34 367	*	*	*	4.5	10.2		内面着剝。外縁直いナブ調整。	チャート他の小礫多数。	
Fig.34 368	陶器 底盤	*	*	(2.55)			内面は剥耗してツルツル。	粗い粒土、其粗粒を多く含む。	
Fig.34 369	東播系 青鉢	*	*	24.0	(4.5)		内外面横ナブ調整。口縁に重ね焼き跡明顯。	石英、長石など、粗～粗粒多し。	
Fig.34 370	土師器 紀伊空甕	*	*	(1.9)			口縁上方に粗指。内外面横ナブ調整、スケ有り。	チャート他の粗粒砂を含む。	
Fig.34 371	瓦器 足	*	*				全長4.2cm 全幅4.0cm 全厚2.7cm	チャート、細～小礫を多く含む。	
Fig.34 372	*	*	SD01検出面				全長6.5cm 全幅2.0cm 全厚1.8cm 重量27.7g	粗土	
Fig.34 373	*	*	SD31				全長7.3cm 全幅2.4cm 全厚2.4cm 重量46.5g	粗土	
							ナブ調整。		

Fig NO 造形番号	種別	調査区 (試験場)	造形名・出土 地点・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考	
Fig.34 374	瓦質 盤	S	SD31下層	36.0	(4.1)		口縁内外面、脚上下端ナテ調整。口部外側取り。台形 状の脚。	粘土		
Fig.34 375	土師器 刷毛	*	SD31	22.4	(4.3)		脚下外周激しく保ける。	チャート他の小理、粗粒 砂粒を多く含む。		
Fig.34 376	瓦質 盤	*	*	36.0	(8.1)		口縁内外面横ナテ調整。脚部外側扭正直。口部外側 強い横ナテ取り。脚下端部外底入スク。	砂粒を多く含む。		
Fig.34 377	*	*	SD31床	24.0	(8.5)		カマボコ型の脚を貼付し、指痕で押上。脚外周スス ケ。内面丁寧なナテ調整。口部外側取り。	チャート他の粗粒砂を多 く含む。		
Fig.34 378	常滑 盤	*	SD31		(7.9)		外周自然釉。脚下状の土疵有り。内外面横ナテ調整。	砂粒を含む。		
Fig.34 379	土師器 土錐	*	*				全長4.2cm 全幅1.1cm 全厚1.0cm 重量3.9g	粘土		
Fig.35 380	*	*	*				全長3.8cm 全幅1.1cm 全厚1.0cm 重量3.2g	粘土		
Fig.35 381	土師器 小皿	*	SD32床	7.6	1.75	5.6	横ナテ調整。赤切り。	粘土		
Fig.35 382	*	*	SD32	7.4	1.9	5.4	底部凹凸消済。横ナテ調整。	粘土		
Fig.35 383	瓦器 碗	*	*	13.0	(2.7)		口縁外周横ナテ調整。脚部外側扭正直。	石英粒を含む。		
Fig.35 384	*	*	SD32下層	12.1	(2.5)		口縁外周横ナテ調整。脚部外側扭正直。内面横ヘラ ミガキ。	粘土		
Fig.35 385	白磁 皿	*	SD32	8.2	(1.7)		口丸。	白色精緻	Ⅳ類	
Fig.35 386	瓦器 碗	*	*	14.2	(2.3)		口縁外周横ナテ調整。脚部外側扭正直。内面横ヘラ ミガキ。	粘土		
Fig.35 387	碗、束帯 瓶	*	*		(2.3)		見込み輪ノ目袖消き。外周露胎。	白色精緻		
Fig.35 388	東晉系 青瓷	*	SD32床			13.2	灰色	粗粒砂を多く含む。		
Fig.35 389	青磁 碗、瓶部	*	*		(2.1)	6.0	灰オーリーブ外底まで施釉。外底丁寧に削る。圓溝 等文。	灰色精緻	I~5-h類	
Fig.35 390	瓦質 三足鼎	*	SD32				全長8.1cm 全幅3.2cm 全厚2.5cm 重量51.1g	粘土		
Fig.35 391	土師器 紀伊型	*	*	23.0	(3.3)		口縁内面厚。外周スズゲ。	結晶片岩を多く含む。		
Fig.35 392	瓦質 盤	*	SD32下層	22.6	(3.7)		口縁外周横ナテ調整。口部外側取り。断面カマボコ 型の脚。	長石の繊・粗粒砂を含む。		
Fig.35 393	*	*	SD33	27.4	(3.2)		断面三脚型の脚。脚下上、口縁内外面横ナテ調整。口 部底底張り。	粘土、チャート粗粒を少 し含む。		
Fig.35 394	常滑 盤	*	SD32		(2.3)		弧強した口料に2条のひび印痕。外周自然釉。	粘土		
Fig.35 395	東晉系 青瓷	*	SD32下層	13.0			外周左下がりハラ、横ナテ調整。口縁横ナテが強く、 上面は凹門。	石英、長石を多く含む。		
Fig.35 396	*	*	*	26.0	(4.7)		口縁下方に施釉。外底右上がりハラ調整。口部底 おとびの上にかけつい横ナテ調整。	石英、チャート 小理を 含む。		
Fig.35 397	常滑 青銅脚部	*	*		(7.2)		青銅脚のものと比較して厚い。舌相合? 神印はす だれ找。内面ナテ調整。	小理ほんと見られな い。		
Fig.35 398	*	*	SD32床		(8.0)		外周長方形格子の神印文。内面自然釉。	小理を含む。		
Fig.35 399	*	*	SD32		(9.2)		外周長方形格子の神印文。内面自然釉。	粗粒砂。小理を多く含む。		
Fig.35 400	*	*	SD32床		(9.5)		外周長方形格子の神印文。内面自然釉。内面指ナテ 剥離者。	粗粒砂が目立つ。		
Fig.36 401	土師器 作	*	P2		(1.4)	5.6	内外面磨耗。	チャート、半色粒多し。		
Fig.36 402	*	*	*	(14.0)	(2.3)		内外面剥耗。	粗粒砂多し。		
Fig.36 403	*	*	*	(13.0)	(1.9)		口縁外周横ナテ調整。	粘・粗粒砂多し。		
Fig.36 404	瓦器 碗	*	P5	12.7	(2.5)		焼成不良。口縁外周横ナテ調整。	石英他の粗粒砂を含む。		
Fig.36 405	志野小皿	*	*	19.6	2.2	5.8	削り出し高台。白濁色の釉。	粗い粘土。		
Fig.36 406	瓦器 小皿	*	P30	(5.0)	(0.7)	(4.0)	外底扭正直。粗粒砂が残る。	粘土		
Fig.36 407	土師器 小皿	*	*		(14)	(6.0)	赤切り。	粘土		
Fig.36 408	瓦器 碗	*	P31			(10)	(2.0)		粘土	
Fig.36 409	*	*	*	(15.0)	(3.4)		口縁外周横ナテ調整。内面わざかに縮文。	粘土		
Fig.36 410	*	*	P81	10.0	(1.7)		内外面磨耗。	粘土		
Fig.36 411	土師器 杯	*	*	13.5	(2.9)		内外面横ナテ調整。	粘土		

Fig.NO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	深さ (cm)	実深 (cm)	特徴	地土・材質	備考
Fig.36 412	瓦器 碗	S	P81		(1.7)	4.5	内面わずかに縮れ。	粘土	
Fig.36 413	瓦器 小皿	*	P106	8.4	1.8	2.4	口縁外面低いナメ調整。段部を削成している。内面 糊ナメ調整。外底板:接合部を認め。	粘土	
Fig.36 414	瓦器 碗	*	*	14.2	4.0	4.4	内面縮れ、糊ナメ調整。口縁外面糊ナメ調整。扁平な 高台。	チャートの小皿を含む。 (在地産?)	
Fig.36 415	*	*	P119	(12.0)	(3.5)		口縁外面糊ナメ調整。側部外面指圧低。	粘土	
Fig.36 416	土師器 杯	*	*	(16.0)	(3.7)		口縁内外面模ナメ調整。側部指圧痕。手づくね或 む。	チャート他の粗粒砂含 む。	
Fig.36 417	土師質 土器杯	*	P123	11.0	(3.7)		表面刮削式入器。内面および口縁外面模ナメ調整。 全体下半部指圧痕。	粘土	
Fig.36 418	*	*	*	13.0	3.3	8.8		赤色風化繊の繊・粗粒合 む。	
Fig.36 419	*	*	*	10.8	(2.0)			繊・粗粒砂を多く含む。	
Fig.36 420	瓦器 碗	*	*	12.8	(1.7)		口縁外面高いナメ調整。	粘土	I-5-b類
Fig.36 421	*	*	*	(12.0)	(1.6)			粘土	
Fig.36 422	*	*	*	(13.0)	(3.0)		口縁外面模ナメ調整。側部外面指圧痕顯著。	粘土	
Fig.36 423	*	*	*	16.8	(2.7)		口縁外面模ナメ調整。	粘土	
Fig.36 424	*	*	*	13.7	3.5	4.2	口縁外面模ナメ調整。	チャートの粗粒を含む。	完形
Fig.36 425	*	*	*	(13.4)	(4.5)		高台がたく、厚膜も厚い。口縁内外面模ナメ調整。	チャートの粗粒多し。	在地産
Fig.36 426	青磁 瓶	*	*		(2.4)		片切による通弁式。経滑板。	灰色繊維	I-5-b類
Fig.36 427	青質 羽茎	*	*	20.0	(7.3)		側部外面指圧痕。外縁探けん。台形底のしっかりした溝。	チャートの小皿。粗粒砂 を含む。	
Fig.36 428	瓦器 碗	*	P127	10.9	(2.2)		口縁外面模ナメ調整。	粘土	
Fig.36 429	土師器 杯	*	*	13.5	(2.3)		横ナメ調整。	粘土	
Fig.36 430	瓦器 碗	*	*	(12.2)	(2.0)		口縁外面模ナメ調整。	粘土	
Fig.36 431	土師器 小皿	*	P449	6.9	1.6	4.8	横ナメ調整。糸切り。	粘土	
Fig.36 432	土師器 杯	*	P449 7番	(0.95)	5.4		糸切り。	粘土	
Fig.36 433	土師小皿	*	*	6.5	1.6	4.9	横ナメ調整。糸切り。	粘土	
Fig.36 434	土師器 杯	*	P449	11.8	3.6	7.6	内外面模ナメ調整。糸切り。	繊維砂を含む。	
Fig.36 435	瓦器 碗	*	*	13.0	(3.0)		口縁外面模ナメ調整。側部外面指圧痕。内面崩れ。	粘土	
Fig.36 436	*	*	*	13.2	3.4	2.5	内面ナメ調。わずかに縮れを認める。	石英。チャートの粗粒砂 を含む。	
Fig.36 437	*	*	*	12.6	(2.5)		内面粗粒状吹き文。内外面スケ。口縁外面模ナメ調 整。側部外面指圧痕。	粘土	
Fig.36 438	*	*	P450	(0.9)	3.2		内面縮れ。	粘土	
Fig.36 439	*	*	*	11.6	(2.2)		内面ナメ調整。2条の横吹き溝。口縁外面横ナメ調整。	粘土	
Fig.37 440	瓦器 小皿	*	P465	7.2	1.55		外壁凹凸、堆ナメ調整。	粘土	
Fig.37 441	土師質 小皿	*	*	24.0	(12.5)		口縁内側。口沿部取扱。溝幅15cm。口縁外面、 腰以下横ナメ調整。内外面ナメ調整。腰下側部外縁 削離する。	チャートの小皿。粗粒砂 多し。	
Fig.37 442	土師質 土器小皿	*	P471 焼出田底下	7.4	1.75	5.7	内外面模ナメ調整。糸切り。	粘土	
Fig.37 443	*	*	*	7.4	1.55	5.0	糸切り。	赤色風化繊を含む。	
Fig.37 444	*	*	*	7.5	1.85	4.9	内外面模ナメ調整。糸切り。	繊・粗粒砂を多く含む。	
Fig.37 445	土師質 土器杯	*	*	1.7	6.4		内外面模ナメ調整。糸切り。	粘土	
Fig.37 446	*	*	*	(3.35)	7.0		内外面模ナメ調整。へら切り。	粗粒砂を含む。	
Fig.37 447	*	*	*	(1.7)	7.0		内外面模ナメ調整。糸切り。	粘土	
Fig.37 448	*	*	*	10.5	4.0	5.2	糸切り。横ナメ調整。	赤色風化繊を多く含む。	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	髙さ (cm)	底径 (cm)	特徴	地土・材質	備考
Fig.37 449	土師器 土器杯	S	P471	14.4	2.5		横ナゲ調整。	粘土	
Fig.37 450	土師器 紀伊型	*	*	25.4	7.5		口縁を拂み上げて強く横ナゲ調整。上側面に小突 きを施付。側内部曲面によるナゲ調整。口縁から 崩落にかけて保ける。	チャート、赤色風化処理の 粗粒砂多し。	
Fig.37 451	瓦器 瓦	*	*	12.4	(3.2)		内面難波状縞文口縁外側横ナゲ調整。側部外面細な 縫合。	粘土	
Fig.37 452	土師器 土器	*	P472	6.6	2.1	4.8	内外面横ナゲ調整。系切り。	粘土	
Fig.37 453	土師器 紀伊型	*	*	21.6	(4.2)		口縁内外面横ナゲ調整。	チャート、青苔、他の粗 粒砂多し。	
Fig.37 454	瓦質 瓦跡	*	P473 横出直口	30.4	4.5			チャート小埋、粗粒砂を 多く含む。	瓦類
Fig.37 455	白磁 瓶底部	*	P473	(14.5)	9.4			灰白色難纏	
Fig.37 456	東播磨系 裏廻片	*	*	(3.4)			外面平行叩き。	粘土	
Fig.37 457	青磁 皿	*	P475	(1.1)	4.8		外面削り、ナゲ調整。	粘土	
Fig.37 458	瓦器 瓦	*	*	14.2	29.5	7.6	内底付近に縞文。口縁外側強い横ナゲ調整。	粘土	
Fig.37 459	*	*	*	12.6	3.3	2.7	内底平行溝、内面難波状の縞文。口縁外側横ナゲ調 整。	粗粒砂、小礫を含む。	
Fig.38 460	土師器 小皿	*	P124	(10.0)	(1.0)		口縁外側横ナゲ調整。内面ナゲ調整。	粘土	G小葉維成 不良か?
Fig.38 461	*	*	P129	(7.4)	(1.6)	(5.0)	系切り。	粗粒砂多し。	
Fig.38 462	*	*	P142		(1.0)	4.6	系切り。	粘土	
Fig.38 463	土師器 杯	*	P28		(1.1)	6.4	系切り。	粘土	
Fig.38 464	*	*	P70		(1.0)	6.0	内外面削耗。	粘土	
Fig.38 465	*	*	P4		(10.0)	(2.5)		粗粒砂多し。	
Fig.38 466	*	*	P22		(1.2)	(8.0)	系切り。	粘土	
Fig.38 467	*	*	P14		(1.2)	(8.0)		粘土	
Fig.38 468	*	*	P17		(1.8)	(7.0)	外側スケル。	粗粒砂多し。	
Fig.38 469	*	*	P29	14.4	3.6	7.2	系切り、横ナゲ調整。	チャート、白色砂、細粒 砂を含む。	
Fig.38 470	*	*	P6		(2.4)	6.2	系切り。	粘土	
Fig.38 471	*	*	P33		(1.6)	(9.0)		粘土	
Fig.38 472	*	*	P28		(4.2)	(6.0)	系切り。	赤色風化処理を多く含む。	
Fig.38 473	*	*	P65		(2.0)	(3.0)		粘土	
Fig.38 474	*	*	P83		(2.1)		横ナゲ調整。	チャート粗粒	
Fig.38 475	*	*	P90		(2.6)	(6.4)	系切り、横ナゲ調整。	チャート、小埋、粗粒 砂を含む。	
Fig.38 476	*	*	P103		(1.5)	(6.0)	系切り。	チャート、石英微の粗粒 多し。	
Fig.38 477	*	*	P89		(1.4)	(6.0)	系切り。	粘土	
Fig.38 478	*	*	P131		(2.7)	(8.0)	系切り、ナゲ調整。	細・粗粒砂を多く含む。	
Fig.38 479	*	*	P150		(1.9)	7.8	系切り。横ナゲ調整。底部と側部の貼付部剥離痕跡 が生きており、剥離明瞭。	*	
Fig.38 480	*	*	P152	14.4	(2.2)		口縁内外面横ナゲ調整。瓦器純の模倣か?	粘土	
Fig.38 481	*	*	P154		11.8	(2.1)	側部中段の複合剥離痕。	粗粒砂多し。	
Fig.38 482	*	*	P158		(2.3)	6.0	系切り。	石英粒を多く含む。	
Fig.38 483	*	*	P157		(1.2)	(6.0)	剥耗している。	粘土	
Fig.38 484	*	*	P133		(2.0)	(6.0)	系切り。	細・粗粒多し。	
Fig.38 485	*	*	P407		(5.0)	(5.0)	系切り。横ナゲ調整。	粘土	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	深さ (cm)	実寸 (cm)	特徴	地土・材質	備考
Fig.38 486	瓦器 瓶	S	P7		(3.0)		口縁外側ナギ調整。	粘土	
Fig.38 487	*	*	P34	(14.0)	(2.4)		口縁外側ナギ調整。側部外面粗仕地。内面平行の 刻文。	*	
Fig.38 488	瓦器 小皿	*	P121		(7.4)	(1.1)	口縁外側ナギ調整。外底粗仕地。既成不良。	チャート他の粗粒多し。	
Fig.38 489	*	*	P96	(8.0)	(1.4)		口縁外側ナギ調整。底部下半粗仕地底。	磁・粗粒砂を含む。	
Fig.38 490	*	*	P403	7.9	(1.1)		内外面横ナギ調整。	粘土	
Fig.38 491	瓦器 碗	*	P114		(3.6)		口縁外側ナギ調整。	粗粒砂多し。	
Fig.38 492	*	*	P35	15.0	(2.8)		口縁外側横ナギ調整。少し段状を呈する。	粘土	
Fig.38 493	*	*	P47	14.4	(3.6)		口縁外側横ナギ調整。側部外面粗仕地。内面暗文。	粘土	
Fig.38 494	*	*	P108	(14.0)	(2.9)		口縁外側横ナギ調整。側部外面粗仕地。内面暗文、ナ ギ調整。	粘土	
Fig.38 495	*	*	P122	14.8	(2.4)		口縁外側横ナギ調整。	粘土	
Fig.38 496	*	*	P130	16.6	2.6		内外面ヘリミガキ。造りは瓦器碗の手法。側部外面 粗粒仕地の上をミガキ。	粘土	
Fig.38 497	近畿陶器 皿	*	P66	(11.0)	(2.2)			粘土	
Fig.38 498	須志器 杯	*	P39	(13.0)	(3.0)		内外面着札。	砂粒を含まない。	
Fig.38 499	須志器 皿	*	P105	(14.0)	(1.5)		内外面横ナギ調整。	粘土	
Fig.38 500	須志器 碗	*	P24		(2.7)	6.4	円板状高台。朱切り、内外面火襷文。	チャート 粗粒多し。	
Fig.38 501	青磁 瓶	*	P53		(2.3)		片割による通弁文。	灰白色精緻	I-5-a類
Fig.38 502	白磁 杯	*	P67		(2.0)		六または八角杯。全面織貫入。	白色精緻	
Fig.38 503	青磁 瓶	*	P77	17.0	(2.5)		鏡通弁文、内底織貫入。	灰色精緻	I-5-b類
Fig.38 504	白磁 皿	*	P146	(10.0)	(1.5)		口先口縁。	白色精緻	I X類
Fig.38 505	*	*	P132		(0.9)	5.0	外底のみ露胎。内底印花文または画文。	灰色精緻	V豆類
Fig.38 506	柴付 碗	*	P29		1.8	5.0	斜張窓。費付以外全面施釉。	白色精緻	明治付
Fig.38 507	*	*	P143		(3.4)		質入。	白色、やや粗い粘土	
Fig.39 508	東播系 菅鉢	*	P80	(22.0)	(3.1)			キメの粗い粘土	
Fig.39 509	瓦質 菅鉢	*	P138	25.2	(7.9)			石英無縫・粗粒多し。	
Fig.39 510	土師器 茶器	*	P27	(20.0)	(3.3)		口唇部強い横ナギ調整。跨上ナギ調整。跨幅 1.5cm。	チャート粗粒砂多し。	
Fig.39 511	*	*	P44	(20.0)	(3.6)		側ナギ調整。外底スケ。	石英粗粒多し。	
Fig.39 512	東播系 土師器茶器	*	P436	20.5	(3.8)		口唇部面取り。口縁内面強い横ナギ調整。口縁外側 突起部の上に強い横ナギ調整。	粘土	東播系
Fig.39 513	土師器 茶器	*	P116	18.8	(2.0)		外底スケ。	チャート粗粒砂多し。	
Fig.39 514	土師器茶器 紀伊型	*	P119	23.4	(4.2)		内外面横ナギ調整。外曲スケ。	チャート小程、粗粒砂多 し。	
Fig.39 515	*	*	P79		(0.9)		外底スケ。	石英粒を多く含む。	
Fig.39 516	土鉢	*	P54				全長38cm 全幅13cm 全厚1.3cm 重量(5.2g)	チャート他細粒粗砂	
Fig.39 517	*	*	P69				全長56cm 全幅11cm 全厚0.9cm 重量36g	粘土	
Fig.39 518	*	*	P87				タグビーボール状の影響。全長(5.3cm) 分幅 (3.7cm) 重量26.5g 孔径(1.5cm)	粘土	
Fig.39 519	*	*	P152				分長(39cm) 分幅13cm 分厚1.2cm 重量(4.8g)	チャートの粗粒多し。	
Fig.39 520	*	*	P154				分長3.4cm 分幅1.6cm 全厚1.4cm 孔径0.4cm 重量5.8g	粗粒砂を含む。	
Fig.40 521	土師器 杯	*	SX1	(1.8)	5.6		内外面着札が激しい。	チャート他の小程、砂粒 を少量含む。	
Fig.40 522	瓦質 小皿	*	*	10.8	(1.7)			白色精緻	E-2類
Fig.40 523	青磁 碗 容器部	*	*		(2.2)		白色の釉。入あり。見込みに菊花花文あり。削り出し 高内。	淡黄白色精緻	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺集名・出土 地点・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig.40 524	土器器 杯	S	集中1	(13)	(5.6)		ヘラ切り。ナダ調整。	粘土	
Fig.40 525	土器器 小皿	*	*	97	1.4		横ナダ調整。ヘラ切り。	粘土	
Fig.40 526	*	*	*	10.2	1.4	7.3	ヘラ切り。	石英、長石、骨丹を含む。	
Fig.40 527	土器器 杯	*	*	(98)	(31)	(6.0)	内外面横ナダ調整。底切り。	粘土	
Fig.40 528	*	*	*	(13.0)	(3.9)		内外面器表の荒れがひどい。	粘土	
Fig.40 529	土器器 碗	*	*	13.3	(3.5)		口縁内面やや肥厚。手づくね成形。内面は丁寧なナ 字溝窪。内面肥厚以外、五郎焼のよう成形手法。 見たことがない胎土。石英、長石、骨丹を含む。	陶入品	
Fig.40 530	*	*	*	15.7	4.8	6.6	内板状高台。底切り? 口縁外クロロ顕著。	粘土	
Fig.40 531	黒色土器 A型	*	*	(15.0)	(2.8)		全体内面ハラミガキ。口縁外面横ハラミガキ。	粘土	陶入品
Fig.40 532	土器器 皿	*	*	13.4	1.4	10.0	すいすい造り。	粘土	
Fig.40 533	土器器 碗	*	*	(15.6)	(4.0)		外面激しいススク。半斐。	チャート。中・粗粒砂多 少。	
Fig.40 534	黒色土器 A型	*	*	14.8	5.2	7.2	口縁内面沈底状の段。内面ヘラミガキ。脚ナダによ る内部には施されていない。外周も同様。底部レン ズ化。高台は高く、二字状に開く。	粘土	陶入品
Fig.40 535	*	*	*	16.8	(2.8)		内面民窓看。クロロ成形。内面ハラミガキ。外面横 ナダ調整。	チャート。粗粒砂を多く 含む。	在地産
Fig.40 536	土器器 碗	*	*	(16.0)	(3.8)		内外面ナダ調整。	粘土	
Fig.40 537	黒色土器 B型 碗	*	*	(12)	(7.0)		底部内外面丁寧なヘラミガキ。高台は八字状に開く。 高台内面滑落あり。	粘土	
Fig.40 538	*	*	*	17.0	(4.4)		内外面横方丁寧なヘラミガキ。内面沈底。	粘土	
Fig.40 539	陶器 器 碗	*	*	19.4	(4.2)		クロロ成形。外面部横ナダ調整。口縁端強め出し。内 外面ススク。二次的被熱。	粘土	
Fig.40 540	瓦器 器 碗	*	集中2	13.5	(3.2)		全体外面部粗筋顕著。内外器表の荒れが激しい。	粗・中粒砂を多く含む。	
Fig.40 541	瓦器 器 皿	*	V集中6	(23.0)	(3.1)		内外面横ナダ調整。	粘土	
Fig.40 542	土器器 皿	*	集中1	25.2	(6.6)		内外面横ナダ調整。潤幅15cm。	花崗岩の石英中粒砂多 量、空母を含む。	既洋C2型
Fig.40 543	*	*	集中2	21.4	(8.7)		潤はほ口縁の位置に付く。溝端面。上下脚ナダ調 整。外周ススク。被熱重変。潤幅25cm。	石英の細・中粒砂を多く 含む。	
Fig.40 544	瓦器 器 碗	*	V集中6	12.4	(3.0)		全体外面部粗筋顕著。内面窪。口縁外面横ナダ調 整。	粘土	
Fig.40 545	*	*	*	16.0	2.0		内外面横ナダ調整。	粘土	
Fig.40 546	*	*	*	(13.4)	(2.5)		口縁外面重ね焼き痕跡。15cm。口縁内外面横ナダ調 整。内面暗窪。	チャート底の砂粒。	
Fig.40 547	土器器 杯	*	*	(2.8)	7.0		足高高台。八字状に大きめ強まる。クロロ成形。	粘土	
Fig.40 548	土器器 羽釜	*	*	(4.4)			外面ススク。潤幅25cm。潤厚15cm。	チャート。石英粗粒中粒 砂、小粒を含む。	既洋C2型
Fig.40 549	瓦器 器 碗	*	SK32	11.8	(2.2)		口縁外面横ナダ調整。側部外面丸みナダ調整。粗生 燒。	粘土	
Fig.40 550	*	*	SK34	11.8	(2.5)		口縁外面横ナダ調整。内面ヘラミガキ。板と横方向に 直線的な接觸が強められている。	粘土	
Fig.40 551	土器器 皿	*	SK33	(14.0)	(2.6)		体部と高台で胎土が異なる。内面暗窪。	粘土	
Fig.40 552	瓦器 器 碗	*	SK34	(1.0)	3.2		内面ヘラミガキ?	赤色風化層を多く含む。	
Fig.40 553	土器器 皿	*	(12.4)	(1.7)	(11.2)		内外面ヘラミガキ。外縁に縦、横方向の直線を強く。	粘土	
Fig.40 554	土器器 杯	*	*	(16.0)	(3.0)		口肩部強い横ナダ。葉部強め出し。口縁内面のハ ケは強め状か?	石英、長石、小粒、粗粒砂 を含む。金雲母多し。角閃 石を含む。	
Fig.40 555	土器器 長胴甕	*	SK33	27.8	(5.2)				
Fig.42 556	土器器 杯	*	SD10中層	(1.6)	(6.0)		あ切り。	粘土	
Fig.42 557	*	*	*	(2.5)	(6.0)		横ナダ調整。あ切り。	粘土	
Fig.42 558	瓦器 器 碗	*	SK30中層	15.6	(3.2)		内面わずかに縮み。口縁内外面横ナダ調整。体部外 面粗筋。	粘土	
Fig.42 559	土器器 皿	*	*	(1.7)	(3.6)		断面三角高台。	粘土	
Fig.42 560	土器器 杯	*	SK31	(12.8)	(3.7)		クロロ成形。口縁内面に細い沈線。	粘土	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	厚さ (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig.42 561	青磁 瓶	S	SK31	(16.6)	(2.8)			灰色粗微	
Fig.42 562	瓦脊 瓶	*	SD10	13.5	4.1	4.6	外面に胎土接合部を明晰にとどめる。口縁外周横ナ マ調整。体部外周部压痕有。	胎土	
Fig.42 563	土師器 土瓶	*	SK30中等				全長5.1cm 全幅1.2cm 全厚1.2cm 重量7.1g	胎土	
Fig.42 564	土瓶	*	*				全長5.3cm 全幅1.3cm 全厚1.3cm 重量7.1g	胎土	
Fig.43 565	土師器 瓶	*	SD11	15.0	(3.5)		外周縦方向ハケ、横ナマ調整、内面積ハケ。外縁スス タ。	赤色チャート他の粗粒砂 を含む。	
Fig.43 566	*	*	*	29.0	(5.9)		口縁内外面側ナマ調整、口縁端部構み上げ、側部外 面積ハケ。	石英粒を多く含む。	
Fig.44 567	土師器 小杯	*	包含層V層	(8.6)	(1.6)	(7.0)	内外面着孔有。	胎土	
Fig.44 568	*	*	*	(7.2)	(1.7)		赤切り。	チャート粗粒多し。	
Fig.44 569	*	*	*	(8.2)	(1.6)		赤切り。	チャート、石英など粗粒 砂多し。	
Fig.44 570	*	*	*	(7.4)	(1.4)		赤切り、平行圧痕あり。	石英、チャート等含む。	
Fig.44 571	*	*	*	7.8	2.1	4.6	内外面横ナマ調整。赤切り。	チャートの粗粒砂、小理 を多く含む。	
Fig.44 572	*	*	*	(7.0)	(2.2)	(4.8)	赤切り。	胎土	
Fig.44 573	*	*	*	(9.0)	(2.0)		器表の荒れが激しい。	胎土	
Fig.44 574	土師器 小瓶	*	*	8.4	1.3	4.4	ヘタ切り。横ナマ調整。	石英、粗・細粒を含む。	
Fig.44 575	*	*	*	(9.8)	1.5	(6.0)	赤切り。横ナマ調整。	赤色粒多し。	
Fig.44 576	土師器 蓋台付小瓶	*	*	(10.8)	3.7	(6.0)	底部赤切り。大きさ高い脚貼付。横ナマ調整。	胎土	
Fig.44 577	土師器 小杯	*	*		(0.9)	4.5	赤切り。	チャート、赤色粒を含む。	
Fig.44 578	*	*	*	(9.0)	(3.2)	(5.0)	赤切り。横ナマ調整。	チャートを含む。	
Fig.44 579	土師器 小瓶	*	*	(9.8)	(1.2)		横ナマ調整。ヘタ切り。	チャート他の粗粒多し。	
Fig.44 580	土師器 杯	*	*		(1.8)	6.8	ヘタ切り。ナマ調整。	赤色粒を多く含む。	
Fig.44 581	*	*	*	(1.6)	7.2			細粒砂を多く含む。	
Fig.44 582	*	*	*	(1.6)	(7.0)		赤切り。横ナマ調整。	チャート粗粒砂を含 む。	
Fig.44 583	*	*	*	(1.1)	(7.0)		赤切り。	石英、チャート、粗粒多 し。	
Fig.44 584	*	*	*	(1.5)	(6.0)		内外面ナマ調整。	赤色粒多し。	
Fig.44 585	*	*	*	(1.4)	(5.4)		ロクロ成形。赤切り。	胎土	
Fig.44 586	*	*	*	(2.0)	(8.0)		赤切り。磨耗が激しい。	胎土	
Fig.44 587	*	*	*	(1.1)	(6.0)		赤切り。	粗・細粒を含む。	
Fig.44 588	*	*	*	(1.9)	(7.0)		全面磨耗。	胎土	
Fig.44 589	*	*	*	1.9	7.0			胎土	
Fig.44 590	*	*	*	(2.5)	(8.0)		横ナマ調整。赤切り。	胎土	
Fig.44 591	*	*	*	(4.1)	(7.0)			チャート他の粗粒多し。	
Fig.44 592	*	*	*	(1.8)	(7.0)		器表の荒れが激しい。	赤色粒多し。	
Fig.44 593	*	*	*	(1.5)	8.0			チャート粗粒。赤色粒含 む。	
Fig.44 594	*	*	*	(1.8)	(8.0)		赤切り。	赤色粒、長石、石英の粗粒 多し。	
Fig.44 595	*	*	*	(1.9)	6.8		赤切り。底部平行圧痕。	チャート粗粒を含む。	
Fig.44 596	*	*	*	(11.0)	(3.2)	(6.0)	横ナマ調整。赤切り。	胎土	
Fig.44 597	*	*	*	(12.2)	(2.4)	(7.0)	ヘタ切り。	チャート、赤色粒を含む。	
Fig.44 598	*	*	*	(1.7)	7.2		赤切り。	チャート、石英粒・細粒砂 を含む。	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	髙さ (cm)	底径 (cm)	特徴	勘定・材質	備考
Fig44 599	土器器 杯	S	混合層V期	(3.0)	7.0	ペタ高台。外底糸切りと弱い削りか。	石英他の繊・粗粒砂を含む。		
Fig44 600	*	*	*	(1.6)	(6.0)	無切り。	チャート。他の小礫・粗粒砂を含む。		
Fig44 601	*	*	*	(11.0)	(3.5)	(7.0)	無切り。	赤色粒多し	
Fig44 602	土器器 瓶	*	*	(2.0)	7.0	無切り。	粘土		
Fig44 603	土器器 杯	*	*	(2.0)	(7.0)	無切り。	赤色粒を多く含む。		
Fig44 604	*	*	*	(1.6)	6.6	無切り。	粘土		
Fig44 605	*	*	*	12.2	(4.3)	口クロ成形。	チャート。赤色粒を含む。		
Fig44 606	*	*	*	(2.7)	(7.2)	無切り。	チャート小礫を含む。		
Fig44 607	*	*	*	13.0	3.8	6.7	無切り。	粗粒砂を多く含む。	
Fig44 608	*	*	*	(2.3)	8.0	厚い底部、内外面スヌケ。	粘土		
Fig44 609	土器器 瓶	*	*	(3.2)	(6.6)	無切り。円板状高台。	赤色粒を含む。		
Fig44 610	土器器 杯	*	*	15.4	3.4	内外面横ナテ調整。外面口クロ目。	チャート・赤色風化繊を多く含む。		
Fig44 611	土器器 瓶	*	*	(1.3)	5.0	外縁 右→左の弱い削り。輪高台	粗粒砂を多く含む。		
Fig44 612	*	*	*	(2.2)	8.8	内外面器表剥離。高台ハ字状に強く踏ん張る。輪高台。	石英、チャート粗粒砂・赤色粒砂多し。		
Fig44 613	*	*	*	(2.0)	6.2	円板状高台。無切り。	繊・粗粒砂を含む。		
Fig44 614	*	*	*	(1.8)	7.6	外底糸切り。輪高台	石英、赤色粒砂多く含む。		
Fig44 615	*	*	*	(2.2)	(5.0)	断面逆台形の高台。内面ミガキ調整。外縁 左→右の擦痕。輪高台。	粘土		
Fig44 616	*	*	*	(2.2)	7.0	高台剥離。無切り。輪高台。	チャート小礫を含む。		
Fig44 617	*	*	*	(14.0)	(4.7)	外面口クロ目直者。	石英、角閃石を含む。	搬入品?	
Fig44 618	*	*	*	(2.8)	7.0	しっかりした高台。内外面横ナテ調整。輪高台	チャート・繊・粗粒砂多し。		
Fig44 619	*	*	*	(2.8)	6.0	高台ハ字状に開く。調節不明。輪高台。	石英、粗粒を含む。		
Fig44 620	*	*	*	14.8	(3.0)	横ナテ調整。	粘土		
Fig44 621	*	*	*	(2.8)	6.7	無切り。貼付高台。外縁に左右方向の削りあり。内面横ナテ調整。高台付近にハケ目。輪高台。	チャート小礫・繊・粗粒を含む。		
Fig45 622	黑土器 杯	*	*	(1.3)	(8.4)	横ナテ調整。	粘土		
Fig45 623	黑土器 瓶	*	*	(1.8)	(6.0)	無切り。	粘土		
Fig45 624	黑土器 杯	*	*	(1.2)	(7.6)	始付高台。横ナテ基調。	粘土		
Fig45 625	*	*	*	13.2	42	9.2 内面自然極。玉程口縁。外縁擦痕。外縁褐色直物あり。	粘土		
Fig45 626	黑土器 瓶	*	*	13.0	(4.2)	外縁強い横ナテ調整。内面 左→右方向削り。横ナテ調整。	長石他の砂粒を含む。		
Fig45 627	黑土器 瓶	*	*	13.8	(2.8)	口縁外反。内面溝有り。	粘土		
Fig45 628	黑土器 瓶	*	*	13.0	(1.5)	口縁端部肥厚。外縁横ナテ調整。	粘土		
Fig45 629	黑土器 杯	*	*	13.2	3.3	8.6 横ナテ調整。	粘土		
Fig45 630	黑土器 瓶	*	*	15.4	(4.4)	外面口クロ目。横ナテ調整。	粘土		
Fig45 631	黑土器 蓋	*	*	(23.6)	(3.6)	横ナテ調整。	粘土		
Fig45 632	黑色土器 A型 棒	*	*	(4.8)	口縁部内面に太い沈溝。外縁相撲がかかるに見らる。	粘土	搬入品		
Fig45 633	黑色土器 B型 棒	*	*	(1.7)	9.0 内面ヘラミガキ。外縁にもヘラミガキが見られ。相撲母を多く含む。粘土	石英、長石を含む。	*		
Fig45 634	*	*	*	14.6	(3.0)	口縁部内面沈溝。内面縁ヘラミガキ。	石英を多く含む。粘土	*	
Fig45 635	黑色土器 A型 棒	*	*	15.4	(4.0)	口縁部内面太い沈溝。内面横ヘラミガキ。胴部外縁削り。ヘラミガキ。	石英、長石を含む。	*	
Fig45 636	瓦器 小皿	*	*	7.7	14	3.6 口縁内外面強い横ナテ調整。外底ナテ調整。凹凸調者。			

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	高さ (cm)	直径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig.45 G7	瓦器 小皿	S	笠置層V層	7.8	(1.3)			石英粒を含む。	
Fig.45 638	*	*	*	7.3	1.2	5.5	外底粗面。	粘土	
Fig.45 639	*	*	*	(8.8)	(1.9)		口縁内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.45 640	*	*	*	7.6	(1.4)		口縁内外面横ナデ調整。	チャート、赤色風化輝を 含む。	
Fig.45 641	*	*	*	8.8	1.6	20	口縁内外面横ナデ調整。		
Fig.45 642	*	*	*	(8.0)	(1.2)		口縁内外面横ナデ調整、外底ナデ調整。	石英粒を多く含む。	
Fig.45 643	*	*	*	7.2	1.0	3.0	口縁部外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.45 644	*	*	*	9.4	1.5	6.0	横ナデ調整。	粘土	
Fig.45 645	*	*	*	(8.4)	(1.5)		外底粗面、他圓器	粘土	
Fig.45 646	*	*	*	7.0	1.4	3.4	内面軋縮文、瓦筋が2つ有り。	粘土	
Fig.45 647	*	*	*	8.3	1.9	2.9	口縁部外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.45 648	白磁 皿	*	*	(0.8)	4.2		外底下半まで施釉。	白色精緻	
Fig.45 649	瓦器 碗	*	*	(2.1)	2.8		新面カマボコ状の無い高台、直線的な端文。	粘土	
Fig.45 650	*	*	*	(1.8)	4.2		内面断文、断面三角の小さな高台。	粘土	
Fig.45 651	*	*	*	(1.3)	(4.0)		断面三角の無い高台。底部3印有り。	粘土	
Fig.45 652	*	*	*	(14.0)	(3.5)		口縁部外面横ナデ調整、側部外底粗面、削り、ナデ 焼成土器。粘土		
Fig.45 653	*	*	*	11.7	(3.0)		口縁部外面強い横ナデ調整。側部外底粗面は他圓器。	粘土	
Fig.45 654	*	*	*	12.2	(3.3)		内面わずかに端文を認める。	粘土	
Fig.45 655	*	*	*	(12.6)	(2.7)		口縁部外底の横ナデは弱い、側部外底粗面は他。内 面端文へラミギキ。	チャート、石英、粗粒砂を 含む。	
Fig.45 656	*	*	*	12.4	(2.2)		口縁部外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.45 657	*	*	*	12.4	(2.9)		口縁部内外横ナデ調整。体部外底削痕压痕。内面 へラミギキ。		
Fig.45 658	*	*	*	12.4	(2.8)		口縁部外面横ナデ調整、側部外底粗面。内面平行 の端文。	石英粒を含む。	
Fig.45 659	*	*	*	12.0	(2.8)		口縁部外面横ナデ調整。内面削痕。体部外底削痕。	チャート、其石、石英粒を 含む。	
Fig.45 660	*	*	*	(13.0)	(3.1)	(3.4)	体部外底削痕。	石英、其石の粗粒砂を含 む。	
Fig.45 661	*	*	*	12.6	(3.5)		口縁部外面横ナデ調整。体部外底削痕压痕著、削 り削り有り。端文を認めない。	チャート、其石を含む。 在地図?	
Fig.45 662	*	*	*	14.0	(3.0)		内面全面、外底中ほどまで施釉。灰青リーピー色の端。体 底下半→左→右方向の無い削り。灰釉。		
Fig.45 663	*	*	*	16.8	(3.0)		口縁部外面横ナデ調整。器壁がうすい。内面端文。	粘土	
Fig.45 664	*	*	*	13.0	(3.0)		口縁部外面横ナデ調整。体部外底削痕。	粘土	
Fig.45 665	*	*	*	(13.2)	(4.0)		口縁部外底横ナデ調整。体部外底削痕压痕著。内面 ナデ調整、わずかにヘラミギキ。新面カマボコ状の 小さい高台。	チャートを含む。 在地図?	
Fig.45 666	*	*	*	13.8	(3.0)		口縁部外底横ナデ調整。側部外底削痕。内面の 端文は摩耗により不明。	粘土	
Fig.45 667	*	*	*	14.5	3.1	4.5	口縁部外面横ナデ調整。内面わずかに直線的な端文 を認める。新面カマボコ状の高台。	チャートの縫を含む。	
Fig.45 668	*	*	*	13.0	(2.5)		口縁部外面横ナデ調整。体部外底削痕压痕著。内 面端文。	粘土	
Fig.45 669	*	*	*	12.8	3.5	3.2	口縁部外面横ナデ調整。平底風の底部中央に施めて 扁平な高台。制部外底削痕。内面端文状次の端文。北 野型式。A2,B1,C3,D2,E5(5回転)	石英粒・粗粒砂を含む。 II 2 13C	
Fig.46 670	*	*	*	12.4	(3.4)		口縁部外面横ナデ調整。側部外底削痕压痕著。内 面のヘラミギキは其石のための確認できない。	石英粒・粗粒砂を含む。	
Fig.46 671	*	*	*	(3.0)	(4.6)		口縁部外面横ナデ調整。平底風な底板に扁平な高台。	粘土	
Fig.46 672	*	*	*	(17.0)	(2.5)		口縁部外面横ナデ調整。	チャート裡、赤色粒を多 く含む。	在地図?
Fig.46 673	*	*	*	11.8	(2.4)		口縁部外面横ナデ調整。内面に無い沈縫。端文をわ ずかに認める。	粘土	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	髙さ (cm)	底径 (cm)	特徴	勘定・材質	備考
Fig.46 674	瓦質 瓶	S	混合層V層	(28)	(5.8)		断面カマボコ状の低部高台。	焼土	
Fig.46 675	*	*	*	15.0	(3.5)		口縁外面横ナテ調整。内面暗い。	焼土	
Fig.46 676	*	*	*	13.4	(3.0)		口縁外面横ナテ調整。内面ヘラミガキがわざかに見られる。外面スクエア。		
Fig.46 677	*	*	*	14.8	(3.2)		口縁外面横ナテ調整。底部外面指擦付痕显著。長石、石英粒多し。チャート無し。	陶器品	
Fig.46 678	青磁 瓶	*	*		(1.9)		黄褐色の釉がうすくかかる。	精緻な焼土	I-5-b
Fig.46 679	*	*	*		(2.0)		底邊折。オリーブ灰色の釉。貫入。	灰色精緻	*
Fig.46 680	*	*	*		(3.2)		灰緑色。	灰色精緻	*
Fig.46 681	*	*	*	12.8	(2.8)		薄緑色。器壁薄い。底邊折と開弁を認める。	白色精緻	
Fig.46 682	*	*	*	(12.6)	(3.5)		外面蘿蔓透かしの内を輪目で充填。内面飾捺壓とジグザグ文。灰オリーブ灰色の釉。	灰色精緻	
Fig.46 683	*	*	*	(15.0)	(3.3)		オリーブ黄色の釉。貫入有り。	灰色精緻	I-5-b
Fig.46 684	*	*	*	(17.0)	(2.7)			灰色精緻	*
Fig.46 685	*	*	*	13.8	(4.6)		灰白色の釉。	灰白色精緻	*
Fig.46 686	*	*	*	17.0	4.1		二次的被熱。半変。		*
Fig.46 687	*	*	*	(3.0)	(5.4)		燒土外に櫛縞。透明度の高い釉。貫入。高台内の釉は削り取る。	灰色精緻	I-6-b
Fig.46 688	*	*	*	16.0	7.0	6.5	焼付へ底になる。2本の沈澱によって内面を分割。区画内に文様。高台ハ斜底。全体に重厚。焼付から高台内にかけ丁寧に釉を捺す。	灰色精緻	I-4-b
Fig.46 689	美濃山 瓶	*	*	(2.0)	9.0		断面三角形の削り出し高台。	精緻	
Fig.46 690	白磁 小杯	*	*	(1.2)				灰白色精緻	
Fig.46 691	青磁 瓶	*	*	(1.6)	5.2		高台内壁に釉を塗き残り。	灰色精緻	
Fig.46 692	青磁 瓶	*	*	21.8	(2.4)		オリーブ灰色の釉がやや厚くかかる。ところどころ釉がかれていない部分がある。	灰色や相い-釉土	
Fig.46 693	青磁 瓶	*	*	(2.1)	(11.4)		断面三角の高台。底部内面丸ノミ工具による花弁。外面全面施釉。緑褐色の釉。	灰色精緻	
Fig.46 694	白磁 瓶	*	*	10.0	(1.4)		透明の釉。	灰白色精緻	IV類
Fig.46 695	近世 陶磁器瓶	*	*	(11.4)	(2.8)		鋼錆釉。	黄白色やや粗い。	
Fig.46 696	近世 陶磁器瓶	*	*	(1.6)	(2.6)		鋼錆釉。見込みを蛇口目付に焼き取る。	焼土	肥前 内野山原
Fig.46 697	青磁 鉢	*	*	22.6	(4.8)		ナテ調整。口縁内面に窓有り。	焼土、石英粒を含む。	備前?
Fig.46 698	東播系 控鉢	*	*	(24.0)	(3.0)		口縁部外面自然釉。	粗い焼土	
Fig.46 699	*	*	*	(25.4)	(3.3)		口縁部外面黑色化。	石英、施の楕・粗粒砂を多く含む。	
Fig.46 700	*	*	*	(24.6)	(4.5)			焼土	
Fig.46 701	*	*	*	(26.0)	(4.9)		褐色に発色。	チャート、石英、小砾を多く含む。	
Fig.46 702	*	*	*	(5.3)	(12.0)		内面墨乾。外面横ナテ調整。	石英を多く含む。	
Fig.46 703	*	*	*	(28.0)	(10.5)		内外面横ナテ調整。	焼土でチャート、小砾を含む。	
Fig.47 704	土師器 副釜	*	*		(3.5)		断面2cm、厚さ1.3cm。跨上下、口縁部ナテ調整。剥落から背先漏部までスケル。	石英、長石粗粒砂多し	桃津C2型
Fig.47 705	瓦質 副釜	*	*		(4.3)		断面カマボコ状の突帯貼付。	チャート・精粒を多く含む。	
Fig.47 706	土師器 副釜	*	*		(3.6)		口縁内外面ナテ調整。内面一部ハケ調整。	チャート・石英を多く含む。	
Fig.47 707	*	*	*		(3.9)			チャート粗粒を含む。	
Fig.47 708	*	*	*	(21.8)	(3.3)		跨から脚部にかけてスケル。	石英粗粒を多く含む。	東播系
Fig.47 709	瓦質 副釜	*	*	20.4	(4.6)		跨一匁内外面横ナテ調整。口縁外周3条の凹溝。内面横ハケ、横ナテ調整。	長石、石英を多く含む。	
Fig.47 710	瓦質 瓶	*	*	23.7	(4.0)			チャート小穂・粗粒砂多し。	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	厚さ (cm)	底径 (cm)	特徴	動土・材質	備考
Fig47 711	土師器 羽茎	S	包合層V層	22.6	(5.1)		口が下方につく。口縁3条の凹窪。口と口縁内外面は 強い横ナデ調整。側部外面部粗粒者。内面横ハリ、ナ デ調整。	チャートの粗粒砂を多く 含む。	相模系
Fig47 712	瓦質 羽茎	*	*		(7.2)		側面部方形の押。上下下、口縁部強い横ナデ調整。側 部外面部粗粒者。指頭状粒が残る。湾下部から側部 にかけてスヌケ。	粘土	
Fig47 713	*	*	*	21.6	(4.8)		口縁部底面より、口縁部内面、湾上下底ナデ調整。側 部外面部粗粒者。内面に1条の沈線。湾の 幅1cm。	石英粒粗砂を含む。	
Fig47 714	土師器 羽茎	*	*	22.0	(5.8)		内外面横ナデ調整。	石英を多く含む。	横津C2型
Fig47 715	*	*	*		(6.0)		湾下から側部にかけてスヌケ、赤素。内面スヌケ。	石英粒を多く含む。	*
Fig47 716	瓦質 羽茎	*	*	27.0	(7.0)		直径15cm、湾上下、口縁部外面部横ナデ調整。側部外 面部粗粒者。湾下から側部にかけてスヌケ。	石英粒を多く含む。	
Fig47 717	土師器 羽茎	*	*	26.4	(6.9)		湾下部、側面部外面部ハケ。内面ナデ調整。	石英粒を多く含む。	横津C2型
Fig47 718	*	*	*	24.4	(7.0)		湾上下および先端部、強い横ナデ調整。側部外面部 ハケ。スヌケ。	石英粒多し。	*
Fig47 719	瓦質 羽茎	*	*	27.0	(3.9)		断面方形の押貼付。側部外面部粗粒者。	粘土	
Fig47 720	土師器 羽茎	*	*	26.5	(6.0)			石英粒を多く含む。	横津C2型
Fig47 721	鍋	*	*	28.0	(4.5)		口縁状凹、内外面ナデ調整。口縁部外面部強い横ナデ 調整。口部下から側部外面部にかけてスヌケ。	石英粒を多く含む。	
Fig47 722	甕・ 壺	*	*		(3.9)	160	内面自然輪。	石英、他の小礫、粗粒を含 む。	
Fig47 723	土錠	*	*				全幅30cm 全幅12cm 全厚1.1cm 重量3.4kg 孔φ0.5cm	粘土	
Fig47 724	*	*	*				全長2.8cm 全幅1.0cm 全厚1.0cm 孔径0.5cm 重量1.3g	粗粒を多く含む。	
Fig47 725	*	*	*				全長2.9cm 全幅1.1cm 全厚1.2cm 重量3.0g 孔φ0.3cm	粘土	
Fig47 726	*	*	*				全長4.0cm 全幅1.7cm 全厚1.6cm 孔径0.4cm 重量8.8g	粘土	
Fig47 727	*	*	*				全長4.0cm 全幅1.4cm 全厚1.5cm 重量6.6g 孔φ0.5cm	粘土、赤色風化鉢を含む。	
Fig47 728	*	*	*				全長3.8cm 全幅1.3cm 全厚1.3cm 重量5.6g 孔φ0.5cm	粘土	
Fig47 729	*	*	*				全長(3.7cm) 全幅1.5cm 全厚1.2cm 孔径0.5cm 重量5.3g	粘土	
Fig47 730	*	*	*				全長6.0cm 全幅2.3cm 全厚2.1cm 孔径0.2cm 重量26.2g	粗粒砂を多く含む。	
Fig47 731	*	*	*				全長4.9cm 全幅1.1cm 全厚1.1cm 孔径0.3cm 重量4.6g	粘土	
Fig47 732	*	*	*				全長4.9cm 全幅1.3cm 全厚1.3cm 孔径0.5cm 重量7.28g	粘土	
Fig47 733	*	*	*				全長4.9cm 全幅1.5cm 全厚1.4cm 孔径0.5cm 重量7.5g	チャートの繩を含む。	
Fig47 734	土製品	*	*				全長3.1cm 全幅3.2cm 全厚30cm 重量44.9g サイコロ状の四角柱で角を屈折する。		
Fig48 735	青磁 碗	包合層堆疊	(3.6)	5.6			輪内すきあかるる。外底に目跡が付着。輪は一部高 台を越えて外底にも見られる。	灰色精緻	龍泉窯系
Fig48 736	土師器 小舟	*	*	10.0	21	6.4		粘土	
Fig48 737	*	*	*	9.7	20	6.2	余切り、内外面横ナデ調整。	チャート砂の砂粒含む。	
Fig48 738	瓦器 碗	*	*	11.4	(3.0)		口縁外面部横ナデ調整。内面わずかにヘラミガキ(暗 文)が認められる。	粘土	
Fig48 739	土師器 碗	*	*		(2.3)	(7.0)	口クロ成形。	石英、長石、チャート砂を 多く含む。	
Fig48 740	土師器 舟	*	*	(13.6)	(3.3)	(8.0)	静止系切り？内外面横ナデ調整。	石英、チャート他の細粒 砂を多く含む。	
Fig48 741	土師器 碗	*	*	(13.0)	(3.2)		ロクロ成形。内外面横ナデ調整。内面ヘラミガキが 部分的に認められる。口縁部盛み出し。	粘土	
Fig48 742	黒色土器 白墨	*	*	14.0	(2.3)		内外面ヘラミガキ。	粘土、紫母を多く含む。	贈入品
Fig48 743	須志器 碗	*	*		(2.2)		円錐駄付高台、貼付部明瞭。系切り。内外面に火薬文。	粘土	
Fig48 744	須志器 皿	*	*	15.8	(1.8)		横ナデ調整。	粘土	
Fig48 745	黑色土器 A型 碗	*	*	(16.0)	(3.3)		内外面横ナデ調整。	石英、長石、藍母の細・中 粒砂を多く含む。	贈入品
Fig48 746	須志器 钵	*	*	17.4	(3.0)		横ナデ調整。	粘土	

Fig NO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	髙さ (cm)	底径 (cm)	特徴	黏土・材質	備考
Fig.48 247	黑色土器 鉢	S	包含層Ⅱ層	(1.5)	9.4		内底横方向に丁寧なミガキ。		搬入品
Fig.48 248	黑色土器 盃	*	*	12.4	21		丁寧な横ナメ調整。瓶み徑15cm。	粘土	
Fig.48 249	黑色土器 鉢	*	*	(3.8)	7.0		内外面横ナメ調整。余切り。	粘土	
Fig.48 250	黑色土器 盃	*	包含層Ⅱ層	(3.7)	12.1		ロクロ成形右まわり。底部中央25×3cmの横円孔を有し、成後に穿つ。外表面横ナメ調整。	粘土	
Fig.48 251	黑色土器 盃	*	*	(17.0)	1.9		外表面に寧な横ナメ調整。	粘土	
Fig.48 252	土器器 皿	*	*	19.4	24	15.2	外表面丁寧なヘミガキ。	赤色風化難を含む。	
Fig.48 253	黑色土器 杯	*	*	(1.5)	(7.0)		ハラ切ら、ナメ調整。ロクロ成形左まわり。外表面横ナメ調整。	粘土	
Fig.48 254	土器器 杯	*	*	8.9	31	5.1	ロクロ成形。ハラ切り。外表面横ナメ調整。	粘土	
Fig.48 255	*	*	*	12.4	28	8.1	外底に粘土繊の単位(幅1cm)をわずかに認める。	粘土	
Fig.48 256	*	*	*	(2.5)	8.0		瓶身の高台がハ字状にふんばる。	赤色風化難を含む。	
Fig.48 257	黑色土器 杯	*	*	(2.0)	(12.0)		ハラ切り。ナメ調整。外表面横ナメ調整。	粘土	
Fig.48 258	黑色土器 盃	*	*	(2.1)	(9.0)		外表面丁寧な横ナメ調整。	粘土	
Fig.48 259	土器器 杯	*	*	(2.4)	10.3		ロクロ成形。	粘土	
Fig.48 260	黑色土器 盃	*	*	(2.2)			丁寧な横ナメ調整。	粘土	
Fig.48 261	黑色土器 皿	*	*	(1.6)	10.6		ハラ切り。ナメ調整。外底滑丸。内底に尾根と見られる縦溝跡有り。	粘土	
Fig.48 262	土器器 杯	*	*	13.2	(2.8)		ロクロ成形。ハラ切り。外表面横ナメ調整。	赤色風化難の細・中粒砂を含む。	
Fig.48 263	*	*	*	(1.6)	8.0		横ナメ調整。	粘土	
Fig.48 264	黑色土器 盃	*	包含層Ⅲ層	15.8	(3.3)		ロクロ回転右まわり。外表面丁寧な横ナメ調整。	粘土	
Fig.48 265	*	*	*	(18.2)	3.5		ロクロ回転右まわり。立ち上がり外表面横方向の細い式模が有る。左井戸外底へラケズリ。口縁端部内面わずかに段折り。	粘土	
Fig.48 266	土器器 長持型	*	包含層Ⅳ層	(25.0)	(4.3)		シャーリングづく。口縁内外面丁寧な横ナメ調整。石英母・角閃石を多く含む。		搬入品
Fig.48 267	*	*	包含層Ⅳ層	(23.6)	(6.0)		口縁端部上方側に横ハラ。染色が銀の黒と大きくなる。外底スケ。	石英粒を多く含む。	
Fig.48 268	土器器 紀伊型	*	*	27.4	(5.6)		口縁は受け口状を呈す。口縁内外面横ナメ調整。脚部外縁ハラ。ナメ調整(ハケはほとんど消えていい記憶)。	結晶片岩・雲母細粒多し。	
Fig.48 269	土器器 紀伊型	*	*	20.0	(4.2)		口縁とは同じ位置に溝有り。脚・口縁横ナメ調整。脚下端ナメ調整。	石英板・磁粒多し。	
Fig.48 270	*	*	*	26.4	(4.8)		口縁からわずかに下に溝有り。口縁内外面横ナメ調整。内外面スケ。口唇部・脚先端部強い横ナメ調整に上り凹陥。	石英中・粗粒細多し。	
Fig.48 271	土器	*	包含層Ⅴ層				全長45cm 全幅13cm 全厚1.3cm 重量5.3kg 孔径0.5cm	チャート粘土。シャーリング。モットを含む。	
Fig.48 272	*	*	*				全長37cm 全幅13cm 全厚1.3cm 重量5.3kg 孔径0.4cm	石英・長石の細・中粒砂を含む。	
Fig.48 273	*	*	*				全長50cm 全幅13cm 全厚1.2cm 重量6.4kg 孔径0.4cm	チャート粘土の細・中粒砂を含む。	
Fig.49 774	瓦器 小皿	*	包含層	9.2	14	5.2	口縫内外面横ナメ調整。外底凸凹。	粘土	
Fig.49 775	*	*	*	8.4	(1.2)		口縫内外面横ナメ調整。	石英粗粒を多く含む。	
Fig.49 776	土器器 小皿	*	*	8.9	15	6.3	ハラ切り。	赤色粒。チャート・石英を含む。	
Fig.49 777	*	*	*	(11.0)	(2.1)		口縫端部横上げ・横ナメ調整。体部外縁側面に横溝有り。	粘土・全表面を含む。	
Fig.49 778	土器器 小杯	*	*	(9.8)	(2.0)	6.0	ハラ切り。	赤色粒多し。	
Fig.49 779	*	*	*	(8.0)	17	5.0	二次的鍛造のためスケ。一部変形。ハラ切り、ナメ調整。	粘土	
Fig.49 780	*	*	*	10.4	22	7.0	ハラ切り。	粘土	
Fig.49 781	土器器 小皿	*	*	9.6	14	5.8	内外面横ナメ調整。余切り。	粘土	
Fig.49 782	土器器 小杯	*	*	7.2	17	4.8	横ナメ調整。余切り。	粘土	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	深高 (cm)	底津 (cm)	剪裁	胎土・材質	備考
Fig49- 783	土師器 杯	S	混合層		(1.4)	6.0	ヘラ切り。	チャート、赤色粒、粗粒砂 多し。	
Fig49- 784	*	*	*		(1.2)	6.4	底紙薄い。縫取りか? 内外面ナデ調整。内面スク。	粘土	
Fig49- 785	*	*	*		(1.5)	(6.0)	横ナデ調整。ヘラ切り。	粘土	
Fig49- 786	*	*	*		(1.3)	6.0		粗粒砂を多く含む。	
Fig49- 787	*	*	*		(1.6)	7.2	素切り。	チャート、磁・粗粒砂多 い。	
Fig49- 788	*	*	*		(1.4)	(6.0)	ヘラ切り。	粘土	
Fig49- 789	*	*	*		(2.3)	(8.4)	素切り。	細粗粒を多く含む。	
Fig49- 790	*	*	*		(2.1)	6.8	全面ナデ調整。	粘土	
Fig49- 791	*	*	*		(1.5)	6.4	素切り。	粘土	
Fig49- 792	*	*	*		(1.5)	(6.2)	素切り。	細粗粒砂を含む。	
Fig49- 793	*	*	*		(1.7)	6.2	素切り。	粘土	
Fig49- 794	土師器 碗	*	*		(2.3)	6.8	素切り。内底設有り。	粘土	
Fig49- 795	*	*	*		(2.1)	(6.6)	素切り。	粘土	
Fig49- 796	*	*	*		(3.6)	(6.6)	素切り。	粘土	
Fig49- 797	*	*	*		(1.6)	5.8	器表調理。	粘土。石英粒を含む。	
Fig49- 798	*	*	*		(1.8)	6.8		粗粒砂を多く含む。	
Fig49- 799	*	*	*		(4.3)	7.0	底部赤切り。ナデ調整。ハ字状にふんばる高台。器表 の焼がれがほんじない。	石英、長石、青閃石を含 む。	
Fig49- 800	*	*	*		(2.7)	(6.0)	ペラ高台。素切り。	粘土	
Fig49- 801	*	*	*		(1.3)	7.4	乳白色に発色。素切り。	粘土	
Fig49- 802	*	*	*		(2.6)	6.4	外面前赤切り。ナデ調整。	粘土	
Fig49- 803	土師器 足高台合併	*	*		(2.8)	5.6		粗粒砂を含む。	
Fig49- 804	土師器 碗	*	*		(3.2)	(7.0)	内面ミガキ。外面白口日。素切り。断面逆台形状の 高台。	石英、チャート、赤色粒を含 む。	
Fig49- 805	*	*	*		(2.2)			粘土。赤色粒多し。	
Fig49- 806	土師器 杯	*	*	(14.0)	(3.6)		ロクロ形成。	チャート小繩を含む。	
Fig49- 807	*	*	*		15.6	(3.2)	外面白口日。横ナデ調整。	チャート、石英、赤色粒多 い。	
Fig49- 808	土師器 碗	*	*		(3.8)	(7.0)	内底状高台。素切り。	小繩、粗粒砂。チャート他 を含む。	
Fig49- 809	*	*	*		(4.5)	(6.0)	内底状高台。素切り。	粘土	
Fig49- 810	土師器 杯	*	*		12.6	4.8	外面白口日。	粘土	
Fig49- 811	*	*	*		(15.8)	(3.7)	(7.4)	外面白口日。素切り。底部断面に内板を確認でき る。	チャート、赤色粒多し。
Fig49- 812	*	*	*		14.8	4.1	7.4	外面白口日。素切り。	赤色粒多し。
Fig49- 813	*	*	*		13.8	4.0	6.4	外面白口日。底底素切り。底部の内板を断面で確認 できる。	石英、チャート細粒を含 む。
Fig50- 814	瓦器 碗	*	*		(1.1)	34	断面二角點削高台。外表面は褐色に発色。内面ヘラミ ガキ。	チャート小繩を含む。	
Fig50- 815	瓦器 小皿	*	*		7.4	1.45	口縁外面横ナデ調整。外底凹凸。	粘土	
Fig50- 816	*	*	*		8.4	1.2	6.6	外底凹凸面。ナデ調整。	石英他小繩含む。
Fig50- 817	*	*	*		7.9	1.8		口縁外面横ナデ調整。	粘土。チャート小繩を少 し含む。
Fig50- 818	瓦器 碗	*	*		11.8	2.8	4.6	口縁外面横ナデ調整。胴部外面指頭圧痕。小さな高 台。内面變形。	石英、長石、青閃石を含 む。
Fig50- 819	*	*	*		13.0	(2.65)		口縁外面横ナデ調整。内面に縮文。	粘土
Fig50- 820	*	*	*		(12.6)	(2.6)		口縁外面横ナデ調整。体部外面指頭圧痕。	粘土

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口縁 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig50 821	瓦製 瓶	S	匂合層	12.2	(2.5)		口縁外周横ナゲ調整。内面擦耗。	粘土	
Fig50 822	*	*	*	13.6	(3.0)		口縁外周横ナゲ調整。内面擦耗。	粘土	
Fig50 823	*	*	*	15.2	(3.2)		口縁外周強い横ナゲ調整。側部外周指圧痕。内面横 方向の縮みがわずかに見られる。	粘土	
Fig50 824	*	*	*	12.2	(2.95)		口縁外周から側部にかけて幅広く横ナゲ調整。内面 擦耗状態。	粘土	
Fig50 825	*	*	*	15.4	(3.1)		口縁外周横ナゲ調整。内面縮み。	粘土	
Fig50 826	*	*	*	(1.1)	2.8		断面三角の高台。	石英、長石を多く含む。	鏡入品
Fig50 827	白磁 小皿底部	*	*	(1.4)	3.7		内面透明釉。	磁鐵	
Fig50 828	青磁輪花 皿	*	*	(1.8)			透明度のある灰オリーブ釉。	灰白色磁鐵	
Fig50 829	白磁 皿	*	*	(2.6)			口充満。	灰白色磁鐵	
Fig50 830	白磁 小皿	*	*	(1.2)	5.2		底部釉を掻き取る。内面磨花文。	灰白色磁鐵	隙削花
Fig50 831	*	*	*	12.8	(2.3)		口丸。	白色磁鐵	
Fig50 832	青磁 小皿	*	*	11.6	(1.4)		外周底部付近露筋。透明度のある灰色の釉。	粘土	龍泉窯系
Fig50 833	白磁 小皿	*	*	9.0	2.4	4.0	切高台。見込みに目跡。透明釉。貫入。	白色磁鐵	
Fig50 834	青磁 瓶	*	*	14.1	(1.8)		透明度のあるオリーブ釉。口縁がわずかに外反。内 面に擦耗1条。	灰白色磁鐵	龍泉窯系
Fig50 835	*	*	*	16.4	(3.0)		内面2条の擦耗。	磁鐵	*
Fig50 836	*	*	*	14.4	(2.5)		画透弁文。	灰色磁鐵	*
Fig50 837	*	*	*	14.2	(3.4)		画透弁文。	灰色磁鐵	*
Fig50 838	*	*	*	18.0	(3.6)		画透弁文。	灰色、やや粗い胎土	*
Fig50 839	*	*	*	(16.6)	(6.3)		画透弁文。貫入。	灰色磁鐵	*
Fig50 840	*	*	*	(20)	5.8		薄緑色の釉。見込みに印字。費付の一部まで施釉。	灰白色磁鐵	*
Fig50 841	*	*	*	(2.2)			オリーブ色の透明度のある釉。脚口有り。	灰白色磁鐵	同安窯系
Fig50 842	北野燒 小皿	*	*	11.0	2.3	5.9	削出し高台。外底削り、外底まで施釉。	粗い胎土	
Fig50 843	撇口 天目	*	*	12.4	(3.2)		黑色釉。	灰白色磁鐵	
Fig50 844	備前 挂鉢	*	*	24.0	(5.0)			石英粒を多く含む。	
Fig50 845	東野系 挂鉢	*	*	28.0	(3.2)		内外面横ナゲ調整。	粘土	
Fig50 846	*	*	V	(30.0)	(6.4)		内外面横ナゲ調整。	チャート小砾。粗粒砂を 含む。	
Fig50 847	*	*	匂合層	31.4	(2.9)		内外面よこなで調整。口唇部凹状。	粘土	
Fig50 848	瓦貢 刷毛	*	*	20.8	4.8		幅1cmの方形縛。跨上下、口縁内外面横ナゲ調整。跨 下から側部にかけてスクラー。	粘土	
Fig50 849	*	*	*	22.2	(3.3)		口縁内外面横ナゲ調整。三角突唇の上下横ナゲ調整。チャート粗粒砂多し。 旁帯下部大スク。		
Fig50 850	土師器 刷毛	*	*	28.0	(5.4)		断面長方形の縛。内外面横ナゲ調整。	石英、角閃石を多く含む。	
Fig50 851	*	*	*	19.3	(5.5)		口唇部面取り。口縁内外面強い横ナゲ調整。側面面 には指跡による押出有り。側部外周叩き痕。	粘土	束接系
Fig50 852	*	*	*	23.2	(5.5)		内外面横ナゲ調整。	石英粗粒多し。	
Fig50 853	*	*	*	24.4	(7.1)		側部外周右上がり細めの叩き痕。口縁内外面横ナゲ 調整。	粘土	
Fig50 854	瓦貢 刷毛	*	*	30.3	3.25		口唇部面取り。断面三角の突唇。	粘土	
Fig50 855	土師器 刷毛	*	*	(13.4)	(6.5)		跨上下、端部横ナゲ調整。口縁内面横ナゲ調整。側部 外周縮ハラ、スク。	石英、漂母、角閃石を含 む。	
Fig50 856	土師器 小杯	*	祝乱層	(7.0)	(1.5)		内外面横ナゲ調整。赤切り。	磁粒砂を含む。	
Fig50 857	*	*	*	(8.6)	(1.8)	5.1	赤切り。	磁粒砂を多く含む。	
Fig50 858	*	*	*	(8.2)	1.5	(5.4)	赤切り。	粘土	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	部高 (cm)	底径 (cm)	特徴	黏土・材質	備考
Fig51 859	頭忠器 瓶	S	複乱層	(2.4)	5.8		内面火捺文。系切り。ロクロ成形。	粘土	
Fig51 860	土師器 杯	*	*	(2.6)	(7.6)		内外面横ナテ調整。系切り。	織紋移多し。	
Fig51 861	瓦器 瓶、底部	*	*	(2.2)	3.8		側部外面下辺仕様。	粘土	
Fig51 862	瓦器 小皿	*	*	(11.4)	(1.7)		口棒内外面横ナテ調整。外底指注痕有。	粘土	
Fig51 863	青磁 瓶	*	*	(1.8)	(6.0)		外底輪を削り取る。内底 ハジグザク文。瓶底部による ゾ字状の輪文を施す。	灰色粘土	同安窯系 1-2期
Fig51 864	白磁(小作 多角瓶)	*	*	(1.3)	3.6		高台を4カ所アーチ状に抉り込む。内底には抉り数の重ね焼きの目跡が見られる。	白色粘土	D類(8角)
Fig51 865	漆津 皿	*	*	(1.8)	4.4		横土。内外面白漆文の柄、内面に継目あり。		
Fig51 866	瓦質 刷茶	*	*	26.6	(3.3)		全面丁寧な横ナテ調整。	石英、長石細粒鉱を多く含む。	
Fig52 867	砥石	*	SD7上層	全長 8.1	全幅 5.3	3.8	使用4面。各面に砥打痕。無面ステ。重量315g。	灰状岩	
Fig52 868	*	*	包含層V層	全長 14.9	全幅 7.9	2.6	砥石面摩耗が顕著。遺物の半分が被熱半焼。重兼 340g。	石英粗面岩	
Fig52 869	*	*	SD30	全長 17.2	全幅 12.2	5.6	4面使用。被熱半焼。重量1840g。	砂岩	
Fig52 870	鉄釘	*	包含層V層	全長 6.9	全幅 0.6		重量24.8g。		
Fig52 871	鉄製器	*	P123	全長 6.6	全幅 1.0	1.0	棒状、重量9.3g。		
Fig52 872	鉄	*	P27	全長 6.5	全幅 4.6	1.3	重量53.8g。		
Fig52 873	石剣	*	包含層	24.3	(5.35)		(1)縁高から1.5cm下に断面台形の凹。外面は縱方向の丁寧な調整がなされている。側上部に併5mmの円孔。円孔から側に溝が削られている。内外面底部は段状を呈す。		
Fig52 874	古鉢	*	V層				新寛永・文政(1668~1683)。八貝貫、コ漏通、一文銭通りが良いので私蔵鉢ではない。		
Fig52 875	*	*	SB4-P4				4字中1字不明。		
Fig53 876	土師器 杯	*	SK90底	(2.3)	7.0		足高台部の充填粘土剥離。横ナテ調整。ヘラ切	粘土	
Fig53 877	土師器 碗	*	*	(1.65)	6.0		外面 左→右の削り。横ナテ調整。内面ハケ、ナテ調整。高台剥離。	粘土	
Fig53 878	土師器 杯	*	*	15.2	5.1	6.8	内外面横ナテ調整。ヘラ切り。	チャート他の粗粒鉱粉を含む。	
Fig53 879	白磁 碗	*	*	15.1	(3.8)		内面白縁下部へ横縫1条。外下面半まで施釉。	灰白土やや粗い粘土	V類
Fig53 880	頭忠器 皿	*	SD36	15.4	(2.3)	12.4	内外面横ナテ調整。	粘土	
Fig53 881	土師器 杯	*	SD35底	15.8	3.1	10.2	内外面横ナテ調整。ヘラ切り。	粘土	
Fig53 882	*	*	SK90底	(3.2)	8.1		黑色土部口端端擦タイブか? 内外ナテ調整。ヘラ切り。	チャートの細粒鉱粉を多く含む。	在施産
Fig53 883	青磁 束帯掛	*	SD34	26.7	10.7	7.5	内外面横ナテ調整。外底スズが激しく付着。黄赤色。	チャート他の小礫を含む。	
Fig53 884	土師器引 手垂掛	*	*	17.2	(7.8)		(1)縁外面。体部内面丁寧な横ナテ調整。薄て大小の押仕掛け。側部外面上部に上がりの叩き痕。外底スズ。	粘土	
Fig53 885	唐物 團扇	*	*	23.6	(5.0)		内外面横ナテ調整。	石英他の粗粒粉を含む。	
Fig53 886	青磁 常滑	*	*	(11.2)			内曲横ナテ調整。外底筋子状の押印。自然釉。	灰色、粗粒粉を含む。	
Fig53 887	土師器 裏	*	SK90	35.2	(13.8)		口部底面取り。外外面ハケ、ナテ調整。	チャートの小礫を多く含む。	
Fig54 888	土師器 杯	*	トレンチ	(4.3)			摩耗が激しい。	チャートの粗粒を含む。	
Fig54 889	土師器	*	*	8.0	(1.3)		内外面横ナテ調整。ヘラ切り。	チャート小礫、粗粒粉を含む。	
Fig54 890	*	*	*	(11.0)	(1.6)		ヘラ切り。内外面横ナテ調整。	粘土	
Fig54 891	頭忠器 皿	*	*	14.6	2.0	10.5	全面表裏の荒れが激しい。	粘土	
Fig54 892	土師器 杯	*	*	(1.9)	6.6		系切り。円板状高台。	粘土	
Fig54 893	青磁 皿	*	*	(1.0)	(3.0)		薄灰緑色の釉。外底のみみを削り取っている。見点 盤日のジグザグ文。施墨による直線。	灰色粘土	同安窯系 1-2
Fig54 894	瓦器 碗	*	*	14.8	(3.8)		内外面ナテ調整。	粘土	
Fig54 895	土師器 杯	*	*	12.2	3.1	7.0	口縁内面に無い尤難。体部内面中空にやや太い沈線。	粘土	

FigNo. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺集名・出土 地点・ 層位	口徑 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig.54 895	土師器 杯	S	混合層	(2.3)	4.4		手切り。内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.54 897	青磁 碗	*	トレンチ	16.6 (5.2)			鏡面舟形。灰褐色釉。	灰色精緻	鹿島窯系 1-5-b類
Fig.54 898	土師器 碗	*	P489	17.4 (4.1)			内外面横方向ハミガキ。下地に擦痕有り。	粘土	
Fig.54 899	青磁 碗	*	トレンチ	14.2 (3.7)			口縁内面2条の削線。削線下に支模を片切り取り。	灰色精緻	1-4類
Fig.54 900	土師器 土鉢	*	*				全長49cm 全幅13cm 全厚13cm 重量6.3kg 孔径0.4cm	粘土	
Fig.54 901	青白磁 合子蓋	*	混合層	5.2	1.5		内面天井部のみ施釉。外面部菊花文を丸ノミ工具で削る。	灰白色精緻	
Fig.54 902	*	*	*	7.0	(1.1)		外面部菊花文を片切り取り。	白色精緻	
Fig.54 903	白磁 小皿底部	*	*		(1.1)	3.8	アーチ状高台。透明釉。	粘土	
Fig.54 904	白磁 盤	*	*		(2.2)		外面部下平、内底露胎。	白色精緻	灰期
Fig.54 905	青磁 盤	*	*		(0.9)	5.8	外底粘接き取り。内底部、片切り取り。	灰色精緻	1-2類
Fig.54 906	白磁 碗	*	*		(1.3)		透明度の良い釉。内面部片切り取りで文様を取っている。底部付近まで施釉。	白色精緻	晩期
Fig.54 907	青磁 碗	*	表揮	(2.3)	5.7		裏側ねじり付まで施釉。	灰色精緻	
Fig.54 908	土師器 碗	*	混合層	(2.1)	6.1		内面ハケ、ナデ調整。手切り。ナデ調整。	粘土	
Fig.54 909	帯滑 蓋	*	*		(4.6)		被熱赤変。	比較的粗土	
Fig.54 910	青磁 皿	*	*	9.5	2.15	4.0	外面部は中位まで施釉。内面露胎。	灰色、やや粗い粘土	同安窯系 1-2類
Fig.54 911	黑墨器 碗	*	*		(2.3)	7.2	内外面横ナデ調整。内面下地に横ハケ調整。	粘土	
Fig.54 912	白磁 皿	*	*	14.8	(1.9)		口縁内面施調さ。	灰色精緻	灰期
Fig.54 913	黒墨器 西鉢	*	*		(2.6)	9.6	手切り。	粘土	
Fig.54 914	瓦質 器蓋	*	*	26.0	(4.95)		口縁内外面強い横子調整。器の幅13cm。	粘土に少量の小礫を含む。	
Fig.54 915	瓦質 皿	*	*	24.0	(5.6)		口縁部面取り。口縁内外面横ナデ調整。脚部外面部施釉。	粘土	土佐型
Fig.54 916	土師器 杯	*	*	13.7	2.6	1.8	内外面横ナデ調整。外底ハラ切り。ナデ調整。	粘土	
Fig.54 917	*	*	*		(2.4)	5.2	内外面横ナデ調整。手切り。	粘土	
Fig.54 918	黑墨器 杯	*	*	13.6	(2.7)		内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.54 919	瓦器 盤	*	*		(1.4)	4.4	しっかりした高台。内面露胎。	粘土	
Fig.54 920	黑墨器 杯	*	*	11.0	(2.8)		内外面横ナデ調整。特に口縁内外面は強い横ナデ調整。	粘土	
Fig.54 921	土師器 杯	*	*	13.9	4.7	6.7	横ナデ調整。手切り。	粘土	
Fig.54 922	*	*	*	13.6	4.75	7.0	内外面横ナデ調整。手切り。	粘土	
Fig.54 923	*	*	*	14.2	(3.0)		内外面横ナデ調整。	チャート、赤色粒を多く含む。	
Fig.54 924	瓦器 碗	*	*	14.0	(3.3)		口縁外縁ハミガキ。ナデ調整。内面摩耗。	粘土	
Fig.54 925	土師器 杯	*	*	14.1	4.6	6.2	内外面横ナデ調整。手切り。	粘土	
Fig.54 926	*	*	*	13.8	4.4	7.1	内外面横ナデ調整。手切り。	赤色粒を多く含む。	
Fig.54 927	土師器 蓋	*	*	24.6	(7.2)		口縁部面取り。口縁内外面横ナデ調整。脚部外面部上部の焼き痕。突端下から脚部にかけて煮しく保ける。	粘土	東播系
Fig.54 928	黒墨器 蓋	NW	SBS	12.2	(1.3)		口縁外縁強い横ナデ調整。内面横ナデ調整。	粘土	
Fig.54 929	*	*	SBS-柱直	(12.0)	(1.2)		全面横ナデ調整。	粘土	
Fig.54 930	*	*	SBS	16.2	(1.6)		内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.54 931	*	*	*		(2.7)		ロクロ右回り。	チャート地の中程度を少含む。	
Fig.54 932	*	*	*	14.6	2.3	12.0	内外面横ナデ調整。	粘土	

FigNO. 遺物番号	種別 年代	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	若微	地土・材質	備考
Fig57 932	須恵器 杯	NW	SB5	(13.0)	(2.8)		俄ナデ調整。	地土	
Fig57 934	土師器 皿	*	SB5-Ⅱ直	16.2	(1.9)		俄ナデ調整。	地土	個人品?
Fig57 935	陶土器 杯	*	SB5	8.0	(3.9)			石英粒混の中～粗粒砂を含む。	
Fig58 936	須恵器 杯	*	SB6	14.8	(2.4)		俄ナデ調整。	地土	
Fig58 937	土師器 杯	*	*	14.4	(1.9)		俄ナデ調整。	地土	
Fig58 938	須恵器 皿	*	SB6-P2	16.4	(2.0)		内外面俄ナデ調整。	地土	
Fig58 939	*	*	SB6-P3	17.8	2.2	14.0	内外面俄ナデ調整。外外面火被文有り。外底ヘラ切 り後、比較的丁寧なナデ調整。	地土	
Fig59 940	須恵器 杯	*	SK50	(12.9)	(3.8)	(8.4)	内外面俄ナデ調整。外底取り離し後、弱い削り、ナデ 調整。底1cmの粘土被り有り。	地土	
Fig59 941	*	*	*		(3.1)	8.4	内外面俄ナデ調整。外底は切り離し後、極めて丁寧 なナデ調整にミガキもあり？	地土	赤色風化層を含む。
Fig59 942	*	*	*	(12.8)	(3.5)		内外面俄ナデ調整。	地土	
Fig59 943	*	*	*	11.2	3.4	6.8	内外面ナデ調整。外底底1cmの粘土被り有り。	地土	
Fig59 944	*	*	*	(14.0)	(3.6)	8.0	底部内外面俄ナデ調整。外底ヘラ切り、ナデ調整。内 底ナデ調整。	地土	
Fig59 945	須恵器 皿	*	*	20.2	(2.4)		内外面俄ナデ調整。端部をわずかに盛み出し。	地土	
Fig59 946	須恵器 蓋組み	*	*		(1.5)		俄ナデ調整。	地土	
Fig59 947	須恵器 皿	*	*	(16.0)	(2.0)		内面俄ナデ調整。外側削り、俄ナデ調整。端部盛み出 し、外側取り。	地土	
Fig59 948	*	*	*		16.4	(1.2)	内外面俄ナデ調整。端部盛み出し。口容部取り。	地土	
Fig59 949	*	*	*	(21.0)	(2.0)		内外面俄ナデ調整。端部盛み出し。外侧面取り。	地土	
Fig59 950	*	*	*	19.0	(1.3)		内外面俄ナデ調整。盛み削り。端部盛み出し、外侧面 取り。	地土	
Fig59 951	須恵器 皿	*	*	17.0	2.7	13.0	底部内外面俄ナデ調整。外底丁寧なナデによりヘラ切 り底を削る。内底もナデ調整。口縁部盛み上げ。	地土	
Fig59 952	*	*	*	17.3	2.4	14.1	底部内外面、内底俄ナデ調整。外底切り離し後、削り、 ナデ調整。	地土	
Fig59 953	*	*	SK49	17.6	2.6	16.5	内外面俄ナデ調整。端部盛み上げ。外底切り離し後、 俄ナデ調整。	地土	
Fig59 954	*	*	*	16.1	2.35	13.8	俄ナデ調整。外底ヘラ切り、俄ナデ調整。口縁部削 り上り。口容部外側取り。	地土	
Fig59 955	*	*	SK50	(16.8)	(2.2)		削と比較して厚唇が薄い。内外面俄ナデ調整。口縁 部盛み上げ。	地土	
Fig59 956	須恵器 杯	*	*	(1.1)	(8.0)		内外面俄ナデ調整。	地土	
Fig59 957	須恵器 皿	*	*	16.8	(2.6)	(9.0)	底部内外面俄ナデ調整。外底切り離し後、ナデ調整。 わずかに粘土被り有り。内底ナデ調整。	地土	
Fig59 958	*	*	*	16.0	2.3	10.0	底部内外面俄ナデ調整。外底ナデを施し、底1cmの 粘土被り有り。内底ナデ調整。口縁部盛み出し、内面取 り。	地土	
Fig59 959	須恵器 杯	*	*	13.4	4.1	8.5	底部内外面俄ナデ調整。外底ヘラ切り、ナデ調整。内 底ナデ調整。外底中央に盛付着。	地土	
Fig59 960	*	*	*		(1.1)	7.0	外底切り離し後、丁寧なナデ調整。1cm内外の粘土 被り有り。内底俄ナデ調整。外底にメ印、ヌヌ有り。	地土	
Fig59 961	*	*	*	15.0	(3.1)		内外面俄ナデ調整。外外面火被文。	地土	
Fig59 962	土師器 甕	*	*	19.8	(10.0)		「X」字状外反縁。外腹わざかに肥厚。口容盛多い 俄ナデにより凹円。口縁外面俄ナデ。側部外面取 り。内面取りスケ。外面被熱熱変。	チャート粗粒砂を多く含む。	
Fig59 963	*	*	*	(15.8)	(8.0)		口縫運部を盛み上げ。口縫部横ナデ調整。口縁内外 面俄ナデ。外面俄ナデ調整。側部外縫行下がりハケ。 内面取り。	石英砂を多く含む。	
Fig60 964	*	*	SK49-50	26.0	(5.5)		口縫運部に盛み上げ。口縫部横ナデ調整。口縁内 面俄ナデ。外面俄ナデ調整。側部外縫行下がりハケ。 内面取り。	頁岩粗粒砂、他を含む。	
Fig60 965	須恵器 杯	*	SK50	(4.4)			口縫を平周に押つけて、水平にならしている。		
Fig60 966	*	*	*	(10.4)	(3.1)		口縫を押つけてより水平にし、内側に盛り出す。 赤色風化層を多く含む。		
Fig60 967	*	*	*	(5.3)			内面布目。外面ナデ調整。	頁岩他の粗粒砂を含む。	
Fig60 968	*	*	*	(8.9)			内面布目。外面ナデ調整痕。印压痕有り。	風化輝。石英結を含む。	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺集名・出土 地点・層位	口径 (cm)	髙さ (cm)	底径 (cm)	特徴	鉱土・材質	備考
Fig60 969	製塙土器	NW	SK50	(6.7)	外面ナデ調整。内面布目。	石英、長石細粒と頁岩粗粒砂を含む。			
Fig60 970	石製品	*	*	全長 15.1	全幅 2.6	全长 1.5	両端掌状。較然赤色。重量91.1g。	結晶片岩	
Fig60 971	土器器 皿	*	SD15	(1.7)	(7.0)		ヘラ切り、ナデ調整。丁寧な横ナデ調整。	赤色風化層を含む。	
Fig60 972	*	*	*	(12.4)	(1.9)	(10.0)	横ナデ調整。	長石他の砂粒	
Fig60 973	*	*	*	14.9	1.7		内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig60 974	*	*	*	13.6	1.7	9.0	内外面横ナデ調整。	チャートの砂粒を含む。	
Fig60 975	土器器 杯	*	*	(12.8)	2.6	(8.0)	横ナデ調整。ヘラ切り、ナデ調整。丁寧な仕上げ。	粘土	
Fig60 976	*	*	*	12.1	2.9	6.5	内外面横ナデ調整。赤切り、ナデ調整。口縁内外面ヌ スク。	長石、赤色風化層	
Fig60 977	*	*	*	13.2	3.1	8.2	横ナデ調整。ヘラ切り、ナデ調整。丁寧な仕上げ。	粘土	
Fig60 978	*	*	*	11.8	2.9	7.3	内外面横ナデ調整。ヘラ切り、ナデ調整。丁寧な仕上げ。	粘土	
Fig60 979	*	*	*	11.8	3.1	8.4	横ナデ調整。ヘラ切り、ナデ調整。丁寧な仕上げ。	粘土	
Fig60 980	*	*	*	13.4	(4.3)		ヘラミガキ。丁寧な仕上げ。	チャート砂粒を含む。	
Fig60 981	灰釉 碗	*	*	15.2	(2.5)		口縁付近わずかに施釉。	粘土	
Fig60 982	黑志器 杯	*	SD16	14.4	3.5	9.4	横ナデ調整。	粘土	
Fig60 983	*	*	SD22	(14.0)	(2.3)		横ナデ調整。	粘土	
Fig60 984	黑志器 皿	*	*	(16.4)	(2.5)		横ナデ調整。外刃切り廻し後、ミガキ。丁寧な仕上げ。	粘土	
Fig60 985	黑志器 杯	*	*	(3.3)	7.4		横ナデ調整。高台費付は円状。丁寧な仕上げ。	粘土	
Fig60 986	製塙土器	*	*	18.0	(5.5)		内面布目。外面ナデ調整。	小礫を含む。	
Fig60 987	*	*	*	(4.2)			内面布目。	砂粒を含む。	
Fig60 988	土器器 要	*	SD16	(16.0)	(8.5)		シャーモットを含む。口縁内外面横ナデ調整。側部 外面右下がりハケ、内側ハケ。横ナデ調整。	チャート他の粗粒多し。	
Fig60 989	土器器 土鉢	*	SD22				全長3.8cm、全幅10cm、全厚1.1cm、重量30g。	粘土	
Fig60 990	黑志器 皿	*	P206		(14)		縫み律2.3cm、横ナデ調整。丁寧な仕上げ。	粘土	
Fig60 991	黑志器 杯	*	P213	14.6	(3.0)		粘土帶接合部で欠損。横ナデ調整。丁寧な仕上げ。	粘土	
Fig60 992	製塙土器	*	P205	(9.8)	(7.6)		内面は縦方向に口横の筋がある。口縁外表面は高熱 により焼け、わずかに液状化を呈す。	粗粒砂を含む。	
Fig60 993	黑志器 杯	*	P204	(14.0)	(3.9)	(8.0)	内外面横ナデ調整。外削起上筋の厚径有り。	粘土	
Fig60 994	土器器 皿	*	P205	16.2	(1.5)		内外面ヘラミガキ。	粘土	
Fig60 995	土器器 要	*	*	15.0	(7.1)		口斜延び+横ナデによる面取り。口縁内外面横ハケ。 外面横ナデ調整。側部外面横ハケ、内面横ハケ、ナデ 調整。外削口端下に段差。	石英を多く含む。	
Fig61 996	黑志器 杯身	*	混合層Ⅱ層	12.5	4.5		側部下半から底筋にかけてヘラケズリ。内外面横ナ デ調整。ロクロ白目有り。	石英小礫を含む。	
Fig61 997	黑志器 杯身	*	混合層Ⅱ層	12.2	(2.7)		内外面丁寧な横ナデ調整。	粘土	
Fig61 998	黑志器 杯身	*	*	15.3	(4.0)		左←右方凹削り+ロクロ左回り。天井部外削り。 強は横ナデ調整。	粘土	
Fig61 999	黑志器 皿	*	混合層Ⅱ層	15.0	1.8	11.7	高元燒成といより、酸化燒成の発色。内面横 横ナデ調整。口縁底部強く拂み上げ。外底端15cm前後 の粘土層を認める。	長石粒、磁粒を多く含む。	
Fig61 1000	*	*	*	(16.0)	(2.0)		丁寧な横ナデ調整。	粘土	
Fig61 1001	*	*	*	16.2	2.6	10.0	内外面横ナデ調整。外底ナデ調整。口縁内面凹み。	粘土	
Fig61 1002	*	*	*	14.2	2.0	10.0	内外面丁寧なナデ調整。	粘土	
Fig61 1003	*	*	*	15.6	2.0	10.5	内外面横ナデ調整。外底ナデ調整。	粘土	
Fig61 1004	*	*	*	(18.6)	2.5	(15.0)	口縁内面凹み。内外面横ナデ調整。外底丁寧なナデ 調整。	粘土	
Fig61 1005	*	*	*	16.2	2.1	13.2	内外面横ナデ調整。酸化燒成。	粘土	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	特徴	地土・材質	備考
Fig61 1006	頭忠器 瓶	NW	気合崩Ⅲ層	(16.4)	2.1	(12.0)	内外面横ナテ調整。口縁内面円凹状。外底に1~15cm幅の船上縫の堆積を認め。	粘土	
Fig61 1007	*	*	*	(17.4)	(2.0)	(13.0)	焼成不良。内外面丁寧な横ナテ調整。外底ナテ調整。叩き目状の平底圧痕有り。	粘土	
Fig61 1008	*	*	*	17.5	2.5	12.0	口縁内面円凹。内外面横ナテ調整。外底ナテ調整。叩き目状の平底圧痕有り。	粘土	
Fig61 1009	頭忠器 杯	*	*	(2.1)	(8.0)	*	内外面横ナテ調整。外底ナテ調整。	粘土	
Fig61 1010	*	*	*	(12.8)	3.0	(9.0)	焼成不良。内外面横ナテ調整。外底丁寧なナテ調整。	粘土	
Fig61 1011	*	*	*	(12.8)	(3.8)	(8.6)	内外面横ナテ調整。外底削りの後、丁寧なナテ調整。	粘土	
Fig61 1012	*	*	*	(12.8)	(3.1)	(8.0)	内外面横ナテ調整。焼成不良。	粘土	
Fig61 1013	*	*	*	13.4	3.3	9.0	内外面横ナテ調整。内底削り、ナテ調整。	粘土	
Fig61 1014	*	*	*	13.6	3.5	8.6	内外面横ナテ調整。外底丁寧なナテ調整。	粘土	
Fig61 1015	*	*	*	(13.8)	(3.3)	(9.0)	焼成不良。内外面横ナテ調整。	粘土	
Fig61 1016	*	*	*	(13.0)	3.0	(8.6)	丁寧な横ナテ調整。	粘土	
Fig61 1017	*	*	*	13.5	3.6	8.0	内外面横ナテ調整。外底ナテ調整。	粘土	
Fig61 1018	*	*	*	12.3	4.0	8.2	横ナテ調整。外底丁寧なナテ調整。	粘土	
Fig61 1019	*	*	*	(12.8)	(3.3)	(7.0)	丁寧な横ナテ調整。	粘土	
Fig61 1020	*	*	*	13.2	4.1	8.2	内外面横ナテ調整。外底ナテ仕上げ。	粘土	
Fig61 1021	*	*	*	(12.4)	3.2	(8.0)	内外面横ナテ調整。外底ナテ調整。外底に×のヘラ記号。	粘土	
Fig61 1022	頭忠器 蓋	*	*	18.4	(2.25)	*	口縁部肥厚し。先端とがる。内外面横ナテ調整。	粘土	
Fig61 1023	*	*	*	*	(1.5)	*	内外面丁寧な横ナテ調整。	粘土	
Fig61 1024	*	*	*	12.6	1.9	*	内外面丁寧な横ナテ調整。転用鏡の可能性。鏡み注26mm。	粘土	
Fig61 1025	*	*	*	14.3	(1.6)	*	丁寧な横ナテ調整。口縁外部面取り。	粘土	
Fig61 1026	*	*	*	17.8	(1.4)	*	内外面横ナテ調整。口縁内面円凹。	粘土、チャート、長石の粗粒が目立つ。	
Fig61 1027	*	*	*	14.0	(1.0)	*	内外面丁寧な横ナテ調整。	粘土	
Fig61 1028	*	*	*	13.2	(1.6)	*	内外面丁寧な横ナテ調整。外底丁寧な横ナテ調整。天井部面削り、ナゲ、ヘラミガキ。	粘土	
Fig61 1029	*	*	*	22.4	(2.3)	*	内外面横ナテ調整。口縁部横ナテ面取り。	粘土	
Fig61 1030	*	*	*	16.8	1.7	*	内底及び口縁部外表面横ナテ調整。天井部外削り跡し後、鍛な仕上げ。	面・板状鉱を少量含む。	
Fig61 1031	*	*	*	19.6	(1.8)	*	内外面丁寧な横ナテ調整。ロクロ左回り。	粘土	
Fig61 1032	頭忠器 高杯脚部	*	*	(4.2)	*	*	内外面丁寧な横ナテ調整。	粘土	
Fig61 1033	*	*	*	(4.4)	12.2	*	内外面横ナテ調整。	粘土	
Fig61 1034	土師器 瓶	*	*	(12.8)	(1.3)	(9.0)	口縁内外面横ナテ調整。底面内外面ナテ調整。	チャート、石英岩の粗粒砂多し。	
Fig62 1035	*	*	*	15.8	1.6	13.0	内外面ヘラミガキ。	粘土	
Fig62 1036	*	*	*	17.0	1.4	14.3	内外表器の荒れが激しい。ヘラ切り。	赤色風化鉄を含む。	
Fig62 1037	*	*	*	(16.6)	(14.5)	(14.1)	横ナテ調整。外底に×ヘラ記号。	粘土、赤色風化鉄を含む。	
Fig62 1038	土師器 杯	*	*	13.8	(2.6)	9.0	体部小位割らみ、口縁部外反。ヘラ切り? 体部内凹面横ナテ調整。底部ナテ調整。	粘土	
Fig62 1039	*	*	*	17.2	3.75	10.8	内外面器表の荒れが激しい。	赤色風化鉄粒を多く含む。	
Fig62 1040	*	*	*	13.2	2.5	8.8	内外面器表の荒れが激しい。体部が膨らみ、口縁部外反。	長石・赤色風化鉄粒を含む。	
Fig62 1041	*	*	*	(12.0)	(2.7)	(7.0)	内外面横ナテ調整。	チャート他の粗粒砂を含む。	
Fig62 1042	*	*	*	(12.8)	(3.3)	(7.0)	内外面横ナテ調整。	チャート、石英岩を含む。	
Fig62 1043	*	*	*	15.2	4.1	10.6	内外面横ナテ調整。余切り。	粘土	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口徑 (cm)	厚さ (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig62 1044	土器器 体	NW	混合層裏層	(13.0)	(3.9)		系切り。	胎土	
Fig62 1045	*	*	*	16.2	(4.0)		内外面横ナテ調整。外沿下平スケ。	チャート他の砂粒を含む。	
Fig62 1046	*	*	*	(2.2)	(8.6)		内外面横ナテ調整。ヘラ切り?	胎土、赤色風化層を含む。	
Fig62 1047	土器器 体 頂部	*	*	(1.7)	(6.6)			磁紋糸を含む。	
Fig62 1048	土器器 柄	*	*	(2.2)	4.8		しつかりした粘付高台。底部円板に体部をつないで立ち上がっていることが、細部調整で見られる。	赤色風化層を含む。	
Fig62 1049	*	*	*	(2.0)	8.8		しつかりした粘付高台。ヘラ切り。ナテ調整。体部外 面横ナテ、内面ナテ調整。	赤色風化層を含む。	
Fig62 1050	縁輪 耳皿	*	*	(2.7)				胎土雑穀	浜北系
Fig62 1051	縁輪 碗	*	*	(4.2)	7.1		削りだし高台。内面に段有り。外底まで全面施釉。	やや乾い胎土	*
Fig62 1052	土器器 柄	*	*	17.2	4.7	9.6	表がよくしつかりした高台。黒色土器 A型模倣施 釉?	胎土、赤色風化層を含む。	
Fig62 1053 天目	*	*	*	(0.9)	(7.0)		内外面褐色。	褐灰色	
Fig62 1054 A型 梗	黒色土器 A型 梗	*	*				比較的しつかりした高台。内底施丁寧なヘラミガキ。 か? 内面激しく研磨。	石英、角閃石。雲母を多く 含む。	搬入品
Fig62 1055	*	*	*	(3.7)			外面部横ナテ、ナテ調整。内面横ヘラミガキ。	チャート小確を含む。	*
Fig62 1056	灰地 窓	*	*	15.4	(1.6)		内外面横ナテ調整。丁寧な仕上げ。口縁は王跡吹。	胎土	
Fig62 1057	縁輪 碗	*	*	(2.5)	7.4		削りだし高台。緑の発色は施して薄い。	胎土やや粗い。しまりが ない。	浜西か浜北
Fig62 1058	黒色土器 A型 梗	*	*	18.0	4.4	9.2	内外面丁寧な横ヘラミガキ。外底も丁寧な横ヘラミガ キが施されていると思われるが、器表が焼けている。 削出三角窓のしつかりした高台。	胎土、石英、金雲母を含 む。	搬入品
Fig62 1059	青磁 碗	*	*	(2.0)	(6.0)		底部横縫合取り。費替の一部にまで釉が及ぶ。緑磁 色。貞人。	胎土	広東系
Fig62 1060	*	*	*	(2.5)	(6.6)		薄緑色。外底既ノ目状に釉洒落。高台斜面前方。見込 ムに片切端による花文。	灰色胎土。	龍泉窑系
Fig62 1061	東諸希 西鉢	*	*	(25.0)	(4.9)		内外面横ナテ調整。	チャートの小確を含む。	
Fig62 1062	土器器 裏	*	*	15.4	(3.1)		口縁外外面横ナテ調整、内外面スケ。	チャート粗粒糸を多く含 む。	
Fig62 1063	*	*	*	16.0	(3.4)		口縁外外面横ナテ調整。側部外表面ハケ。内外面は げし?スケ。	石英、角閃石を多く含む。	
Fig62 1064	移動式 羽籠	*	*	(2.3)			内外面スケ。内面にいいヶ。	石英他。磁粉を含む。	
Fig62 1065	土器器 裏	*	*	(18.0)	(6.8)		側部外表面、横・機方向ハケ調整。口縁内外面横ハケ調 整。側部外表面右上がり、内外面横方向ハケ。	チャートの小確、粗粒糸 を多く含む。	
Fig62 1066	*	*	*	14.0	(5.4)		口縫部底部取り、内外面ナテ調整。外面部熱変形。	チャートの小確を多く含 む。	
Fig62 1067	*	*	*	(12.0)	(6.0)		口縁外外面横方向ハケ調整。内面下端に横ハケ有り。 側部外表面右上がり、内外面横方向ハケ。	石英粒を多く含む。	
Fig62 1068	*	*	*	18.0	(6.5)		(1)斜部外表面右上がり内外面横方角の深いナテ調整。側 部外表面、横機方向ハケ。	石英、金雲母を多く含む。	
Fig62 1069	*	*	*	(21.8)	(6.0)		(2)口縁外外面横深いナテ調整。側部外表面横ハケ。側 部内外面横ハケ、縱方向ナテ調整。口縁内面下端にハ ケ。	石英粒を多く含む。	
Fig62 1070	*	*	*	(17.8)	(6.8)		上刷部外表面・窓内面にハケ。口縁は彌上上げで、 深い横ナテ調整。外面部熱変形。	チャート他の砂粒を含 む。	
Fig62 1071	*	*	*	27.7	(5.0)		内面横方向、側部外表面横方向のハケ。	石英、長石の粗粒糸を多 く含む。	
Fig62 1072	*	*	*	17.2	(10.1)		口縁外方に膨らむ。口縁外外面横ナテ調整。口縁端 部横み上げ、浅い横ナテ調整。側部内面横ナテ調整。 外縫横子口状平底。横ハケ、縦ハケ調整。内面 スケ。外面部熱変形。	チャート他の砂粒を多く 含む。	
Fig62 1073	*	*	*	24.5	(10.5)		(1)口縁外外面横方角深いナテ調整。側部外表面右下がり ハケ。内面上部横ハケ。中位以下削端によるナテ 調整。	石英粒を多く含む。長石、 金雲母を含む。	
Fig62 1074	承器器 短脚壺	*	*	(6.0)	(3.9)		内外面横ナテ調整。	胎土	
Fig62 1075	*	*	*	10.8	(3.5)		内外面横ナテ調整。内面 左→右方向の削り。頭部 から側部にかけて自然縫。	胎土、堅致	
Fig62 1076	承器器 裏	*	*	(12.6)	(5.8)		口縁外外面横ナテ調整。側部外表面青海波文。口縁端 部下垂氷柱。	胎土、堅致	
Fig62 1077	*	*	*	18.2	(10.2)		口縫部内丁寧な横ナテ調整。側部外表面叩き痕。内 面青海波文をナテ消す。	胎土内、外面横ナテ調整。側部外表面平行叩き痕。内	
Fig62 1078	*	*	*	18.2	(6.4)		面青海波文、ナテ調整。外面自然縫。	灰色胎土。	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	深高 (cm)	英単語 (cm)	特徴	勒上・材質	備考
Fig63 1079	頭部 瓦耳棒	NW	玄合層Ⅲ層		(8.6)		耳状把手。把手に13cmの円孔。	粘土	
Fig63 1080	頭部 瓦耳棒	*	*		(13.4)	(15.0)	体部外面横ナゲ、把手、体部内面横ナゲ調整、外底ハ リ記号、内底粗粒土痕。	粘土	
Fig64 1081	土錐形 土錐	*	*				全長(2.2cm) 全幅1.1cm 全厚1.1cm 重量2.8g 孔径0.3cm	石英粗粒砂を含む。	
Fig64 1082	*	*	*				全長4.0cm 全幅1.0cm 全厚1.0cm 重量2.8g 孔径0.3cm	石英他の粗粒砂を含む。	
Fig64 1083	*	*	*				全長4.0cm 全幅1.3cm 全厚1.4cm 重量4.7g 孔径0.5cm	粘土	
Fig64 1084	*	*	*				全長4.4cm 全幅1.3cm 全厚1.1cm 重量4.4g 孔径0.3cm	頁岩、石英などの粗粒砂 を含む。	
Fig64 1085	*	*	*				全長3.3cm 全幅1.0cm 全厚1.0cm 重量2.7g 孔径0.3cm	粘土	
Fig64 1086	*	*	*				全長12.7cm ¹ 分幅1.0cm 全厚0.9cm 重量1.6g 孔径0.3cm	粘土	
Fig64 1087	*	*	*				全長5.4cm 全幅1.3cm 全厚1.2cm 重量5.9g 孔径0.35cm	チャート他の繊・粗粒 を含む。	
Fig64 1088	*	*	*				全長4.3cm 全幅1.4cm 全厚1.3cm 重量5.4g 孔径0.3cm	粘土	
Fig64 1089	*	*	*				全長4.5cm 全幅1.1cm 全厚1.0cm 重量4.2g 孔径0.3cm	粘土	
Fig64 1090	*	*	*				全長37.5cm ¹ 全幅1.1cm 全厚1.2cm 重量4.5g 孔径0.4cm	粘土	
Fig64 1091	*	*	*				全長(3.4cm) 全幅1.1cm 全厚1.0cm 重量3.0g 孔径0.3cm	粗粒砂を含む。	
Fig64 1092	*	*	*				全長3.7cm 全幅1.0cm 全厚1.1cm 重量3.8g 孔径0.35cm	頁岩、石英などを含む。	
Fig64 1093	*	*	*				全長4.2cm 全幅1.0cm 全厚1.2cm 重量4.3g 孔径0.4cm	粘土	
Fig64 1094	*	*	*				全長3.8cm 全幅1.3cm 全厚1.3cm 重量5.4g 孔径0.4cm	粘土	
Fig64 1095	*	*	*				全長4.1cm 全幅1.0cm 全厚0.9cm 重量2.4g 孔径0.35cm	粘土	
Fig64 1096	*	*	*				全長4.7cm 全幅1.6cm 全厚1.6cm 重量8.8g 孔径0.6cm	粘土	
Fig64 1097	*	*	*				全長4.2cm 全幅1.3cm 全厚1.3cm 重量5.5g 孔径0.6cm	粘土	
Fig64 1098	*	*	*				全長4.6cm 全幅1.5cm 全厚1.5cm 重量6.5g 孔径0.5cm	チャートの繊・粗粒 を含む。	
Fig64 1099	*	*	*				全長4.9cm 全幅1.6cm 全厚1.5cm 重量8.9g 孔径0.5cm	チャート、石英を多く含 む。	
Fig64 1100	製塗土器	*	*		(4.8)		内面に刃痕痕跡。	風化輝の砂粒を多く含 む。	
Fig64 1101	*	*	*		(9.0)	(5.0)	内外面布口、外面部ナゲ調整。	チャート他の小繊・粗粒 砂を多く含む。	
Fig64 1102	*	*	*		10.2	(5.5)	外面ナゲ調整、指印圧痕跡、内面ナゲ調整。	風化輝の小繊、粗粒砂 を含む。	
Fig64 1103	*	*	*		(11.8)	(5.3)	内面布口板、外面部ナゲ調整。	チャート・繊、風化輝を多 く含む。	
Fig66 1104	青磁 瓶	*	SB9-P5		(3.5)		緑褐色、全面貫入。	灰褐色	鹿泉窯系
Fig66 1105	*	*	*		16.2	(3.0)	透明度のある薄緑色、片切取の草花文、口縁内面に は「ノ」字状の文様有り。この文様は類例が見あたら ない。	灰色堅磁	*
Fig67 1106	*	*	SB12-P5		(2.1)		緑褐色。	灰褐色	1-5-b類
Fig67 1107	土錐質 土錐	*	SB12-P2				全長4.7cm 全幅1.3cm 全厚1.2cm 重量4.7g 孔径0.4cm	繊・中粒砂を含む。	
Fig68 1108	*	*	SK40				全長36cm 全幅0.9cm 全厚0.8cm 重量2.2g 孔径0.3cm	粘土	
Fig68 1109	瓦器 碗	*	SK44	14.1	(2.2)		口縁外面横ナゲ調整、内面には横方向の縞々。	粘土	
Fig68 1110	東勝系 羽茎	*	SK44-E	21.2	(5.8)		口縫部は内側する面と口縁部外側横ナゲ調整。灣は 斜面三角形でしづらりしている。湾下15cm幅で横 ナゲ調整。その下に、石下で壁に單位の隠いき瓦。	石英粗粒砂を多く含む。	
Fig69 1111	土錐質 高台付杯	*	SK45		(2.0)	(9.0)	高台下ハサギ状に踏ん曲れる。内外面横ナゲ調整。	粘土	
Fig69 1112	瓦質 鍋	*	*	15.0	(3.3)		外面部粗粒痕跡。	粘土	
Fig69 1113	東勝系 豆鉢	*	SK46	26.0	(2.7)		内外面横ナゲ調整。	粘土	
Fig69 1114	土錐質 杯	*	SK45		(3.0)	(8.4)	内外面横ナゲ調整、系切り。	粘土	
Fig69 1115	土錐質 底盤	*	SE1		(9.0)	(5.2)	横ナゲ調整、系切り。	砂粒多し。	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig69 1116	黑泥器 皿	NW	SE1	(14.4)	2.1	(12.0)	内外面横ナデ調整。丁寧なつくり。火棒文有り。	陶土	
Fig69 1117	土師器 小杯	*	*	(20)	(1.6)	(4.4)	希切り。	細粒粉多し。	
Fig69 1118	土師器 杵 瓢	*	*		(3.0)	(8.0)	ハラ切り、ナデ調整。	陶土	
Fig69 1119	瓦器 碗	*	*	13.6	(2.7)		口縁外周横ナデ調整。腹部外周指圧痕。内面暗文。	*	
Fig69 1120	*	*	*	(17.0)	(1.7)		内面暗文。	陶土	
Fig69 1121	*	*	*	(14.0)	(3.3)		口縁外周横の横ナデは弱い。体部外周指圧痕。	*	
Fig69 1122	*	*	*	11.8	3.7	3.0	口縁外周横ナデ調整。内面頸部状の暗文。体部外周指圧痕。無地で小さい高台。	チャート砂粒少し。	
Fig69 1123	*	*	*	17.0	(2.9)		口縁外周横ナデ調整。体部外周削り。	陶土	
Fig69 1124	青磁 蓮弁文碗	*	*		(2.6)	4.8	高台骨付をこえて一部底までかかる。高台幅を水平面に削り出す。	灰色精緻	1-5-b類
Fig69 1125	青磁 碗	*	*	14.6	(2.1)		薄紐黄色。	灰白色精緻	*
Fig69 1126	*	*	*	(15.0)	(3.0)		丸ノミ状工具で邊骨文を抜く。口縁端部が尖る。輪郭は灰黒(こまろ)、輪郭を知らない。	暗灰色精緻	
Fig69 1127	青磁 皿	*	*		(1.7)	3.8	縦条文。外周まで施釉。体部中段で削して直線的に立ち上がるタイプ。外底に目跡。	灰色精緻	1-1-b類
Fig69 1128	青磁 蓋 製鉢	*	*		(10.0)		削片。	砂粒がほとんど見られない。	
Fig69 1129	常滑 蓋	*	*		(8.1)		魚骨状の押印文が帯状に施される。内面ゴマわり。	砂粒を含む。	
Fig75 1130	土師器 杵	*	SD13	11.8	2.7		内外面横ナデ調整。	陶土	
Fig75 1131	*	*	*	13.2	3.4	7.6	横ナデ調整。	陶土	
Fig75 1132	須恵器 杵	*	*		(1.8)	(6.6)	内外面横ナデ調整。高台横ナデにより凹状。底部切り離し。一方向ナデ調整。	陶土	
Fig75 1133	須恵器 蓋	*	*		(11.6)	(1.5)	内外面横ナデ調整。丁寧なつくり。	陶土	
Fig75 1134	*	*	*	12.3	2.4		瓶径27cm。内外面横ナデ調整。丁寧なつくり。	陶土	
Fig75 1135	土師器 小杯	*	SD14下層	6.0	1.7	4.8	希切り。	陶土	
Fig75 1136	土師器 皿	*	SD14	13.8	1.3	10.8	内外面横ナデ調整。	チャートの粗粒を含む。	
Fig75 1137	*	*	SD14中層		(1.6)	(10.0)		チャート底の細粗粒砂を多く含む。	
Fig75 1138	*	*	SD14	15.8	1.4	12.0	内外面ヘラミガキ。	陶土	
Fig75 1139	*	*	*	15.8	(1.5)		口縁内面わずかに段有り。	半色灰化躍、チャート粗粒砂を含む。	
Fig75 1140	*	*	SD14下層	16.2	1.9		横ナデ調整。手づくね成形か?	陶土	
Fig75 1141	*	*	SD14	11.0	(2.3)		内外面横ナデ調整。	陶土	
Fig75 1142	土師器 杵	*	*		(2.2)	(8.0)	横ナデ調整。	陶土	
Fig75 1143	土師器 皿	*	SD14下層	11.0	1.9	7.6		陶土、半色灰化躍を含む。	
Fig75 1144	土師器 杵	*	*	(13.2)	2.65	(8.0)	内外面横ナデ調整。	陶土	
Fig75 1145	*	*	*		(4.3)	8.1	内外面横ナデ調整。ハラ切り。	陶土	
Fig75 1146	*	*	*	12.7	3.0	8.1	内外面横ナデ調整。ハラ切り。	陶土	
Fig75 1147	*	*	*	(14.0)	(3.1)		内外面横ナデ調整。	陶土	
Fig75 1148	*	*	*		(2.7)	9.0	ナデ調整。	陶土	
Fig75 1149	*	*	SD14中層	13.8	3.2	8.2	希切り。横ナデ調整。	陶土	
Fig75 1150	*	*	SD14下層		(3.0)	(12.0)	ハラ状にしつきりとんでも高台。	半色灰化躍多し。	
Fig75 1151	*	*	*		(2.0)	(8.0)		半色砂粒、石英細粒砂を含む。	
Fig75 1152	土師器 碗	*	SD14	(12.0)	(2.7)		瓶めて薄いつくり。内外面横ナデ調整。	陶土	
Fig75 1153	土師器 杵	*	SD14下層	(13.8)	(2.2)	(10.0)	横ナデ調整。丁寧なつくり。	陶土	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	厚さ (cm)	直径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig.25 1154	瓶 甌	NW	SD14	17.4	2.4	14.4	内外面横ナギ調整。	粘土	
Fig.25 1155	*	*	*	17.0	2.1	13.2	横ナギ調整。内外面火吹文。口縁飾み上げ。	粘土	
Fig.25 1156	瓶 甌	*	SD14下層	(1.3)			丁寧なナギ調整。	粘土	
Fig.25 1157	*	*	*	12.8	2.3		積み径14cm。内外面横ナギ調整。天井面は摩耗。周辺に黒色鉛筆芯。転用何か?	粘土	
Fig.25 1158	*	*	*	(13.0)	(1.3)		内外面横ナギ調整。丁寧なつくり。	粘土	
Fig.25 1159	*	*	*	11.3	2.4		積み径17cm。内外面丁寧なナギ調整。外縁自然釉。	粘土	
Fig.25 1160	*	*	*	30.0	(1.5)		内外面横ナギ調整。丁寧なつくり。	粘土	
Fig.25 1161	瓶 甌	*	*	13.2	3.7	8.2	内外面横ナギ調整。	粘土	
Fig.25 1162	*	*	*	(12.0)	(3.6)			チャート、砂粒を多く含む。	G.
Fig.25 1163	*	*	*	(2.3)	(1.0)		内外面横ナギ調整。比較的小さい高台。	粘土	
Fig.25 1164	*	*	*	(16.0)	(4.0)		内外面横ナギ調整。ロクロ右回り。	粘土	
Fig.25 1165	瓦器 甌	*	*	14.8	(3.4)		口縁外面横ナギ調整。体部外面直面施。		*
Fig.25 1166	青磁 甌	*	SD14	(1.6)	(3.4)		高台内面まで施釉。	灰色精緻	
Fig.25 1167	經繩 甌	*	SD14下層	(1.8)	6.4		外底削り有り。	粘土	
Fig.25 1168	白磁 甌	*	*	(2.4)			多角形。	白色精緻	
Fig.25 1169	青磁 甌	*	SD14	(2.7)			灰緑色。	灰色やや粗い。	
Fig.25 1170	青磁 甌	*	*	(1.3)	6.2		外面下半まで施釉。内面施目。	粘土	同安窯 1-1-b類
Fig.25 1171	*	*	SD14下層	11.2	2.9	5.6	中位で強く屈曲。内面施目ジグザゲ文。瓶原体に2支の支柱。全面施釉後、外底を積き取る。	同安窯系 1-2類	
Fig.25 1172	青磁 甌	*	SD14中層	(3.0)	(5.0)		底溝、高台内面をこえて、外底にまで瓶がかかる。	やや粗い灰色	
Fig.25 1173	帶面 環錠	*	SD14上層	(7.9)	(14.0)		内外面横ナギ調整。	粘土	
Fig.25 1174	束腰系 瓦盆	*	SD14下層	24.0	(4.6)		口縁外面変形。有孔柱がかかる。外底2条の凹窓状。	石英地の砂粒を含む。	
Fig.26 1175	土師器 甌	*	*	13.8	(3.5)				入品
Fig.26 1176	*	*	*	23.2	(5.0)		外面横ナギ、横ヘラミガキ。内面横ハケ、横ナギ調整。	粘土	紀伊型
Fig.26 1177	瓦質 甌	*	SD14中層	17.0	(4.7)		内外面横ナギ調整。側部外面削り直し。	粘土	
Fig.26 1178	*	*	SD14下層	(27.6)	(2.9)		内外面横ナギ調整。外面直面施。	粘土	
Fig.26 1179	*	*	*	18.7	(6.3)		内面ハケ、横ナギ調整。底部付近横ハケ。外面直面施。	粘土	
Fig.26 1180	土師器 甌	*	*	(18.0)	(3.8)		内外面横ナギ調整。外面スケ。	結晶変岩質の砂粒多し。	紀伊型
Fig.26 1181	*	*	*	32.2	(6.0)		口縁、口唇外縁横ナギ調整。内面下地に横ハケ。口唇部取り除き。外面スケ。	石英、細粒砂を多く含む。	
Fig.26 1182	土師器 甌	*	SD14中層	19.0	(6.7)		内面横ハケ、横ナギ調整。内面下地に横ナギ調整。側部外縁直上がり平行等間隙。	石英、赤色粒を多く含む。	東播系
Fig.26 1183	瓦質 甌	*	*	26.4	(4.9)		口縁外方に肥厚。瓶面二角形状の突部が付く。口縁外面直面横ナギ調整。側部外縁ナギ調整。凹凸が見られる。	チャート他の繊維粒を含む。	
Fig.26 1184	束腰系 引手	*	*	(22.0)	(7.5)		内面ナギ調整。口縁が太くしつかりしている。口唇部厚い。突部外縁上に横ナギ調整。瓶底外縁直上がりの引き手。内面ナギ調整。外面スケ。	石英・長石の砂粒を含む。	東播系
Fig.26 1185	製塼土器	*	SD14下層	9.8	(2.7)		内面にシワが残る。	頁岩、チャート粗粒、繊維粒を含む。	
Fig.26 1186	*	*	*	10.4	(4.4)			赤色風化褪色の細・粗粒を含む。	
Fig.26 1187	土罐	*	SD14				全長4.0cm 全幅1.0cm 全厚1.1cm 重量3.6g 孔径0.3cm	織・粗粒砂を含む。	
Fig.26 1188	*	*	SD14下層				全長3.95cm 全幅1.1cm 全厚1.0cm 重量4.5g 孔径0.4cm	粘土。	
Fig.26 1189	*	*	SD14				全長5.1cm 全幅1.3cm 全厚1.2cm 重量5.5g 孔径0.4cm	粘土。	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig.76 1190	土師器	NW	SD14 F層				全長(36cm) 全幅1.2cm 全厚1.1cm 重量4.1g 孔径0.3cm	粘土	
Fig.76 1191	*	*	SD14				全長4.4cm 全幅1.9cm 全厚1.7cm 重量12.1g 孔径0.3cm	粘土	
Fig.76 1192	*	*	SD14 Y層				全長4.4cm 全幅1.0cm 全厚0.8cm 重量2.6g 孔径0.3cm	粘土	
Fig.76 1193	*	*	*				全長4.8cm 全幅1.8cm 全厚1.7cm 重量13.6g 孔径0.6cm	粘土	
Fig.76 1194	*	*	*				全長(4.1cm) 全幅1.1cm 全厚1.0cm 重量3.4g 孔径0.3cm	粘土	
Fig.76 1195	土師器 小杯	*	SD17	4.9	1.5	4.7	ぬ切り、横ナデ調整。	粘土	
Fig.76 1196	*	*	*	7.0	1.5	4.8	ぬ切り、横ナデ調整。	粘土	
Fig.76 1197	土師器 杯	*	*		(1.6)	6.4	横ナデ調整。	粘土	
Fig.76 1198	黑土器 杯	*	SD17 F層	12.2	3.8	7.2	ぬ切り、内外面横ナデ調整。	赤色粒砂を含む。細粒砂 を多く含む。	
Fig.76 1199	黑土器 盞	*	SD17	(13.2)	(1.4)		内外面横ナデ調整。内面摩耗部、黒付着。	粘土	軽用泥
Fig.76 1200	黑土器 盞	*	SD17 F層		(2.4)	(14.0)	横ナデ調整。ヘラ切り、ナデ調整。	粘土	
Fig.76 1201	白磁 盞	*	SD17	12.1	(1.8)			粘土	IV類
Fig.76 1202	灰釉 碗	*	*	(1.9)	8.5		内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.76 1203	青磁 碗	*	*		(3.5)		圓溝弁文椀。	灰白色精緻	龍泉窯系 1~5-b
Fig.76 1204	青磁 盞	*	SD17 F層		(0.9)	4.2	外底強引き取り、内面ジグザグ文と丸ノミ状工具に よる複数の沈線。	灰色精緻	同安窯 1~2
Fig.76 1205	青磁 碗	*	SD17	16.0	3.0		透明度の良い緑色。外面擦痕、内面画花文。	灰色精緻	龍泉窯系 1~4類
Fig.76 1206	*	*	*		(2.0)	6.0	見込みに草花文を彫り、瓶は登付をこえて一部外底 までかかる。	灰色精緻。	*
Fig.76 1207	*	*	SD17 F層		(5.0)		瓶が厚くかかる。	灰色精緻。	*
Fig.76 1208	青瓷 碗	*	SD18 F層		(6.5)		青瓷削部分		*
Fig.76 1209	黑土器 杯	*	P259		(1.0)	(8.0)	外底に粘土縁の接合部を認める。	粘土	
Fig.76 1210	瓦器 碗	*	P240	(13.0)	(2.5)		口縁外周強い横ナデ調整、内面縮文。		*
Fig.76 1211	土師器 杯	*	P230		(2.9)	7.6	ぬ切り。	赤色風化羅、縫中粒砂を 多く含む。	
Fig.76 1212	灰釉 碗	*	P206		(2.0)	(7.0)	外底にぬ切り痕跡。	粘土	
Fig.76 1213	瓦器 碗	*	P231		(6.4)	(2.1)	口縁内外面横ナデ調整。	粘土	
Fig.76 1214	木葉器 杯(空形)	*	P230	14.8	4.7	6.6	ぬ切り。	赤色風化羅、他の細・中粒 砂を含む。	
Fig.76 1215	黑土器 盞	*	P267	13.2	(1.7)		内外面横ナデ調整。丁寧なつくり。	粘土	
Fig.76 1216	磨口天目 茶碗	*	P257	(11.0)	(4.5)		外面下化がけ。褐色の粒がうすくかかる。	黄白色 やや粗い粘土。	
Fig.76 1217	束腰系控 鉢	*	P272		(5.9)		片口部。	粗い粘土。	
Fig.76 1218	瓦質指輪	*	P255	(18.0)	(5.5)		内外面ナデ調整。5本半位の巻線。	粘土	
Fig.76 1219	土師器 羽茎	*	P297	(21.0)	(1.8)		全面横ナデ、丁寧なつくり。外面スケベ。	石英、他の中粒砂多し。	
Fig.76 1220	瓦質 羽茎	*	P253	(16.4)	(4.6)		口縁は強い横ナデにより、3条の弱い円錐状の凹み。 内面横ハケ。潤滑から剥離にかけて激しくスケベ。	粘土	
Fig.76 1221	土師器 土鉢	*	P254				全長3.7cm 全幅1.0cm 全厚0.9cm 重量21g 孔径0.3cm	粘土	
Fig.76 1222	*	*	*				全長2.7cm 全幅1.2cm 全厚1.0cm 重量2.5g 孔径0.4cm	粘土	
Fig.76 1223	*	*	P302				全長(4.6cm) 全幅1.6cm 全厚1.6cm 重量9.7g 孔径0.6cm	粘土	
Fig.76 1224	土師器 杯	*	混合層F層	(3.3)	8.1		底部突出タイプ、ヘラ切り、ナデ調整。	赤色風化羅粗粒砂を多く 含む。	
Fig.76 1225	*	*	*		(3.4)	(7.0)	内外面横ナデ調整。ぬ切り。	粗粒砂を多く含む。	
Fig.76 1226	瓦器 小皿	*	*	7.8	1.3	6.5	全体内外面横ナデ調整、内面ナデ。外底指頭に痕跡、 内面粒砂充填有り。	チャート他の粗粒砂を 含む。	
Fig.76 1227	瓦器 碗	*	*		(1.1)	3.6	外面部頭圧痕による凹凸が激しい。	粘土	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	跡高 (cm)	英津 (cm)	特徴	動土・材質	備考	
Fig.78 1228	白磁 小皿	NW	盆形層Ⅱ層	(1.2)	5.0	透明の釉。アーチ状高台。内外全面施釉。貢入有り。	黄白色やや粗い胎土。			
Fig.78 1229	漸円夷盃 皿	*	*	(11.0)	(1.8)	薄緑色の釉が口縁内外にかかる。貢入有り。底部部 略凹。	灰白色粗織			
Fig.78 1230	白磁 皿	*	*	11.8	(1.0)	口丸。	灰白色粗織			
Fig.78 1231	青磁 皿	*	*	11.4	(1.9)	透明度の強い緑色。貢入。内面に浅。口縁外反。	灰白色粗織			
Fig.78 1232	漸円夷盃 皿	*	*	16.8	(3.0)	薄緑色の釉。全面貢入。	灰白色粗い胎土			
Fig.78 1233	青磁 碗	*	*	(2.2)	7.3	緑褐色の釉。貢入。内面墨縁丸くおさめる。全面施釉 し。外底釉削り。底部部色。盤ぐる施釉。見込みに誤 い段取り。	灰白色やや粗い胎土 龍安寺系			
Fig.78 1234	*	*	*	(15.0)	(2.5)	口縁内面に1条の浅線。体部上位で若干内側に屈曲。 外底に細かく鶴足。透明度の強い釉。	灰白色粗織	同安寺系		
Fig.78 1235	*	*	*	17.4	(4.7)	緑褐色。透明度の良き器形の差別化がよく見える。 ハウガ式。	灰色でやや粗い。	龍安寺系		
Fig.78 1236	*	*	*	(16.0)	(4.0)	削り出し高台。内底内縁に軽削ぎ。外底豊岱で施 釉。外底と高台内縁を削る。	灰白色粗織	*		
Fig.78 1237	*	*	*	(2.6)	(6.4)	透明度の高い緑色。口縁内面に沈澱。侈底内面片 削り章花文。	灰白色粗織	*		
Fig.78 1238	*	*	*	(14.0)	(3.0)	透明度のある緑色。口縁内面に沈澱。侈底内面片 削り章花文。	灰白色粗織	*		
Fig.78 1239	*	*	*	14.6	(3.6)	緑褐色。外縁端連弧文。	灰色やや粗い胎土	*		
Fig.78 1240	*	*	*	(2.2)	6.2	緑褐色の釉。外底鉢ノ目状に釉剥落。底部部赤褐色。 見込みに印記。外周丸くミツ工具で通文。	灰色やや粗い胎土	*		
Fig.78 1241	*	*	*	14.8	(3.8)	透明度のある緑色の釉。分離的に貢入。壁面薄い。	灰色のやや粗い胎土	*		
Fig.78 1242	青磁 楓葉皿	*	*	12.4	3.0	6.6	透明度のある緑色釉。高台内縁一部外底まで釉が かかる。内面片削りの器種有り。	灰白色、粗い胎土		
Fig.79 1243	土師器 羽足	*	*	(17.0)	(4.1)	部削り。外縁端連弧文。	棒土			
Fig.79 1244	土師器 裏	*	*	(19.0)	(5.0)	内外面横ナギ調整。口縁受け口状を呈す。	石英地の細粒粗砂多く 含む。	紀伊？		
Fig.79 1245	*	*	*	24.6	(5.7)	口縁内面横方向のハケ。側部外縁ハケ、内面横 ナギ調整。口縁端連弧は上部のみ出して横方向に強く ナギする。	石英小礫、赤母を多く含む。	畠山品		
Fig.79 1246	常滑 要 底部	*	*	(5.4)	21.8	外縁端板厚層による縱方向のナギ跡が顯著。内面自 然積がかかる。	棒土			
Fig.79 1247	土師器 土鋤	*	*	全長(24cm) 孔径0.4cm	全幅10cm 全厚10cm 重量1kg	細粒砂を含む。				
Fig.79 1248	*	*	*	全長(3.9cm) 孔径0.4cm	全幅10cm 全厚0.9cm 重量2.5g	チャート地の頬、粗粒砂 を含む。				
Fig.79 1249	*	*	*	全長(3.8cm) 孔径0.45cm	全幅1.25cm 全厚1.3cm 重量4.1g	棒土				
Fig.79 1250	*	*	*	全長4.5cm 孔径0.4cm	全幅1.1cm 全厚1.0cm 重量4.2g	棒土				
Fig.79 1251	*	*	*	全長4.2cm 孔径0.5cm	全幅1.5cm 全厚1.3cm 重量5.8g	細粒砂を多く含む。				
Fig.79 1252	*	*	*	全長(3.2cm) 孔径0.3cm	全幅1.0cm 全厚1.0cm 重量2.8g	チャート地、赤色砂粒を含 む。				
Fig.79 1253	*	*	*	全長(5.6cm) 孔径0.4cm	全幅1.5cm 全厚1.5cm 重量10.9g	チャート地の粗粒砂を多 く含む。				
Fig.79 1254	*	*	*	全長5.1cm 孔径0.3cm	全幅1.5cm 全厚1.4cm 重量9.5g	棒土				
Fig.79 1255	*	*	*	全長(6.3cm) 孔径0.4cm	全幅2.0cm 全厚2.0cm 重量12.1g	細粒砂を多く含む。				
Fig.79 1256	土師 器	*	*	全長(4.2cm) 孔径0.6cm	全幅1.8cm 全厚1.8cm 重量10.5g	棒土				
Fig.82 1257	土師器 皿	NE	SK76	14.0	2.0	11.0	内外面横ナギ調整。外底ヘラ切り。ナギ調整。	棒土		
Fig.82 1258	東播磨 鉢	*	*	19.4	(4.2)	内外面横方向の丁かなナギ調整。口縁上面水平な面 をなし、外方に強張。	長石、石英などの細粒粗 砂を含む。			
Fig.82 1259	土師器 要	*	SK78	(15.7)	10.4	口縫外縁横ナギ調整。口縁内面横ハケ。側部外縁横 ハケ。製造内面横ナギ調整。指壓痕痕跡。	石英、長石の細粒粗 砂を多く含む。			
Fig.82 1260	陶 底	*	SK79	(1.8)	10.4	口縫外縁横ナギ調整。外底高台内縁に扒引の痕跡注痕 有り。しまかりした點付高台。	棒土			
Fig.83 1261	土師器 皿	*	SK81	13.7	14	10.2	[1]外縁横ナギ調整。内面横ナギ調整。内底ヘラミ カタ。内面スッキ。外縁2条の沈澱。	棒土		
Fig.83 1262	須恵器 杯 底部	*	SK81	(1.5)	7.6	底部外縁丁寧な横ナギ調整。底部外縁ヘラ切り。ナ ギ調整。	棒土			
Fig.83 1263	土師器 皿	*	SK82	14.0	(1.5)	内外面丁寧な横ナギ調整。棒ヘラミガキ。	棒土			
Fig.83 1264	須恵器 皿	*	SK81	(15.6)	(1.9)	内外面横ナギ調整。内面は削りと丁寧な機ナギ調整 を施す。	棒土			

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	厚さ (cm)	底深 (cm)	特徴	地土・材質	備考
Fig83 1265	土器器 杯	NE	SK83	13.2	3.9	8.6	内外面横ナデ調整。外底ヘラ切り。ナデ調整。外底に メのヘラ記号。	粘土	
Fig83 1266	土器器 杯	*	SK82		(4.0)	11.0	高台内外面強い横ナデ調整。	粘土	
Fig83 1267	土器器 杯	*	SK83		(8.6)	11.5	丁寧な横ナデ調整。底部は下方に孔強。断面三角 形。	粘土	
Fig83 1268	土器器 甕	*	SK81	16.8	(7.4)		口縁外側指沿圧痕、横ナデ調整。側部外側指沿圧痕。 ナデ一部ヘラメガキ。内面横方向の丁寧なナデ調 整。一部ヘラミガキ。	粘土。雲母を多く含む。 鉛入品	
Fig83 1269	*	*	SK83	27.0	(4.0)		口縫内斜面横ハケ。側部外面縦、内面横ハケ。	石英。他の極・粗粒砂を含 む。	
Fig83 1270	*	*	*	(18.6)	(5.5)		口縫部収取り。口縫内面横ハケ。横ナデ調整。口縫外 面横ナデ調整。側部外面縦。横ハケ。側部内面横ナデ 調整。	チャート他の砂を含む。 在地産	
Fig83 1271	*	*	*	28.0	(6.0)		口縫外側指沿横ナデ調整。口縫端部を上に延長し外 縫に凹みがある。側部外側木理の縦、厚体による緩ハ ケ。内面は横ナデ調整。	石英。長石微の研・粗粒砂を 多く含む。	
Fig83 1272	製陶土器	*	SK81		(3.5)		内面布目。	粗粒砂を含む。	
Fig83 1273	*	*	SK83		(6.6)		外底ナデ調整。内面布目。	小織を多く含む。	
Fig83 1274	*	*	*		(5.0)		内面布目をわずかに認める。	チャート小織。粗粒を多 く含む。	
Fig83 1275	*	*	SK81	12.4	(3.5)		内面布目。	粗粒、小織を含む。	
Fig83 1276	土器器 皿	*	*				全長30cm 全幅10cm 全厚10cm 重量2kg 孔径0.4cm	粘土。	
Fig83 1277	*	*	*				全長(4.5cm) 全幅1.0cm 全厚0.9cm 重量28g 孔径0.4cm	粗粒砂を含む。	
Fig83 1278	*	*	*				全長(2.3cm) 分幅(1.0cm) 全厚(0.9cm) 重量16g 孔径0.4cm	粘土。	
Fig83 1279	*	*	*				全長(2.1cm) 分幅(0.8cm) 全厚(0.8cm) 重量11g 孔径0.4cm	粘土。	
Fig83 1280	*	*	*				全長(1.1cm) 空幅1.1cm 全厚1.0cm 重量2kg 孔径0.3cm	織・粗粒砂を含む。	
Fig83 1281	*	*	*				全長42cm 全幅10cm 全厚10cm 重量3.4kg 孔径0.5cm	織・粗粒砂を含む。	
Fig83 1282	*	*	SK83				全長48cm 全幅1.8cm 全厚2.0cm 重量12.5g 孔径0.6cm	粘土。	
Fig83 1283	*	*	*				全長(5.6cm) 全幅1.1cm 全厚1.1cm 重量51g 孔径0.3cm	粘土。	
Fig84 1284	土器器 杯	*	SK85	(14.0)	(2.5)		内外面横ナデ。ヘラミガキ。	粘土。	
Fig84 1285	土器器 皿	*	SK89	(12.8)	1.5		口縫外側から全体内面まで横ナデ調整。底部外側ナ デ調整。	粘土。	
Fig84 1286	土器器 皿	*	SK88	15.4	2.2	12.9	内外面横ナデ調整。	粘土。	
Fig84 1287	*	*	SK85	16.8	2.0	13.0	内外面横ナデ調整。口縫端部を上に摘み出し、横ナ デ調整。	粘土。	
Fig84 1288	*	*	SK88	16.4	2.2	13.8	内外面横ナデ調整。口縫外反。口縫内面わずかに段状を呈す。 内外面横ナデ調整。	粘土。	
Fig84 1289	*	*	SK87	(15.4)	(1.9)		焼成は良くない。内外面横ナデ調整。	粘土。	
Fig84 1290	土器器 杯	*	SK85	16.3	(2.4)		口縫外反。口縫内面わずかに段状を呈す。 内外面横ナデ調整。	粘土。	
Fig84 1291	土器器 杯	*	SK88		(1.2)	(8.0)	内外面横ナデ調整。	粘土。	
Fig84 1292	*	*	*	(4.3)	7.0		内外面横ナデ調整。貼付高台。骨付わずかに凹む。	粘土。	
Fig84 1293	*	*	*	(12.4)	(3.6)		内外面横ナデ調整。ヘラ切り。丁寧なナデ調整。	粘土。	
Fig84 1294	*	*	*	(3.0)	(8.0)		内外面横ナデ調整。外底余切り。ナデ調整。	粘土。	
Fig84 1295	*	*	SK87	13.6	4.0	8.0	内外面横ナデ調整。ヘラ切り。ナデ調整。	粘土。	
Fig84 1296	*	*	SK88	(14.8)	4.9	(8.0)	内外面丁寧な横ナデ調整。外底ヘラ切り。削り。ナデ 調整。貼付高台。骨付凹む。	粘土。	
Fig85 1297	土器器 皿	*	SK84	(13.0)	(1.6)		口縫端部外側面取り。内外面丁寧な横ナデ調整。	粘土。	
Fig85 1298	*	*	SK85	16.5	(2.5)		天井部外側ヘラ削り。ナデ調整。他の部分は丁寧な 横ナデ調整。端部は断面三角形状に摘み出す。	粘土。	
Fig85 1299	*	*	*	14.6	(1.2)		内外面横ナデ調整。端部側面取り。下方に摘み出す。	粘土。	
Fig85 1300	*	*	SK88	(18.0)	(2.2)		内外面丁寧な横ナデ調整。	粘土。	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺物名・出土 地点・層位	口径 (cm)	厚さ (cm)	直径 (cm)	特徴	動物	地質・材質	備考	
Fig85 1301	土師器 甕	NE	SK87	(15.6)	(7.0)		口縁込み上げ上方に鉛錠し後い棒ナガ調整。側部外 面削、下下がりハケ、内面削。		石英粗粒砂を多く含む。		
Fig85 1302	*	*	SK84	23.0	(3.4)		口縁込み上方に鉛錠し、口部部2凹凸、口縁内外削 ハケ、棒ナガ調整。側部外削ハケ、内面削ハケ。		石英多し。		
Fig85 1303	*	*	SK88	28.0	(7.6)		口縁込み上方に鉛錠し、口部部2凹凸、口縁内外削 ハケ、棒ナガ調整。側部外削ハケ、内面削ハケ。		石英、雲母を多く含む。 石英化。		
Fig85 1304	*	*	SK86	19.2	(9.3)		口縁込み上方に鉛錠しき、張い棒ナガ調整。口縁内 削ハケ、側部外削ハケ。		石英化。		
Fig85 1305	製陶土器	*	SK85		(5.7)		内面削目。		チャート・赤色風化繊維 層。		
Fig85 1306	*	*	*	(5.2)			内面削目。		チャート・貝若海の小灘 を含む。		
Fig85 1307	*	*	*	(3.0)			内面削目。		赤色風化繊維の小灘を多 く含む。		
Fig85 1308	土師器 土瓶	*	*				全長48cm 全幅12cm 全厚1.1cm 重量52g 孔径0.4cm		粘土		
Fig85 1309	*	*	*				全長50cm 全幅11cm 全厚1.0cm 重量4kg 孔径0.4cm		粘土		
Fig85 1310	*	*	*				全長4.3cm 全幅1.1cm 全厚0.9cm 重量3.2g 孔径0.25cm		粘土		
Fig85 1311	*	*	*				全長3.3cm 全幅1.1cm 全厚1.0cm 重量2.6g 孔径0.3cm		粘土		
Fig85 1312	*	*	*				全長4.4cm 全幅1.2cm 全厚1.1cm 重量3.8g 孔径0.3cm		粘土		
Fig85 1313	*	*	*				全長36cm 全幅1.0cm 全厚0.9cm 重量2.4g 孔径0.3cm		粗粒砂を多く含む。		
Fig85 1314	*	*	SK89				全長2.7cm 全幅1.0cm 全厚0.8cm 重量1.8g 孔径0.3cm		粘土		
Fig85 1315	須恵器 杯	*	SD27集中	(14.0)	(3.0)		底との接合部で調節。器表が荒れている。		粘土		
Fig85 1316	*	*	*	14.0	3.3	9.0	内外面横ナガ調整。		粘土		
Fig85 1317	須恵器 蓋	*	SD26	15.4	(1.2)		施めて丁寧な棒ナガ調整。		粘土		
Fig85 1318	土師器 杯	*	SD27集中		(3.2)	0.80	内外面横ナガ調整。系切り。		粘土		
Fig85 1319	土師器 土瓶	*	*				全長34cm 全幅1.1cm 全厚1.1cm 重量3.8g 孔径0.4cm		粗粒砂を含む。		
Fig85 1320	*	*	SD26				全長4.3cm 全幅1.4cm 全厚1.2cm 重量6.1g 孔径0.5cm		粘土		
Fig85 1321	土師器 甕	*	SD27集中	(6.6)			口縁内外削ハケ調整。側部外削ハケ。上肩部内 削ハケ。下部ナガ調整。		石英粗粒を多く含む。		
Fig85 1322	土師器 小皿	*	上膠集中7	10.4	1.8	7.2	ヘア切り。ナガ調整。鉢底赤変。		粘土		
Fig85 1323	*	*	*		9.7	1.6	6.0	底部刃状剥離。		粘土	
Fig85 1324	土師器 小杯	*	*	(9.8)	(2.4)	(6.4)	内外面横ナガ調整。ヘア切り。完形。		粘土		
Fig85 1325	*	*	*	10.4	2.5	7.4	内外面丁寧なナガ調整。ヘア切り。		粘土		
Fig85 1326	*	*	*	(9.8)	(2.9)	(6.0)	内外面ナガ調整。ヘア切り。ナガ調整。完形。		チャートの小灘を多く含 む。		
Fig85 1327	*	*	*	9.8	2.3	7.5	内外面ナガ調整。ヘア切り。器壁厚い。完形。		石英他の礫・粗粒を多く 含む。		
Fig85 1328	*	*	*	(10.0)	(2.2)	(6.3)	ヘア切り。ナガ調整。		粘土		
Fig85 1329	土師器 杯	*	*	10.5	3.5	6.7	ヘア切り。ナガ調整。		チャート粗粒を含む。		
Fig85 1330	*	*	*		(1.8)	(8.0)	ヘア切り。ナガ調整。		粘土		
Fig85 1331	*	*	*	(11.6)	(3.7)	(7.0)	内外面横ナガ調整。ヘア切り。		粘土		
Fig85 1332	*	*	*	(11.4)	(3.6)	(7.0)	ヘア切り。ナガ調整。		粘土		
Fig85 1333	*	*	*	(12.2)	(3.4)	(8.0)	内外面横ナガ調整。ヘア切り。底部に円板を認める。		粘土		
Fig85 1334	*	*	*	13.5	4.7	7.4	円板高台。ヘア切り。内外面ナガ調整。		チャート粗粒を含む。		
Fig85 1335	*	*	*	12.3	5.3	7.7	内外面横ナガ調整。ハサ式に踏み張る高台。		粘土		
Fig85 1336	*	*	*	14.3	(4.8)		横ナガ調整。ヘア切り。高台剥離。		粘土		
Fig85 1337	須恵器 A型 碗	*	*	15.4	(2.5)		内外面横ヘラミガキ。		石英・長石の礫・粗粒を 含む。	搬入品	

FigNO 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	厚さ (cm)	底径 (cm)	特徴	地土・材質	備考
Fig86 1338	黑志器 鉢	NE	土器集中7	(13.0)	(4.2)		内外面丁寧な横ナギ調整。	粘土	
Fig86 1339	土師器 鉢	*	*	(2.9)	7.2		内外面丁寧な横ナギ調整。外方に跳ね張るしつかりした蛤貝高台。外底は赤切り？切り離し底丁寧なナギ調整。	粘土	
Fig86 1340	須志器 鉢	*	*	17.2	(4.2)		内外面丁寧な横ナギ調整。	粘土	
Fig86 1341	黒色土器 B型 鉢	*	*	16.3	(3.4)		内外面丁寧なヘラミガキ。内面に幅1.5mmの沈線。	粘土	插入品
Fig86 1342	*	*	*	(3.5)	6.0		内外面丁寧な横ナギヘラミガキ。	粘土	*
Fig86 1343	黒色土器 A型 鉢	*	*	17.6	(4.1)		口縁外周丁寧な横ナギ調整。胴部外側擦れ、ナギ調整。内面は丁寧な横ナギヘラミガキ。…肩端風の文様をへて張り抜く。	粘土	*
Fig86 1344	土師器 鉢	*	*	(22.0)	(6.5)		口縁外周、底部、口縁内外面強い横ナギ調整。胴部外側擦れハケ、ナギ調整。胴部内側擦れナギ調整。外面激しくヌクヌク。	石英粗粒を多く含む。他に角閃石、斜長石も含む。	
Fig86 1345	*	*	*	(24.0)	(6.5)		口縁外周、肩上下、齊瀬面は横方向の強いナギ調整。内面は丁寧な横ナギヘラミガキ。…肩端風の文様をへて張り抜く。	石英粗粒を多く含む。他に角閃石、斜長石も含む。	
Fig86 1346	*	*	*	30.2	23.0		口縁外周、底部、口縁内外面強い横ナギ調整。胴部外側擦れハケ、ナギ調整。下半は横方向のハケ、内面ナギ調整。外底被熱点窪。内底ススキ。	石英粗粒を多く含む。雲母も多い。	
Fig86 1347	製陶土器	*	*	10.1	(7.3)		内外面調整。	チャート粗粒、小砾多し。	
Fig86 1348	土師器 土鉢	*	*				全長4.0cm、全幅12.0cm、全厚1.1cm 重量4.4g 孔径0.5cm	地土	
Fig87 1349	土師器 皿	*	包含層質層	13.6	12	10.4	内外面横ナギ調整。ハラ切り後丁寧なナギ調整。	粘土	
Fig87 1350	*	*	*	(14.4)	(17)	(10.0)	内外面横ナギ調整。外底ヘラ切り、ナギ調整。	粘土	
Fig87 1351	*	*	*	(14.0)	15		内外面横ナギ調整。外底ヘラ切り。	粘土	回転台成形
Fig87 1352	*	*	*	15.0	15	11.0	丁寧な横ナギ調整。	粘土	
Fig87 1353	*	*	*	15.0	14	11.0	丁寧な横ナギ調整。	粘土	
Fig87 1354	*	*	*	13.2	17	11.0	横ナギ調整。ヘラ切り。	チャート他の颗粒移を含む。	
Fig87 1355	*	*	*	(16.0)	(20)		横ナギ調整。	粘土	
Fig87 1356	*	*	*	14.0	18	11.0	口縁内外横ナギ調整。	赤色風化輝を含む。砂粒を含む。	
Fig87 1357	*	*	*	14.2	15	10.0	内外面横ナギ調整。	砂粒移を含む。	
Fig87 1358	*	*	*	16.8	20		内外面ヘラミガキ。内底はナギ調整。	粘土	
Fig87 1359	*	*	*	14.3	(19)		内外面横ナギ調整。	粘土	
Fig87 1360	*	*	*	13.6	22	7.4	内外面横ナギ調整。	粘土	
Fig87 1361	*	*	*	15.6	28	10.0	内外面横ナギ調整。外底ヘラ切り。削り。ナギ調整。	赤色風化輝を含む。	
Fig87 1362	*	*	*	(14.0)	24	(9.0)	横ナギ調整。ヘラ切り。	粘土	
Fig87 1363	土師器 杯	*	*	10.6	3.0	5.0	横ナギ調整。赤切り。	粘土	
Fig87 1364	土師器 皿	*	*	(13)	7.8		*のヘラ記号。	粘土、赤色風化輝、チャートを含む。	
Fig87 1365	土師器 杯	*	*	12.2	29	6.4	内外面横ナギ調整。	赤色風化輝多し。	
Fig87 1366	*	*	*	14.6	27	5.5	内外面ナギ調整。ヘラ切り。ナギ調整。	粘土	
Fig87 1367	*	*	*	(13.0)	(23)		内外面横ナギ調整。口縁強く外反。	粘土	
Fig87 1368	*	*	*	(2.0)	(10.0)		横ナギ調整。赤切り。	粘土	
Fig87 1369	土師器 皿	*	*	(15)	7.6		内外面横ナギ調整。外底ヘラ切り、ナギ調整。	粘土	
Fig87 1370	土師器 杯	*	*	(14)			横ナギ調整。外底+のヘラ記号。	粘土	
Fig87 1371	*	*	*	(24)	9.0		内外面ナギ調整。回転台成形。	粘土、赤色風化輝を含む。	
Fig87 1372	土師器 碗	*	*	(19)	(8.0)		内外面横ナギ調整。円板高台。赤切り。	粘土	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig87 1373	土師器 杯	NE	気合屋塚	(1.4)	5.6			精土。赤色風化粒を含む。	
Fig87 1374	土師器 碗	*	*	(2.9)	6.6		円板状高台。系切り。内外面横ナナ子調整。火拂文。	石英他の砂粒多い。	
Fig87 1375	土師器 杯	*	*	(1.8)	11.0		内外面丁寧な横ナナ子調整。外底も切り離し後、丁寧なナナ子調整。	精土	
Fig87 1376	土師器 碗	*	*	(3.9)			内外面横ナナ子調整。	赤色風化粒を含む。	
Fig87 1377	土師器 杯	*	*	(3.0)	11.3		高台・足付高台が付く。高台脇内外強い横ナナ子調整。ヘラ切り。丁寧なナナ子調整。	精土	
Fig87 1378	須恵器 皿	*	*	(16.0)	(1.4)		内外面強い横ナナ子調整。外底丁寧なナナ子調整。	精土	
Fig87 1379	*	*	*	(14.0)	(2.0)	(9.8)	内外面横ナナ子調整。	精土	
Fig87 1380	*	*	*	16.4	1.9	13.6	内外面横ナナ子調整。	精土	
Fig87 1381	*	*	*		(1.9)		内外面横ナナ子調整。	精土	
Fig87 1382	*	*	*	(15.4)	(1.3)	(6.0)	内外面強い横ナナ子調整。外底丁寧なナナ子調整。	精土	
Fig87 1383	*	*	*	15.8	2.3		内外面丁寧な横ナナ子調整。ヘラ切り後、削り、ナナ子調整。	精土	
Fig87 1384	*	*	*	15.0	2.1	11.1	内外面横ナナ子調整。	精土	
Fig87 1385	*	*	*	(15.2)	(2.5)		口縁内外面強い横ナナ子調整。内外面横ナナ子調整。	精土	
Fig87 1386	*	*	*	22.4	2.5	19.0	内外面横ナナ子調整。口縁底部彫み上げ。	精土	
Fig87 1387	*	*	*	13.4	1.8	10.0	内外面横ナナ子調整。外底ナナ子調整。	精土	
Fig87 1388	*	*	*	(16.6)	(2.05)		内外面横ナナ子調整。	精土	
Fig87 1389	*	*	*	17.8	(2.4)		口縁内外面横ナナ子調整。外底横ナナ子調整。外底凹凸が付く。ナナ子調整。	精土	
Fig87 1390	*	*	*		(6.0)		内外面ナナ子調整。×ヘラ記号。	精土	
Fig87 1391	須恵器 皿	*	*		(1.6)		ナナ子調整。	精土	
Fig87 1392	*	*	*	(12.2)	(2.7)		内外面横ナナ子調整。天井外面に自然施。	精土	
Fig87 1393	*	*	*	16.0	1.7		内外面丁寧な横ナナ子調整。	精土	
Fig87 1394	*	*	*	15.4	1.7		内外面丁寧な横ナナ子調整。	精土	
Fig87 1395	*	*	*	13.2	1.3		内外面横ナナ子調整。	精土	
Fig87 1396	*	*	*	(12.4)	(1.9)		内外面丁寧な横ナナ子調整。	精土	
Fig88 1397	*	*	*	13.8	4.7		左→右方向の削り。ロクロ左回り。天井内面当肩の斜め底成る。	モカート他の粗粒を含む。	
Fig88 1398	須恵器 杯	*	*	(12.0)	(4.2)		斜めヘラタケナリ部分の底部はナナ子調整。中位は左→右方向削り調整。上部は横ナナ子調整。ロクロ右回り。	精土	
Fig88 1399	*	*	*	13.3	4.8		斜めヘラタケナリ部分の外底部分(左→右方向)削り。上半は横ナナ子調整。ロクロ右回り。	精土	
Fig88 1400	*	*	*	(11.8)	(2.8)		内外面横ナナ子調整。外表面は削り、ナナ子調整。	精土	
Fig88 1401	*	*	*	13.2	3.7	8.2	内外面横ナナ子調整。器表が荒れている。ヘラ切り。	精土	
Fig88 1402	*	*	*	13.8	2.7	8.5	内外面横ナナ子調整。回転台成形。	精土。赤色風化粒を含む。	
Fig88 1403	*	*	*	12.6	3.8	8.6	内外面横ナナ子調整。	精土	
Fig88 1404	*	*	*	(14.4)	(2.8)	(8.0)	内外面横ナナ子調整。外底ナナ子調整。	精土	
Fig88 1405	*	*	*	12.2	4.0	6.8	内外面丁寧な横ナナ子調整。ヘラ切り。ナナ子調整。内面黒付着。	精土	
Fig88 1406	*	*	*	13.6	31.5	8.6	内外面横ナナ子調整。ヘラ切り。	精土	
Fig88 1407	須恵器 皿	*	*	17.0	(4.0)		瓦型のような焼き上がり。内外面横ナナ子調整。	精土	
Fig88 1408	須恵器 杯	*	*	(3.1)	8.0		内外面横ナナ子調整。系切り。	精土	
Fig88 1409	*	*	*	(1.2)	8.1		内外面丁寧な横ナナ子調整。費付凹状。外底ヘラ切り。後ナナ子調整。	精土	

FigNo 遺物番号	種別	調査区 (試験)	遺構名・出土 地点・層位	口徑 (cm)	厚さ (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig88 1410	黑志器 杯	NE	混合層質壁	(1.7)	10.3		内外面横ナギ調整。	粘土	
Fig88 1411	*	*	*	(2.2)	7.4		内外面丁寧な横ナギ調整。外底切り離し後、丁寧な ナギ調整。	粘土	
Fig88 1412	*	*	*	(2.4)	(10.0)		内外面丁寧な横ナギ調整。外底切り離し後、丁寧な ナギ調整。	粘土	
Fig88 1413	黑志器 盃 茶器	*	*	(6.7)	(11.0)		内外面横ナギ調整。底部内面面端ナギによる凸凹有り。 高さは大きく外に膨らむ傾向。貼付高台基部外側 強 い横ナギによる接着力。	小球を含む。	
Fig88 1414	*	*	*	(6.6)	(10.4)		内面横ナギ調整。胸部外側(左・右方向)面削り、ナ ギ調整。貼付高台基部外側横ナギ調整。	粘土	
Fig88 1415	黑志器 長柄壺	*	*	(4.6)			内外面横ナギ調整。	細粒砂を含む。	
Fig88 1416	黑志器 短柄壺	*	*	(10.0)	(4.3)		内外面横ナギ調整。	粘土	
Fig88 1417	瓦器 小皿	*	*	7.8	1.6		口縁内外面横ナギ調整。外底指仕高麗署。	粘土	
Fig88 1418	黑色土器 A型 棒	*	*	13.2	(3.8)		表面の荒れが激しい。口縁内面沈窪。	石英、長石粒を多く含む。	搬入品
Fig88 1419	黄釉 碗	*	*	(2.1)	5.4		黄緑色の釉。高台壺形に段有り、系切り。ナギ調整。 骨付、外底にも施釉。	粘土	近江産
Fig88 1420	黑色土器 A型 棒	*	*	(18.0)	(3.4)		口縁外面横ナギ調整。胸部外面削減。内面は丁寧な 横ナギ。	石英、雲母粉を含む。	搬入品
Fig88 1421	黑色土器 B型 棒	*	*	(16.6)	6.0	(7.6)	口縁外沿に強い横ナギにより内凹、内面2mm程の深 い沈窪。外底横ナギ丁寧なヘリミヨキ。外側4分割し て上部を施す。	粘土	植葉産
Fig88 1422	灰釉 瓶	*	*	(1.6)	8.8		ハ字状に開く貼付高台、内面底部近くで施釉。	粘土	
Fig88 1423	灰釉 瓶	*	*	(16.0)	(5.1)		内外面丁寧な横ナギを施す。黄緑色の釉。	粘土	近江産
Fig88 1424	白磁 瓶 茶器	*	*	(2.6)	7.0		腹部中央部は膨らみ、厚い。ほぼ高台外面まで施釉。白色堅膜 新時代形の高台。	白色堅膜	
Fig88 1425	赤生土器 壺	*	*	(6.1)			手すり。上胸部内面陶起帶4条、下腹陶起帶下に捧 狀文又は輪状文貼付。上段には印加文字貼付。	チャート他の砂粒を多く 含む。	
Fig88 1426	土器 壺	*	*	14.8	(2.7)		口縁上部に施釉。	粘土	搬入品
Fig88 1427	*	*	*	14.8	(4.0)		受け口状の縫。口縁内外面横ナギ調整。胸部外面削 除。	石英粗粒砂を多く含む。	
Fig88 1428	*	*	*	18.0	(4.2)		口縁内外面横ナギ調整。	チャート、赤色化粧を 多く含む。	
Fig88 1429	*	*	*	(18.0)	(5.4)		口縁内外面横ナギ調整。胸部外面削除ハケ。	チャート他の粗粒砂を含 む。	
Fig88 1430	*	*	*	(24.0)	(6.5)		口縁内外面横ナギ調整。端部は上に膨張。胸部外 面削除ハケ、内面削除ハケ。	石英粗粒砂を多く含む。	
Fig88 1431	*	*	*	24.0	(8.0)		口縁端上部に貼付施釉。口縁内面横ハケ、横 ナギ調整。外底面横ナギ調整。胸部外面削除ハケ、内面上 部横ハケ、口縁ナギ調整。	石英、長石粗粒砂多し。	
Fig88 1432	*	*	*	(27.0)	(4.5)		口縁部を削除横ナギ調整。わずかに上方に軽削。口 縁内面削除ナギ調整。胸部外面削除ハケ、内面削 除ハケ。	石英砂を多く含む。	
Fig88 1433	*	*	*	(28.8)	(4.1)		口縁部を削除横ナギ調整。口縁内面削除ハケ、 外面削除ハケ。	+	
Fig88 1434	*	*	*	(12.8)			胸部外面削除ハケ、口縁部内面横ナギ。	石英、長石粗粒砂多し。	
Fig88 1435	*	*	*	(24.0)	(11.6)		口縁部を削除し下方方に擴くナギ。口縁外面横 ナギ、内面は横ハケ・横ナギ、胸部外面削除ハケ、内面 ナギ調整。	石英粗粒砂を多く含む。 雲母を含む。	
Fig88 1436	*	*	*	(32.6)	(11.1)		口縁部を削除し上方方に擴くナギ。口縁外面横 ナギ、内面は横ハケ・横ナギ、胸部外面削除ハケ。	石英粒、長石を多く含む。	
Fig88 1437	土細器 刷毛	*	*	20.4	(7.2)		口縁部出突り。陶幅2cm、端面は強い横ナギにより凹 状。胸部外面削除ハケ。	石英を多く含み両面も 含む。	
Fig88 1438	製塩土器	*	*	(4.0)			内面に布目。	青岩、チャートの小礫、粗 粒砂を多く含む。	
Fig88 1439	*	*	*	(5.0)			内面のようになびく。	小礫、粗粒砂を含む。	
Fig88 1440	*	*	*	(4.4)			内面に布目、陶器のようになびく。	*	
Fig88 1441	*	*	*	(5.5)			内面に布目、外面ナギ。	*	
Fig88 1442	*	*	*	(5.7)			内面に布目、外縁方向の擦痕。	鈎紋をあまり含まない。	
Fig88 1443	土細器 丸錐	*	*				全長36cm 全幅12cm 全厚1.2cm 重量4.0kg	粘土	
Fig88 1444	*	*	*				全長39cm 全幅10.5cm 全厚1.0cm 重量3.5kg	*	
Fig88 1445	*	*	*				全長36cm 全幅10cm 全厚1.2cm 重量4.2kg	*	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺物名・出土 地点・層位	口径 (cm)	厚さ (cm)	英寸 (cm)	特徴	地土・材質	備考
Fig89 1446	土器	NE	包合層埋葬				全長4.0cm 全幅1.0cm 全厚1.0cm 重量27g 孔径0.4cm	粘土	
Fig89 1447	*	*	*				全長3.1cm 全幅1.1cm 全厚1.0cm 重量38g 孔径0.4cm	*	
Fig89 1448	*	*	*				全長4.5cm 全幅1.0cm 全厚1.0cm 重量35g 孔径0.4cm	*	
Fig89 1449	*	*	*				全長3.8cm 全幅1.0cm 全厚1.0cm 重量36g 孔径0.4cm	*	
Fig89 1450	*	*	*				全長5.1cm 全幅1.3cm 全厚1.25cm 重量74g 孔径0.3cm	*	
Fig89 1451	*	*	*				全長4.4cm 全幅1.1cm 全厚1.3cm 重量46g 孔径0.3cm	*	
Fig89 1452	*	*	*				全長5.4cm 全幅1.2cm 全厚1.2cm 重量57g 孔径0.35cm	*	
Fig89 1453	*	*	*				全長6.6cm 全幅1.35cm 全厚1.3cm 重量85g 孔径0.3cm	*	
Fig89 1454	*	*	*				全長6.2cm 全幅1.2cm 全厚1.1cm 重量54g 孔径0.3cm	*	
Fig89 1455	*	*	*				全長(3.9)cm 全幅1.8cm 全厚1.7cm 重量83g 孔径0.4cm	*	
Fig89 1456	*	*	*				全長4.3cm 全幅1.0cm 全厚1.1cm 重量35g 孔径0.45cm	*	
Fig89 1457	*	*	*				全長4.4cm 全幅1.7cm 全厚1.6cm 重量104g 孔径0.5cm	*	
Fig89 1458	古鏡	*	*				9.0cm通室、内径181cm、内孔1cm		
Fig91 1459	瓦器 小皿	*	SB15-P4	(6.0)	(1.3)	(4.2)	内外面横ナギ調整。	粘土	
Fig91 1460	白磁 小皿	*	SB15-P3	8.8	(1.6)		外縁にコテ痕がある。	白色堅緻、透明感。	D型
Fig91 1461	青磁 鏡	*	SB15-P4		(3.0)		外縁縦溝有文。	褐色堅緻、灰オーリーブ 色の釉。	
Fig91 1462	土器等 土器	*	SB15-P2				全長19cm 全幅1.0cm 全厚0.9cm 重量1.5g 孔径0.4cm	粘土	
Fig91 1463	*	*	*				全長3.1cm 全幅0.8cm 全厚0.9cm 重量2.1g 孔径0.3cm	*	
Fig91 1464	*	*	SB15-P7				全長3.5cm 全幅1.3cm 全厚1.4cm 重量4.7g 孔径0.4cm	*	
Fig91 1465	瓦器 碗	*	SK74	13.6	(2.1)		内縁横方向のヘラ削きが僅少に見られる。口縁外周 面ナギ。	*	
Fig91 1466	瓦質 鏡	*		24.2	(3.4)		口縁部内外横ナギ。	粘土	
Fig92 1467	土器等 杯	*	SB16-P2		(2.3)	5.6	底部あたり。	*	
Fig92 1468	土器等 土器	*	SK62				全長3.8cm 全幅1.0cm 全厚0.9cm 重量3.2g 孔径0.3cm	チャートの鉢を含む。	
Fig93 1469	瓦器 碗	*	SD20		(1.5)	3.4	外前縁頭に微細者、比較的しっかりとした断面三角 の底面。	粘土	
Fig93 1470	土器等 杯	*			(2.4)	7.5	底部あたり。	粘土	
Fig93 1471	*	*	*		(2.4)	8.8	高くハ字状に盛りあがる高台。	*	
Fig93 1472	青磁 鏡	*			(1.5)		口縁部内面は片切切りによる2条の團羅。	灰色堅緻	I~4型
Fig93 1473	東唐系 青磁	*		27.6	(3.8)		内外面横ナギ。外縁保ける。	織粒砂を含む。	
Fig93 1474	瓦質 鏡	*		18.8	(4.5)		口縁部内外横ナギ調整。内西面ナギ調整。	面取り。	
Fig94 1475	瓦質 羽茎	*		(19.0)	(5.2)		口縁部外側3条の長い凹線。底部表面横方向削り口 縁内面は片切切り調整。拂紋2cm。	石英、他の粗粒砂を含む。	
Fig94 1476	土器等 羽茎	*		23.8	(6.3)		口縁部内外横ナギ調整。時に微細な削みが施され る。軸外周右上2/3の調節。	砂粒を含む。	東播系
Fig94 1477	土器等 葉	*		29.6	(5.9)		口縁部内外、口背部横ナギ。制部外周被ハケ、口縁内 面横ハケ。	石英粒を多く含む。	
Fig94 1478	土器等 羽茎	*		21.6	(9.0)		口縁部内外横丁草で深い横ナギ調整。制部外周中位 以下左右5分の調節。	粘土	東播系
Fig94 1479	瓦質 葉	*			(3.8)		口縁部内外横ナギ調整。	石英粒を多く含む。	
Fig94 1480	纏前 大要底部	*			(3.0)	34.0	内外面ナギ調整。	粘土	
Fig94 1481	土器	*	*				全長3.0cm 全幅1.0cm 全厚1.0cm 重量2.3g 孔径0.3cm	*	
Fig94 1482	*	*	*				全長3.3cm 全幅1.1cm 全厚0.9cm 重量2.4g 孔径0.4cm	*	
Fig94 1483	*	*	*				全長3.3cm 全幅1.3cm 全厚1.1cm 重量3.3g 孔径0.4cm	*	

Fig NO 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴	胎土・材質	備考
Fig94 1484	土器 鉢	NE	SD20				全長5.1cm 全幅13cm 全厚1.2cm 重量50g 孔径0.4cm	粘土	
Fig94 1485	*	*	SD24				全長5.0cm 全幅11cm 全厚1.1cm 重量4.9g 孔径0.3cm	*	
Fig94 1486	瓦器 鉢	*	P382	(12.4)	2.8	(34)	口縁部内外面横ナデ。底部外周指捺圧痕有。	*	
Fig94 1487	土器器 鉢	*	P321		(2.5)	(7.0)	内外面横ナデ調整。系切り。	*	
Fig94 1488	縦縫 鉢	*	P332		(0.9)		外底も施釉。肉脛。	*	
Fig94 1489	青磁 底部	*	P391		(1.9)	5.4	外底に目皿。焼付まで施釉。外底は丁寧に削る。	灰色精緻	I-5-a類?
Fig94 1490	青磁 碗	*	P329			(1.6)	体部繊細。	灰色精緻。透明度のある薄緑の釉。	
Fig94 1491	*	*	P314		(2.1)		*	*	
Fig94 1492	土器器 土鉢	*	P389				全長3.6cm 全幅12cm 全厚1.3cm 重量41g 孔径0.5cm	粘土	
Fig95 1493	土器器 小杯	*	包含層V層	7.0	1.6	5.0	内外面横ナデ。	*	
Fig95 1494	土器器 小皿	*	*	10.6	1.7	4.4	内外面横ナデ。へラ切り。断面かまぼこ状の高台貼付。	*	
Fig95 1495	*	*	*	10.8	1.5	5.5	器表の荒れが激しい。	石英、長石粒を含む。	
Fig95 1496	土器器 皿	*	*	15.8	1.7	12.0	口縁部内面段、内外面横ナデ。へラ切り+ナデ。	粘土	
Fig95 1497	*	*	*	13.6	1.0	10.0	内外面横ナデ調整。口縁部強く外反。へラ切り後ナデ調整。	*	
Fig95 1498	*	*	*	(15.8)	(1.6)	(13.0)	内外面横ナデ調整。へラ切り。	*	
Fig95 1499	*	*	*	14.6	1.4	11.4	内外面横ナデ調整。外底丁寧なナデ調整。	*	
Fig95 1500	*	*	*	16.0	1.1	13.2	内外面横ナデ調整。外底へラ切り+丁寧なナデ調整。	粘土。赤色風化色を含む。	
Fig95 1501	*	*	*	14.0	1.7	8.0	内外面横ナデ。外底へラ切り+ナデ。	細粒砂を含む。	
Fig95 1502	*	*	*	14.4	1.7	9.4	内外面横ナデ。外底へラ切り+ナデ。	粘土	
Fig95 1503	*	*	*	15.8	1.4		口縁部内外面横ナデ調整。手づくね成形。	*	
Fig95 1504	*	*	*	14.9	1.4	12.0	内外面横ナデ。外底へラ切り+ナデ。	*	
Fig95 1505	土器器 杯部	*	*	(15)	(9.0)		内外面横ナデ調整。「X」へラ記号あり。	チャートの枠線を含む。	
Fig95 1506	土器器 杯	*	*	(32)	7.8		*	粘土	
Fig95 1507	*	*	*	(20)	7.6		内外面横ナデ調整。へラ切り。	*	
Fig95 1508	*	*	*	(16)			内外面横ナデ調整。「X」へラ記号あり。	*	
Fig95 1509	*	*	*	(13.0)	3.9	(7.0)	内外面横ナデ。外底へラ切り+ナデ。	チャートの粗粒砂を多く含む。	
Fig95 1510	*	*	*	13.4	3.7	6.4	内外面横ナデ。外底を切り。	石英他の砂粒多を多く含む。	
Fig95 1511	*	*	*	(2.3)	(9.4)		高台盛強い横ナデ。	粘土	
Fig95 1512	土器器 鉢	*	*	15.2	4.7		内外面横ナデ調整。高台削離。	*	
Fig95 1513	頭蓋器 皿	*	*	(15.0)	(1.7)		内外面横ナデ調整。	*	
Fig95 1514	*	*	*	(14.6)	2.0	12.2	内外延強い横ナデ調整。外底丁寧なナデ調整。	*	
Fig95 1515	頭蓋器 杯	*	*	12.6	3.2	8.4	内外面横ナデ調整。	*	
Fig95 1516	*	*	*	(11.8)	(3.2)		*	*	
Fig95 1517	*	*	*	(2.2)	(8.0)		*	*	
Fig95 1518	縦縫 鉢	*	*	(14)	(6.0)		円盤状高台。外底は四枚を呈し削り+ナデ。肉脛。	*	
Fig95 1519	頭蓋器 杯	*	*	(1.4)	8.0		内外面横ナデ調整。	*	
Fig95 1520	*	*	*	(1.7)	2.8		内外面横ナデ調整。高台は太く、外側に踏み出る。	*	
Fig95 1521	頭蓋器 鉢	*	*	(2.5)	7.0		体部外縁は削り+削り+ナデ+部分的にへラ削き、縁 身でやや高い高台を有す。	*	

FigNO. 遺物番号	種別	調査区 (試掘)	遺構名・出土 地点・層位	口径 (cm)	高さ (cm)	英寸 (cm)	特徴	地土・材質	備考	
Fig95 1522	頭蓋骨	NE	気合崩V層	(3.2)	(7.0)		体部内外面横ナゲ、外底ヘラ切り+ナゲ調整。	粘土		
Fig95 1523	*	*	*	(1.2)	12.2		内外面横ナゲ調整。	*		
Fig95 1524	頭蓋骨	*	*		(1.6)		*	*		
Fig95 1525	*	*	*	(21.0)	(1.5)		*	*		
Fig95 1526	*	*	*	16.6	(4.1)		天井部外面は右から左へのヘラ削り、内外横ナゲ調整。	*		
Fig95 1527	頭蓋骨	*	*	6.5	(7.0)		内外面横ナゲ調整。	*		
Fig95 1528	縦軸	*	*	(1.1)	7.2		陶軸。外底削り(左→右)縫匂りの軸。	*	洛西窪	
Fig95 1529	縦軸	*	*	(1.8)	(6.0)		陶軸。削り出し高台で費付の一部にも軸がかかる。薄緑色の軸は薄くかかる。	*	山城窪	
Fig95 1530	*	*	*	15.2	5.0	6.6	軸軸。外削りは深い削り+ナゲ調整。	断面セピア。	洛西窪	
Fig95 1531	瓦器 小皿	*	*	7.0	1.3	5.3	外底指面圧痕著。	粘土		
Fig95 1532	黑色土器 日輪	*	*	(1.5)	6.0		ハ字状にしっかり掘り高台。	*	贈入品	
Fig95 1533	黑色土器 A型	*	*	(18.0)	(3.0)		外削りヘラ削り。	石英、雲母粒が多い。	*	
Fig95 1534	瓦器 碗	*	*	12.8	(3.0)		口縁部外面横ナゲ。側部外削り指面圧痕。	粘土		
Fig95 1535	黑色土器 A型	*	*	(13.0)	(3.7)		器表の荒れが激しい。	*		
Fig95 1536	瓦器 碗	*	*	12.7	3.1	24	内面口縁部付近に難崩状、底部付近横方向の略文。高台は扁平な粘土絆を貼付。	*		
Fig95 1537	白磁 瓶	底部	*	*	(1.5)	5.6		質感赤変。	粘土	
Fig96 1541	白磁 皿	*	*	(10.0)	(1.9)		口先の白磁斑。	白色磁鐵の筋土、釉は白色。	四葉	
Fig96 1542	青磁 碗	*	*	(2.2)			外縁に攝羅文を有す。	灰白色磁鐵の筋土、薄緑色の釉。	龍泉窯系 1-5-6類	
Fig96 1543	青磁 碗	*	*	(1.0)	(3.6)		内底荷皿、外底は釉を張っている。	灰色模様。	同安窯系	
Fig96 1544	*	*	*	(1.7)	5.4		下側部から屈曲して立ち上がる。費付まで施釉、内底に丸い胎部が残る。殘花頂。	灰色のやや粗い筋土。	龍泉窯系	
Fig96 1545	青磁 碗	*	*	16.3	(2.5)		外縁に攝羅文を有す。	灰色模様の筋土。オリーブ色の釉。	龍泉窯系 1-5-6類	
Fig96 1546	青磁 碗底部	*	*	(3.5)			見込みに丸ノミによる文様。高台内面焼き取り。焼けあり。	灰色のやや粗い筋土。		
Fig96 1547	*	*	*	(2.7)	5.0		底花外縁まで施釉。	灰白色模様。		
Fig96 1548	青磁系 盤	*	*	21.0	(2.3)		内面横ナゲ調整。	灰白色地。		
Fig96 1549	*	*	*	(2.9)	14.4		口縁部が肥厚。	チャート、石英などを含む。		
Fig96 1550	土師器	*	*	(14.0)	(5.7)		紀伊型頬、口縁を上方に拡張し強い横ナゲ。側部内外削り頭付圧痕者。外削りしく擦ける。	结晶片岩粒を含む。	贈入品	
Fig96 1551	土師器	*	*	23.2	(3.2)		断面三角形の跡。跨上口下口縁部内外横ナゲ。口縁面削り。	石英、赤色砂粒を含む。	東播系	
Fig96 1552	*	*	*	(22.0)	(5.0)		東播系羽足。断面三角形の大きな溝が並ぶ。外縁横ナゲ調整。側削り叩き。跨下以下傾ける。	石英粒を多く含む。	*	
Fig96 1553	瓦質 鋤	*	*	14.2	(4.1)		口縁内済、内外横ナゲ。側部外面は深い削り。	粘土		
Fig96 1554	*	*	*	(3.6)			口縁部内外面横ナゲ調整。	*		
Fig96 1555	*	*	*	(24.0)	(7.5)		口縁部内外面横ナゲ調整。側部内外面削頭付圧痕者。	チャート筋の砂粒を多く含む。		
Fig96 1556	土師器	*	*	17.0	(5.3)		内外面横ナゲ調整。口縁部下方に少し延張。	チャート筋の砂粒を含む。		
Fig96 1557	*	*	*	24.0	(6.4)		口縁部内外面、口部削頭付横ナゲ。端部上面に延張。	石英粒を多く含む。		
Fig96 1558	製陶土器	*	*	14.7	(7.0)		高熱により海綿状を呈する。内面横ハケ。	砂粒を多く含む。		
Fig96 1559	土師器	*	*	23.6	(5.5)		口縁部内外面、口部削頭付横ナゲ。端部上面に延張。	石英粒を多く含む。	贈入品	

Fig NO 造物番号	種別 Category	調査区 (試験場)	遺構名・出土 地点・層位	口幅 (cm)	厚さ (cm)	底径 (cm)	特徴 Description	胎土・材質 Clay・Material	備考 Remarks
Fig.97 1560	標準型 羽茎	NE	混合層V層	(16.0)	(5.8)		内外面、口縁部内外面横ナデ調整。	*	
Fig.97 1561	土器器 類	*	*	25.8	(7.7)		口縁部内外面、口縁部横ナデ、腹部を上に膨張。 側面外周部ハケ、内面横ハケ+ナデ調整。	*	個人品
Fig.97 1562	製陶土器	*	*		(5.6)		内外面ナデ調整。	赤色風化繊、青岩小砾を含む。	
Fig.97 1563	*	*	*		(7.4)		外面指頭付地顕著、内面ハケ+ナデ調整。	チャートの砂粒を含む。	
Fig.97 1564	土器器 土鉢	*	*				全長(21cm) 全幅0.9cm 全厚0.8cm 重量14g 孔径0.3cm	粘土	
Fig.97 1565	*	*	*				全長(3.3cm) 全幅1.3cm 全厚1.3cm 重量4.6g 孔径0.4cm	*	
Fig.97 1566	*	*	*				全長3.7cm 全幅1.1cm 全厚1.1cm 重量3.3g 孔径0.4cm	*	
Fig.97 1567	*	*	*				全長3.8cm 全幅1.2cm 全厚1.1cm 重量3.8g 孔径0.4cm	*	
Fig.97 1568	*	*	*				全長4.3cm 全幅1.0cm 全厚1.1cm 重量4.1g 孔径0.3cm	*	
Fig.97 1569	*	*	*				全長5.2cm 全幅1.0cm 全厚0.8cm 重量3.2g 孔径0.3cm	*	
Fig.97 1570	*	*	*				全長4.1cm 全幅1.3cm 全厚1.2cm 重量3.9g 孔径0.3cm	*	
Fig.97 1571	*	*	*				全長4.6cm 全幅1.4cm 全厚1.2cm 重量5.8g 孔径0.3cm	*	
Fig.97 1572	*	*	*				全長3.8cm 全幅1.2cm 全厚1.3cm 重量3.6g 孔径0.3cm	*	
Fig.97 1573	*	*	*				全長4.8cm 全幅1.15cm 全厚1.2cm 重量4.6g 孔径0.3cm	*	
Fig.97 1574	*	*	*				全長5.3cm 全幅1.1cm 全厚1.1cm 重量4.8g 孔径0.3cm	*	
Fig.97 1575	*	*	*				全長4.8cm 全幅1.2cm 全厚1.3cm 重量6.1g 孔径0.3cm	*	
Fig.97 1576	*	*	*				全長(4.1cm) 全幅1.8cm 全厚1.5cm 重量10.7g 孔径0.5cm	*	
Fig.97 1577	*	*	*				全長5.8cm 全幅1.3cm 全厚1.4cm 重量8.9g 孔径0.25cm	*	
Fig.97 1578	*	*	*				全長4.2cm 全幅1.3cm 全厚1.4cm 重量8.0g 孔径0.7cm	*	
Fig.97 1579	*	*	*				全長5.0cm 全幅1.9cm 全厚1.8cm 重量14.1g 孔径0.6cm	*	
Fig.97 1580	*	*	*				全長4.2cm 全幅1.5cm 全厚1.4cm 重量7.9g 孔径0.5cm	*	
Fig.97 1581	*	*	*				全長5.0cm 全幅1.6cm 全厚1.5cm 重量11.0g 孔径0.6cm	*	
Fig.97 1582	*	*	*				全長6.2cm 全幅2.5cm 全厚2.6cm 重量36.0g 孔径0.9cm	*	
Fig.97 1583	鰐石	*	*	全長 94	全幅 8.2	全厚 3.4	特に使用部がなし。重量669g。		

写真図版



仁淀川河口上空より上ノ村遺跡を臨む



調査前の遺跡全景(南から)

PL 2



調査前の遺跡全景（南から）



同上（西南から）



調査前の遺跡全景（東から遠景）



同上（東から近景）

PL 4



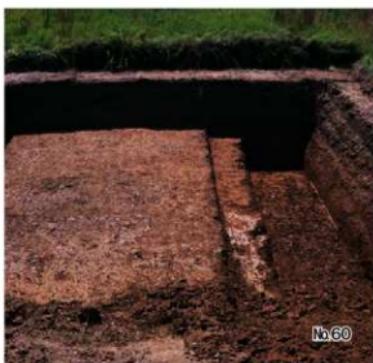
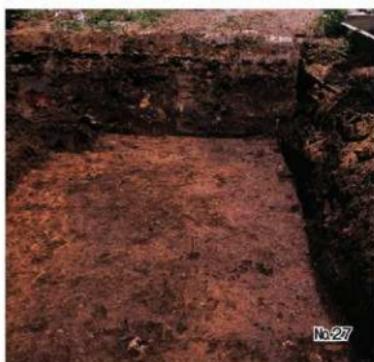
調査前の遺跡全景(西南から)

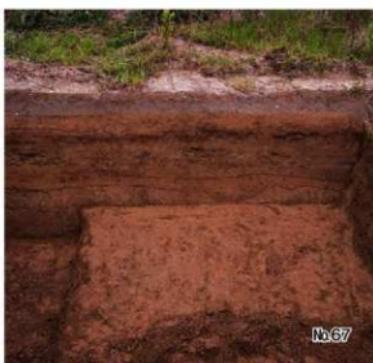
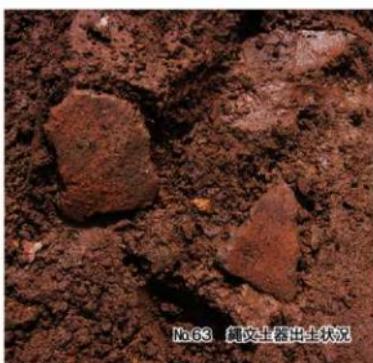
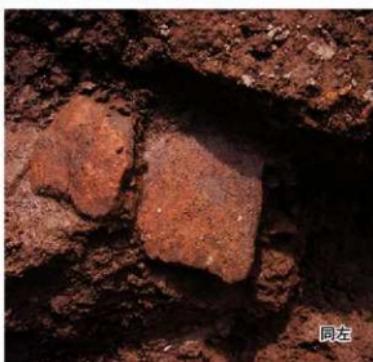
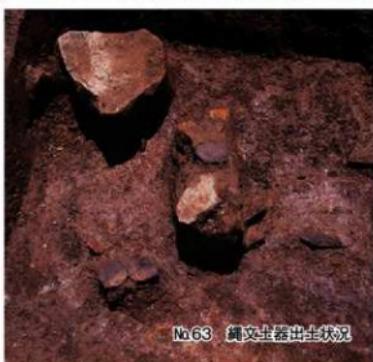


同上(北から)



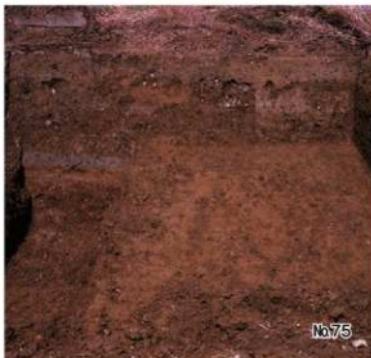
試掘調査①







No.69



No.75



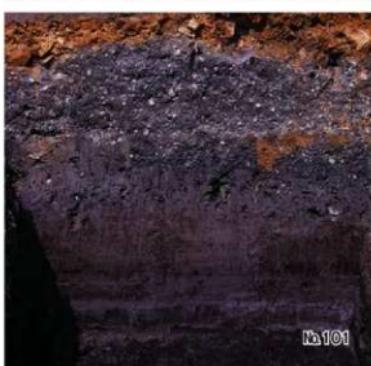
No.94



No.95



No.100



No.101

試掘状況④



S区(2005年度)上層完掘状況(西から)



同上(南から)



S区 南壁基本層準



同上 西壁基本層準



SK14 (南から)

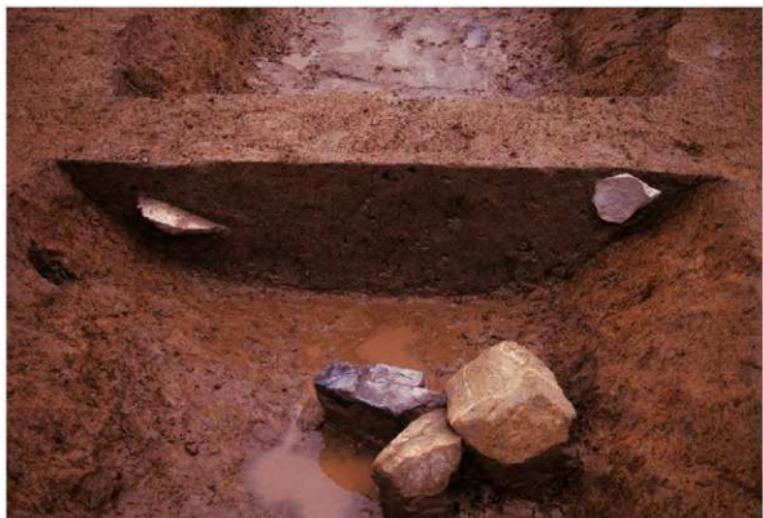


SK18

PL 12



SK14 (東から)



SK14 セクション



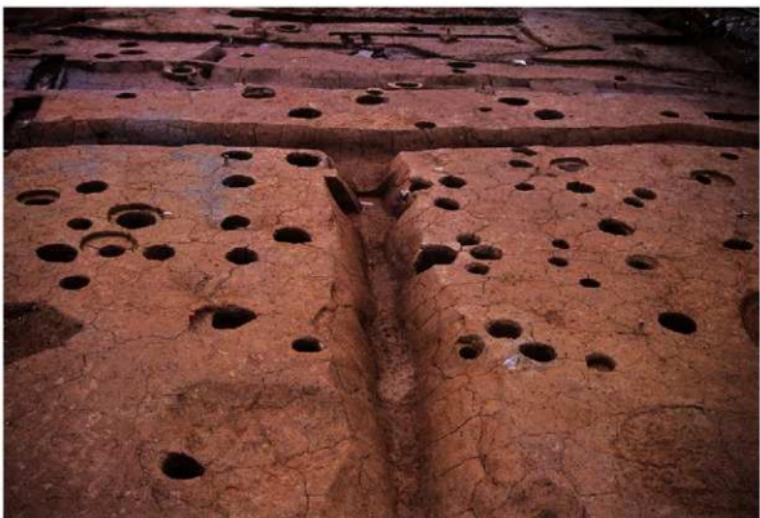
SK22 墓出土状況



SD16 完掘状況(北から)



SD1 完掘状況(西から)



同上(東から)



SD1 セクション



同上

PL 16



SD6 セクション



SD7 セクション



P123 遺物出土狀況 (417・427)



P106 遺物出土狀況 (413・414)



SD7 遺物出土状況 (青磁碗 : 294)



同上 (土師器・瓦器など)



P133



SB3—P11 (94)



P119 (514)



同上



P70



P138

ピット内 遺物出土状況



S区1東部(2007年度)石列検出状況(北から)



同上 完掘状況



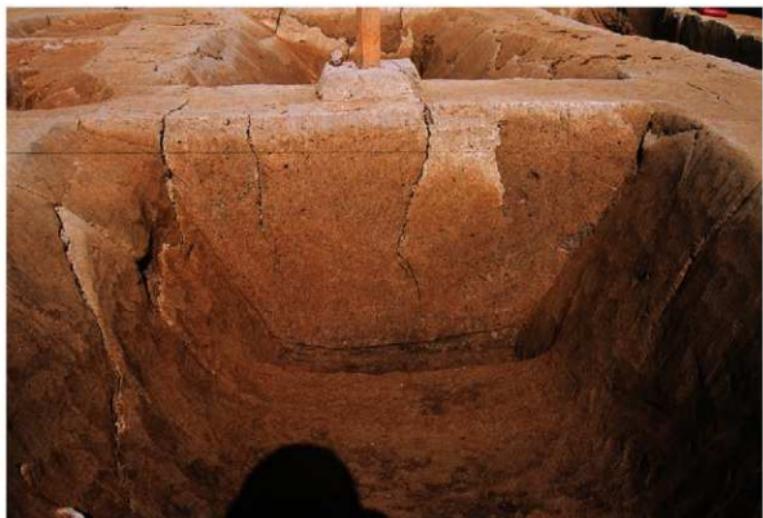
SD30 (南から)



SD6 (東から)



SD31 セクション



SD32 セクション



P465 遺物出土狀況



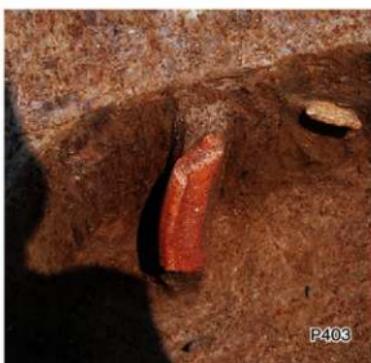
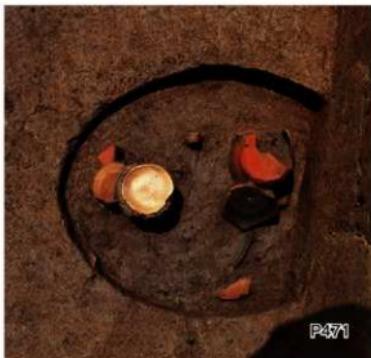
同上 完掘狀況



SK82 遺物出土状況



SK82 セクション



SD30, P403·449·471 遺物出土狀況



SK90 烧土検出状況



同上 完掘状況



SD34 (南から)



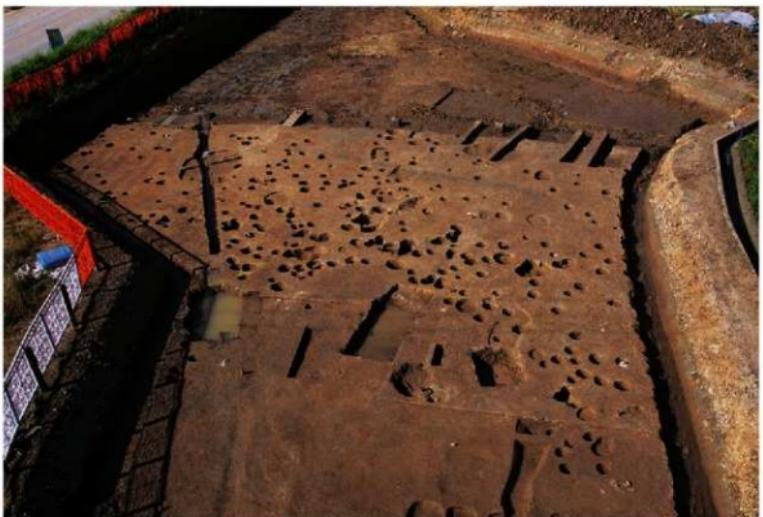
S区2 完掘状況



SD34 床面出土束播系鉢 (883)



同上 束播系羽釜 (884)



NW区 上層完掘状況(南から)



NW区 東壁セクション

PL 30



SD14 セクション



SD15 セクション



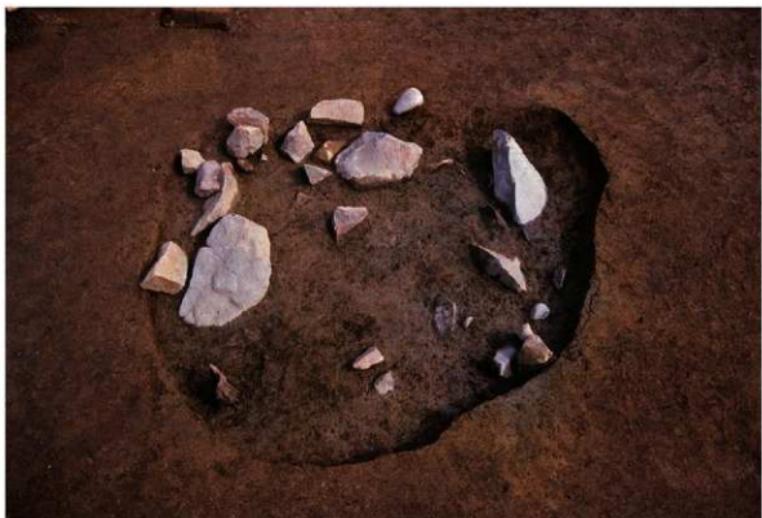
SD17 セクション



SD15 遺物出土状況



SE1 検出状況(南から)



同上(東から)



SE1 中層(南から)



同上(東から)



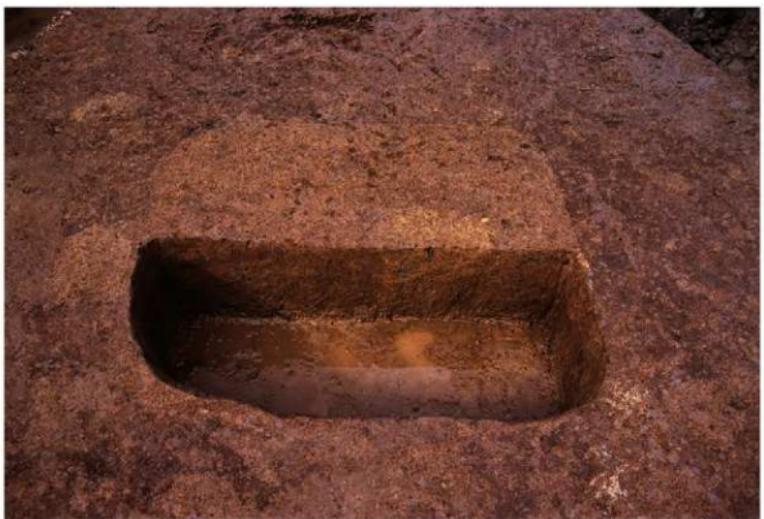
SE1 完掘状況(東から)



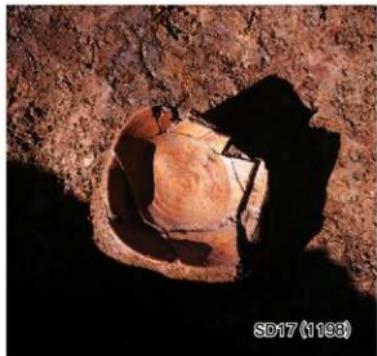
同上(西から)



SB5 - P4 断面



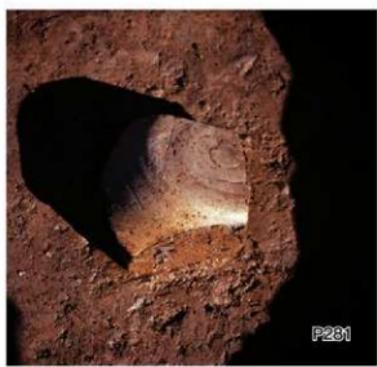
P202 断面



SD17 (1198)



同 (1206)



P281



P285



SE1 (1122)



同 (1117)



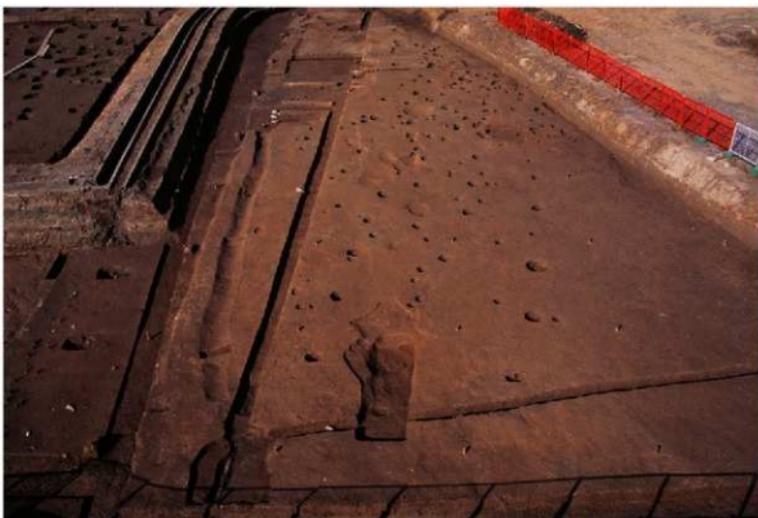
SK50 遺物出土状況(北から)



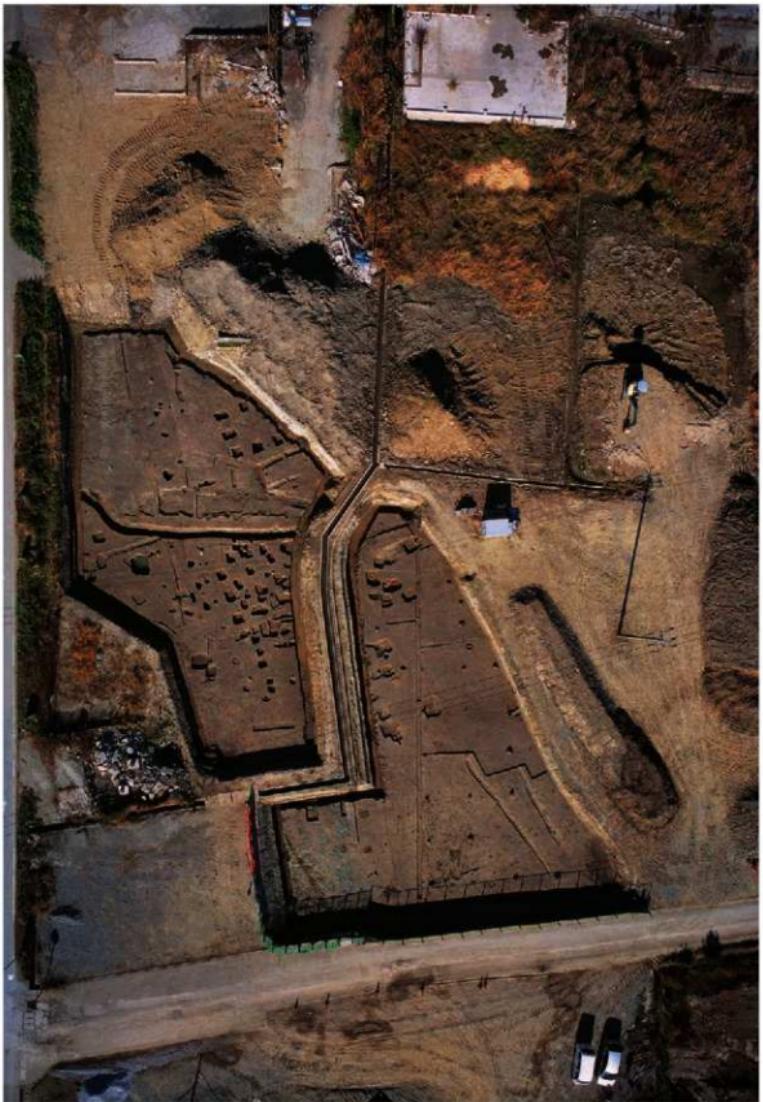
同上(南から)



NE区 上層完掘状況(北から)



同上(南から)



NW·NE区下层完掘状况

PL 40



NE区 西壁セクション



同上 東壁セクション



NE区下層北部の土坑群（北東から）



SK69 セクション

PL 42



SK69 完掘状况



SK71 完掘状况



SD20 セクション



同上

PL 44



SD21 セクション



SD27 セクション



集石 1



集石 2



土器集中7(南から)



同上(東から)



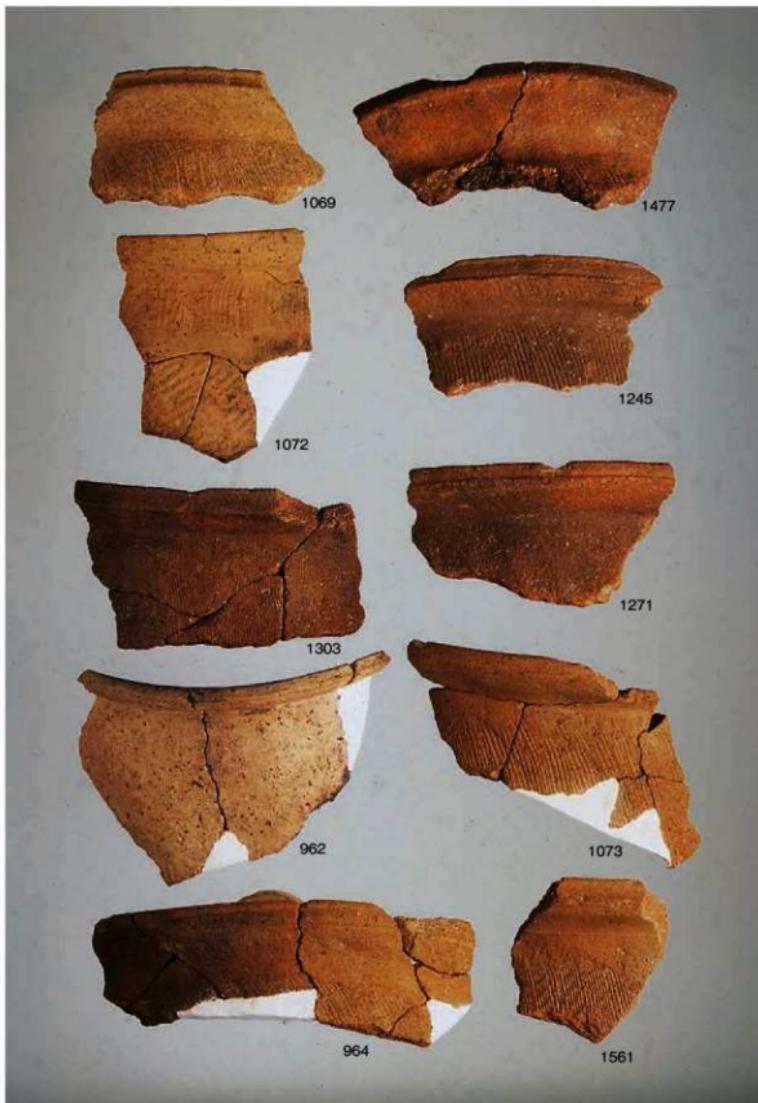
黑色土器B類椀(1421)出土狀況



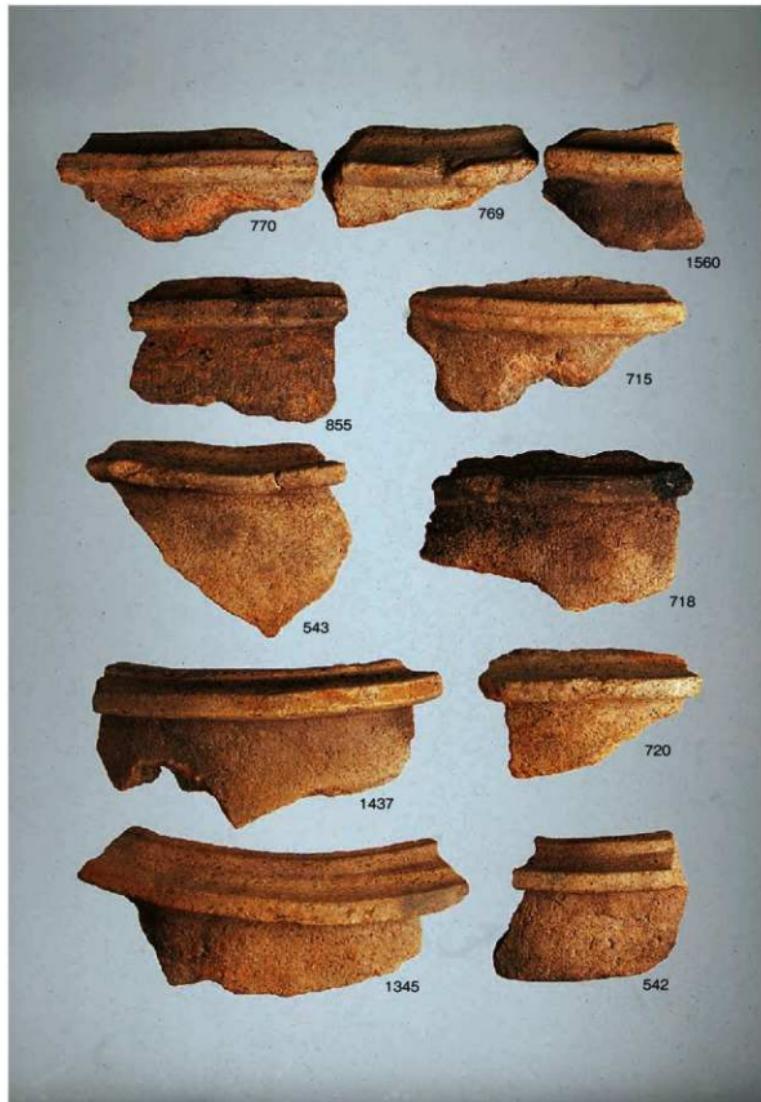
土師器椀(1376)出土状况



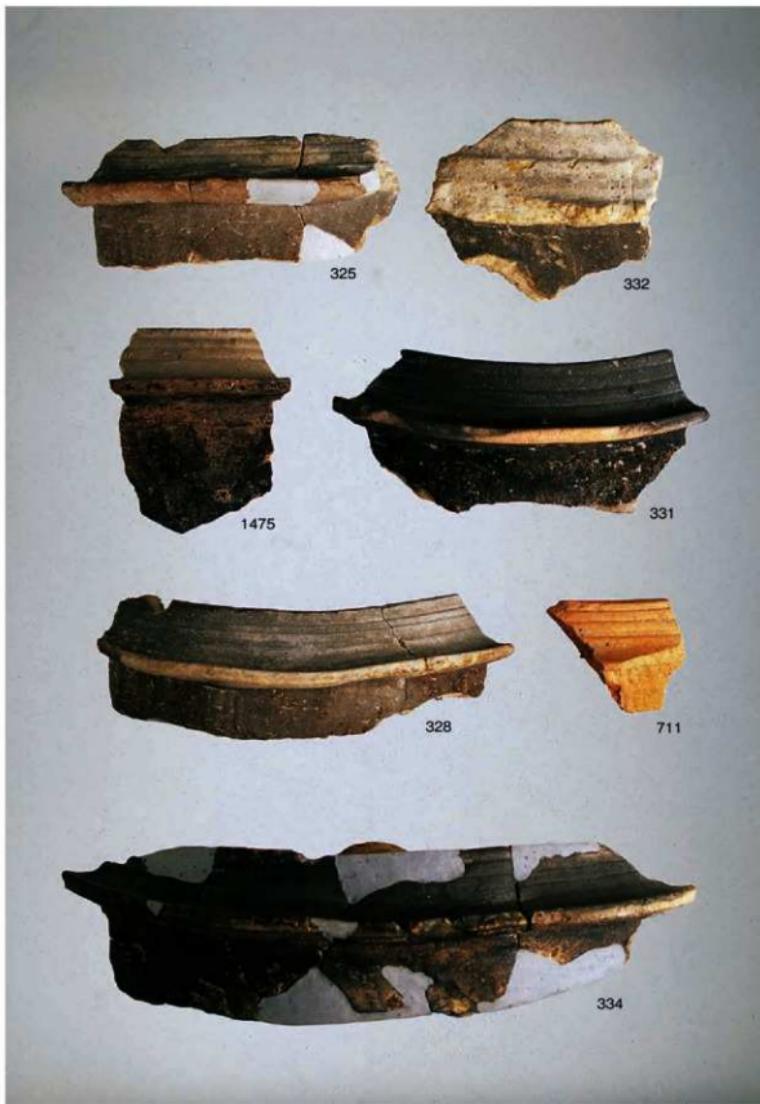
試掘調査出土の縄文土器



土器片



土器羽釜



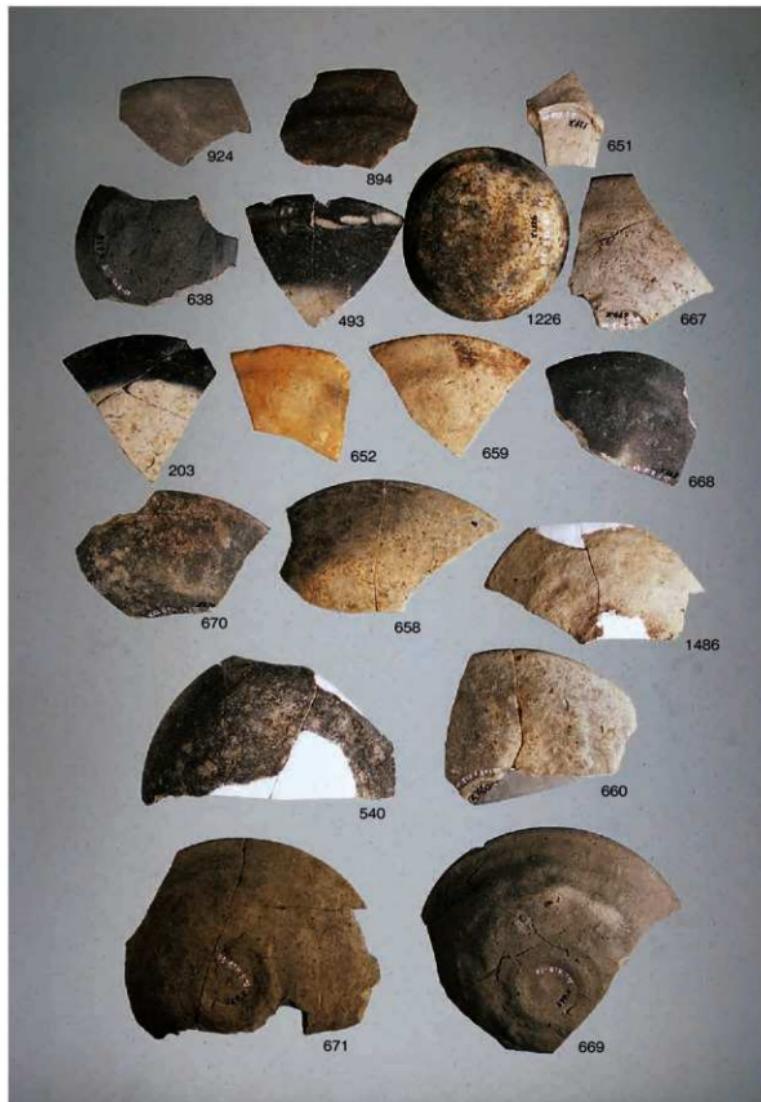
瓦質羽釜①



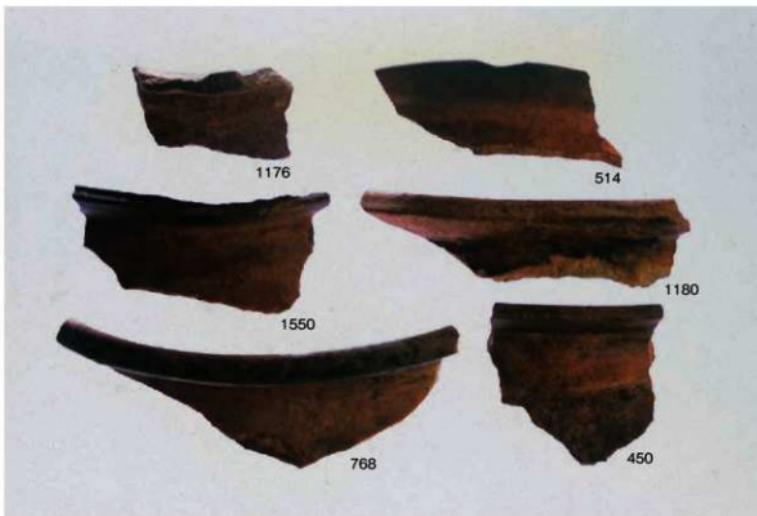
瓦質羽蓋②



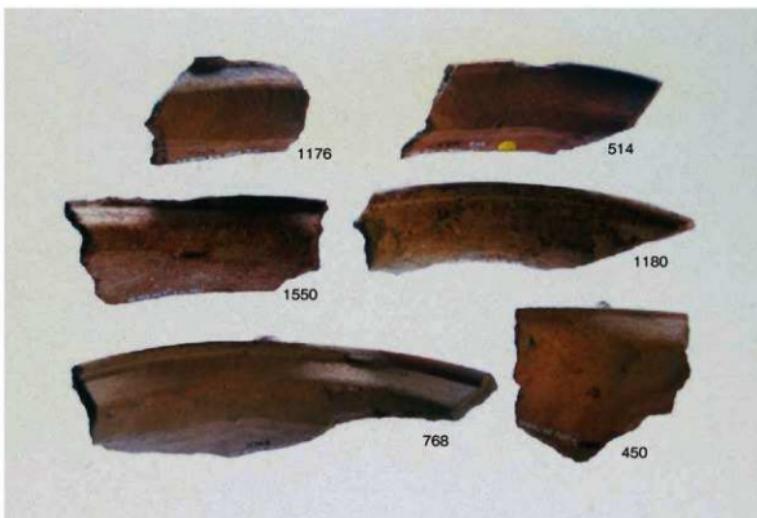
東周系捏鉢



瓦器惋・小皿



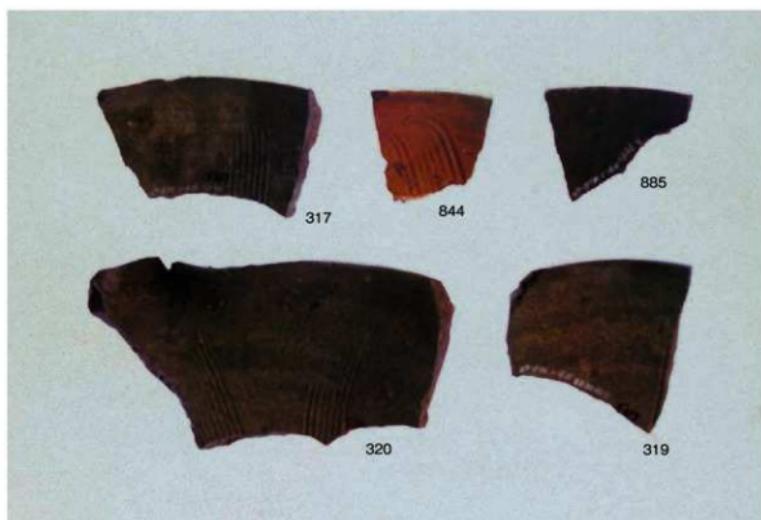
紀伊型壺



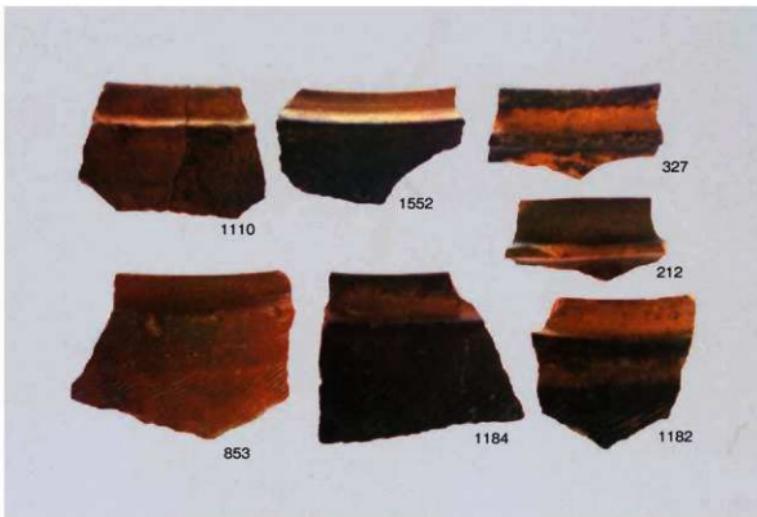
同上 内面



備前擂鉢



同上 内面



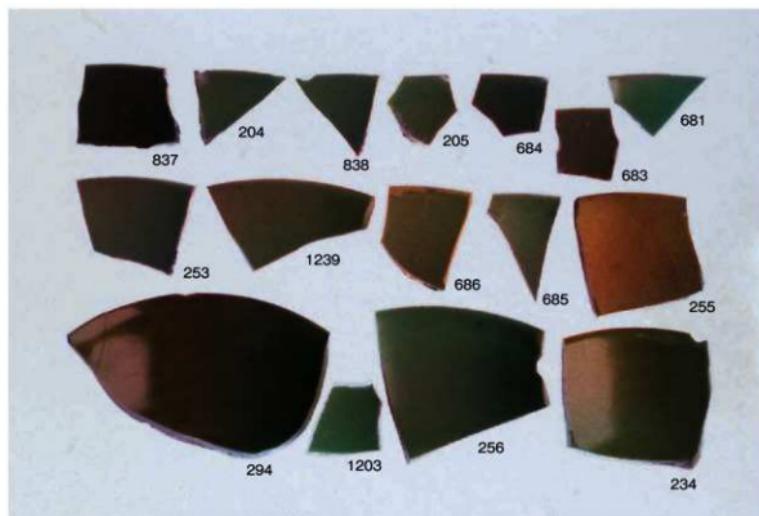
束播系羽釜



常滑甌腹部



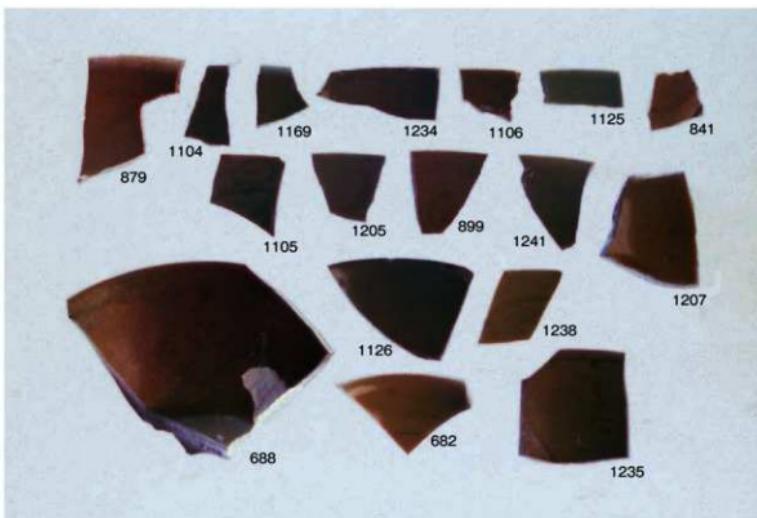
青磁碗①



同上 内面



青磁碗②



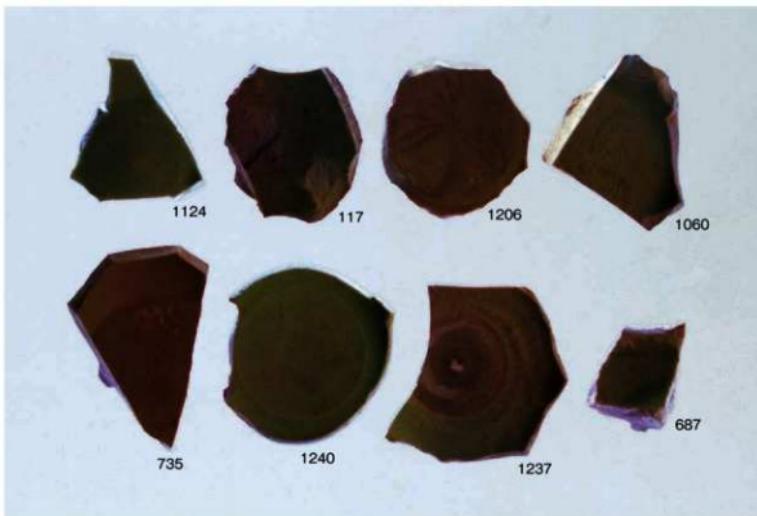
同上 内面



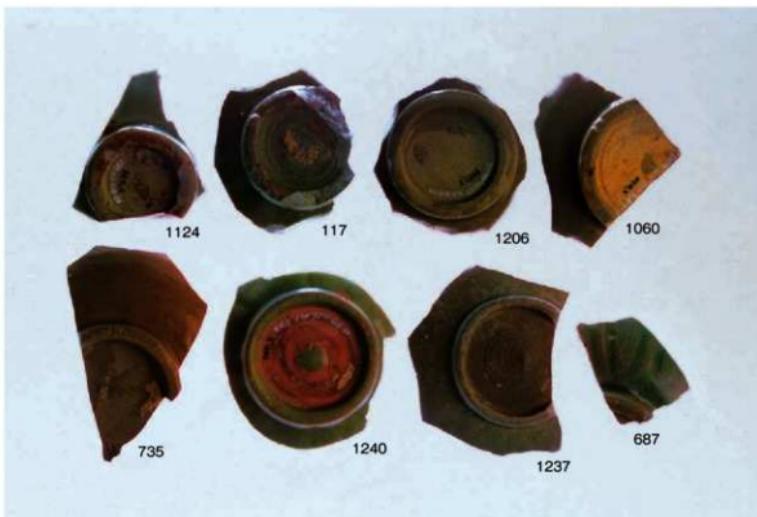
青磁・白磁



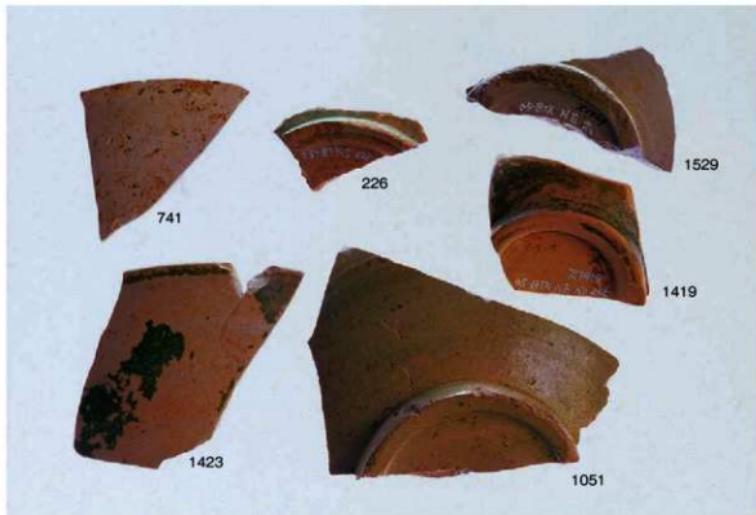
同上 内面



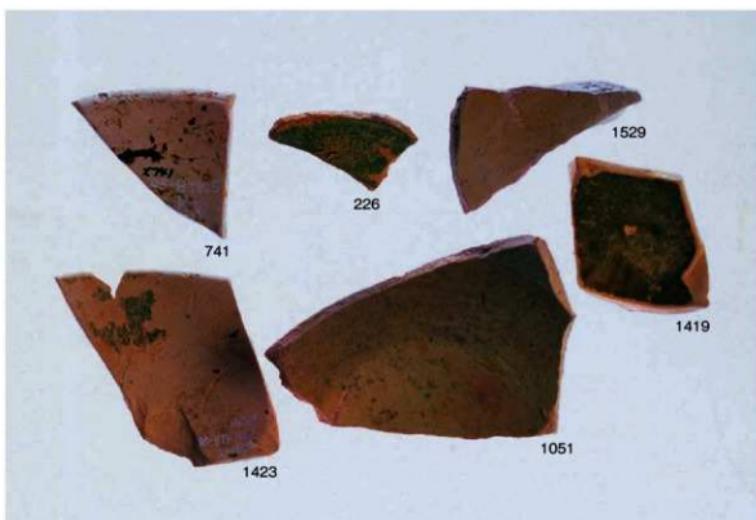
青磁碗底部



同上 内面



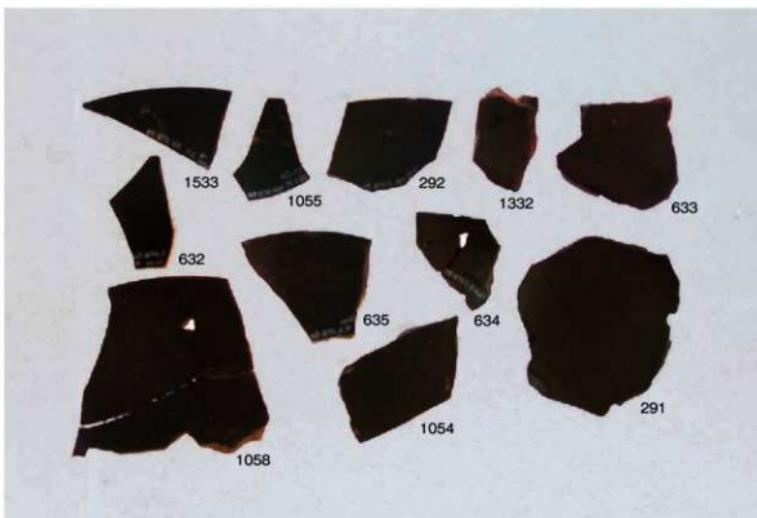
綠釉陶・皿



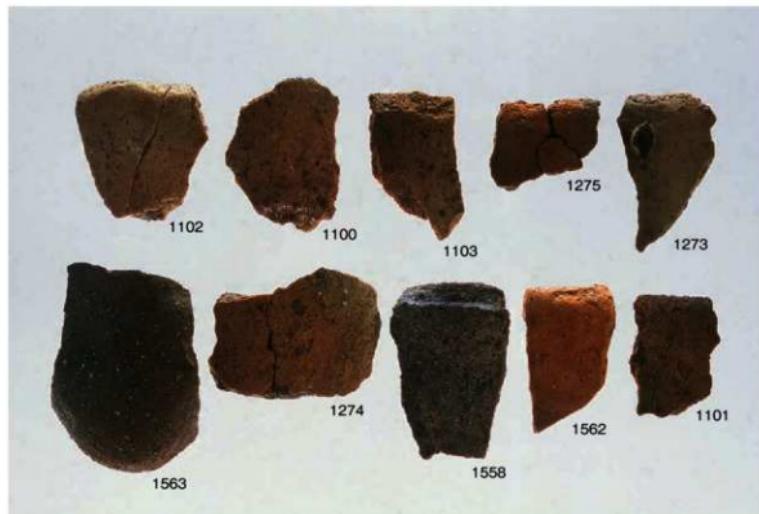
同上 内面



黑色土器 A・B 類 様



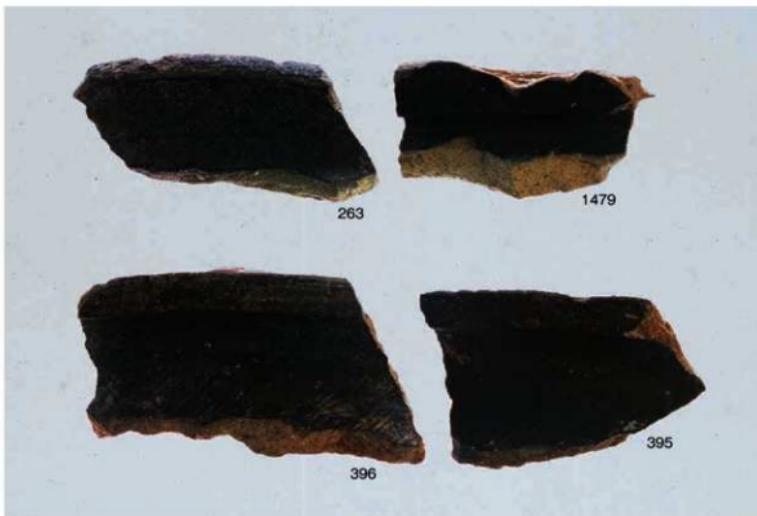
同上 内面



製塩土器



同上 内面



瓦質塊



土錘



東播系捏鉢 (703)



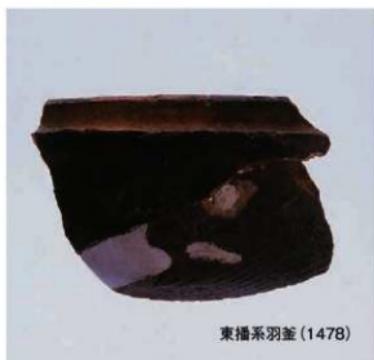
同左 (883)



土師器羽釜 (1346)



同左 (441)

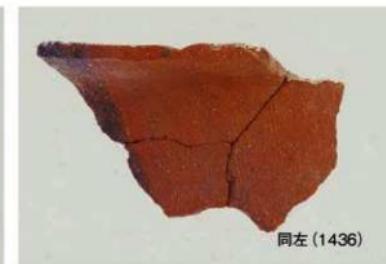


東播系羽釜 (1478)



石鍋 (873)

東播系捏鉢・土師器羽釜・東播系羽釜・石鍋



東播系羽釜・土師器甕・綠釉椀・青磁碗・陶器甕



黑色土器 A 類椀 (534)



瓦器椀 (459)



瓦器椀 (414)



同左 (424)



同上 (425)



同左 (1122)



同上 (1536)



同左 (562)

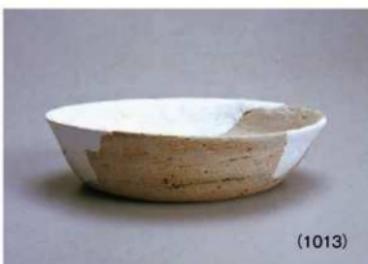
黑色土器 A 類椀・瓦器椀



(944)



(959)



(1013)



(1018)



(1316)



(1020)

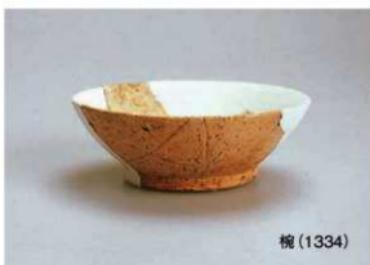
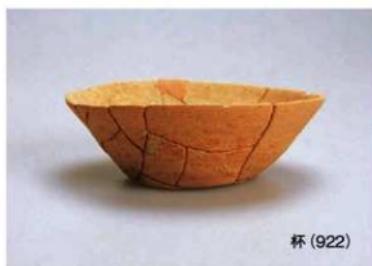
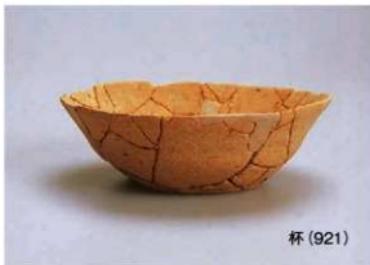


(1161)



(1295)

須惠器杯



土師器榆・杯



SE 1 柱



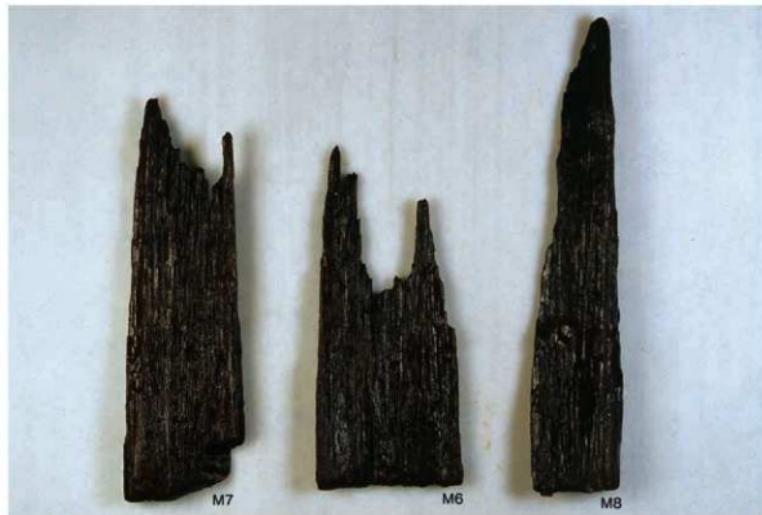
SE 1 横木と柱



SE 1 側板①



同上 ②



SE 1 側板③



同上 ④

報告書抄録

ふりがな	かみのむらいせき							
書名	上ノ村遺跡 I							
副書名	波介川河口導流事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	II							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第107集							
編著者名	出原恵三							
編集機関	財高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1							
発行年月日	2010年3月19日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			
かみのむらいせき 上ノ村遺跡	〒781-1154 高知県 土佐市 新居 上ノ村	39205	190119	33° 36° 29°	133° 42° 26°	2007.12.17 2008.8.21	試掘調査 1.632m ² 本調査 3.440m ² (延べ6.880m ²)	河川工事
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
上ノ村遺跡	集落跡	古代	掘立柱建物 土坑	4棟 17基	土器類 須恵器 縁軸 製塙土器	・国内外の豊富な撒入土器。 ・中世前期に盛行期を迎える川津的な集落遺跡。		
		中世	掘立柱建物 土坑 井戸	10棟 73基 1基	土器 瓦器 常滑 貿易陶磁器			
		近世	土坑	1基	近世陶磁器			
仁淀川河口近くの右岸に営まれた古代から中世前期を中心とする集落遺跡である。今回新発見の遺跡であるが、高知平野の古代から中世史を知る上で極めて重要な位置を占める遺跡となるであろう。古代は、城山裾部に掘立柱建物と土坑、土器集中などが見られ、祭祀的な性格を帯びた遺跡であったと考えられる。								
要約	中世にいたって遺構の範囲が著しく拡大され、溝に囲まれた屋敷が登場する。東海、紀伊、播磨、和泉、吉備、山城などさまざまな地域からの搬入品、貿易陶磁器が多量に出土しており活発な経済活動のあったことが知られる。出土遺物や立地から見て、中世前期に盛行期を見る川津的な性格を持った集落であり、水運を利用した交流の要衝として位置付けられよう。							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第107集

上ノ村遺跡Ⅰ

波介川河口導流事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

2010年3月19日

発行 財高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社